

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡伯耆町

かなまわりあしやびらいせき
金廻芦谷平遺跡・
こしきさんこふんぐんかなまわりちく
越敷山古墳群(金廻地区)

2018. 3

一般財団法人 米子市文化財団

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡伯耆町

**金廻芦谷平遺跡・
越敷山古墳群（金廻地区）**

2018. 3

一般財団法人 米子市文化財団

例　　言

1. 本報告書は、鳥取県が計画する一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴い、平成26年度に西伯郡伯耆町金廻地内で実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鳥取県の委託を受けて、一般財団法人米子市文化財団が実施した。
3. 本報告書における方位は真北を示し、表記した座標値は世界測地系の座標値である。またレベルは海拔標高を示す。
4. 本報告書第125図の地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」(平成17年1月1日発行)を加筆・修正して使用した。
5. 調査の実施に当たって、基準点測量をエースプランに、調査前地形測量と空中写真撮影をフジテクノに、出土金属製品と漆製品の保存処理、成分分析を元興寺文化財研究所に、自然科学分析を古環境研究所にそれぞれ委託した。
6. 出土石材の同定は、高橋章司氏の肉眼観察による。また、玉類の観察については、河合章行氏より教示を得た。出土人骨については、現地での取上げ、クリーニング作業及び、人類学的調査所見の執筆について、井上貴央氏のご協力を得た。
7. 本報告書は、佐伯純也が執筆、編集した。
8. 発掘調査によって作成された図面、写真類は米子市埋蔵文化財センターに、出土遺物は伯耆町教育委員会によって保管されている。
9. 現地調査及び報告書の作成には、多くの方々からご指導、ご支援を頂いた。明記して感謝いたします。(敬称略)

井上貴央、岩本 崇、河合章行、下江健太、高橋章司、出原恵三、中原 齊、山内紀嗣、
鳥取県西部土地改良区

凡　　例

1. 発掘調査時に使用した遺構名及び遺構番号は、報告書作成時に変更している。
2. 遺跡の略称は「T-コシキ4」と記載した。
3. 本報告書における遺物・遺構番号は次のように記す。
Po：土器・須恵器 S：石器 F：鉄製品 B：青銅製品 G：ガラス製品 U：漆製品
4. 本文中、挿図中及び写真図版の遺構・遺物番号は一致する。
5. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで表示した。
6. 遺物実測図の縮尺は、土器・陶器が4分の1、石器が1分の1、3分の1、鉄製品が3分の1、青銅製品が1分の1、漆製品が1分の1である。

金廻芦谷平遺跡・越敷山古墳群新旧遺構名対照表

新遺構名	旧遺構名
越敷山71号墳	71号
1 主体部	SX90
2 主体部	SX91
3 主体部	SX51
4 主体部	SX52
5 主体部	SX50
越敷山79号墳	79号
1 主体部	SX89
2 主体部	SX87
3 主体部	SX81
4 主体部	SX84
5 主体部	SX88
6 主体部	SX63
7 主体部	SX48
8 主体部	SX49
9 主体部	SX64
越敷山129号墳	SD92
1 主体部	SX46
2 主体部	SX47
3 主体部	SX55
越敷山130号墳	SD60
1 主体部	SX56
2 主体部	SX57
越敷山131号墳	
1 主体部	SX44
越敷山132号墳	SD86
1 主体部	SX62
越敷山133号墳	SD28
1 主体部	SX27
越敷山134号墳	
1 主体部	SX38
越敷山135号墳	
1 主体部	SX36
2 主体部	SX37
3 主体部	SX45
越敷山136号墳	SD66
1 主体部	SX65

新遺構名	旧遺構名
越敷山137号墳	SD67
1 主体部	SX93
越敷山138号墳	
1 主体部	SX39
越敷山139号墳	
1 主体部	SX26
越敷山140号墳	SD34
1 主体部	SX35
越敷山141号墳	SX94
1 主体部	SX94
越敷山142号墳	
1 主体部	SX68
越敷山143号墳	SD32
1 主体部	SX33
越敷山144号墳	SD21
1 主体部	SX20
越敷山145号墳	SD29
1 主体部	SX30
越敷山146号墳	SD19
1 主体部	SX18
越敷山147号墳	SD17
1 主体部	SX16
越敷山148号墳	SD24
1 主体部	SX72
越敷山149号墳	SD12
1 主体部	SX7
越敷山150号墳	SX54
石棺墓 1	SX53
土器棺墓 1	SX77
土壙墓 1	SX22
土壙墓 2	SX23
土壙墓 3	SX73
土壙墓 4	SX76
土壙墓 5	SX103
土壙墓 6	SX78
土壙墓 7	SX25
土壙墓 8	SX59

新遺構名	旧遺構名
土壙墓 9	SX61
土壙墓10	SX85
土壙墓11	SX84
土壙墓12	SX69
越敷山80号墳	SX80
陷 穴 1	SK70
陷 穴 2	SK74
陷 穴 3	SK107
陷 穴 4	SK97
陷 穴 5	SK102
陷 穴 6	SK104
陷 穴 7	SK109
陷 穴 8	SK108
陷 穴 9	SK83
陷 穴 10	SK98
陷 穴 11	SK59
陷 穴 12	SK101
陷 穴 13	SK111
陷 穴 14	SK106
陷 穴 15	SK99
陷 穴 16	SK110
陷 穴 17	SK105
陷 穴 18	SK100
陷 穴 19	SK41
陷 穴 20	SK10
陷 穴 21	SK8
陷 穴 22	SK5
陷 穴 23	SK4
陷 穴 24	SK6
土 坑 1	SX75
溝 1	SD1
溝 2	SD11
溝 3	SD2
溝 4	SD13
塹 壕	千号

目 次

例言、凡例、新旧遺構名対照表

目次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	2
第3節 整理作業の経過	2
第4節 調査体制	2

第2章 金廻芦谷平遺跡の調査

第1節 調査区の概要と層位	3
第2節 古墳の調査	8
第3節 古墳以外の調査	127
第4節 遺構に伴わない遺物	140

第3章 自然科学分析等

第1節 越敷山古墳群における顔料分析（株式会社古環境研究所）	141
第2節 越敷山古墳群出土ガラス玉の成分分析（株式会社古環境研究所）	144
第3節 越敷山古墳群出土鏡の分析（公益財団法人元興寺文化財研究所）	146
第4節 越敷山80号墳における樹種同定（株式会社古環境研究所）	148
第5節 越敷山80号墳における放射性炭素年代測定（株式会社古環境研究所）	149
第6節 越敷山古墳群から検出された人骨について（井上貴央）	151

第4章 総括

第1節 金廻芦谷平遺跡の調査成果	156
第2節 越敷山古墳群（金廻地区）の調査成果	156
第3節 越敷山周辺の歴史的環境	161
第4節 結語	165

出土遺物観察表

写真図版

報告書抄録・要約・奥付

第1章 調査の経緯と経過

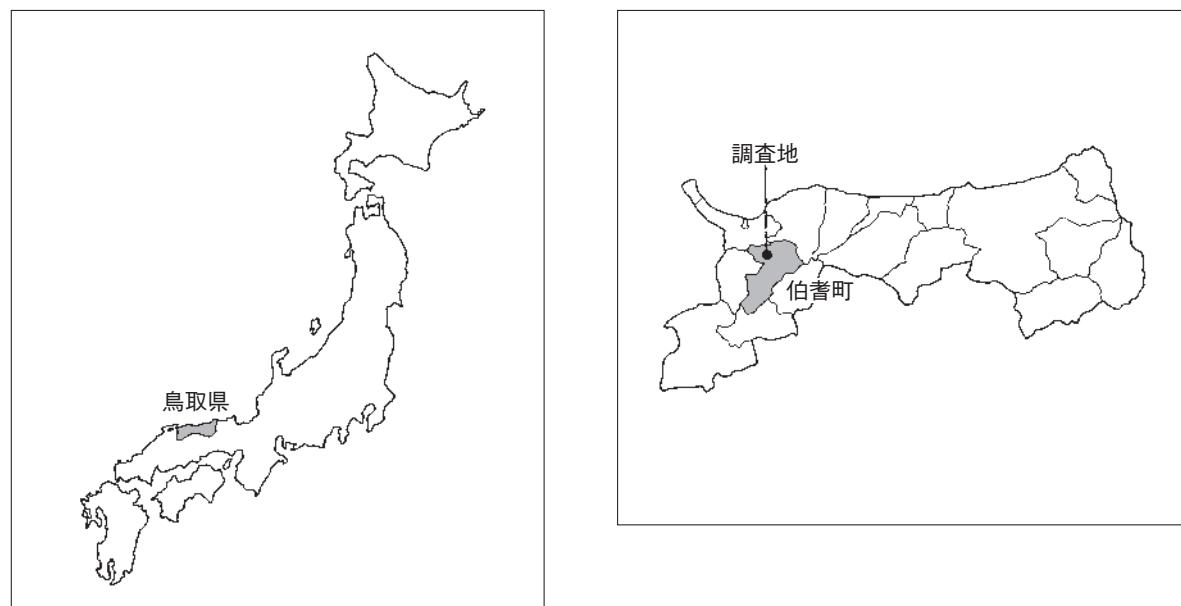
第1節 発掘調査に至る経緯

本発掘調査は、西伯郡伯耆町金廻において計画された一般国道181号（岸本バイパス）の道路改良工事予定地内に所在する埋蔵文化財について実施したものである。国道181号（岸本バイパス）は、米子市五千石から伯耆町吉定を結ぶ全長6kmの高規格道路であり、道路区間内では、米子市・西山ノ後遺跡や伯耆町・長者屋敷遺跡の調査などが実施され、既に米子市五千石～伯耆町坂長区間の一部は供用されている。

今回、発掘調査を実施した越敷山古墳群（金廻地区）は、平成25年度に伯耆町教育委員会が本調査を行った地点の西側に位置している。この地点では、平成23年度に伯耆町教育委員会による試掘調査が実施され、石棺墓の蓋石が出土したことから、事業主体者である鳥取県と鳥取県教育委員会、伯耆町教育委員会による事前協議が重ねられ、この工事予定区間における発掘調査日程の調整を行ったが、平成25年度以降は鳥取県教育文化財団の調査が県東部の鳥取西道路に傾注することと、平成26年度内の伯耆町教育委員会の事業量が多く、年度内の調査実施が困難な状況であったことから、米子市文化財団埋蔵文化財調査室が本調査を実施することとなった。

発掘調査届については、平成26年2月27日付で、文化財保護法第92条の第1項に基づく発掘届を鳥取県教育委員会に提出している。

発掘調査については、平成26年4月1日に鳥取県西部総合事務所と正式に契約を締結し、平成26年4月14日から現地調査に着手、平成26年11月24日には現地説明会を開催し、平成27年3月30日に全ての調査を完了した。



第1図 遺跡位置図

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は工事対象区間の4,003m²を対象とし、平成26年4月14日から平成27年3月30日までの期間で現地調査を行った。現地では、地形的な制約から丘陵上に排土置場を設置することができないため、東側斜面下位より調査を進め、順次丘陵部へ向かって排土置場を確保しながら調査を進めた。

重機については、斜面部の調査開始時から排土置場を設置するために使用したほか、丘陵部では排土の運搬作業に使用した。また、越敷山80号墳の石室解体作業にも活用している。それ以外の作業は全て人力により、表土掘削、遺構検出を行った。業務委託に関しては、測量基準点の設置、空中写真撮影、調査前地形測量、自然科学分析、出土金属・漆製品の保存処理業務を専門業者に委託した。

第3節 整理作業の経過

整理作業は、平成26年度に一部の出土遺物の洗浄と注記作業を行った。平成29年度には、残りの出土遺物の洗浄、注記、接合作業を行い、作図、写真撮影を実施し、年度末に報告書を刊行した。

第4節 調査体制

平成26年度（2014年度） 現地調査

事業主体 一般財団法人米子市文化財団

理事長 杉原弘一郎

常務理事 中村智至（一般財団法人米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室長 岡 雄一（米子市教育委員会文化課長）

事務長兼調査員 小原貴樹

次長兼統括調査員 平木裕子

非常勤職員 田中昌子

事業担当 主任調査員 佐伯純也

平成29年度（2017年度） 整理作業

事業主体 一般財団法人米子市文化財団

理事長 杉原弘一郎

常務理事 先灘達也（一般財団法人米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室長兼調査員 小原貴樹

次長兼統括調査員 平木裕子

非常勤職員 田中昌子

事業担当 統括調査員 佐伯純也

調査協力・管理・指導・助言 米子市教育委員会・伯耆町教育委員会・鳥取県教育委員会

第2章 金廻芦谷平遺跡の調査

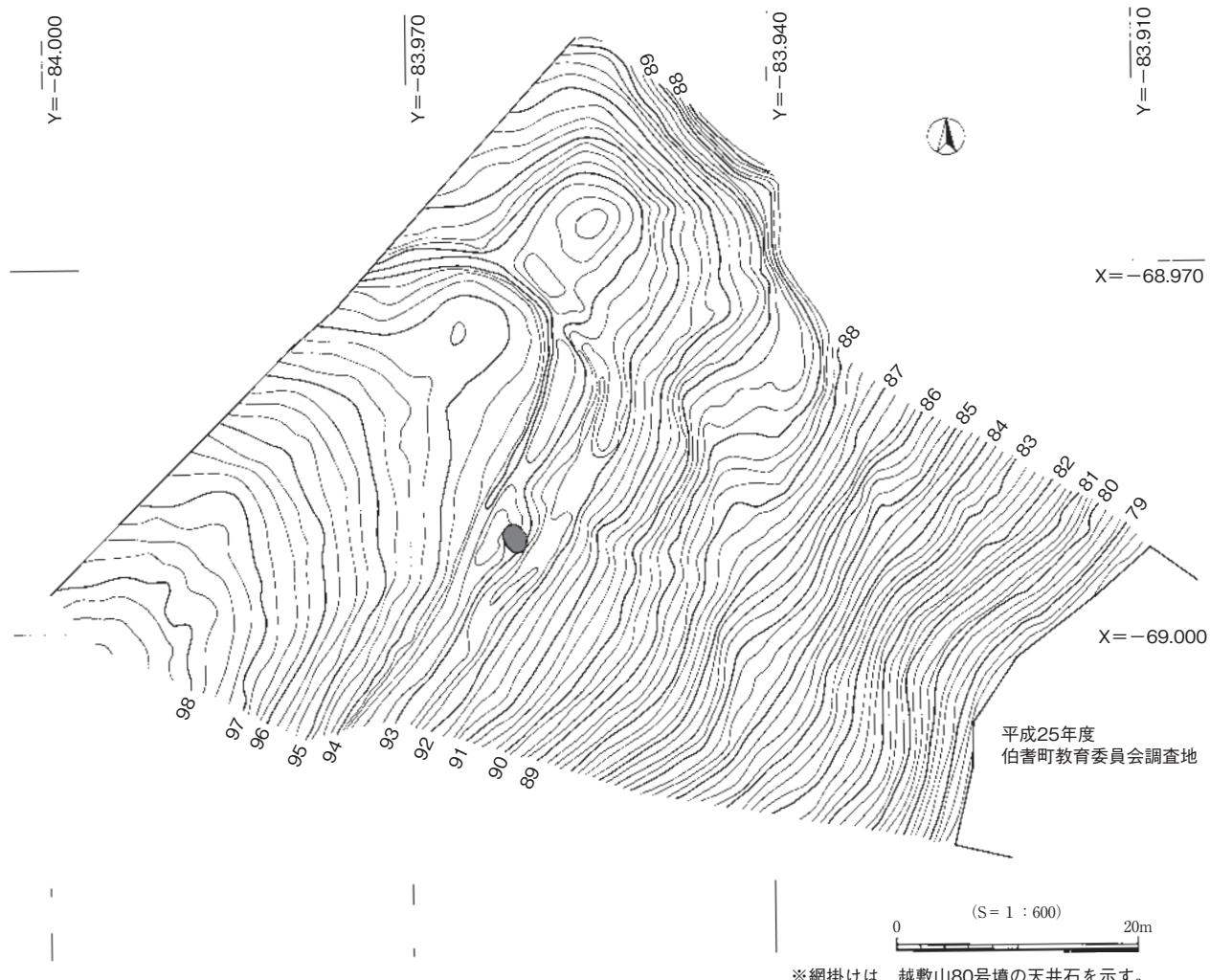
第1節 調査区の概要と層位

金廻芦谷平遺跡は、越敷山から北へ細長く伸びる丘陵の先端部に位置している。現地の標高は、調査区内の最高所で98mであり、ここから南東側の斜面下の標高は78mである。なお、更に下位の斜面部は、平成25年度に伯耆町教育委員会による発掘調査が行われており、2基の石棺墓が検出されている。

調査地の現況は山林であり、周辺の民有地には広葉樹が生い茂っている。調査前に実施した地形測量では、丘陵の先端部に越敷山71号墳と79号墳の2基の古墳が連なっている状況を確認した。また、南東部に下る斜面部には2枚の天井石が露出する横穴式石室墳があり、これが越敷山80号墳と推測された。

越敷山71号墳と79号墳の間には、南側に向かって馬蹄形に伸びる全長50mあまりの溝があり、これはアジア・太平洋戦争末期の本土決戦に備えて造られた塹壕の跡であると推測された。

調査区の区割りは、世界測地系（第V系）に基づいて10m単位の方眼の交点に杭を設置した。各グ



第2図 金廻芦谷平遺跡 調査前測量図

リッドの名称は、平成23年度に鳥取県教育文化財団が実施した「金廻家ノ上ノ内遺跡・越敷山古墳群(金廻地区)」の設定方法を参考にグリッド名を割り当てている。

発掘調査は、主に人力にて包含層を掘削して遺構を検出した。また、排土の処理は、人力にて一輪車により運搬し、重機により調査区内の排土置場へと移動させた。排土置場については、調査区内の南東部斜面に設定し、斜面の下には木製の柵を設けて土砂が流出しないよう対策を行った。

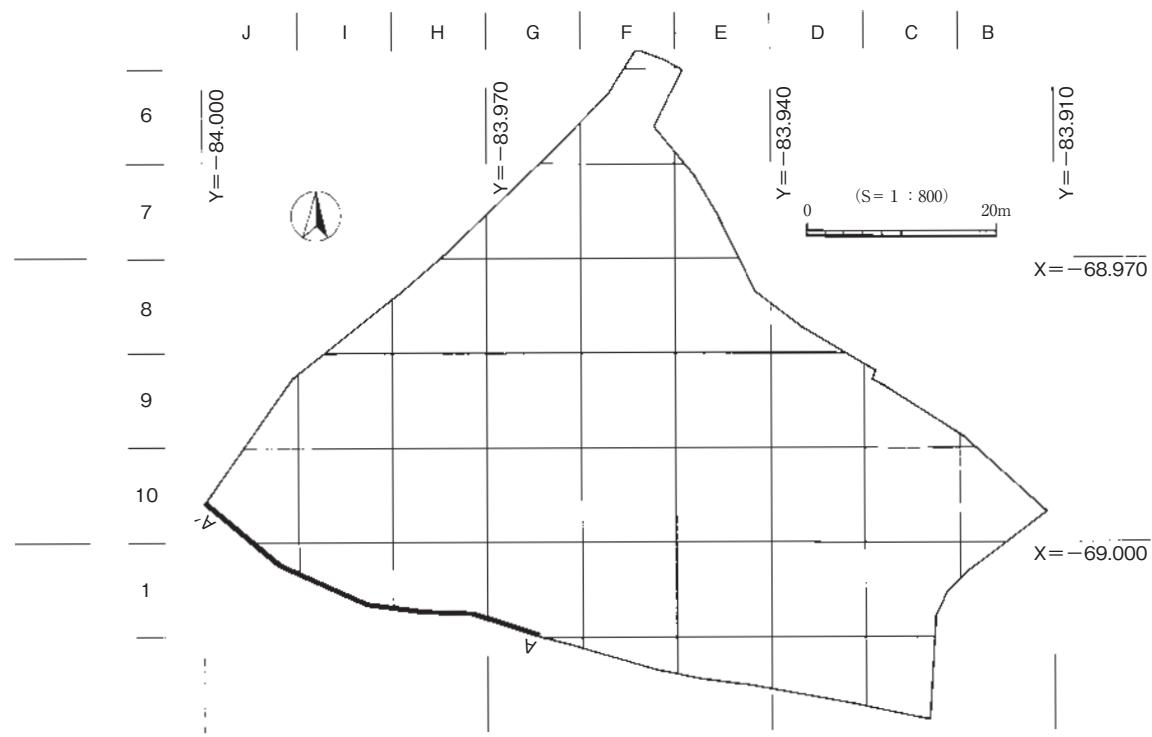
人力による遺構掘削については、鍬とジョレンを用い、遺構の検出作業についてはガリと移植鎌を使用した。

現場での遺物の取り上げは、台帳を作成して出土地点と層位を記録して管理した。検出した遺構名については、調査段階では仮の略号を用いているが、本報告書作成段階で変更している。遺構番号については、同じ番号が重複しないよう、全て続き番号で登録した。

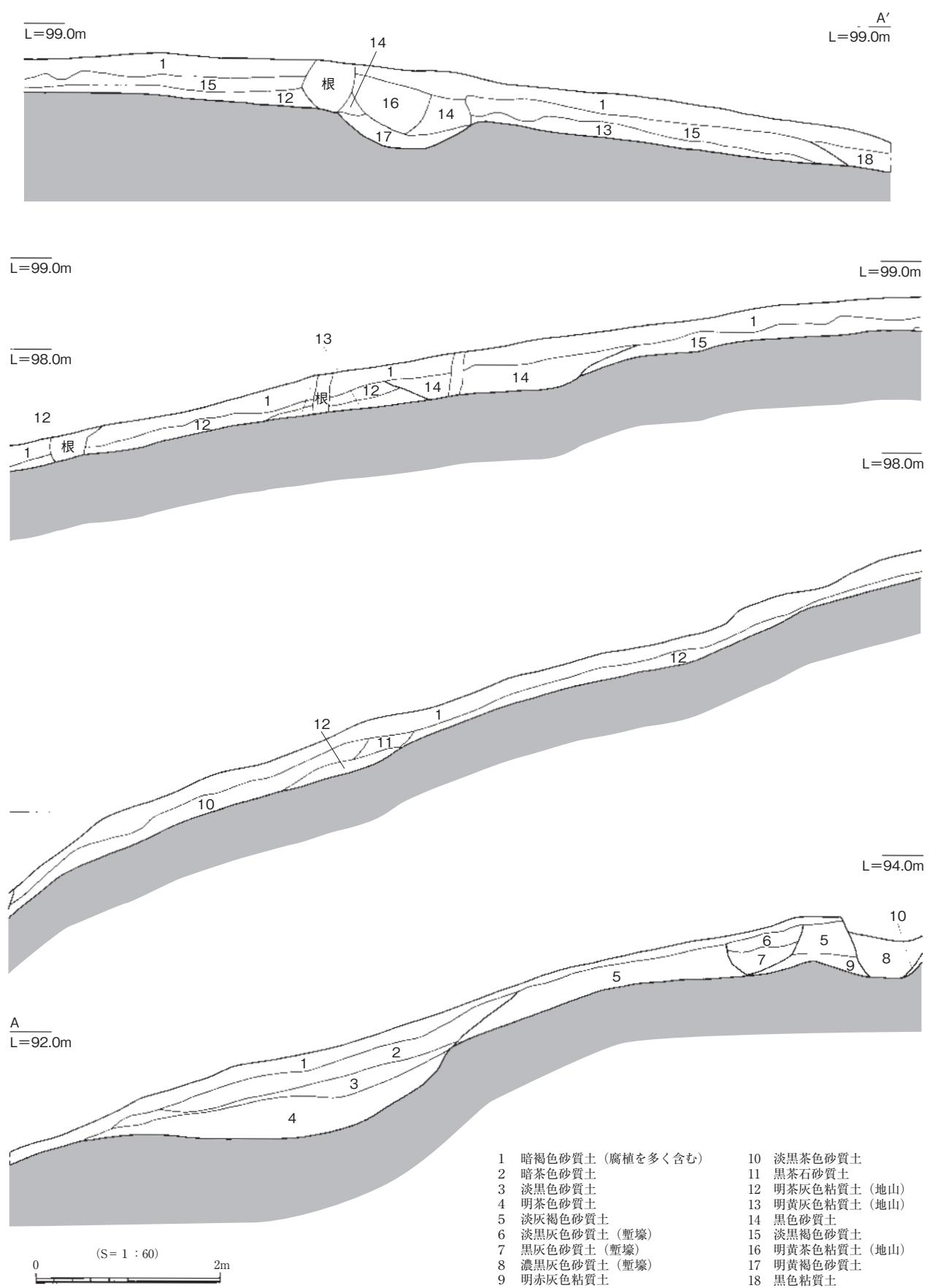
検出した遺構の記録には、トータルステーションとオートレベルを用いて実測作業を行った。また、写真撮影は、現地では35mmの一眼レフカメラを使用し、白黒、リバーサルフィルムで撮影した。また、サブカメラとして、コンパクトデジタルカメラも使用している。遺物の撮影には、一眼レフのデジタルカメラを使用した。

調査区内の層位は、表土に腐植を多く含む灰褐色系の砂質土が全面を覆っており、標高96~98m付近では地山である明黄灰色粘質土と表土との間層に淡黒褐色砂質土が堆積している。この淡褐色砂質土の上面で、古墳と埋葬施設を検出し、更に下層の地山面直上で陥穴を検出している。

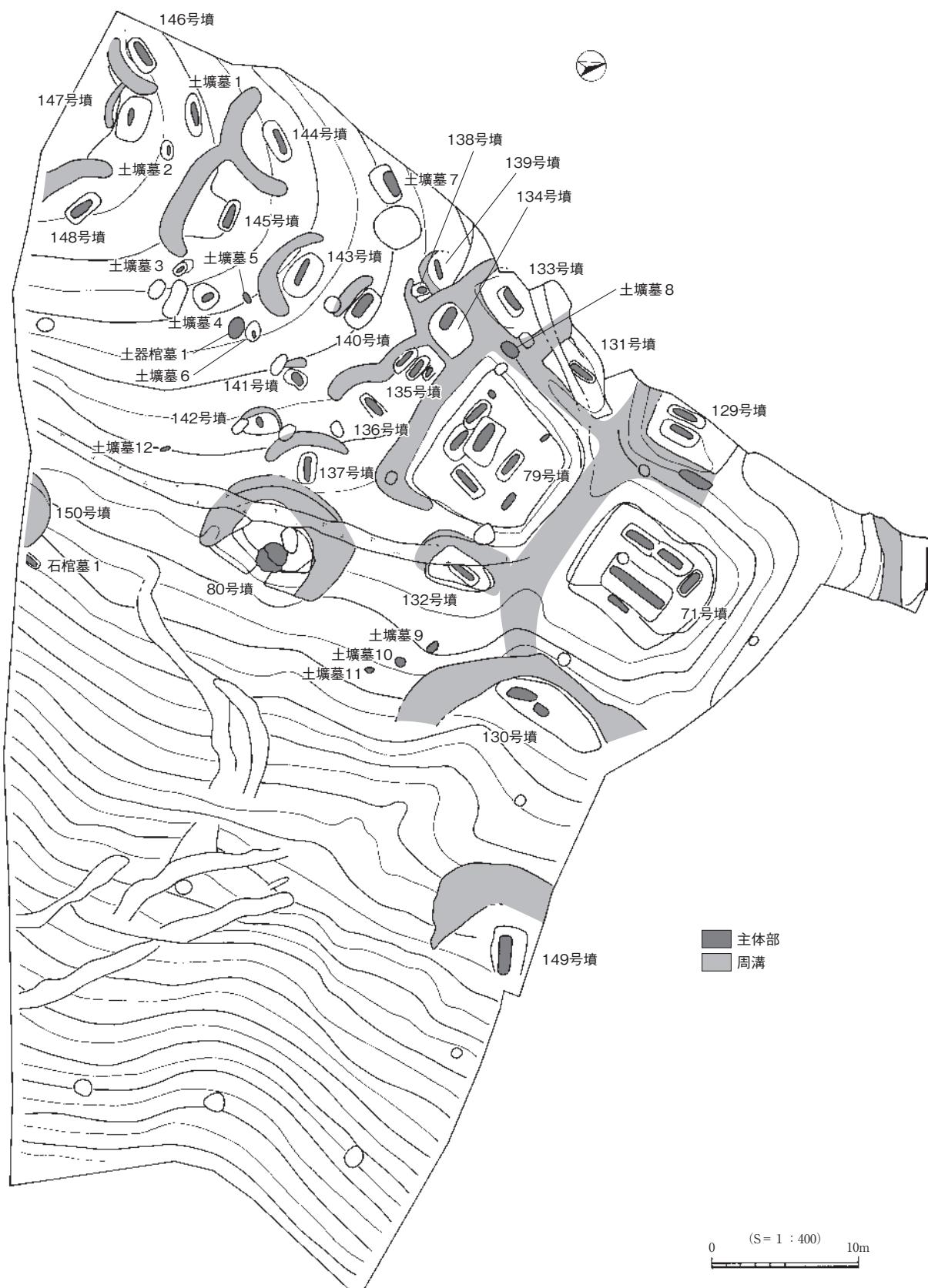
金廻芦谷平遺跡で検出した遺構は、古墳のほかにも縄紋時代のものと見られる陥穴24基と弥生時代前期の土坑1基、時期不明の溝状遺構4条、塹壕である。出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、青銅鏡、鉄製品、勾玉、ガラス玉などの玉類、漆塗櫛、石鏸などの石器類で、弥生時代から古墳時代後期までのものが中心である。



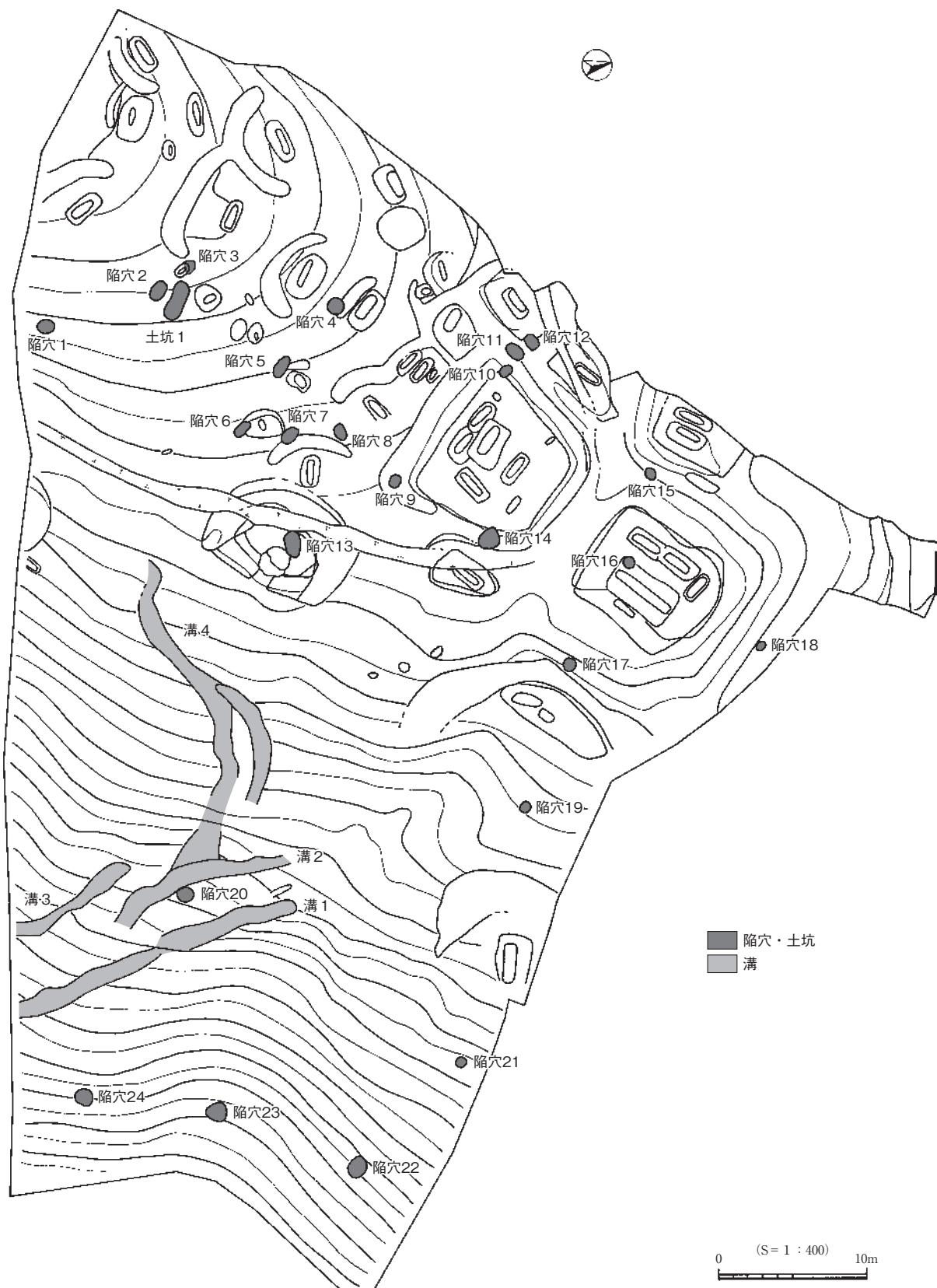
第3図 調査区割図



第4図 調査区断面図



第5図 遺構配置図（古墳）



第6図 遺構配置図（古墳以外）

第2節 古墳の調査

金廻芦谷平遺跡の調査区内には、周知の遺跡である越敷山71号墳と79号墳、横穴式石室墳である80号墳が所在しているほか、新たに周溝や段状の平坦面を持つ古墳22基と埋葬施設40基、古墳の周囲に散在する石棺墓1基、土器棺墓1基、土壙墓12基を検出した。このうち、周溝を持つ古墳は直径3mにも満たない小型のものが含まれているが、明瞭な区画を意識したものであることから、ここでは古墳として取り扱った。

越敷山71号墳（第7～18図）

越敷山の山頂部から北東方向へ、細長く伸びる尾根の先端部に位置している方墳である。南に隣接する越敷山79号墳とは周溝を隔てているが、塹壕により西側の周溝底が消滅したため、両古墳の周溝は輪郭が不明瞭になっている。

墳丘・周溝

越敷山71号墳は、丘陵先端部の最も見晴らしの良い場所を占地している。調査前から明瞭に方形墳の形態を留めており、遺跡地図にも登録されていた。西に隣接する越敷山79号墳との境に、昭和20年の春から夏にかけて掘削された塹壕が通っており、墳丘上も上面が大きく削平されていることから、築造された当初の状況から改変されていると考えられる。あるいはトーチカなどを墳丘上に構築する予定だったのか分からぬが、日本の敗戦により塹壕の掘削は中途で放棄された。

古墳の規模については、南北方向に位置する、越敷山129号墳と130号墳の周溝底の立ち上がりからの距離が16.5mとなる。東西方向は、斜面下となる東側が調査区外に伸びるため墳裾の位置が把握できないが、標高92m付近で墳裾の北西側に平坦面が出来ていることから16mほどと推測される。墳丘の高さについては、現状では130号墳の周溝底から墳丘の表土面まで高さ3.5mを測ることから、築造当初はこれ以上の規模であろう。墳丘東側の墳裾コーナー部は、等高線では隅部が突出するように削り残されているが、意図的に造られたものかはつきりしない。更に、墳裾北東部の平坦面から北東へ下がった、標高91m付近には古墳の周溝と見られる幅1mの溝が掘削されており、さらに北側に新たな古墳が存在する可能性が高い。

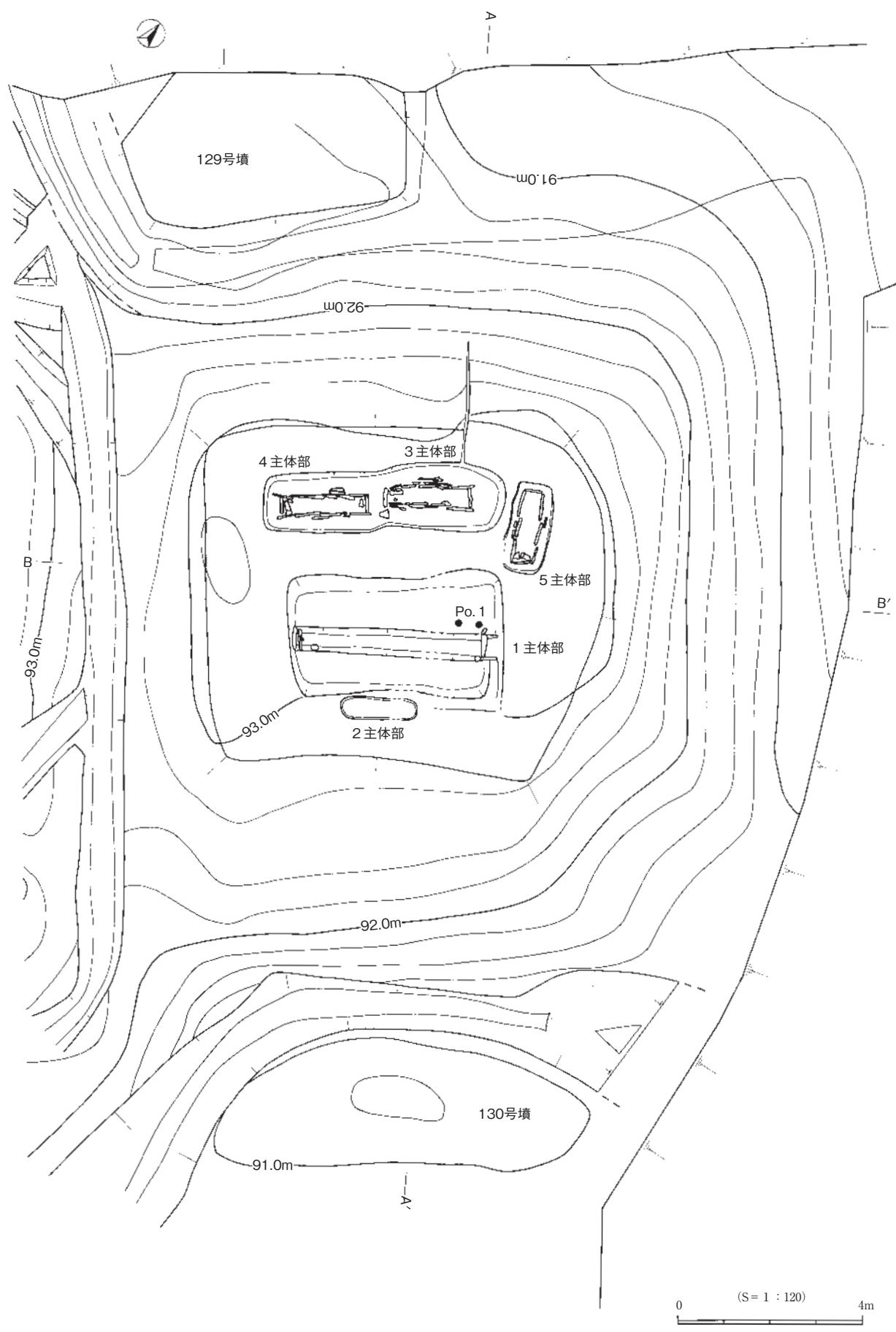
墳丘の盛土は、地山を平坦に均した後、褐色砂質土と淡黒色砂質土、明茶色粘質土を交互に敷き詰めて盛土されており、埋葬施設はこの盛土層を切る形で構築されている。

埋葬施設

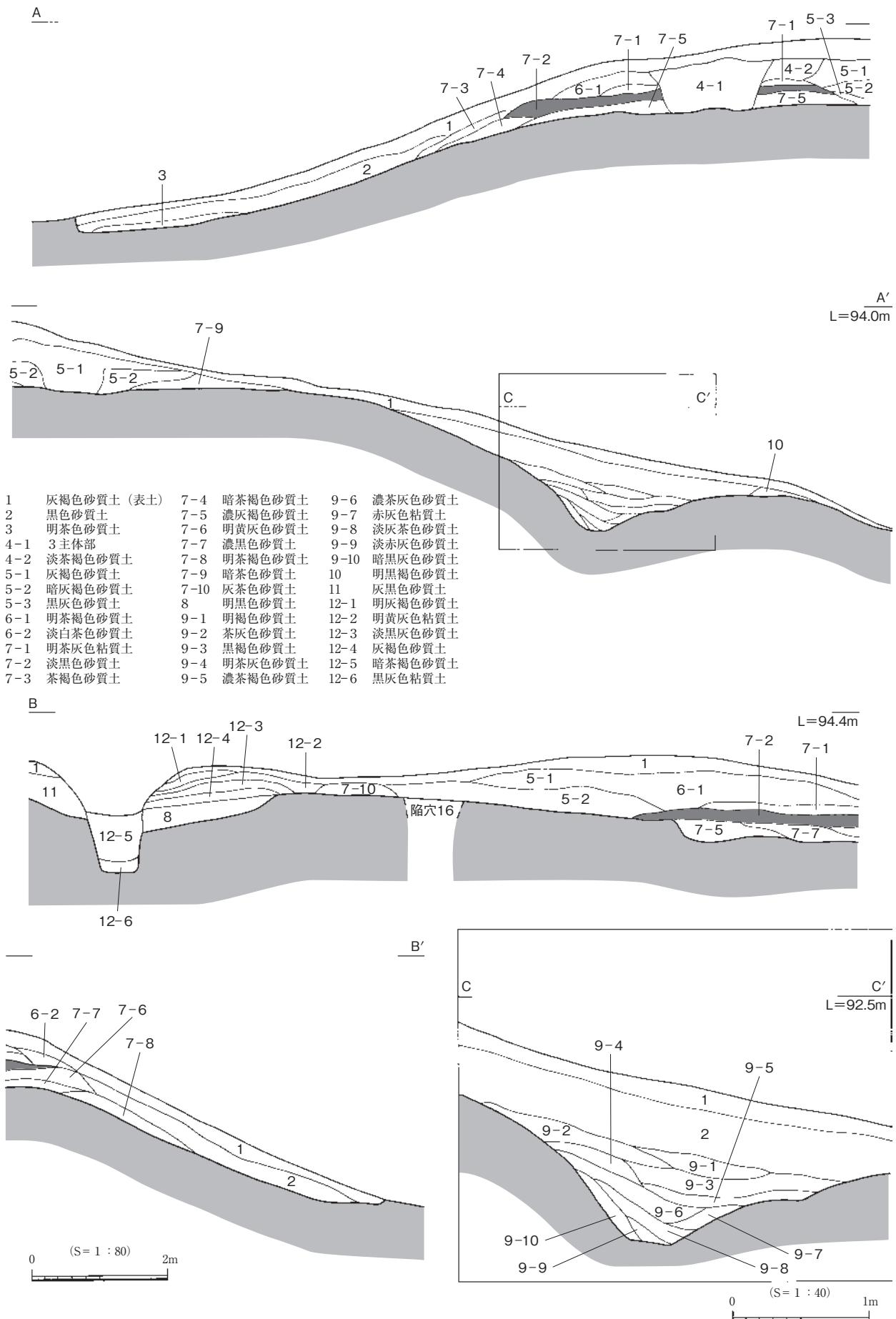
埋葬施設は、墳丘の中央部に大型の木棺墓である1主体部があり、その東側に同じ方向に造られた2主体部と、西側に2基の石棺墓が直列して配置され、北に東西方向を向く5主体部が構築されている。それぞれの墓壙の切り合いが少ないため築造された順序は不明だが、遺構の配置状況から、1・2主体部→3主体部→4主体部→5主体部の順に造られたと考えられる。

1主体部 墳丘の中央からやや南東寄りに造られた、大型の組み合わせ式木棺を主体部とする埋葬施設である。墓壙の掘形は二段墓壙で、表土を除去した直下から墓壙の掘形を検出した。また、墓壙の上面の表土から土師器の高坏（Po. 1）が出土した。墓壙の規模は、検出面の長さ4.8m、幅2.8mで、残存している深さは墓壙の検出面から15cm程度である。

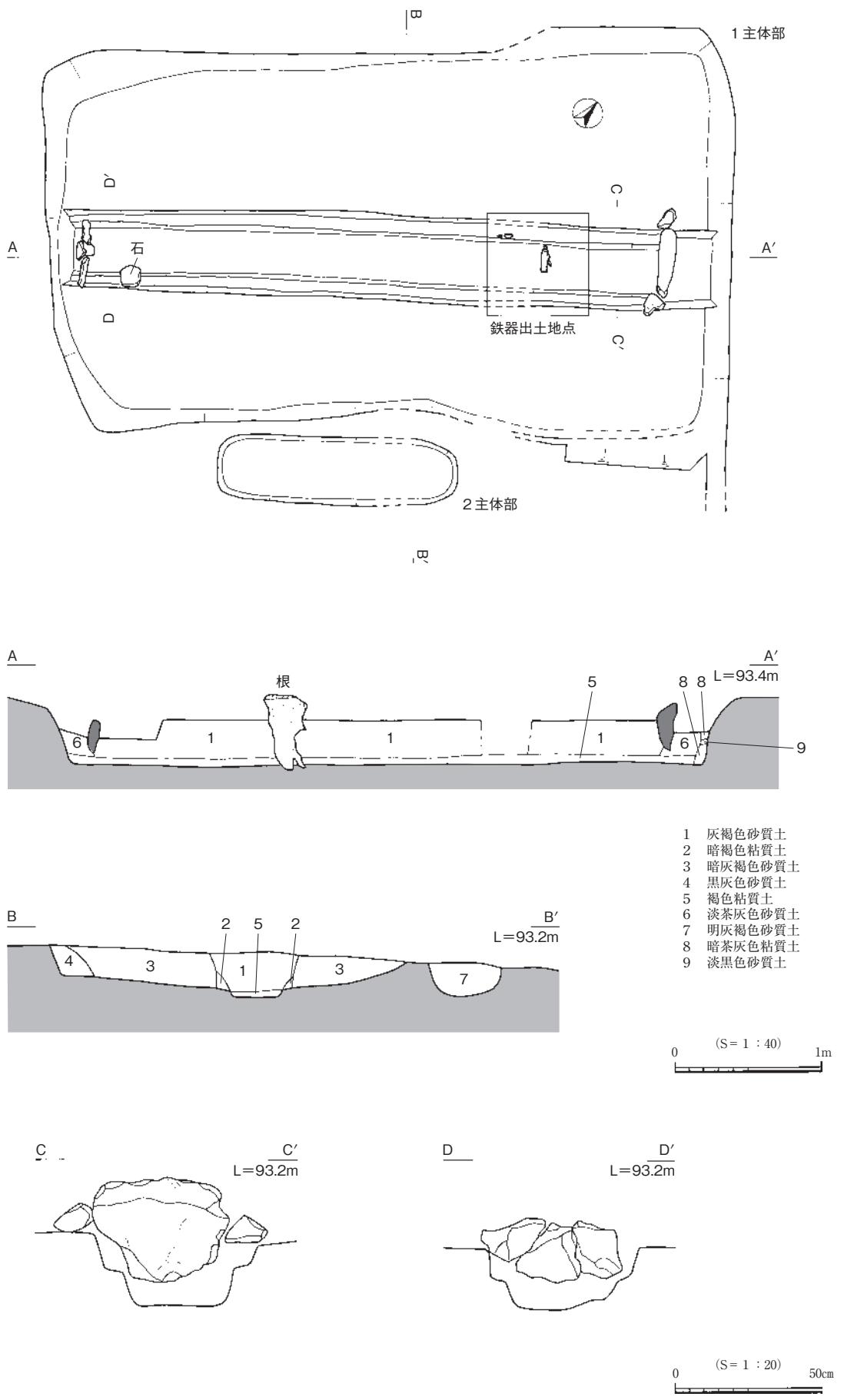
埋葬施設の構造は、小口部にのみ平石を使用するタイプで、棺内の内法の長さ3.9m、幅30cm、高



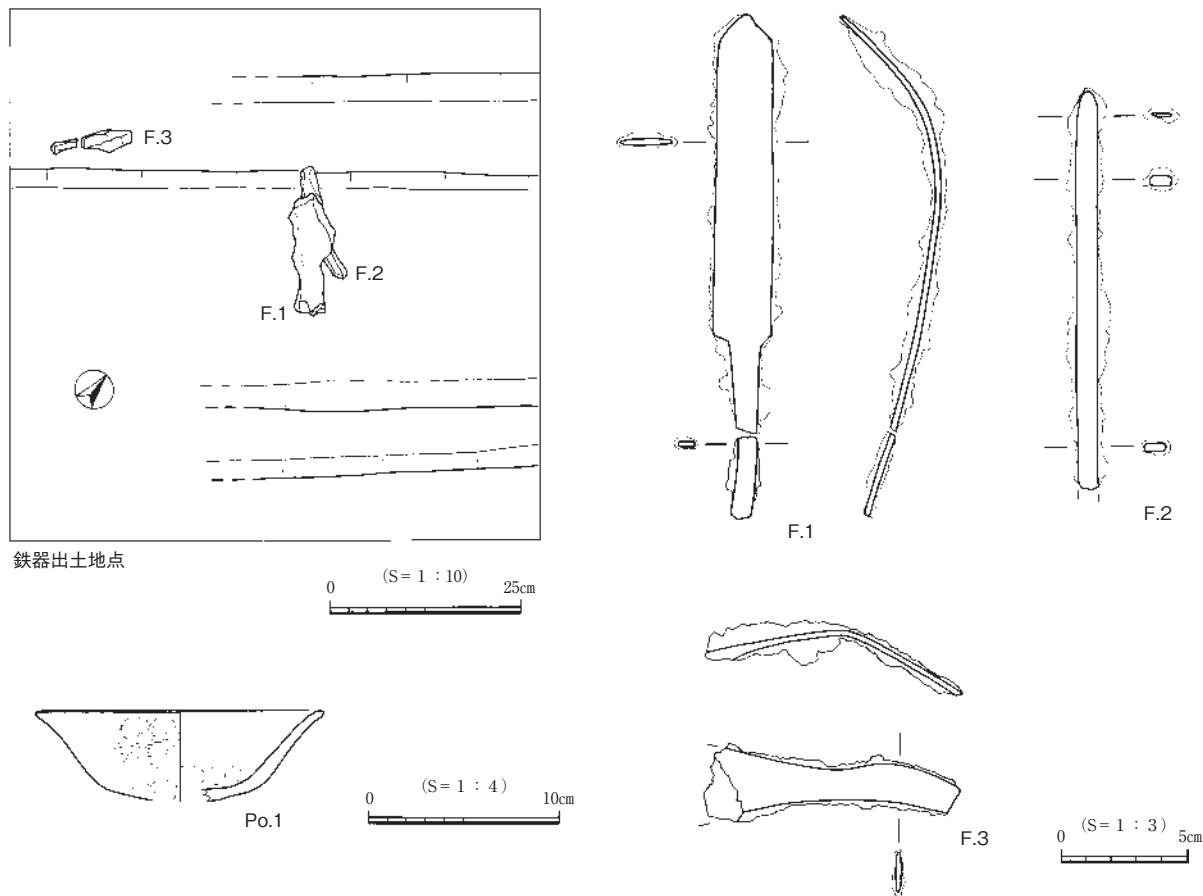
第7図 越敷山71号墳 遺構図



第8図 越敷山71号墳 遺構図



第9図 越敷山71号墳 1・2主体部遺構図



第10図 越敷山71号墳 1 主体部遺構・遺物図

さ40cmの木棺墓と推測される。木棺の痕跡から、長側板は幅10cm程度の板材を使用していると推測されるが、長側板の痕跡と重複して鉄製品（F.3）が出土していることから、木棺を設置する前から置かれていたか、木棺が腐朽してから内部に落ち込んだものか。また、棺床部には褐色の粘質土が水平に堆積していたことから、棺底には底板を持たず、粘土を敷いていたものと推測される。この他の出土遺物は、棺床から鉄製品（F.1・2）が出土した。

2主体部 1主体部の墓壙の南東部に平行して掘られた土壙墓である。プランは整った長楕円形で、長さ1.65m、幅45cm、深さ25cmを測る。断面形は「U」字形をなし、埋土は明灰褐色砂質土1層のみで、底面に石枕は見られなかった。出土遺物も無いため、埋葬施設か断定できないが、埋葬施設か副葬品を収めたものと推測される。

3主体部 1主体部の北西部で検出した、やや大型の石棺墓である。南側の掘形が4主体部の掘形と重複しており、こちらの方が4主体部に切られている。石棺の石蓋は下面に5枚の平石を置き、更に上面に多量の平石を置いて閉塞している。石棺の棺内は土砂が堆積しており、掘り下げるとすぐに棺内の両端部から二つの頭蓋骨が出土した。このことから、この石棺墓には複数の遺体が埋葬されていたことが判明した。

石棺の掘形は、長さ1.8m以上、幅1.5m、深さ35cmで、石棺の据え付け穴は石棺の寸法に合わせて「口」字形に溝が掘られている。石棺の組み合わせは、数枚の平石を直列させて長側板としているが、隙間ができる所には裏側や表側に平石を重ねて土砂の流入を防いでいる。石棺の規模は、内法で長さ1.8m、幅40cm、高さ30cmを測る。棺内の床面には、南西側のみ石枕があるが、床面からは若干遊離していることと、人骨の出土レベルが床面から10cmほど高いことから、追葬時に床面が嵩上げされた

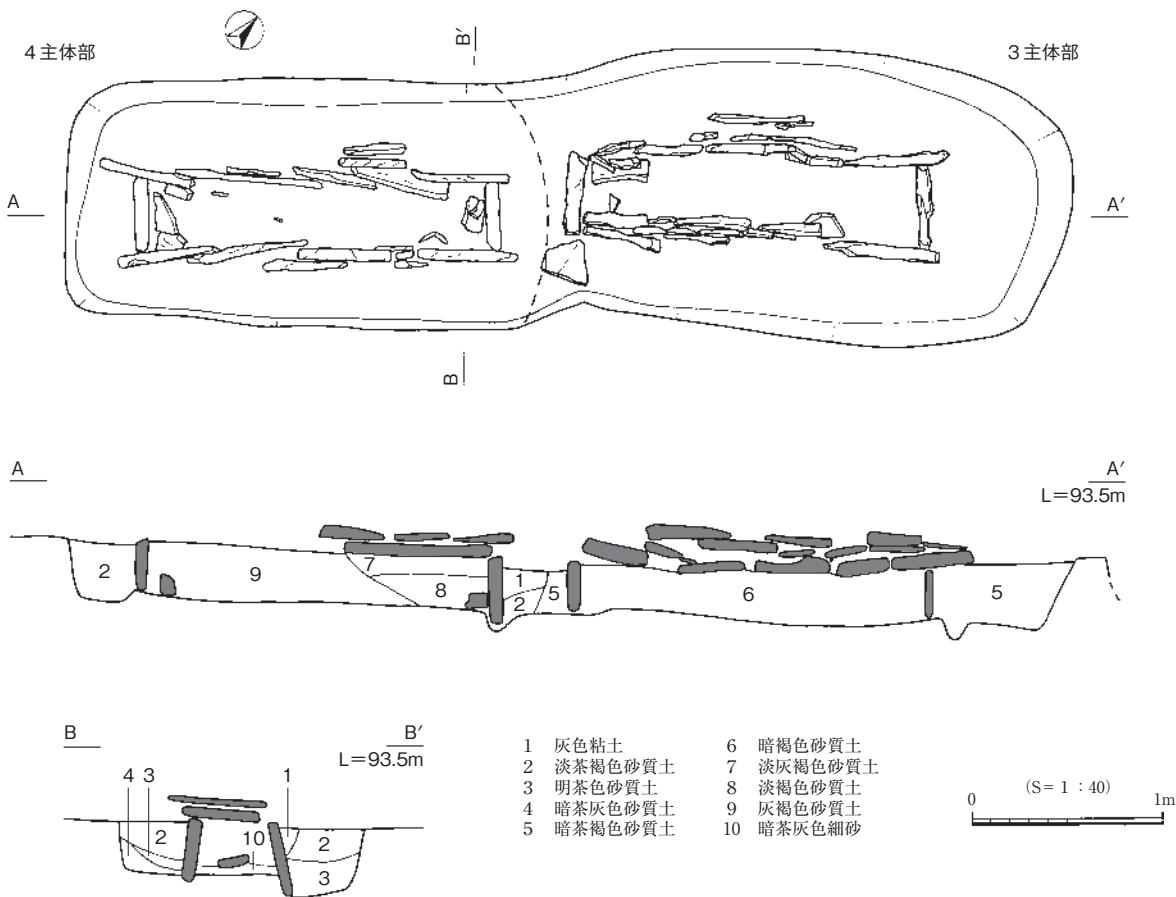
ものか。この石棺内からは、人骨以外の遺物は見つからなかった。

4主体部 3主体部の南西に、直列して配置された石棺墓である。石棺の掘形は、長さ2.5m、幅1.3m、深さ30cmを測る。石蓋は北東側に四角い平石を置き、更に上に3枚の平石を置いているが、南西側の石蓋は盗掘によって失われている。

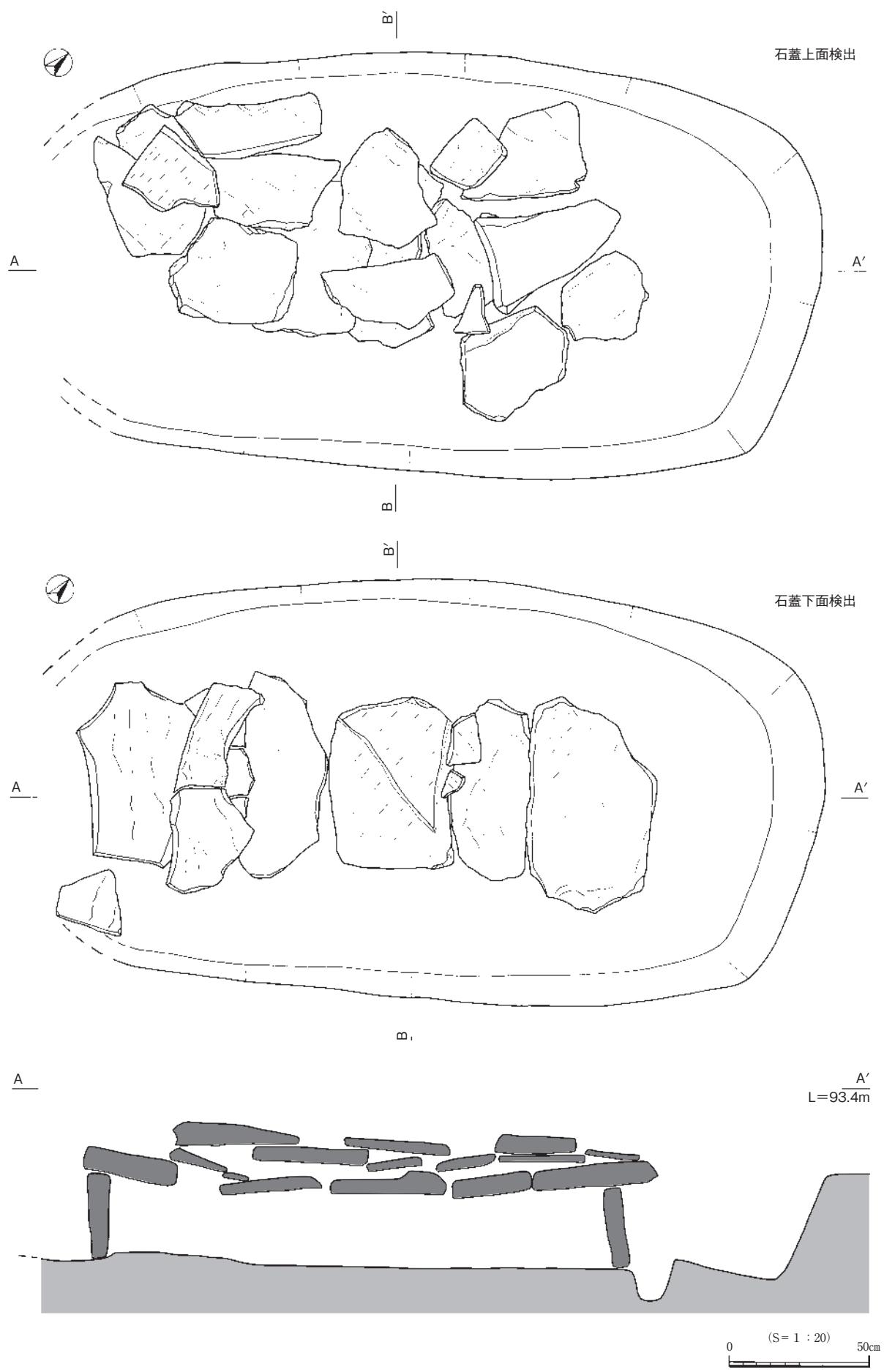
石棺の組み合わせは、平石を「ハ」字形に重ねて長側板とし、小口部は「H」字形となる。棺内の内法は長さ1.8m、幅45cm、高さ25cmを測る。また、石棺材の一部には朱が塗られている。棺内の床面は、南西側がやや高くなっている。床面には盗掘時に取り残した管玉（S.1）や鉄製品（F.4~6）が残されていた。石枕は両端部にあり、南西側は平石を置き左右に平石を立てかけるが、北東側はブロック状の石を置くのみである。こうした状況から、この石棺墓には複数の遺体が埋葬（追葬）されていたものと考えられる。

5主体部 1主体部と3主体部の北側に直交して造られた石棺墓である。石棺の掘形は、長さ2m、幅90cm、深さ30cmで、石棺の据え付け穴は底面に「ロ」字形に溝が掘られるが、裏込め部分は掘形と石棺材の隙間が狭くなっている。石蓋は一部が木の根によって動かされていたが、10枚ほどの平石を置いて閉塞されている。また、北側の石蓋には両面に鑿状の工具で調整した痕跡が明瞭に残るものがある。

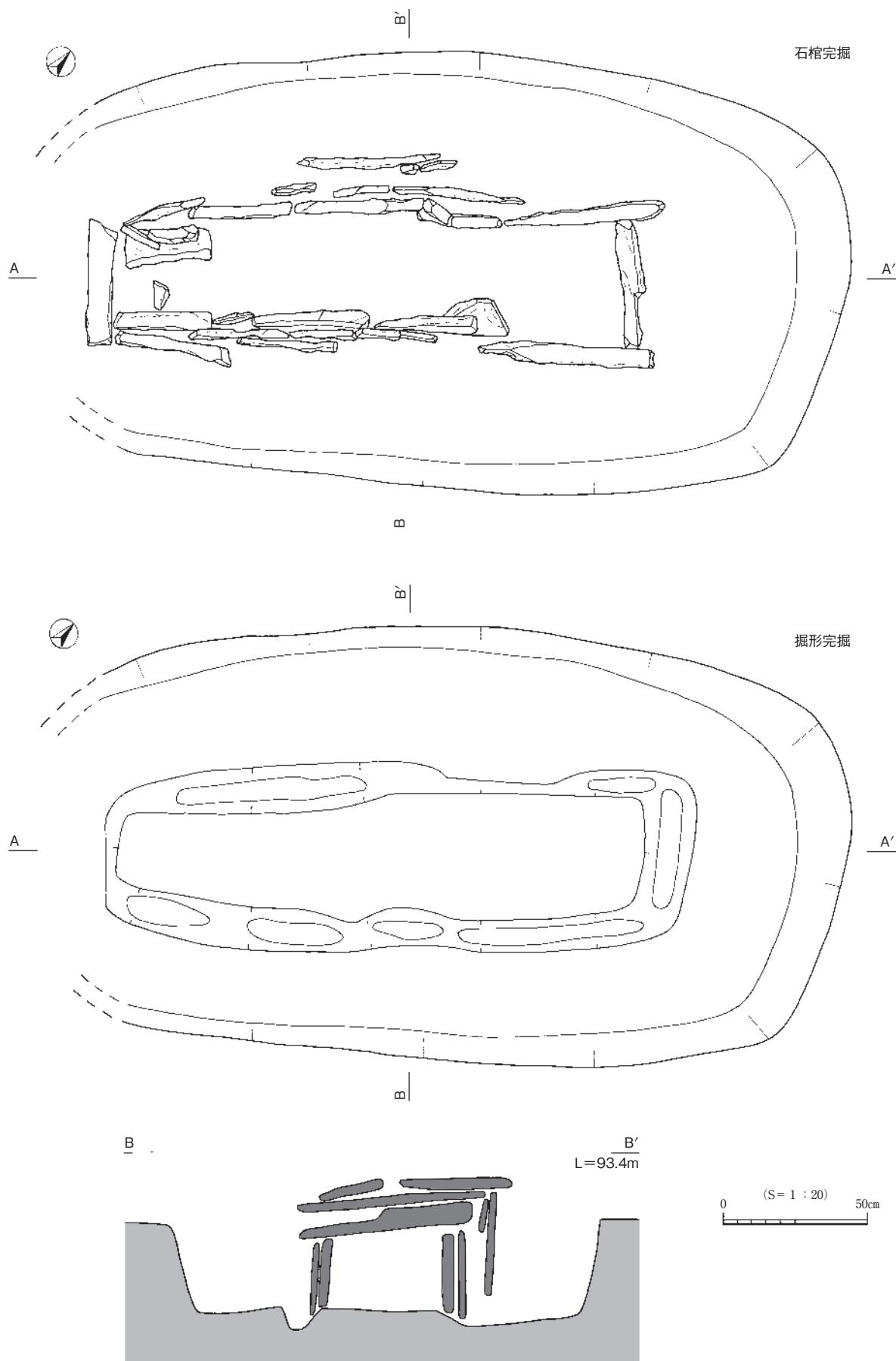
石棺は8枚の平石を「ロ」字形に組み上げて構築されており、規模は内法で長さ1.6m、幅46cm、高さ25cmを測る。棺内は、床面が石枕のある南に向かって高くなっている。石棺の床面から5cmほど浮いた場所に枕石が置かれ、更に左右に三角形の石が立てかけられている。恐らく石の下に土を盛つて、石枕の高さを調整したものと考えられる。



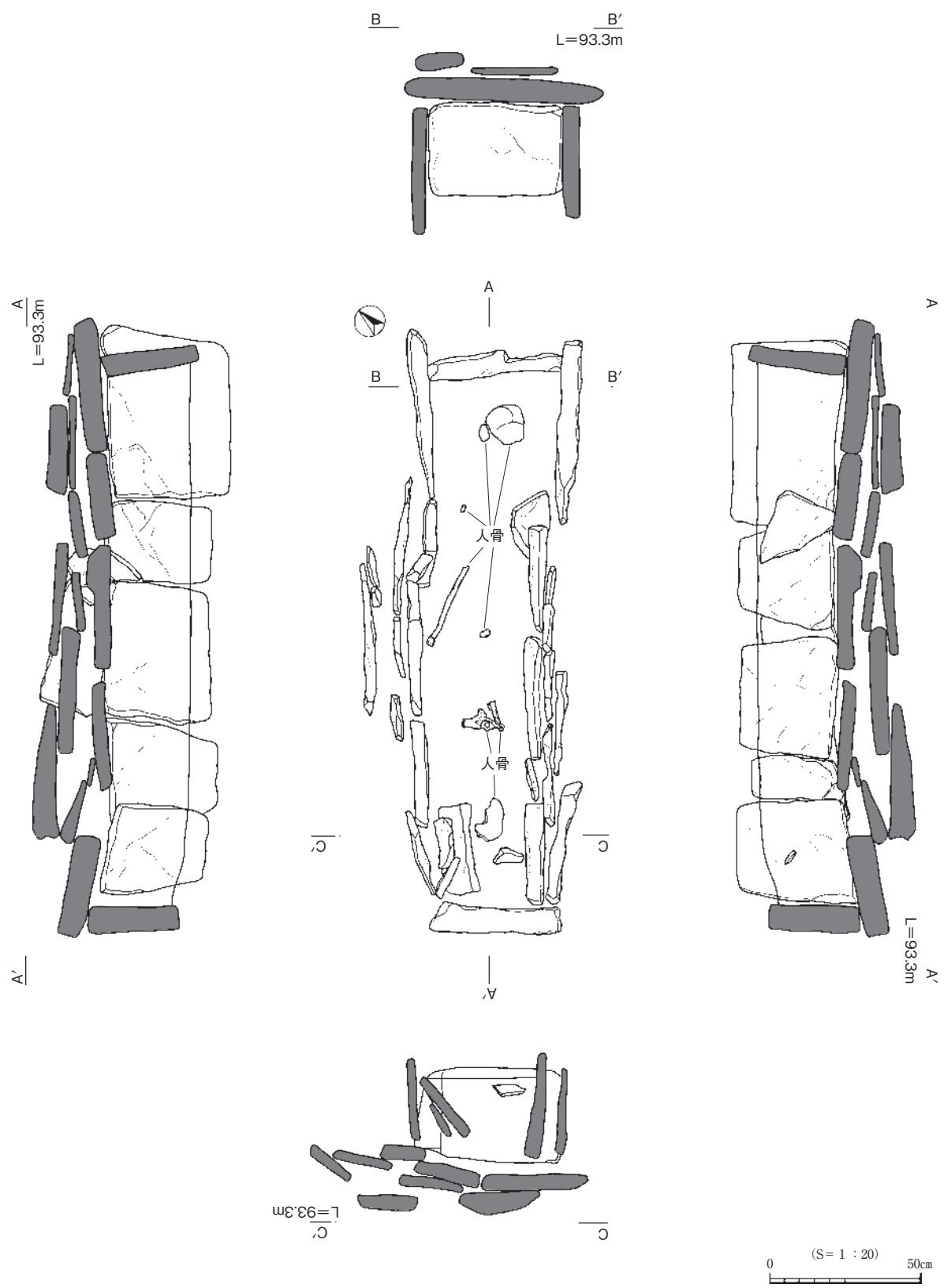
第11図 越敷山71号墳 3・4主体部遺構図



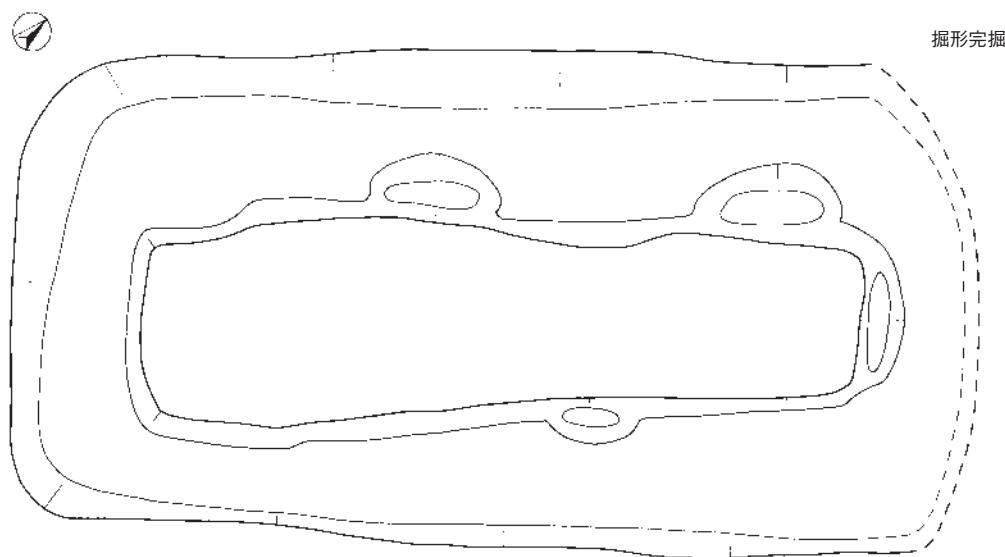
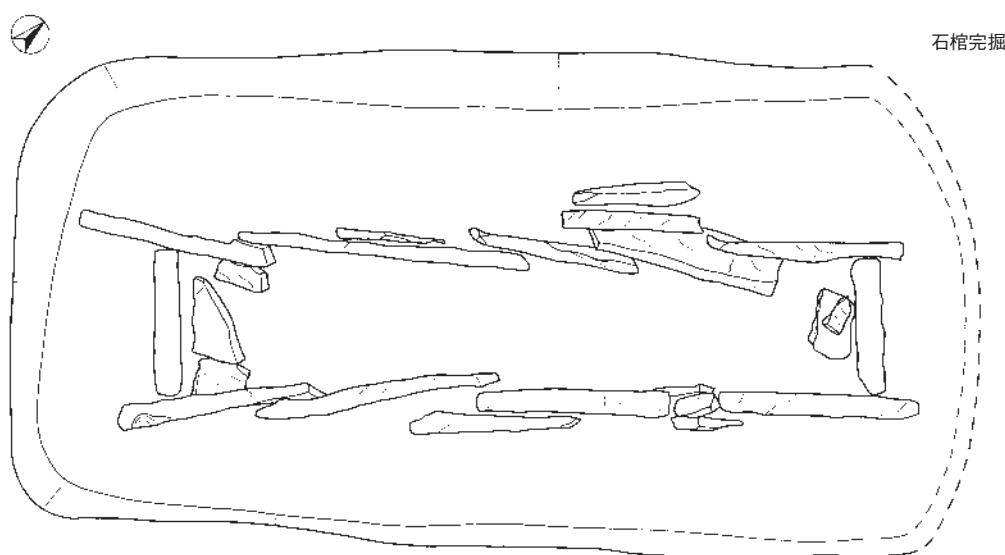
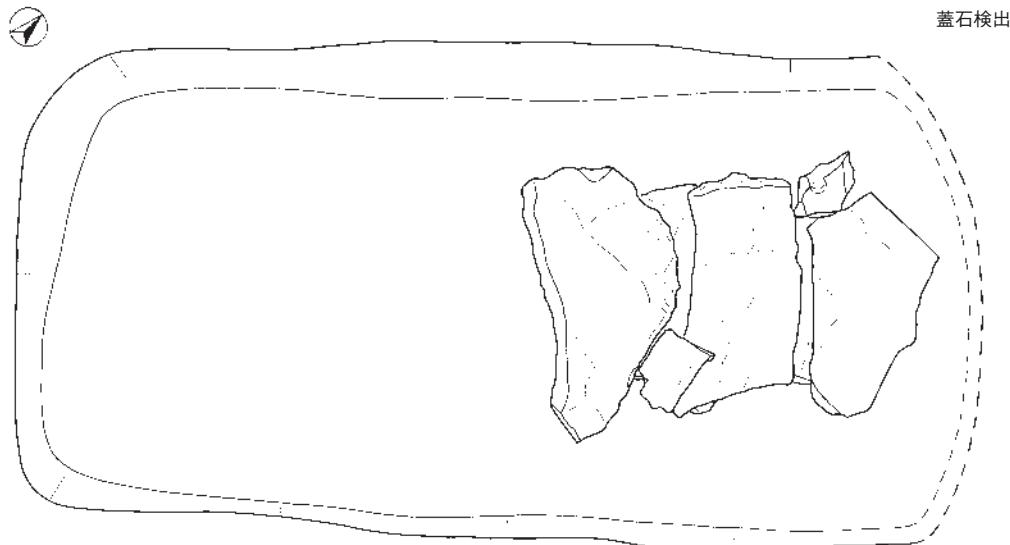
第12図 越敷山71号墳 3主体部 遺構図



第13図 越敷山71号墳 3主体部 遺構図

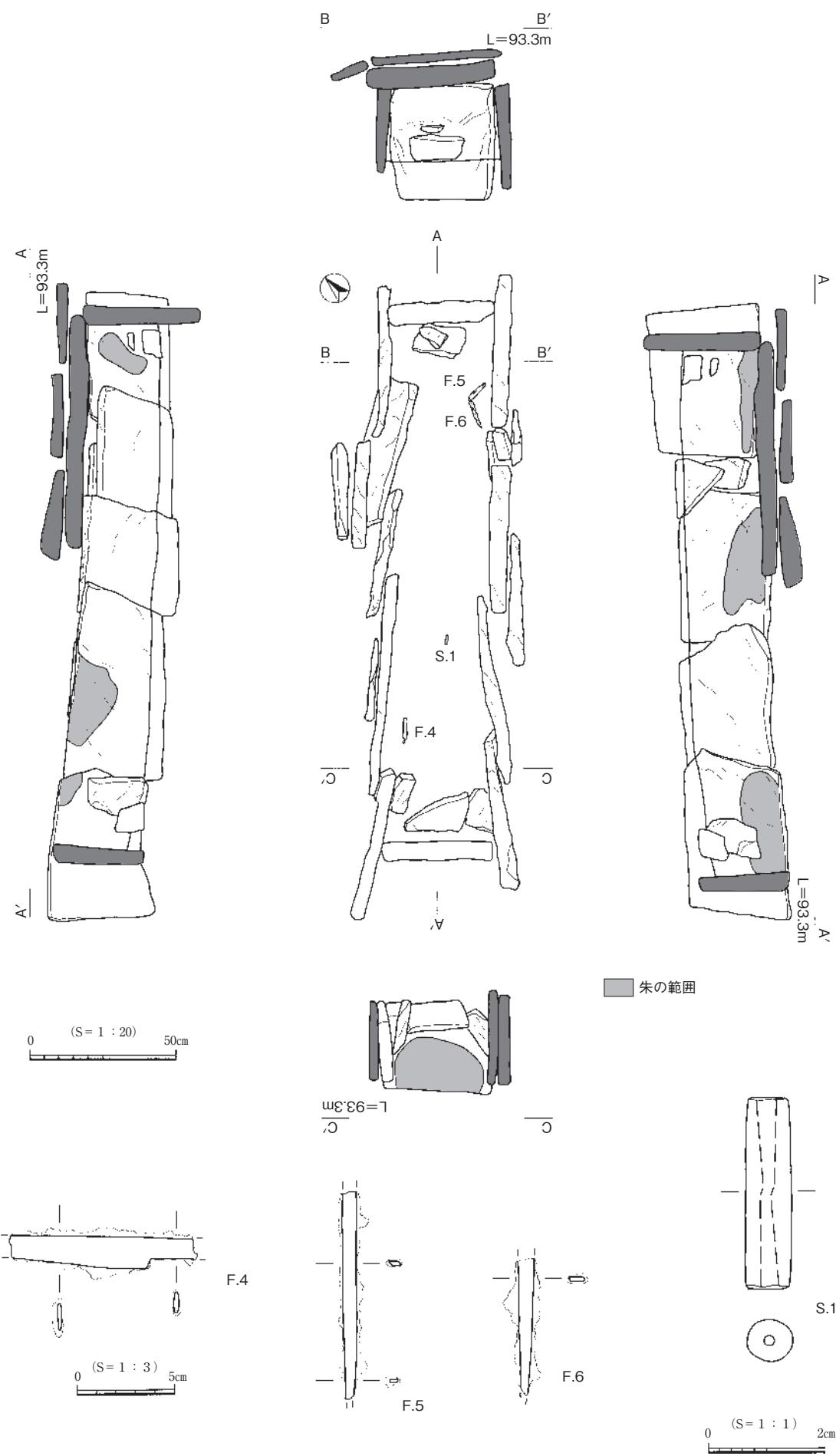


第14図 越敷山71号墳 3主体部 遺構図

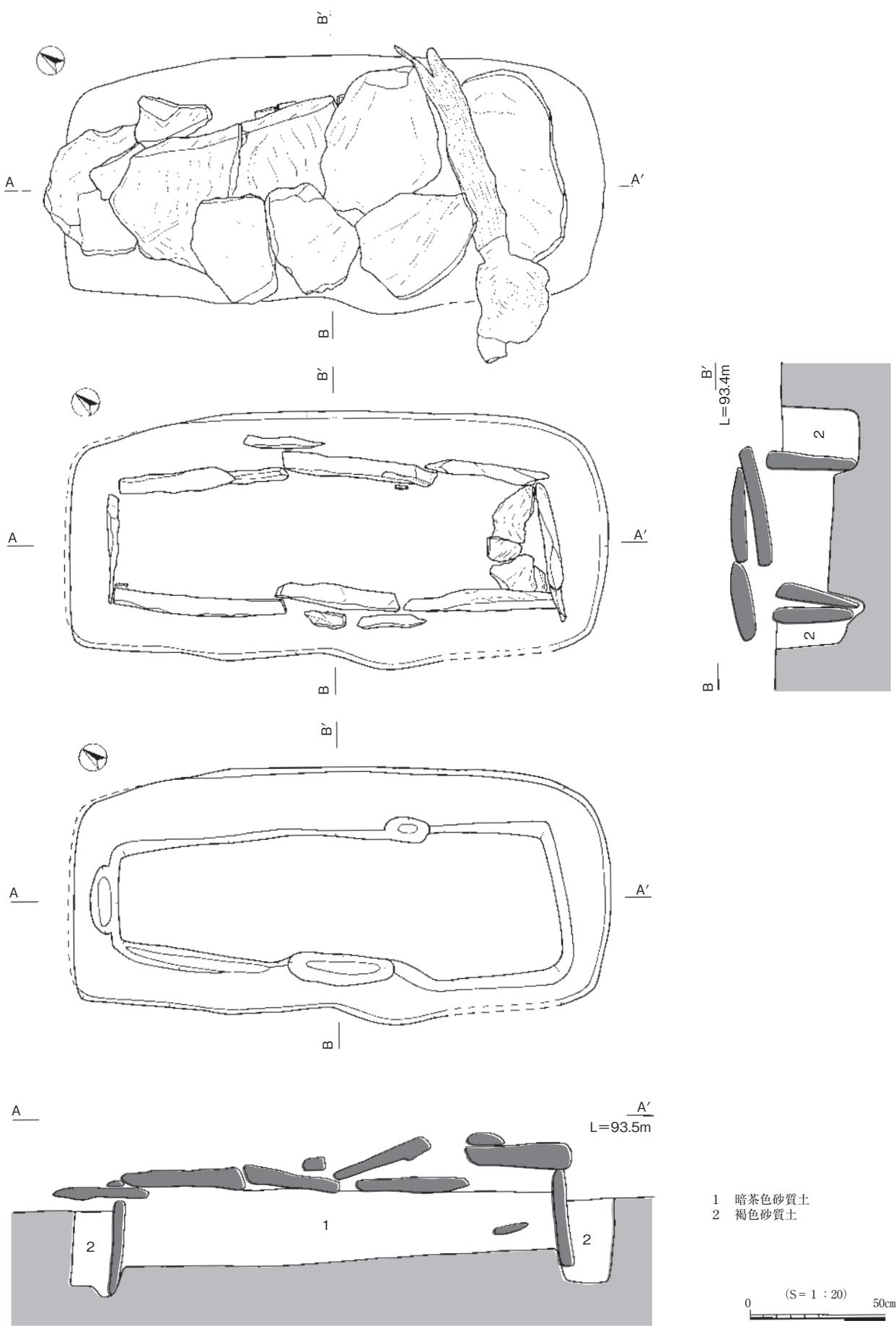


0 (S = 1 : 20) 50cm

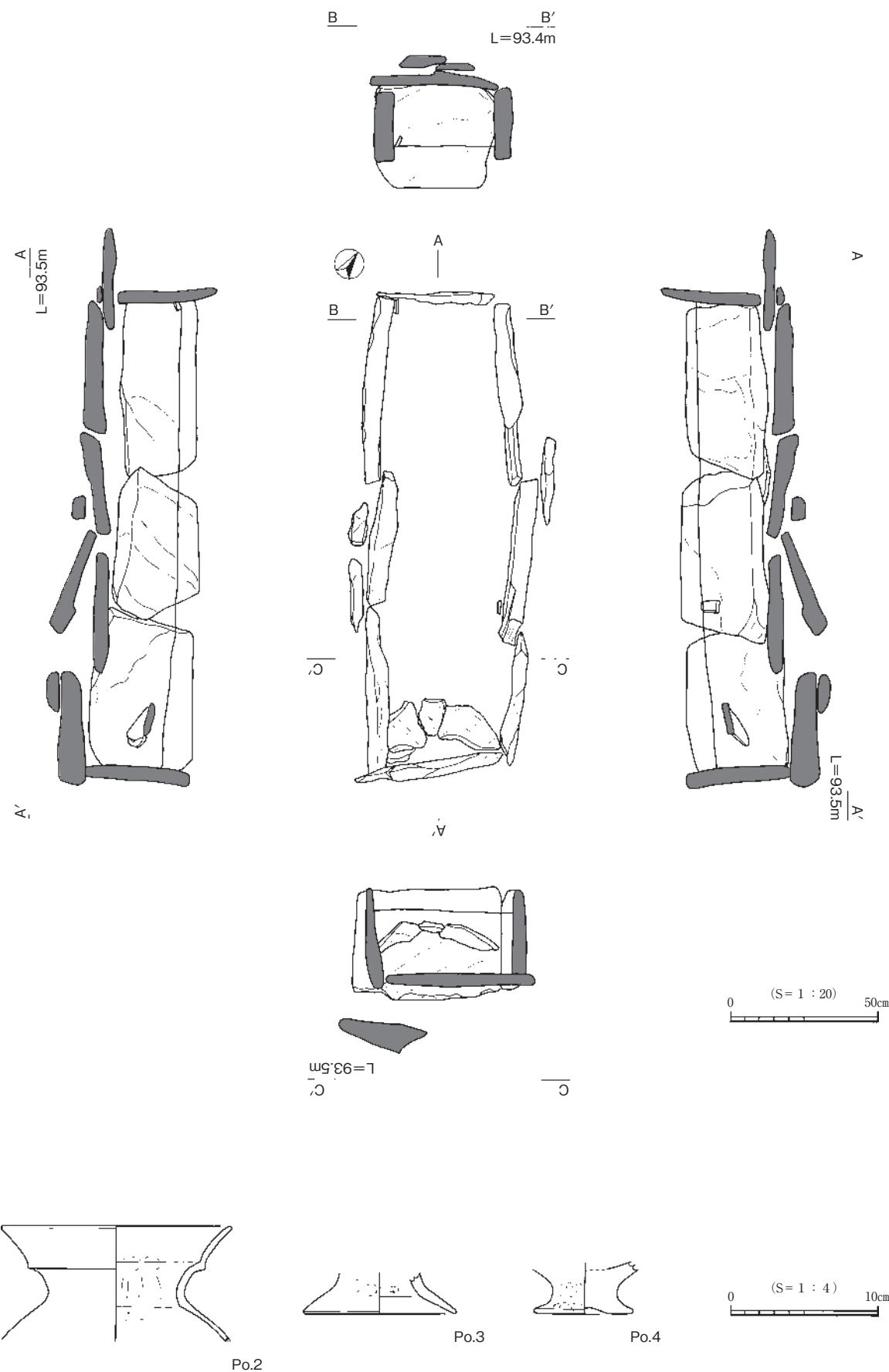
第15図 越敷山71号墳 4 主体部 遺構図



第16図 越敷山71号墳 4 主体部 遺構・遺物図



第17図 越敷山71号墳 5 主体部 遺構図



第18図 越敷山71号墳 5主体部 遺構・遺物図

出土遺物

直接埋葬施設に関わる遺物は、1主体部と4主体部の棺内から出土した鉄器や管玉のほか、1主体部上の表土から出土した土師器の高坏がある。周溝内からの出土遺物は土器が主体であり、二重口縁の土師器壺と低脚壺の底部が出土している。また、周溝を共有する越敷山129号墳、130号墳の周溝内出土遺物も71号墳からの転落遺物の可能性があるが、それらは各古墳の項目で述べる。

Po. 1は、口縁端部が外反する土師器の高坏である。脚部は欠損しており、復元口径は14.8cmで、外面にヨコハケの痕跡が残る。Po. 2は、越敷山79号墳と接する周溝内から出土した、土師器の二重口縁壺の破片である。器壁が薄く、内外面とも風化している。器壁が薄く口縁が肥厚しない特徴から、青木編年のV・VI期からVII期古段階に相当する。Po. 3は、内外面ともナデ調整する土師器高坏の脚端部片。Po. 4は、低脚壺の底部と見られる。F. 1は、1主体部の棺内から出土した鉄剣で、刃部の長さ15.5cm、刃部の幅2.2~2.5cmを測る。外面上は、鎬は見られない。茎部は折損しているため全長が不明だが、長さ7.5cm以上と推測される。茎部の幅は0.8~1.5cmで、厚さは0.3cmとやや細い。目釘穴の有無については、欠損部分があるため分からず。関は非対称で、表面には木質なども残っていない。鉄槍の可能性もあるが、拵えの構造が復元できないため剣とする。刃部は意図的に折り曲げられており、埋葬時に折り曲げて副葬されたものと考えられる。刃部が折り曲げられていることから、鞘は使用されていない。F. 2は、ヤリガンナである。現存する長さは、15.5cmで基部を欠損している。刃部は緩い反りを持つが、鎬の有無は錆化しているため不明である。基部は1cm×0.5cmで、断面は長方形を呈している。F. 3は、長さ10.4cmの不明鉄製品である。端部が欠損して鎌膨れが進行しているが、現状では匙形を呈する。F. 1と同様に中途で折り曲げられているが、武器であれば剣の茎部か。F. 4は、4主体部の棺内から出土した刀子と見られる鉄製品で、先端部と基部を欠損する。現存する長さは9.6cmあり、X線写真では直角の関を確認できる。表面には、木質は確認できない。F. 5は、現存する長さ7cmの鉄製品で、ヤリガンナの基部か。F. 6は、現存する長さ7cmの鉄製品で、ヤリガンナの基部か。端部には、0.5cmほどの布の纖維が付着している。S. 1は、長さ3.3cm、幅0.8cmの管玉で、両面穿孔されている。原石は、花仙山産の碧玉か。

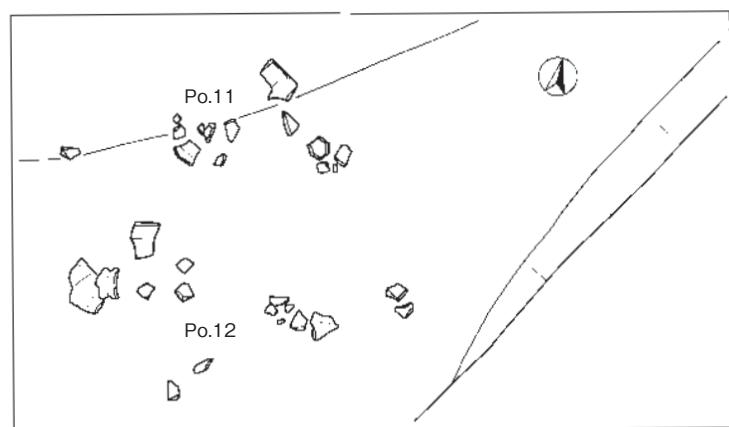
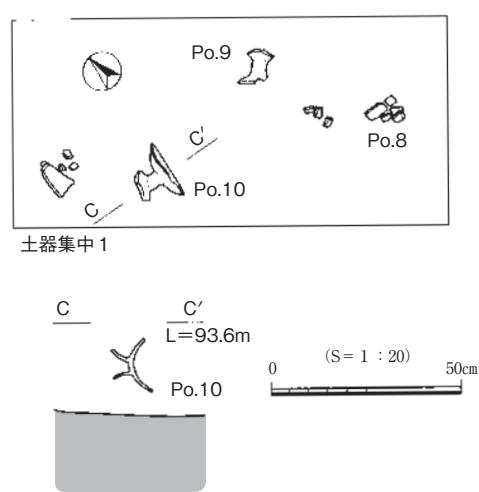
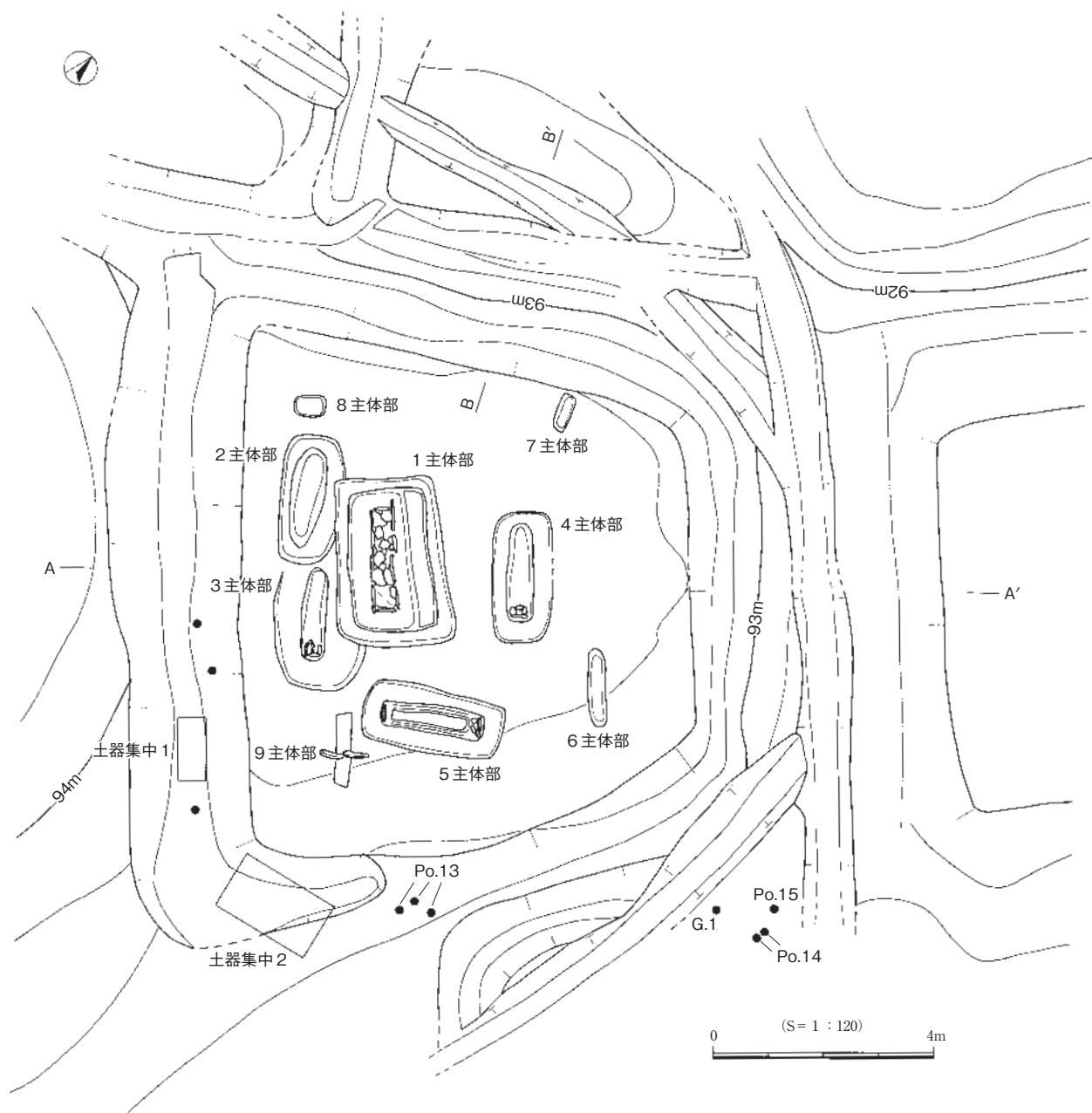
この古墳の築造された時期は、Po. 1や1主体部の形態から、古墳時代前期中葉から後葉と考えられる。

越敷山79号墳（第19~32図）

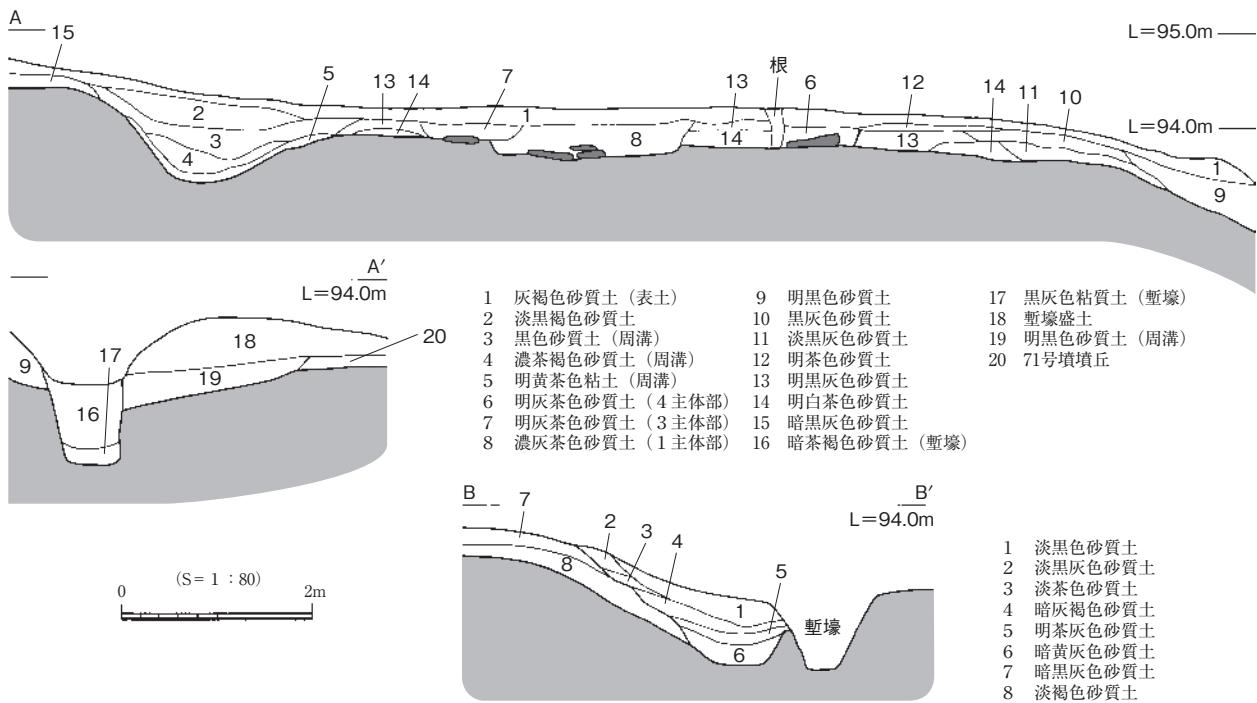
越敷山71号墳の南西部に隣接する方墳である。調査前の測量では、台形を呈しているため越敷山71号墳の墳丘と連なる前方後方墳かと推測されたが、両古墳の間に周溝が確認されたことから、71号墳とは独立した方墳と考えられる。

墳丘・周溝

越敷山79号墳の墳丘は、地山を四角く削り出した方墳で、東西の周溝は越敷山71号墳、135号墳と共有しており、東側が幅2.4m、深さ60cm、西側が幅2.4m、深さ1m程と推測される。南北の周溝は、北側が斜面側に向かって傾斜しているが、越敷山131号墳の周溝によって区画されている。南側の周溝は、越敷山132号墳の周溝によって改変されているようだが、南西部のコーナー付近で、幅1.5m、深さ50cm程度が残存しており、本来の大きさは、周溝内側の立ち上がりから東西11m程、南北11.6mの規模であったと推測される。



第19図 越敷山79号墳 遺構図



第20図 越敷山79号墳 遺構図

墳丘の盛土は、一部の埋葬施設では調査前から石蓋や石棺材が露出しているものがあったことから殆どが流出しており、表土も含めて40cm程度しか残っていなかった。周溝内から出土した遺物は、南西部のコーナーに近い土器集中1と土器集中2の周辺から出土しており、さらに南東部のコーナー部分、越敷山132号墳の周溝と重複する部分に分かれる。

埋葬施設

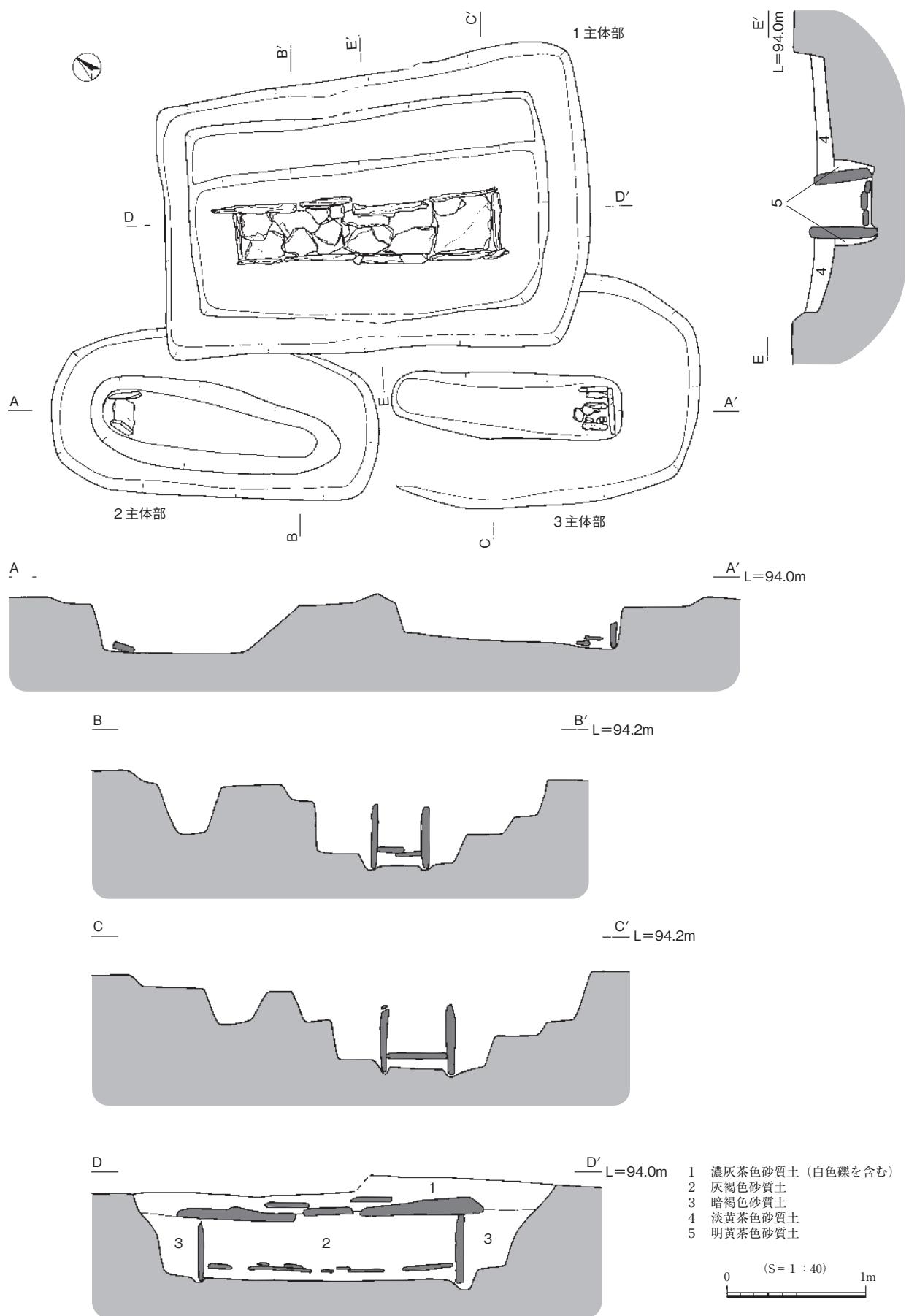
埋葬施設は、墳丘上に9基確認された。石棺墓が2基、石蓋土壙墓4基、小口部にのみ平石を使用する折衷型の埋葬施設3基がある。各主体部が築造された順序は、1主体部→2主体部→3主体部の順で、それ以外のものは切り合いが無いため分からぬ。

1 主体部 墳丘の中央よりやや南西寄りに造られた、大型の石棺墓である。墓壙の掘形は二段墓壙で、長さ3.1m、幅2m、残存する深さは10~30cmを測る。石棺の掘形は、北東側に幅30cmほどの段を設けるタイプで、棺材を組み上げるために掘り残されたものか。石棺を組み上げた時には、この段も埋め戻されていた。

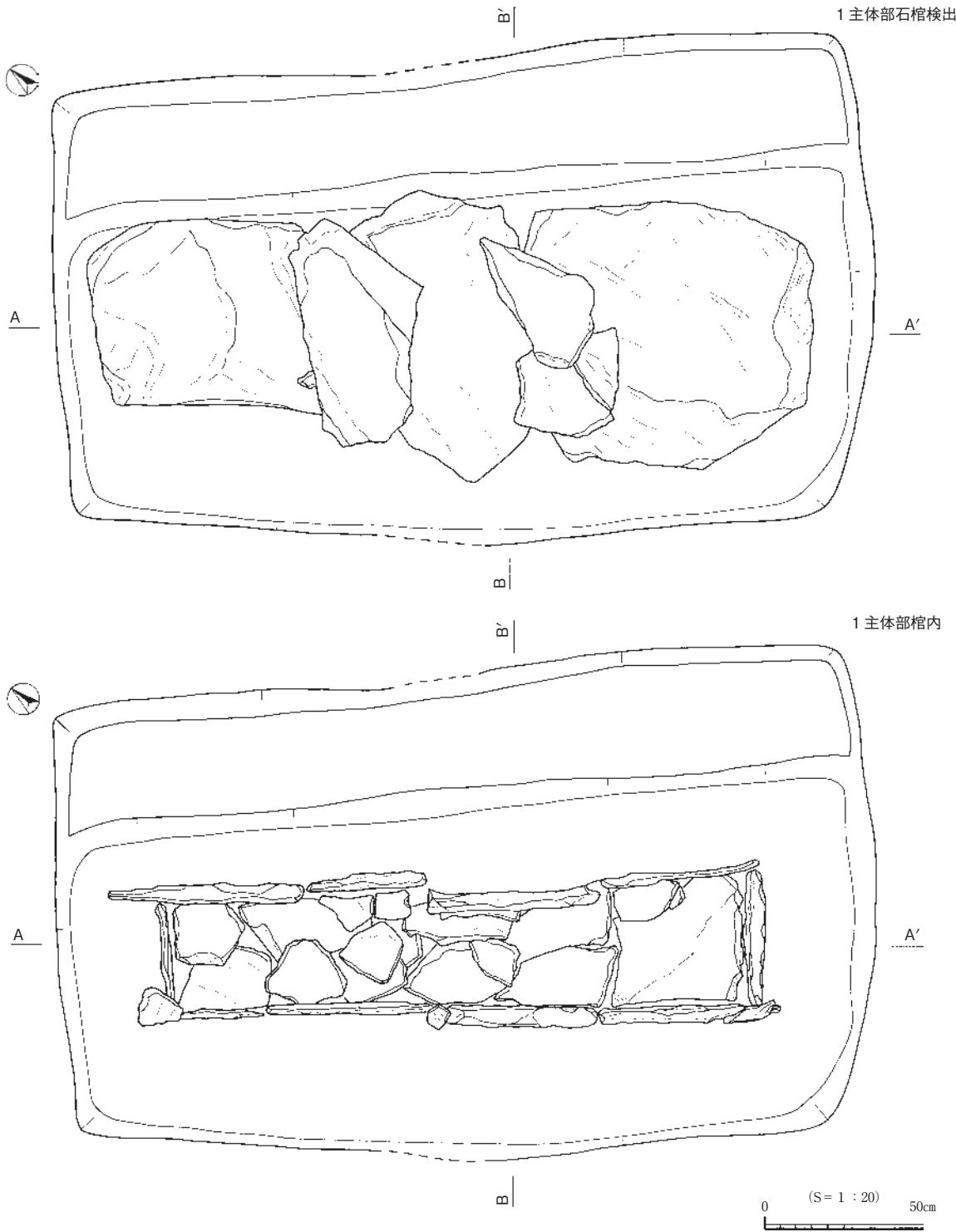
石棺掘形の規模は、長さ2.6m、幅1.55m、深さ25cmを測る。石蓋は3枚の平石を並べ、合わせ口の上部に平石を置いて閉塞している。石棺の構造は、四角く整形された4枚の平石を長側板とし、小口板を「H」字形に組み合わせている。棺床には小割した平石が一面に敷き詰められているが、目立った副葬品や石枕などは見られなかった。石棺の規模は、内法で長さ1.82m、幅32cm、高さ40cmを測る。

2 主体部 1主体部の南西部に隣接して造られた、石蓋土壙墓である。墓壙の掘形は、1主体部を切っているため、こちらの方が新しい。墓壙の掘形は二段墓壙で、長さ2.4m、幅1.2m以上、深さ5cm程度が確認できる。石蓋は、平石を6枚並べた上に多数の平石を被せて閉塞している。

主体部は長さ1.8m、幅40~65cm、深さ40cmで、北西側が南東側よりも広くなっている。遺体の納まりが良いように掘られている。石枕は、北西側の底面に平石が1個置かれ、更に左右から挟み込むようにして平石が立て掛けられている。

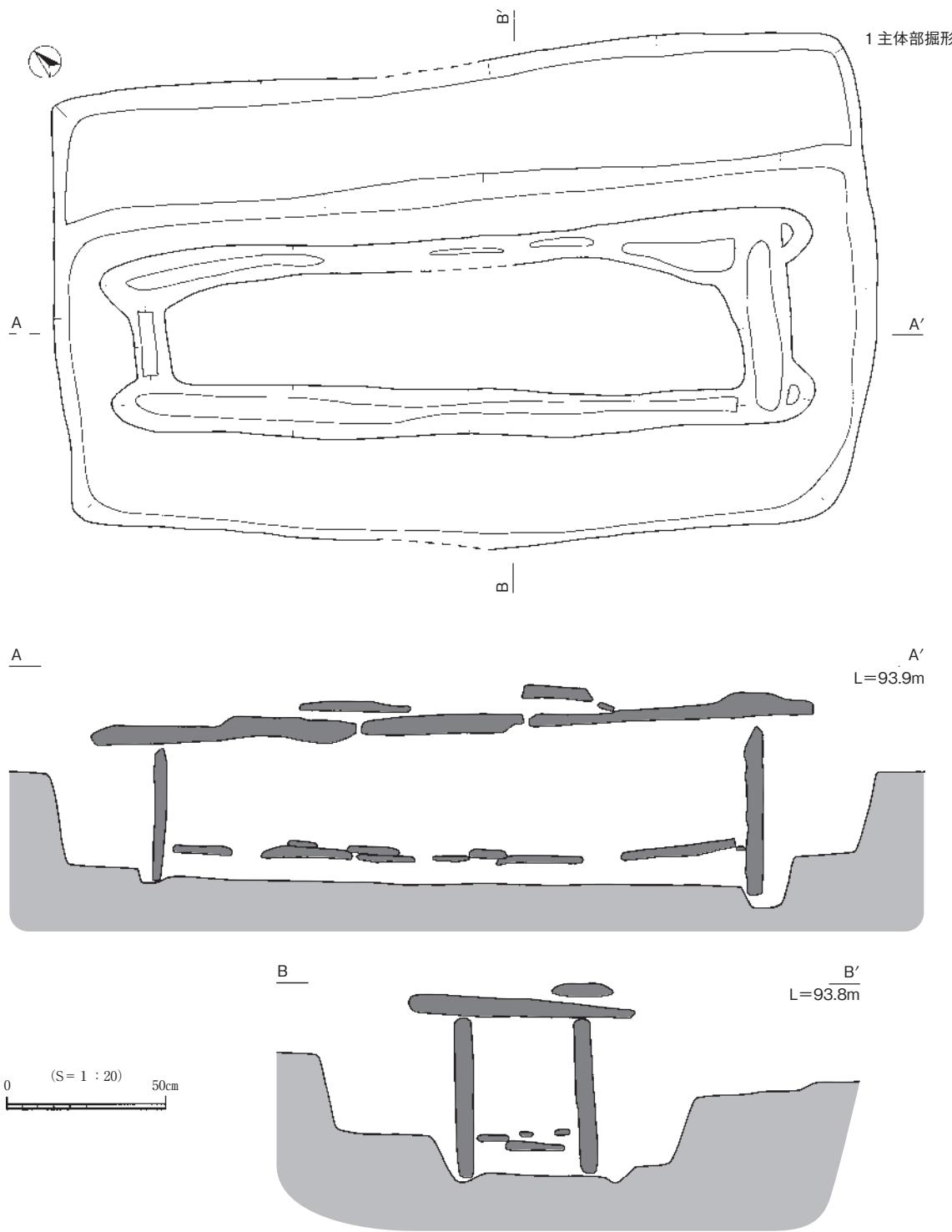


第21図 越敷山79号墳 1～3 主体部遺構図



第22図 越敷山79号墳 1主体部遺構図

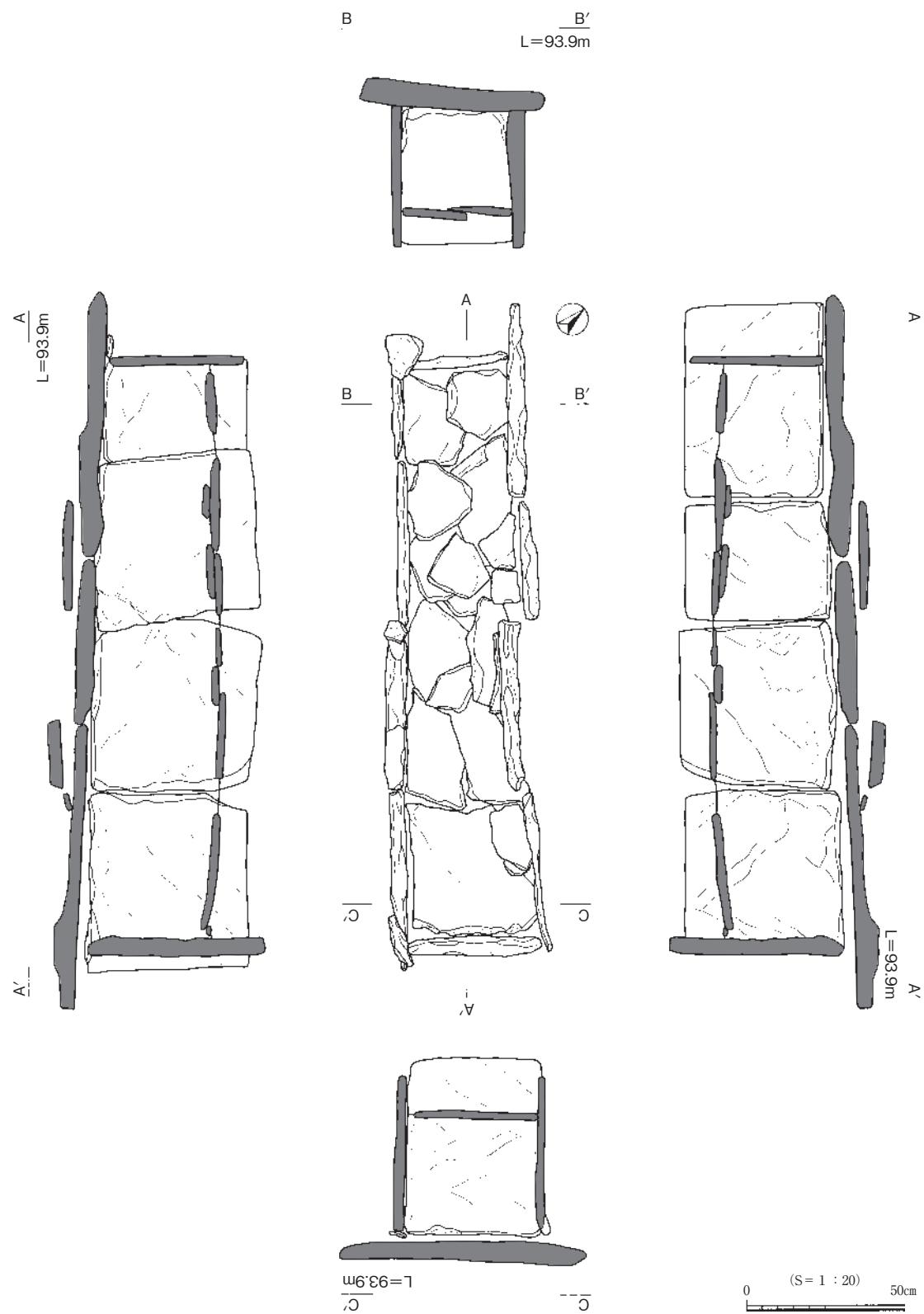
3 主体部 1主体部の南東部に隣接して造られた、片側の小口部にのみ石を用いる折衷型の石棺墓である。石蓋が1主体部と2主体部の掘形と重なることから、新しい段階のものと考えられる。墓壙の掘形は二段墓壙状となるが、表土を10cmほど掘り下げた時点で掘形を検出したことから、墳丘の盛土は大半が流出している。石蓋は、4枚の平石を並べて合わせ口の上に平石を置いて閉塞している。主体部は長さ1.65m、幅35~48cmで、東側が広く西側が狭くなる。小口板は、幅34cm、高さ22cm、厚さ4cmの平石を使用しており、小口板を立てるための掘形は、やや大きめに掘られている。石枕は、東側の底面に平石を数個置き、更に小口板に接して2枚の平石を側石状に真っ直ぐ立てているが、石枕の中央にも区画するように平石が立てられている。幅が10cmほどしかないため二人同時に使用したも



第23図 越敷山79号墳 1 主体部遺構図

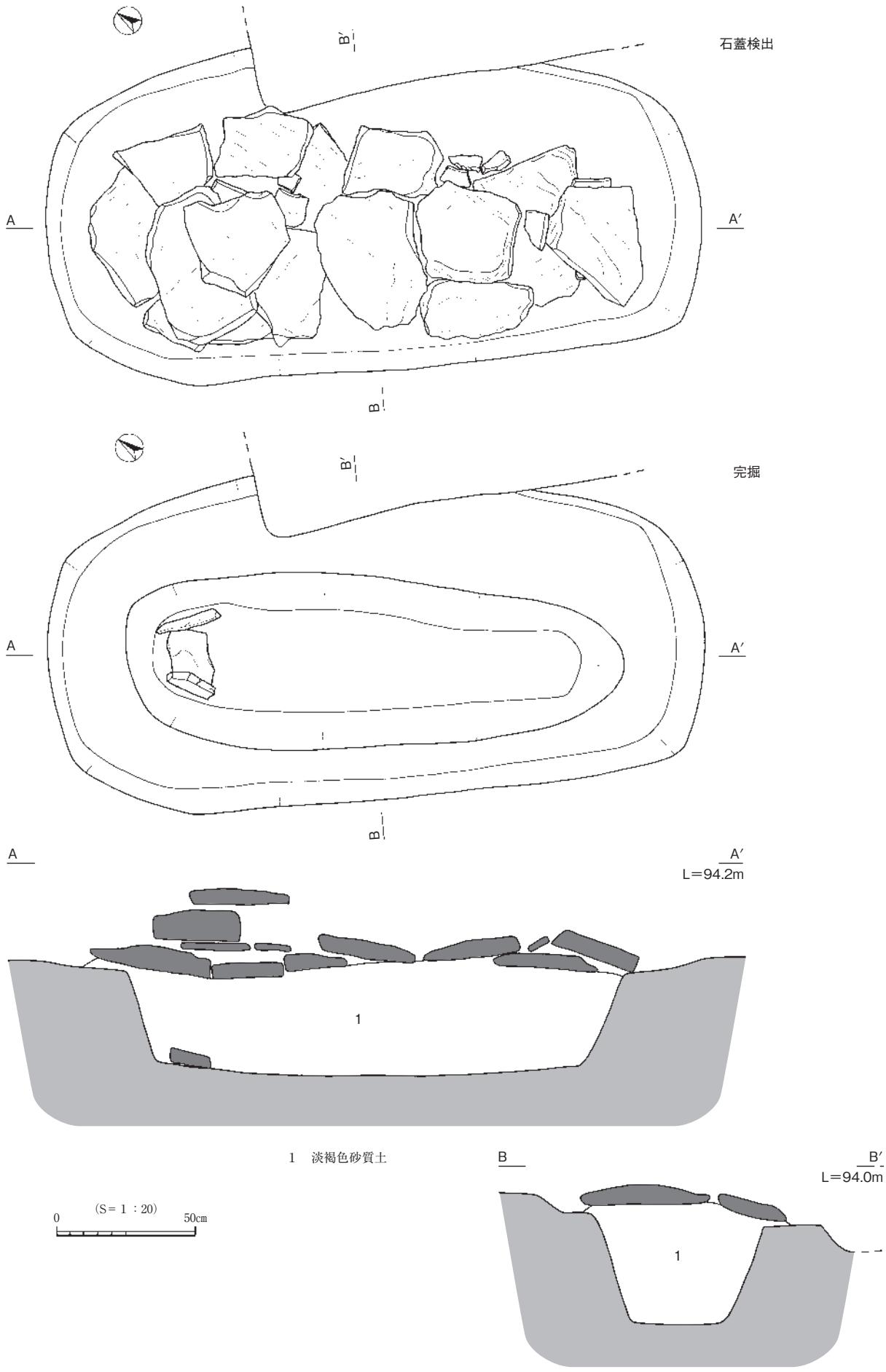
のでは無いと思われるが、このような形になった意図は不明である。

4 主体部 1 主体部の東に位置する、折衷型の石棺墓である。墓壙の掘形は二段墓壙で、検出面の長さ2.4m、幅1.1m、深さ25cmを測る。石蓋は5枚の平石を並べ、合わせ口の上に3枚の平石を置いて閉塞している。主体部は、東側の小口部にのみ平石を用いる折衷型で、西側の小口部には使用されていない。主体部の規模は、長さ1.8m、幅40~55cmで、東側が広く、西側が狭い。小口板は、幅32cm、高さ48cm、厚さ6cmの平石を使用しており、棺床より20cm以上の深さまで差し込んで固定する。石枕は、南東部の底面に1個の平石を置き、左右に2個の平石を小口部に接するようにして挟み込んでいる。いわゆる「V」字形の石枕を意識したものと考えられる。

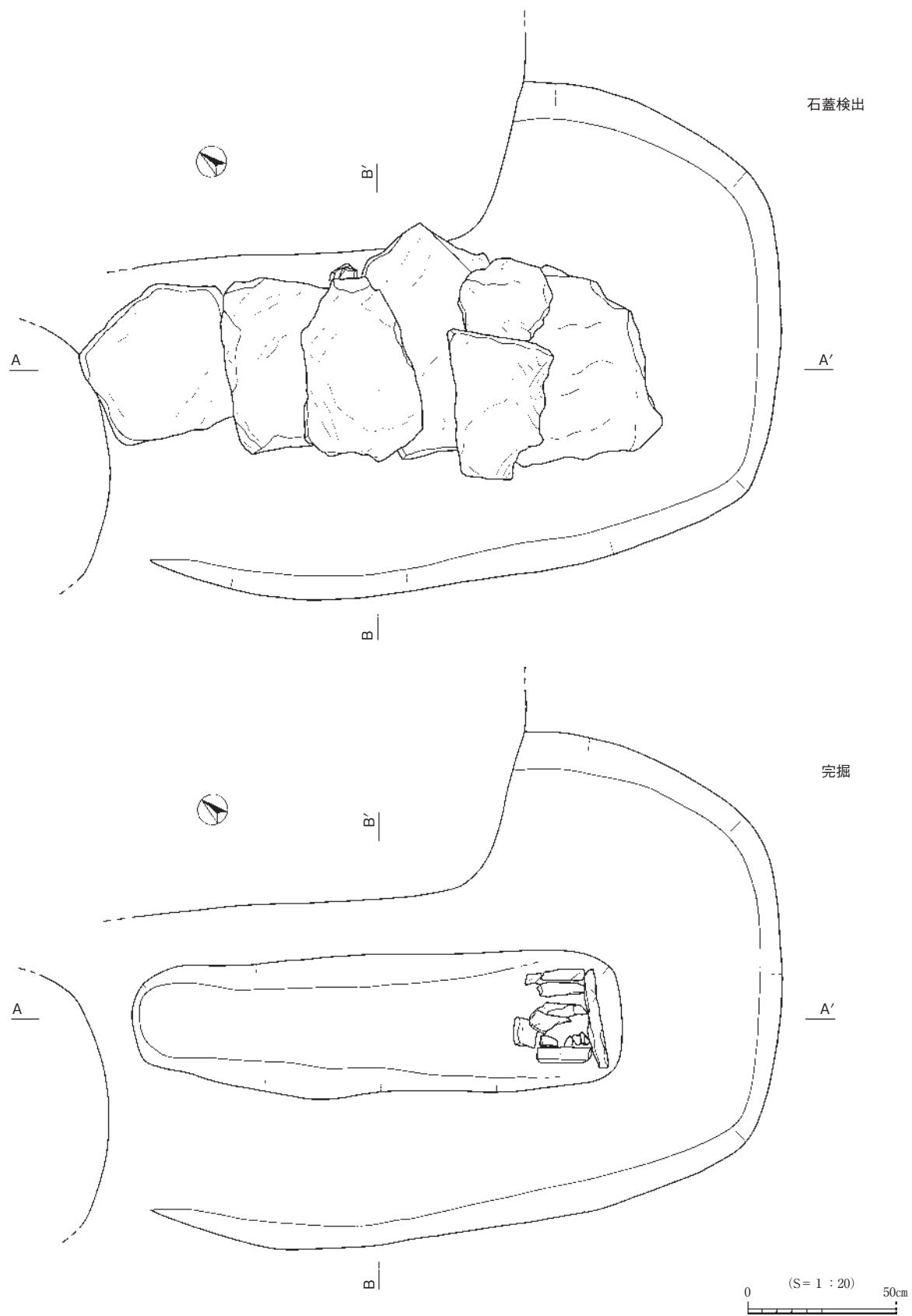


第24図 越敷山79号墳 1 主体部遺構図

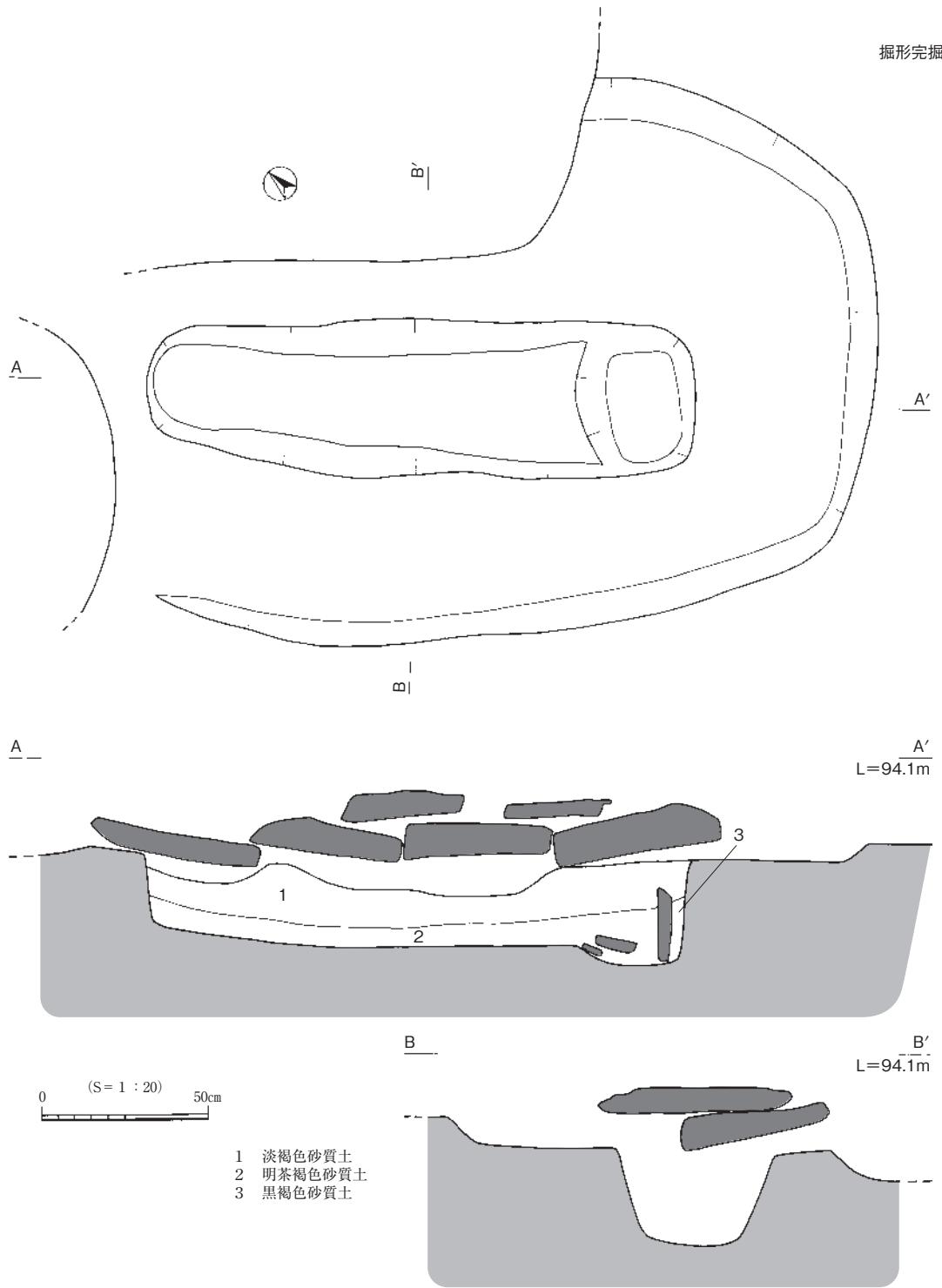
5 主体部 1 主体部の南東部で検出した、小口部にのみ平石を用いる折衷型の石棺墓である。墓壙の掘形は二段墓壙で、長さ2.6m、幅1.1m、深さ35cmを測る。石蓋は、5枚の平石を並べて閉塞している。主体部は、両小口部に平石を立てているが、長側板の部分には木棺の痕跡は見られなかった。ただし、長側板の部分が10cmほど高くなっていることから、木製の棺材が使用された可能性がある。この場合、棺材は「ロ」字形に組み合されている。棺内からの出土遺物は見られなかつたが、東側の



第25図 越敷山79号墳 2 主体部遺構図



第26図 越敷山79号墳 3主体部遺構図

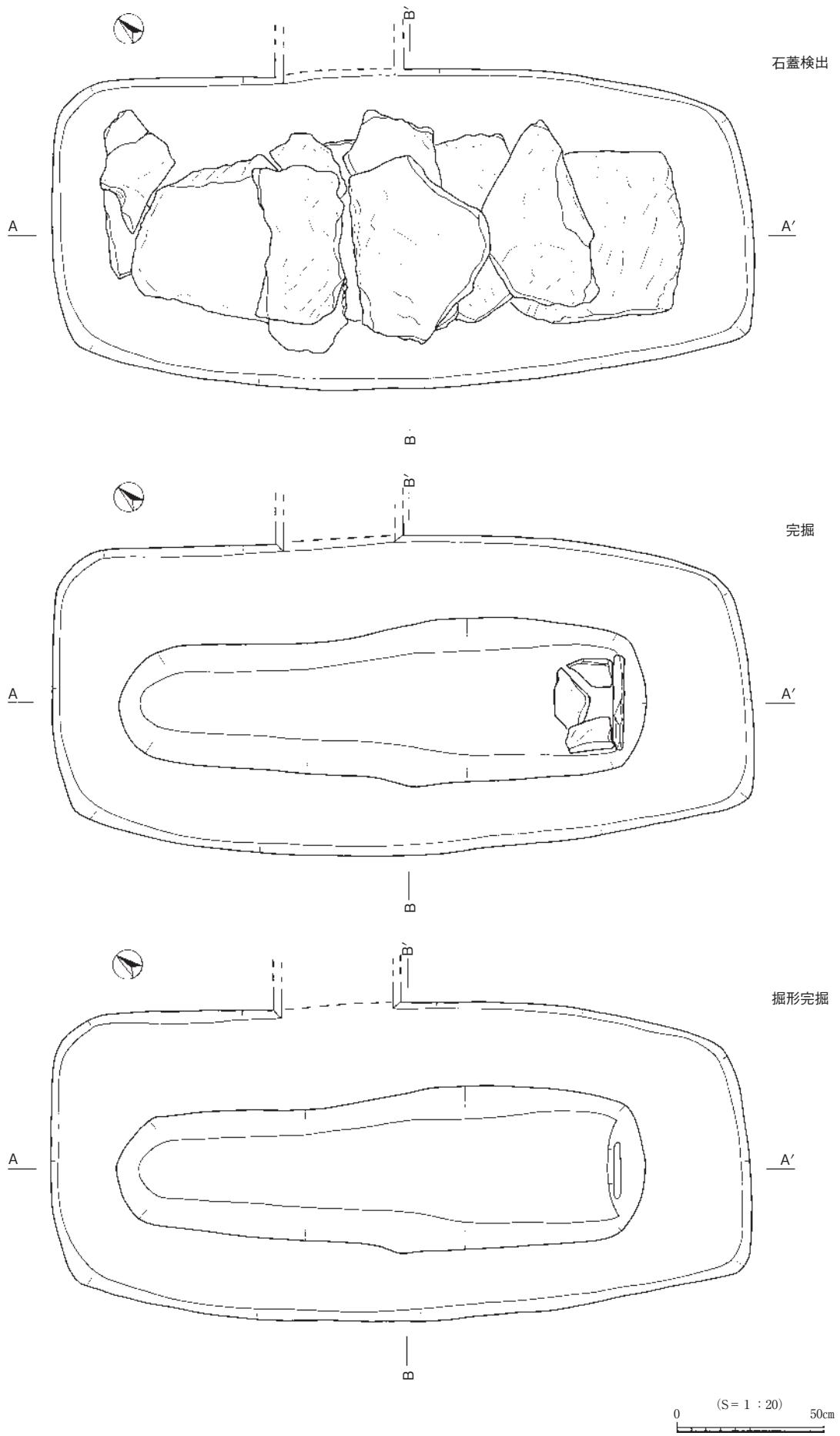


第27図 越敷山79号墳 3 主体部遺構図

底面に2個の平石を置いて石枕としている。

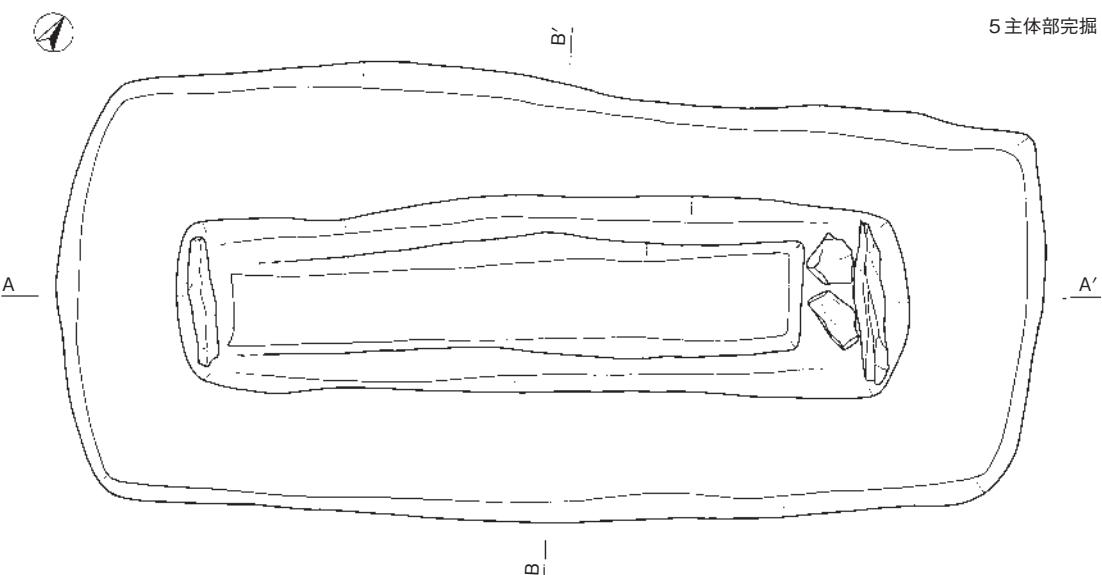
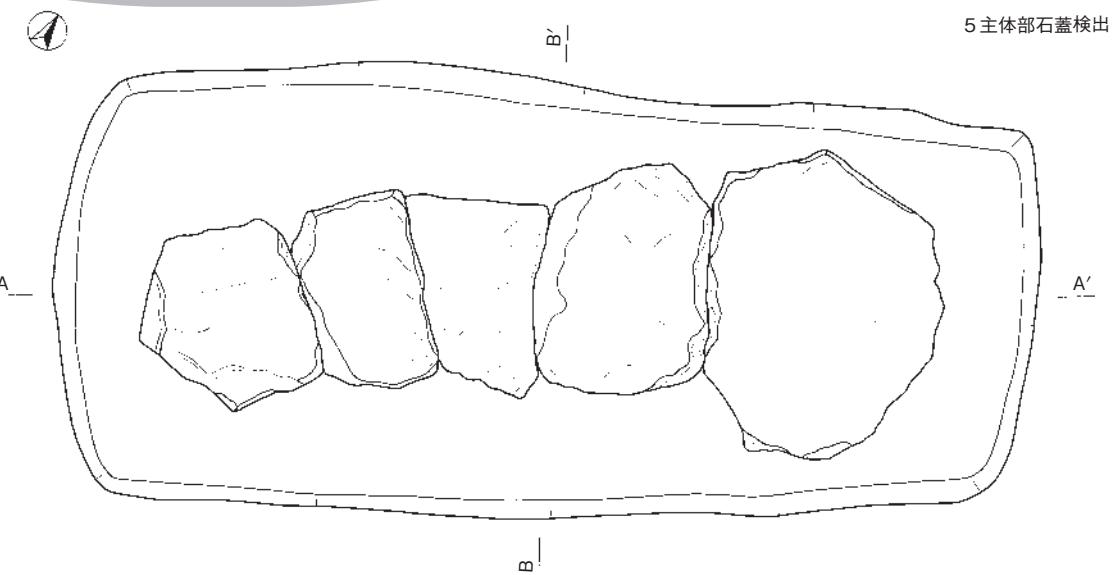
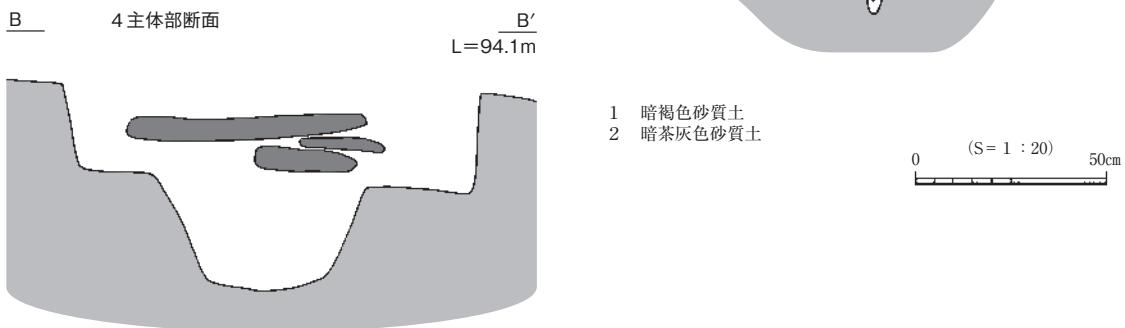
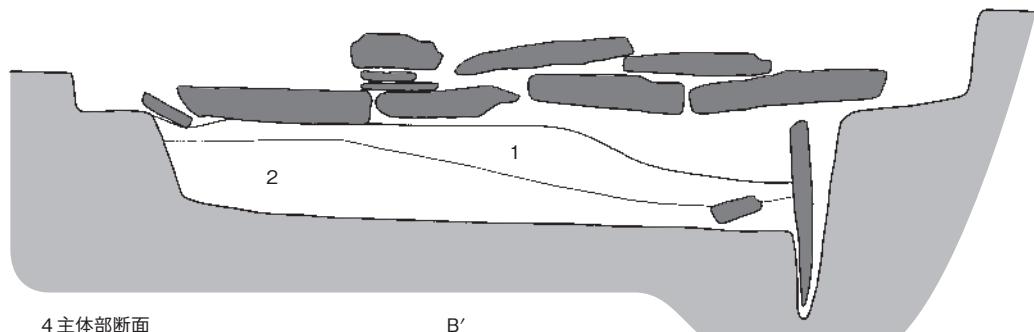
6主体部 墳丘の西側で検出した、石蓋土壙墓である。石蓋は3枚の平石を並べ、合わせ口の上に平石を置いて閉塞している。主体部は、長さ1.35m、幅30cm、深さ16cmの長楕円形を呈する。底面の南東部に、長方形の石を1個置いて石枕としている。

7主体部 4主体部の北西部で検出した、小型の石蓋土壙墓である。石蓋は2枚の平石を置き、合わせ口の上面に平石を置いて閉塞している。主体部は、長さ70cm、幅26cm、深さ12cmの隅丸方形を呈する。石枕は見られなかったが、底面のレベルは南側がやや高くなっていることから、南頭位で埋葬されたものか。

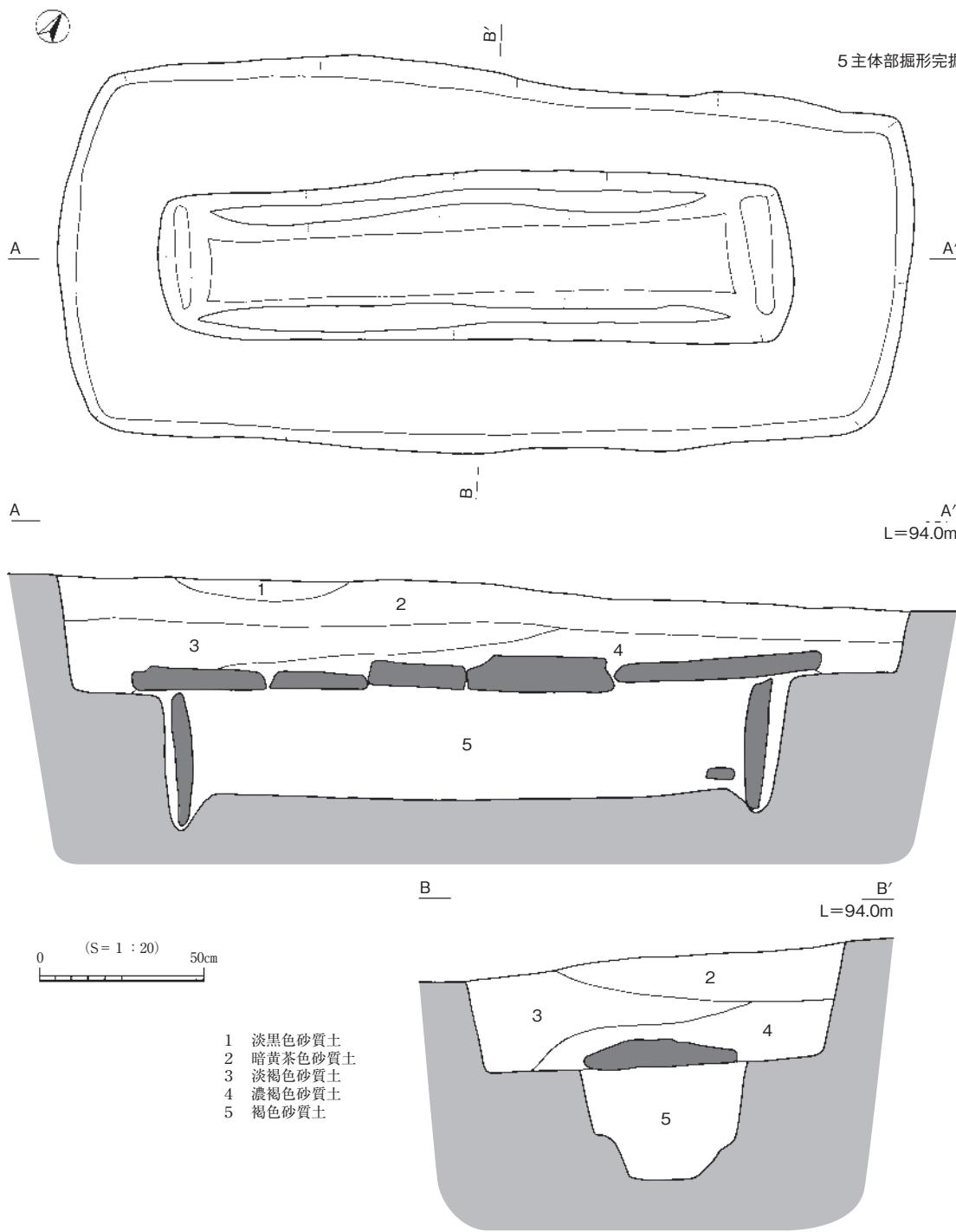


第28図 越敷山79号墳 4主体部遺構図

A 4 主体部断面 A'
L=94.1m



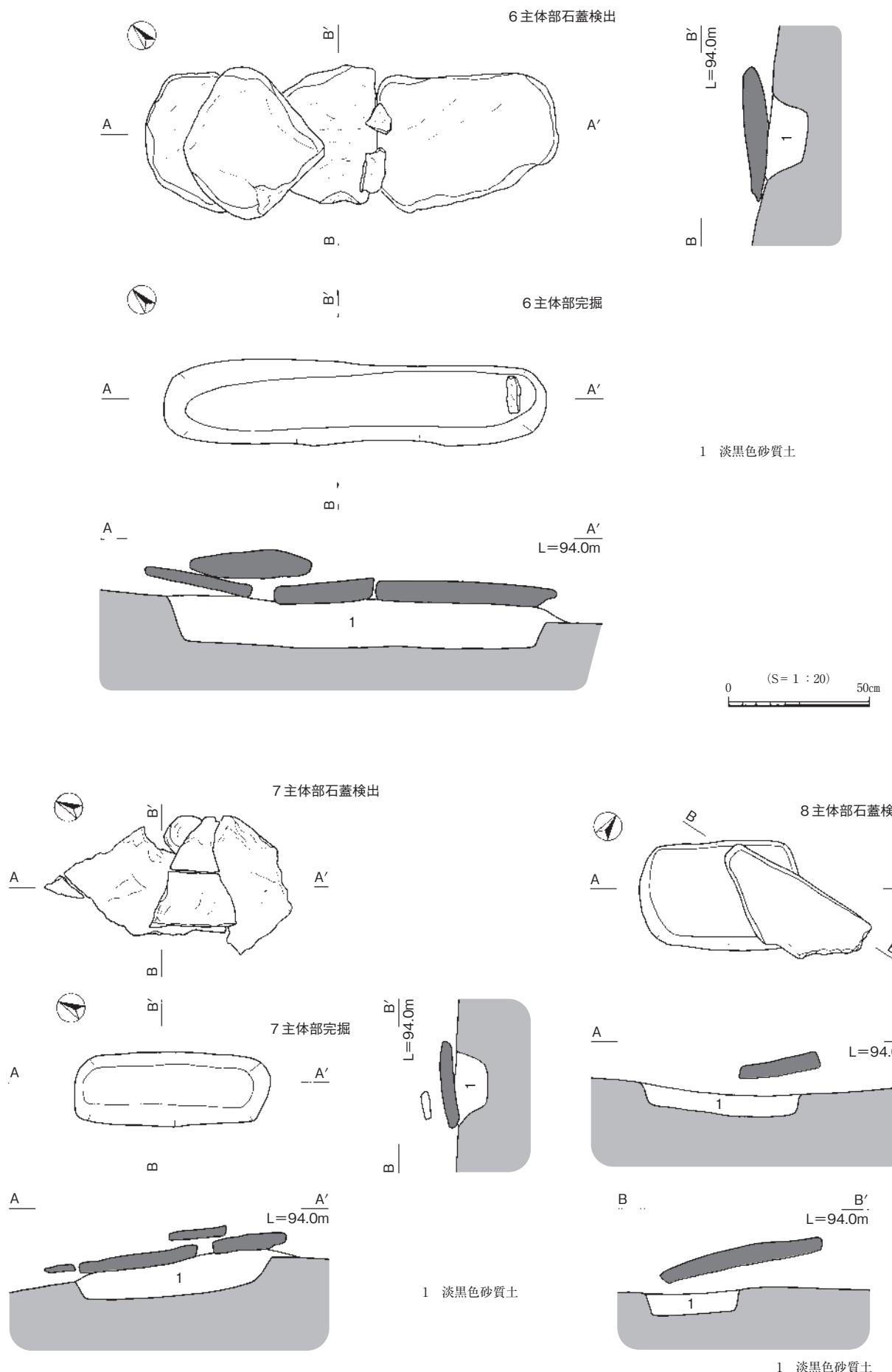
第29図 越敷山79号墳 4・5 主体部遺構図



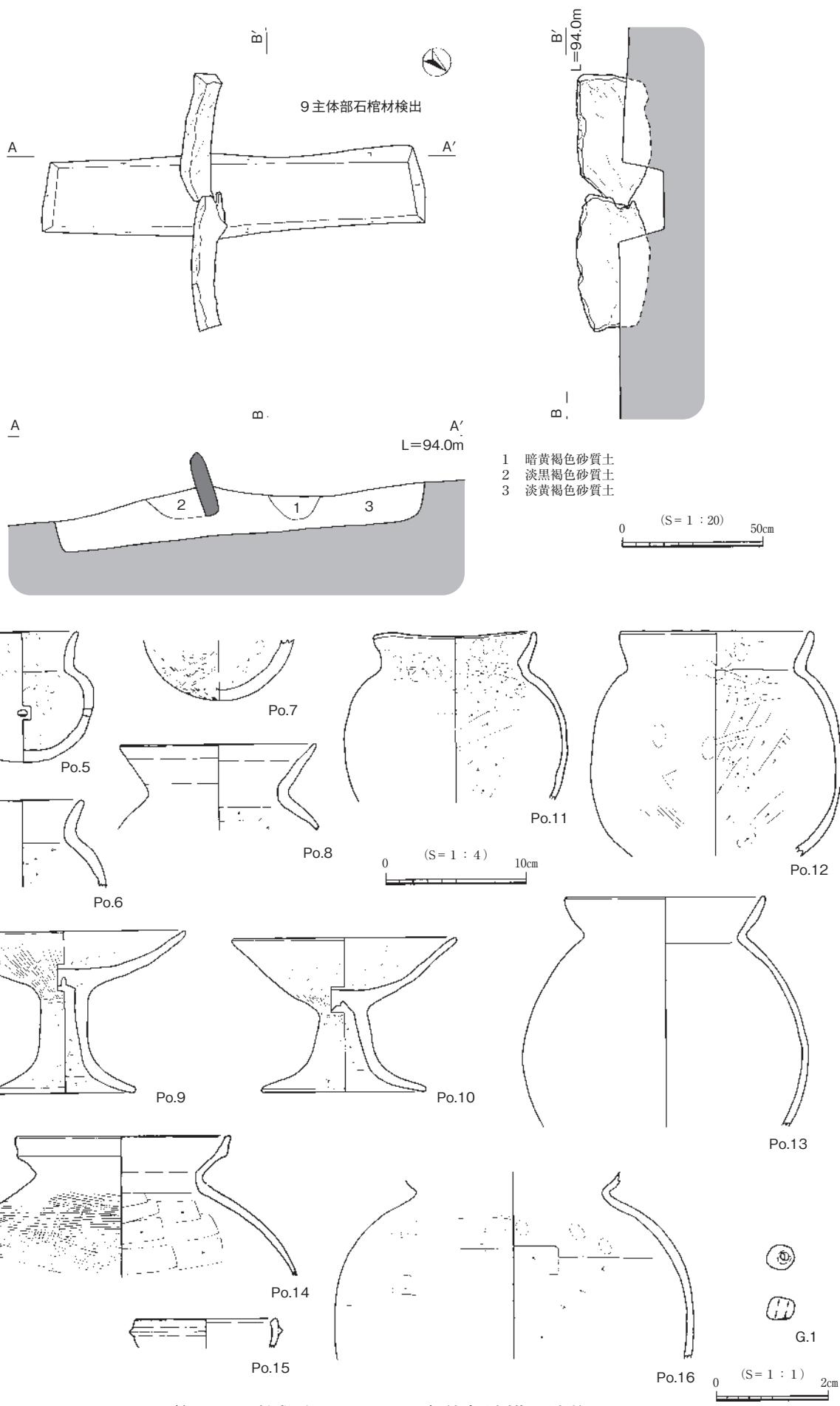
第30図 越敷山79号墳 5主体部遺構図

8主体部 2主体部の北西部で検出した、石蓋を伴う小型の土壙墓である。石蓋は、最大長56cmの三角形のものが1枚のみ残っていた。主体部は、長さ56cm、幅40cm、深さ8cmの隅丸方形を呈する。石枕は見られなかったが、底面のレベルは西側がやや高くなっている。

9主体部 墳丘の南端から、直立した状態で検出した2枚の平石である。検出状況から見て、石棺の長側板の部材が原位置を留めたまま残っていたものと考えられる。この2枚の平石は調査開始前から露出していたことから、既に墳丘の盛土は大半が流出していると思われた。残存している長さは90cm程残っており、棺床部を断ち割ると、断面では北側の長側板を抜き取った痕が見られたが、面的に抜き取り痕を検出することは出来なかった。位置関係から見て、5主体部の埋葬が終了した後に造られたものと考えられる。



第31図 越敷山79号墳 6～8 主体部遺構図



第32図 越敷山79号墳 9主体部遺構・遺物図

出土遺物

この古墳に伴う遺物は、周溝内から土器とガラス玉が出土しているが、埋葬施設に伴う遺物は全く見られなかった。Po. 5は、復元口径7.6cm、器高9.2cmの小型丸底壺で、側面には0.5cmほどの穴が開けられている。外面はナデ調整され、内面はヘラケズリの痕跡が残る。Po. 6は復元口径8.6cmの壺で、口縁部は「く」字形を呈する。Po. 7は丸底壺の底部で、外面にはハケ、内面にはヘラケズリ後ナデ調整される。Po. 8は、口縁部が外反する壺で、口縁部は「く」字形をなし、外面と口縁部はヨコナデ、内面はヘラケズリ調整される。Po. 9は土師器の高坏で、復元口径17.3cm、脚部径9.7cm、器高11.5cmを測る。坏部は浅い椀形で、外面にはタテハケ調整の痕が残る。胎土はやや緻密で、橙褐色を呈する。Po. 10も高坏で、口径15.8cm、脚部径11.5cm、器高11cmを測る。坏部は緩い段が付き、外面にはタテハケの痕が残る。胎土は緻密で明灰褐色を呈するが、焼成がやや不良のため表面の風化が進行している。Po. 11は、胎土が淡褐色を呈する、口径11.4cmの甕である。外面はナデ、内面はケズリ調整される。Po. 12は、口縁部が「く」字形を呈する甕である。調整と胎土がPo. 11とよく似ているため、同一個体か。Po. 13は、土器集中2の北東側の周溝内から出土した、口縁部が「く」字形を呈する甕である。色調は灰白色を呈し、内外面とも風化しているが、胎土には石英粒を多く含む。Po. 14は、口縁端部が肥厚しながら直立する甕で、外面はヨコハケ、内面はケズリ調整する。Po. 15は復元口径10cmを測る、退化した複合口縁形を呈する小型壺の口縁部片である。Po. 16は、外面をヨコハケ調整する壺で、内面のヘラケズリは頸部にまで至らない。G. 1は、周溝内底面から出土した、直径0.5cmの淡いブルーを呈する小玉である。

この古墳の周溝が埋没した時期は、Po. 9から青木Ⅲ期の古墳時代中期前半と考えられる。

越敷山129号墳（第33～39図）

越敷山129号墳は、越敷山71号墳の北西に位置する方墳である。墳丘の北西側は調査区外に伸びるが、すぐに急斜面となるため、一辺が8m×5mほどの長方形墳と考えられる。

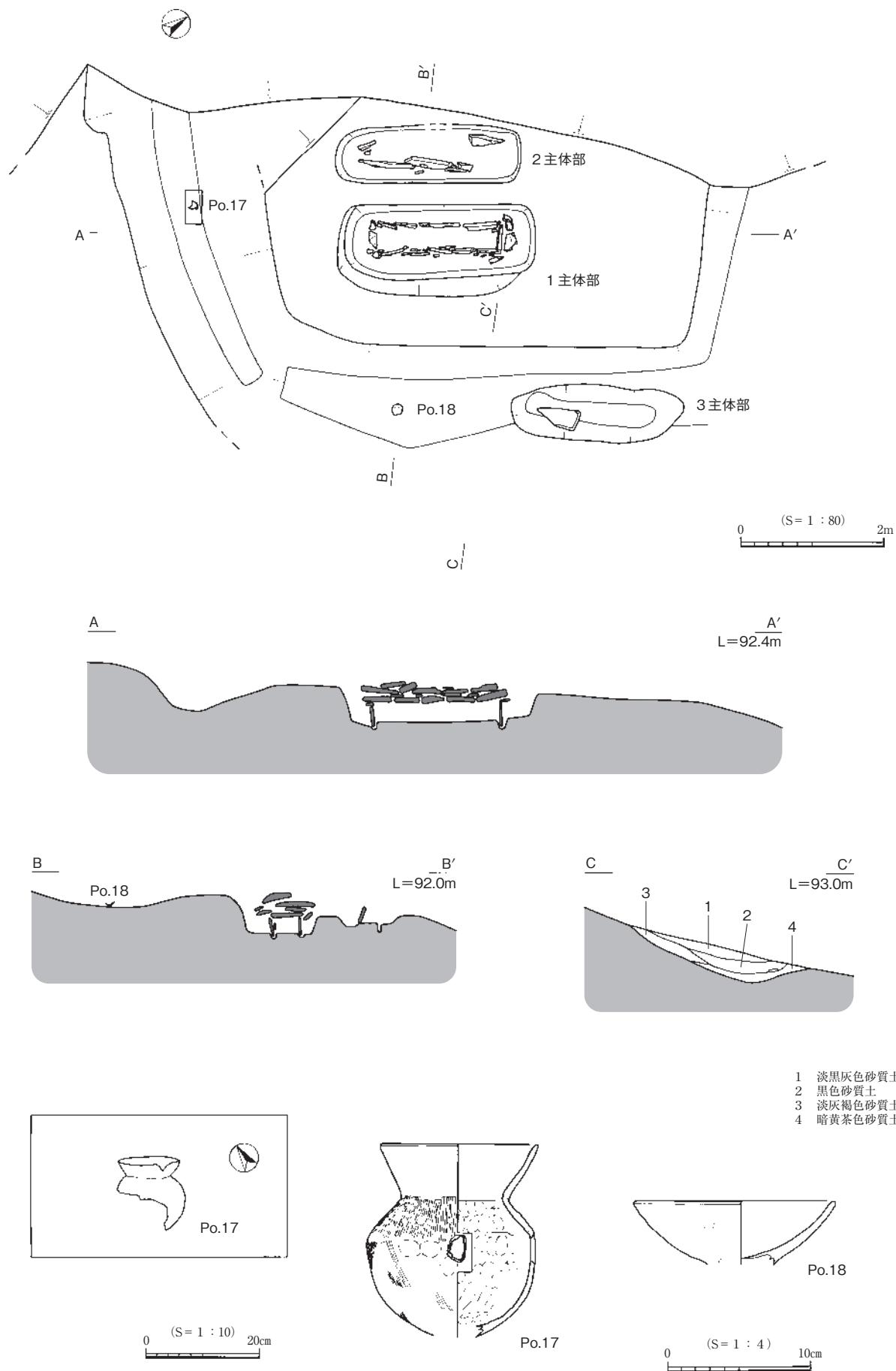
墳丘・周溝 この古墳の墳丘は、地山を削り出して成形されており、周溝は南西側で幅2m、深さ60cm、南東側で幅2m前後、深さ10cmを測る。墳丘の北東側には明瞭な周溝は持たず、そのまま平坦地形となる。

墳丘の盛土は、調査前からほとんどが流出していたため、表土直下ですぐに地山となる。墳丘上の2基の埋葬施設はこの地山面で検出したが、2主体部は既に盗掘されていた。この古墳に伴う遺物は、周溝内と周溝内埋葬から土師器が出土した。

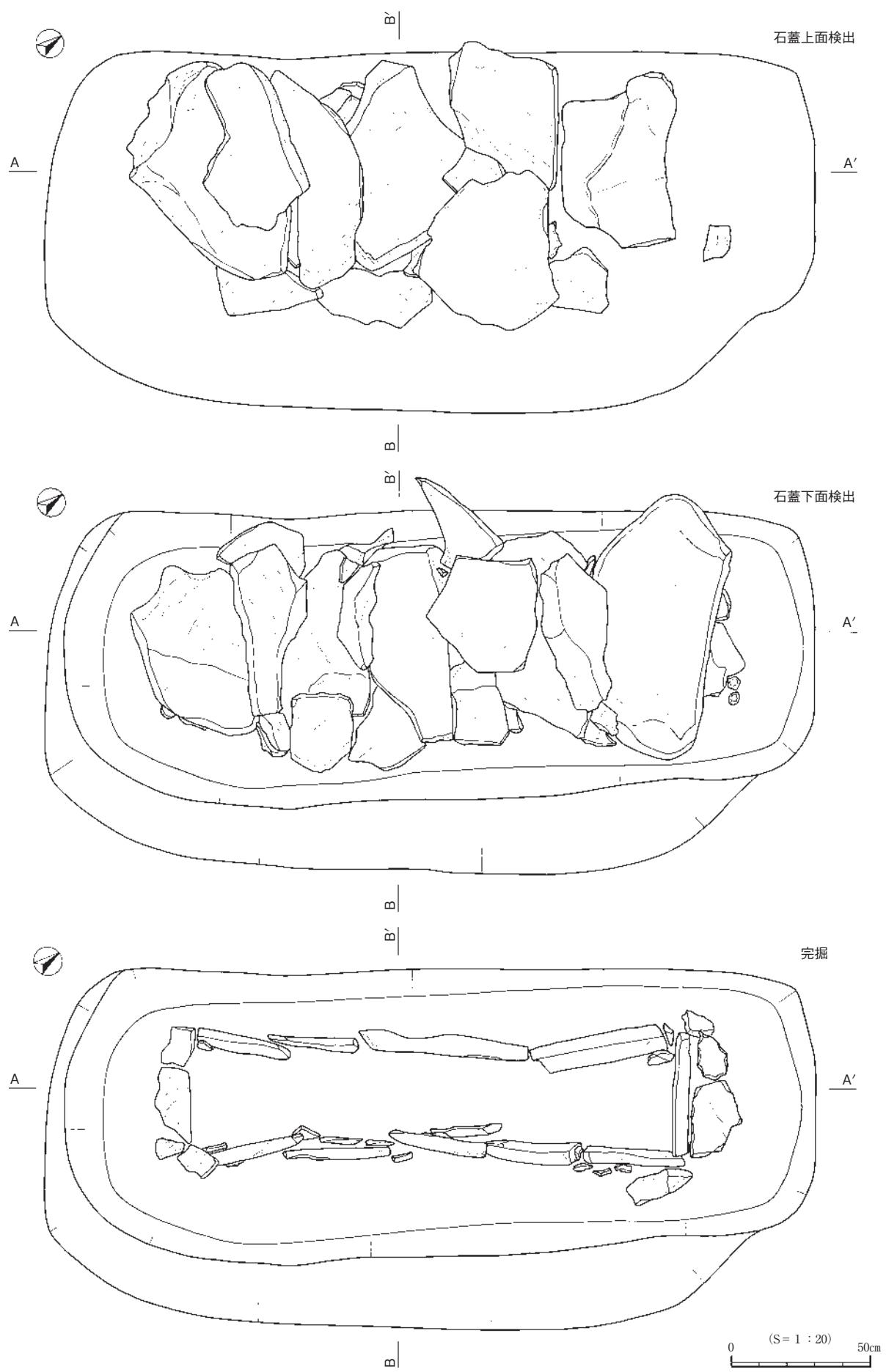
埋葬施設 埋葬施設は墳丘上に2基あり、南東側の周溝内にも土壙墓が1基ある。

1 主体部 墳丘の南東周溝寄りで検出した、石棺墓である。石棺の掘形は、長さ2.7m、幅1.1m、深さ30～50cmの隅丸方形である。石棺材を固定した穴は、掘形の底面に深さ15cmほどの「ロ」字形の溝が掘られている。石蓋は大型の平石を5枚並べ、合わせ口の上面に石蓋を置き、更にその上にも平石を置いて閉塞する。

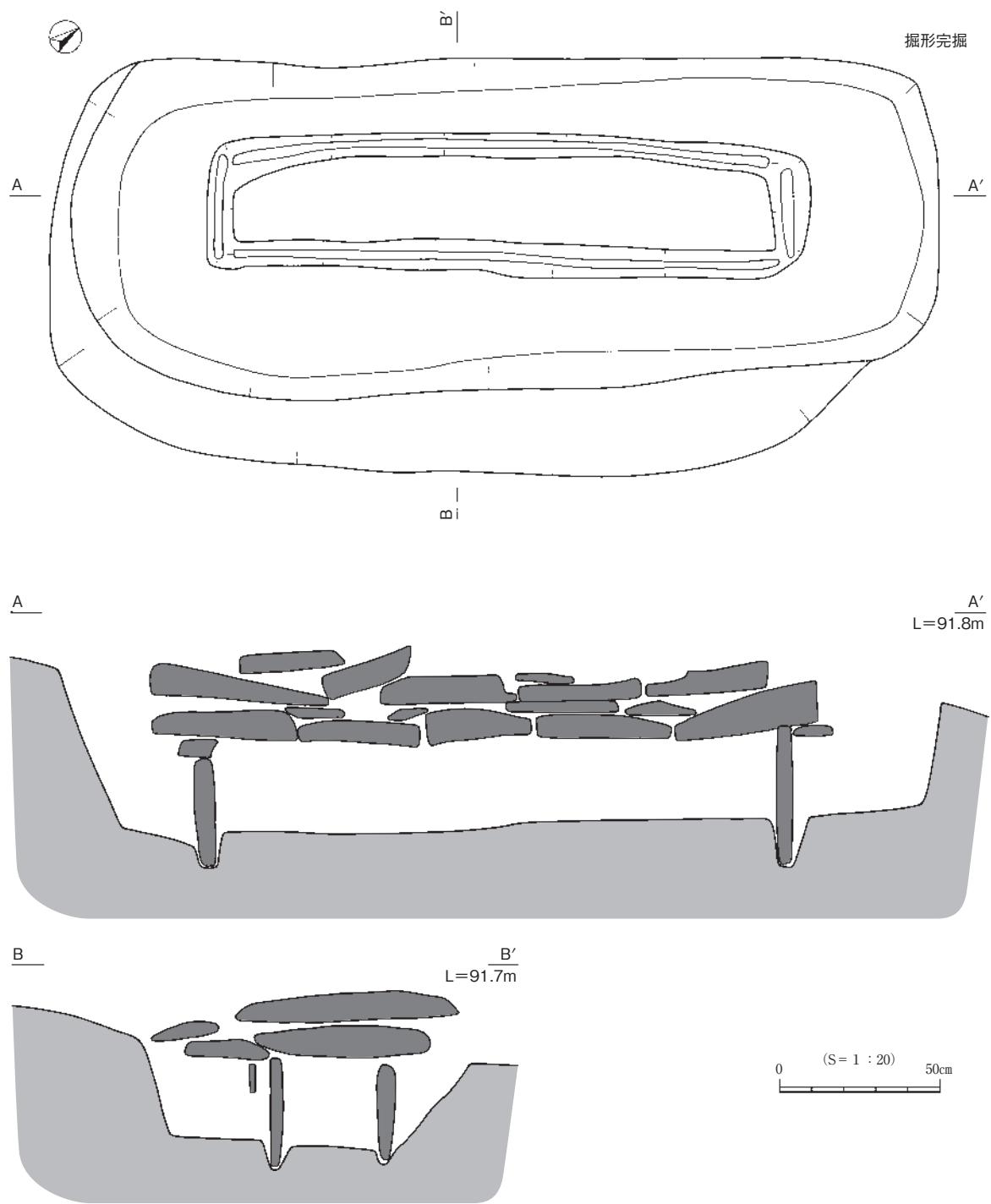
石棺の構造は、4～5枚の平石を立てて長側板とし、南東側の合わせ目の隙間には小割した平石が充填されている。石棺の小口部は、丁寧に調整された平石を「ロ」字形に組み合わせている。石棺の規模は、内法で長さ1.75m、幅35cm、高さ25cmを測る。棺内の底面には石枕は無く、副葬品も見られなかった。



第33図 越敷山129号墳 遺構・遺物図



第34図 越敷山129号墳 1 主体部遺構図

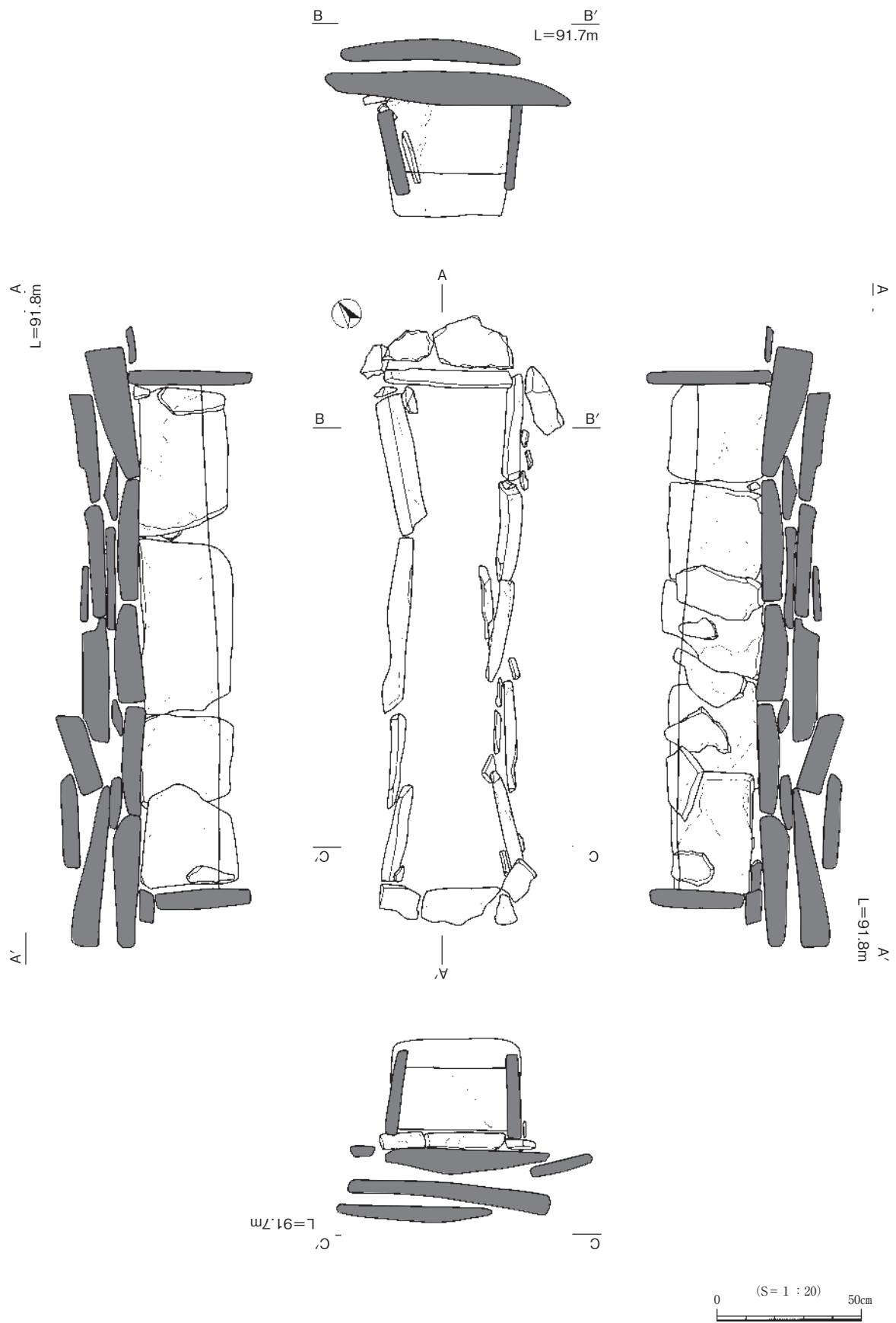


第35図 越敷山129号墳 1 主体部遺構図

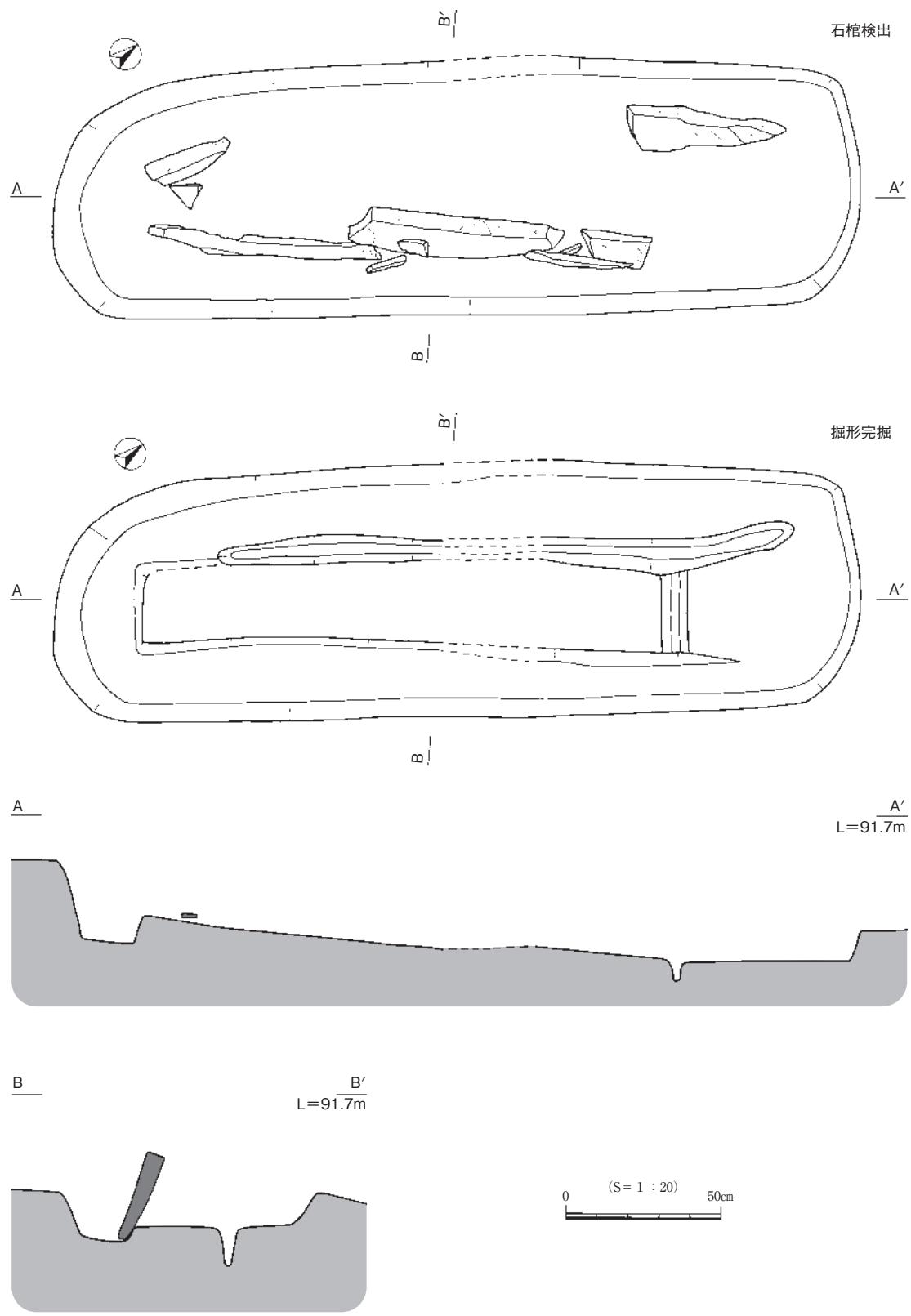
2主体部 1主体部の西側に、平行して造られた石棺墓である。両主体部には、切り合いが無いことから前後関係は分からぬ。

石棺の掘形は、長さ2.6m、幅80cm、深さ20cmを測り、外形は長楕円形を呈する。石棺の検出時には、既に石蓋と一部の石棺材が失われていたことから、早くに盜掘されていたと考えられる。

石棺の内法は、石棺の据え付け穴から見て、長さ1.7m、幅25cm、高さ20cm程度を測り、石棺の組み合わせ方は、小口板を長側板が挟み込む「H」字形に組まれていたと考えられる。石棺の底面は南西側がやや高くなっていることから、頭位方向は南西と見られる。



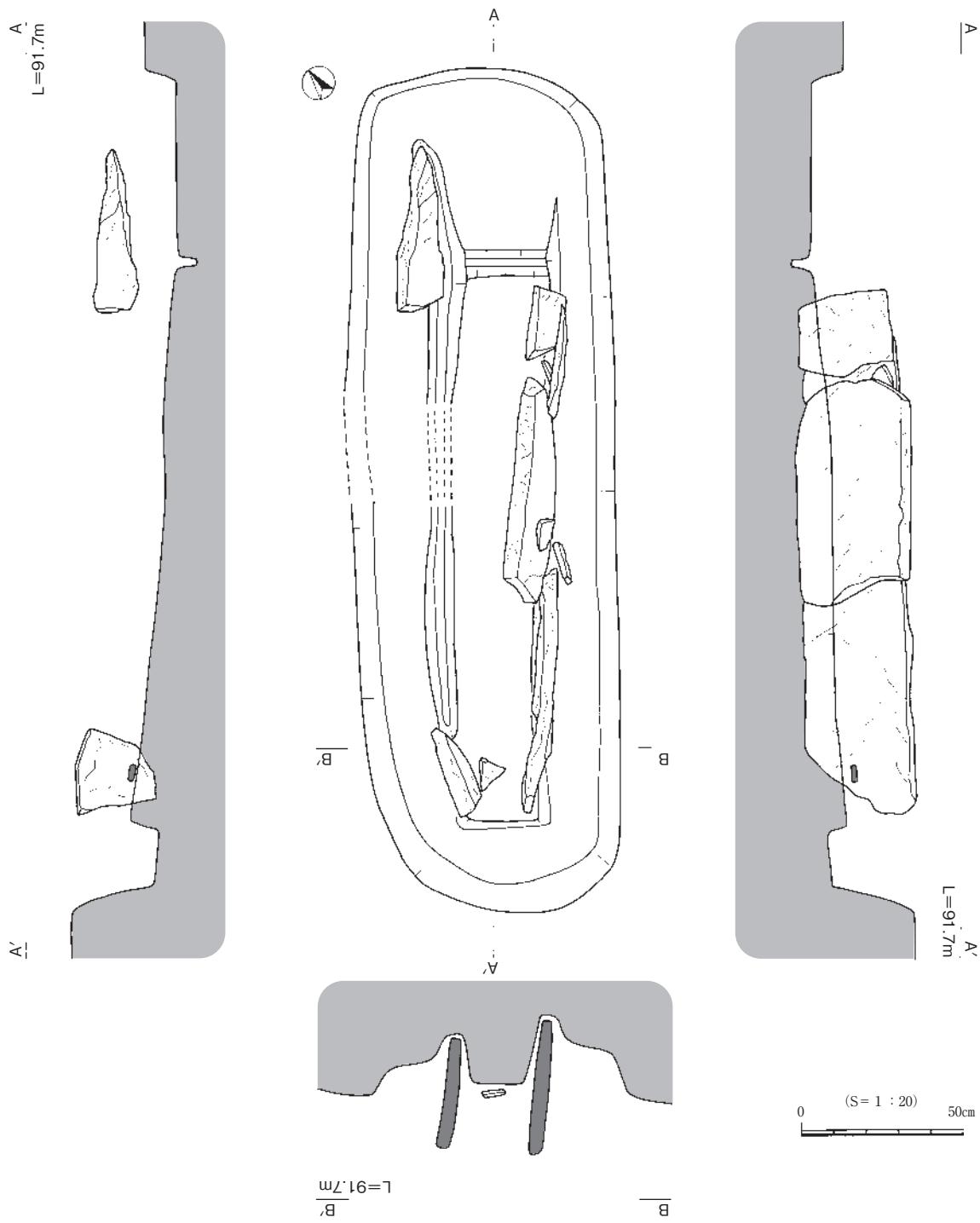
第36図 越敷山129号墳 1 主体部遺構図



第37図 越敷山129号墳 2主体部遺構図

3主体部 越敷山129号墳の南東側、周溝内で検出した土壙墓である。検出面には、標石のように平石が1枚置かれていた。

土壙の規模は、長さ2.4m、幅80cm、深さ30cmで、底面は「U」字形を呈する。土壙の底面に枕石は見られないが、北東側の底面が高くなっている。出土遺物は、墓壙の埋土中から土師器の高環脚部が1点だけ出土している。

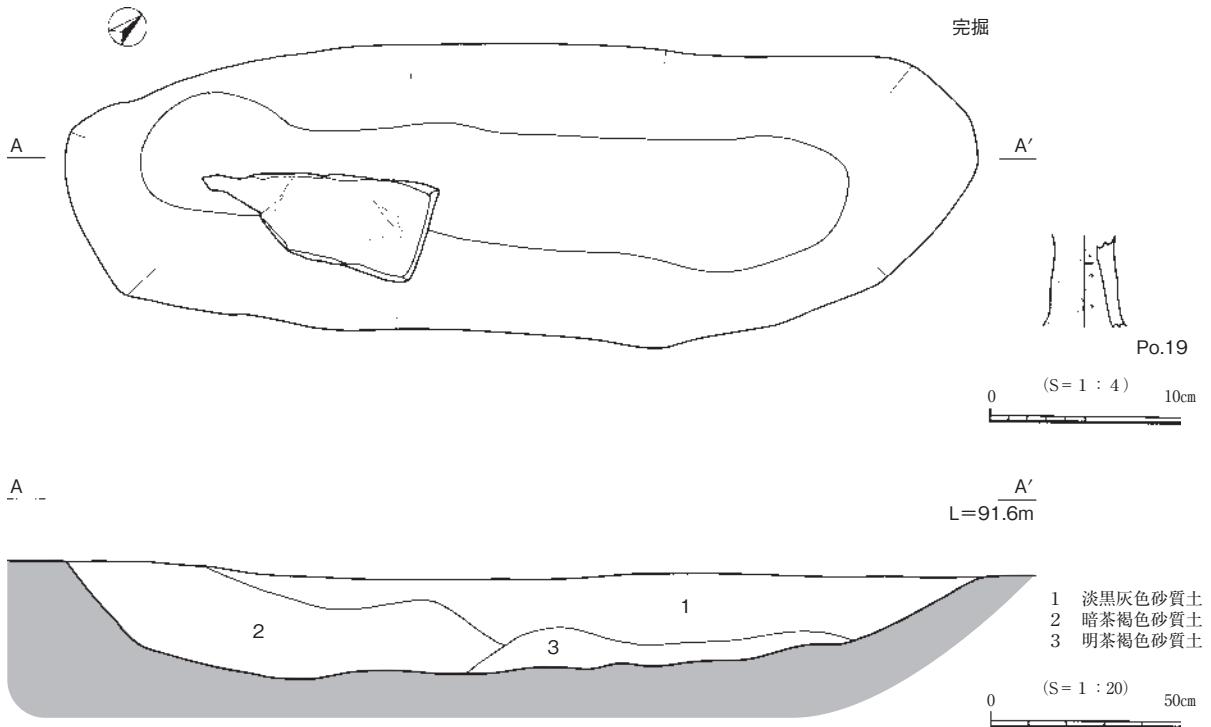


第38図 越敷山129号墳 2主体部遺構図

出土遺物

この古墳に伴う遺物は、南西側周溝内の底面から土師器の壺が出土したほか、越敷山71号墳との境の周溝底面と3主体部の埋土中から高坏が出土した。

Po. 17は、肩部と胴部の境に緩い段が付く、土師器の長頸壺である。色調は淡褐色を呈し、外面は全体にナデ調整され、内面はケズリ後にナデ調整される。体部の側面には、意図的に外側から穴が開けられている。Po. 18は、口縁が真っ直ぐ外方に伸びる高坏で、内外面ともナデ調整する。脚部との接合面はきれいに取れているが、意図的に除去されたものか分からない。Po. 19は、淡茶色を呈する小型の高坏の脚部片である。この古墳が埋没した時期は、Po. 17、18から古墳時代中期と考えられる。



第39図 越敷山129号墳 3 主体部遺構・遺物図

越敷山130号墳（第40～46図）

越敷山130号墳は、越敷山71号墳の南東部、標高91m付近で検出した古墳である。北西側の周溝を越敷山71号墳の周溝と共有しているが、墳丘の東側は急斜面となるため、当初から不整形な区画墓として造られたものと考えられる。北西側に伸びる墳丘と周溝は、調査区外であることから未調査である。

墳丘・周溝

墳丘の盛土については、調査前から石棺の一部が露出していたことから、既に大半が流出していたものと考えられる。墳丘の形は周溝の形から円墳と考えられるが、墳丘の東側が急斜面で落ち込むことから、当初から半円形の墳丘であったものと考えられる。

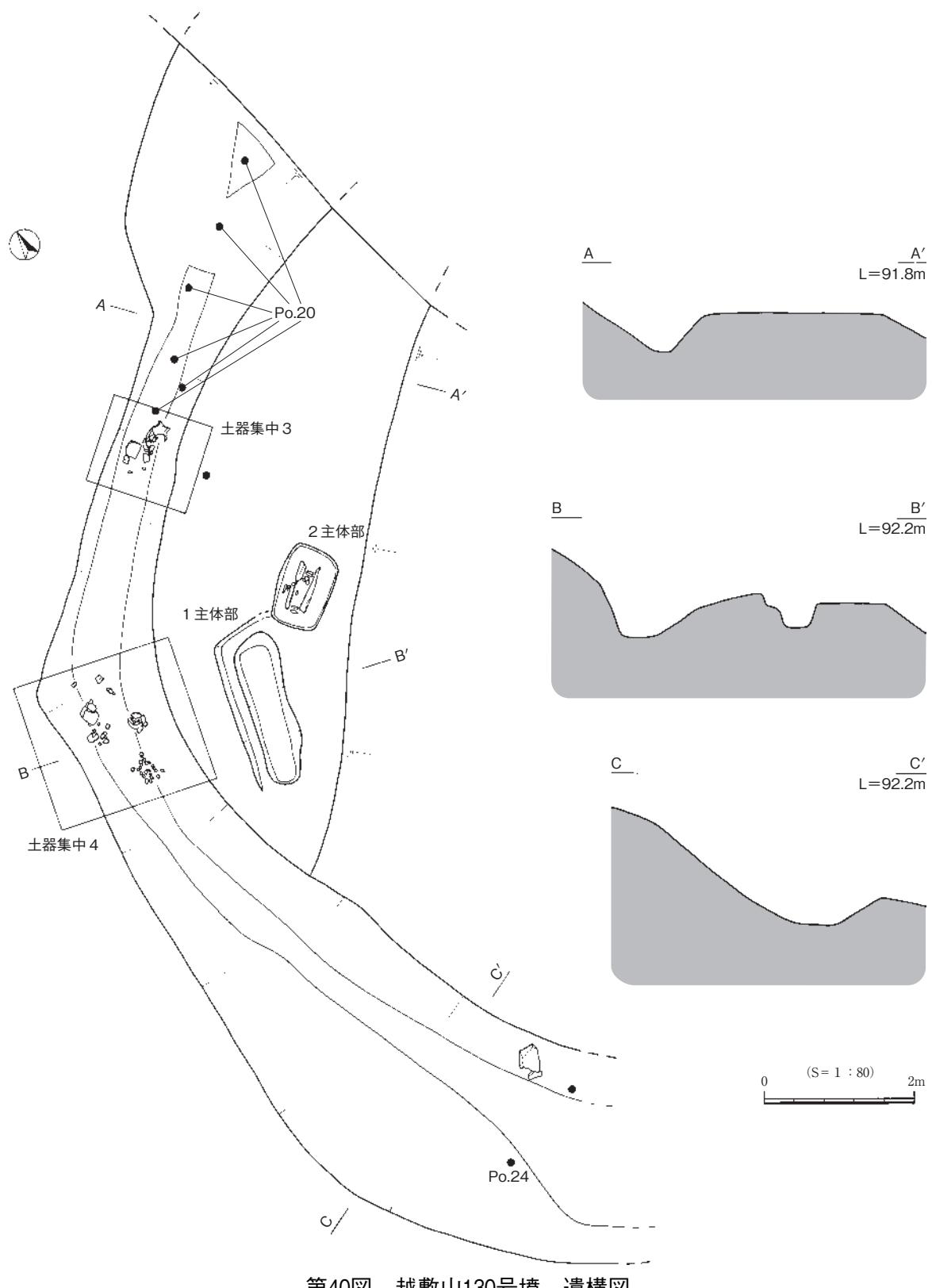
周溝は、検出した長さ16m、幅1～3m、深さ50cmで、周溝内からは土器が出土している。土器が出土したレベルに高低差があることから、越敷山71号墳の築造時と130号墳の築造時に供献された土器で時期差があるものと考えられる。

埋葬施設

この古墳に伴う埋葬施設は、石蓋土壙墓と小型の石棺墓を検出した。

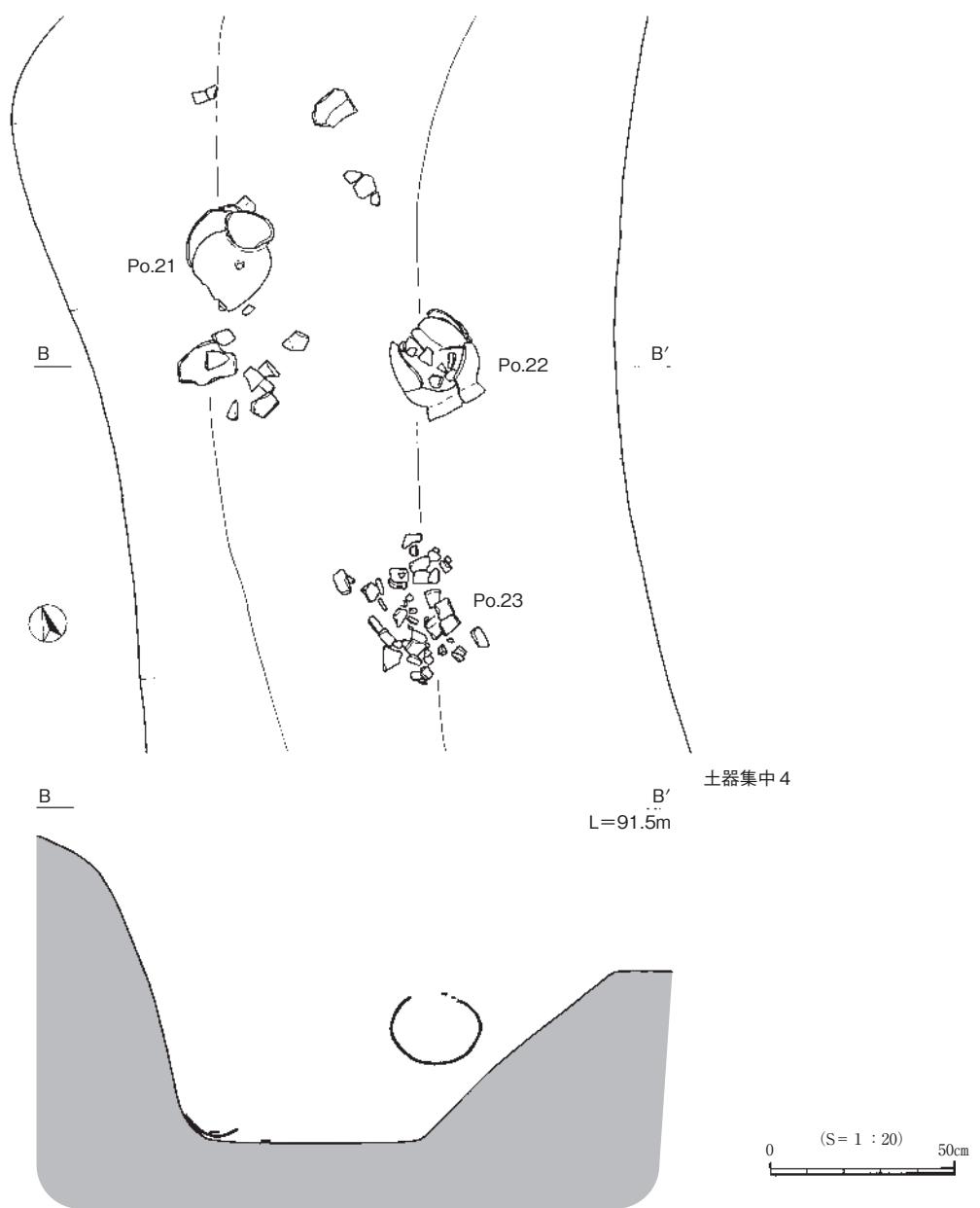
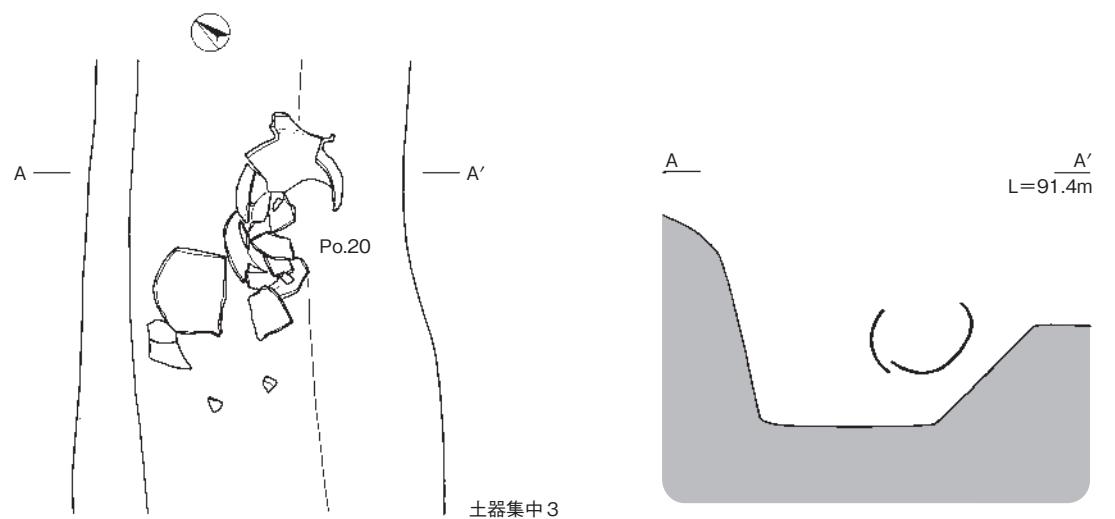
1 主体部 墳丘の西側、周溝寄りの地点で検出した石蓋土壙墓である。墓壙の上面が削平されているため規模は分からぬが、掘形の北側に10cmほどの段が残ることから、二段墓壙の埋葬施設であったと考えられる。墓壙上面の石蓋は、4枚の平石を置き、更に上面に平石を並べて閉塞している。主体部の規模は、長さ2m、幅40～60cm、深さ30cmを測る。墓壙の底面はほぼフラットであるが、石枕は置かれていなかった。北側の石蓋に大型の平石が使用されていることと、墓壙底面の北側がやや幅広くなることから、北頭位で埋葬された可能性が考えられる。

2 主体部 墳丘の東側で検出した、小型の石棺墓である。石棺の掘形は、長さ1.1m、幅70cm、深さ12cmを測り、石棺の据え付け穴は石棺材の寸法に合わせて「口」字形に掘られている。石蓋は、4枚の平石を並べ、更に上面に1枚の平石を置いて閉塞している。

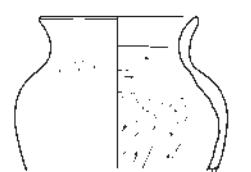
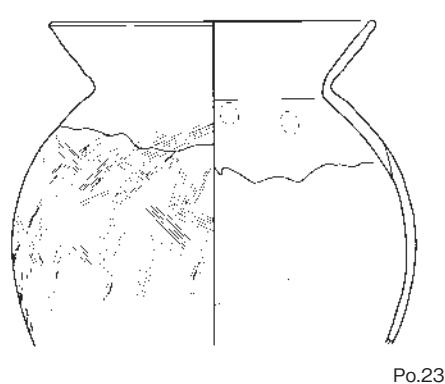
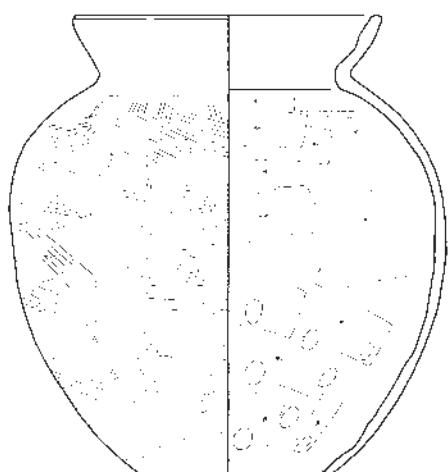
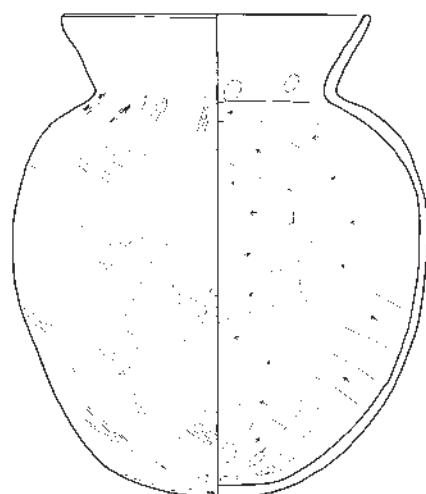
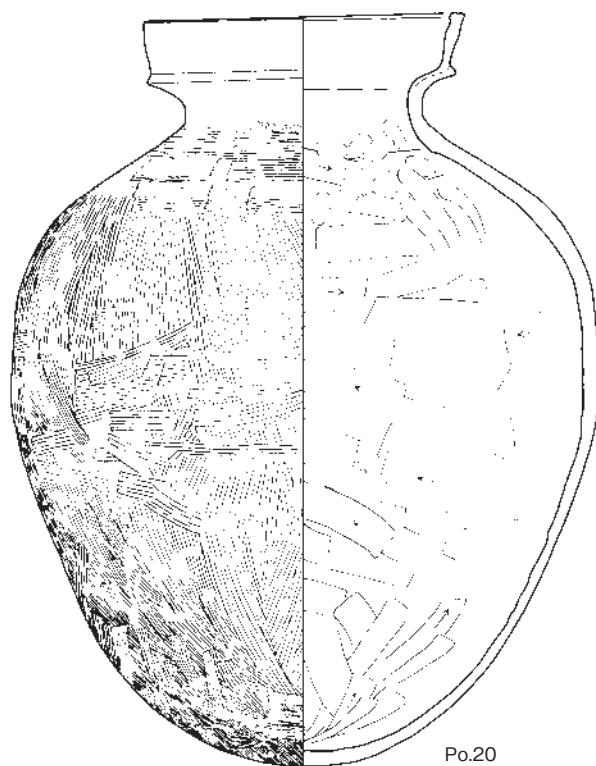


第40図 越敷山130号墳 遺構図

石棺の構造は、北側を2枚、南側を1枚の平石を立てて長側板としており、石棺の小口部には、それぞれ2枚の平石を合わせて、「H」字形に組み合わされている。石棺の規模は内法で、長さ46cm、幅18cm、高さ12cmと、極めて小さいことから、小児埋葬と推測される。棺床には、東側に3個の小石を利用した小さな石枕が置かれている。

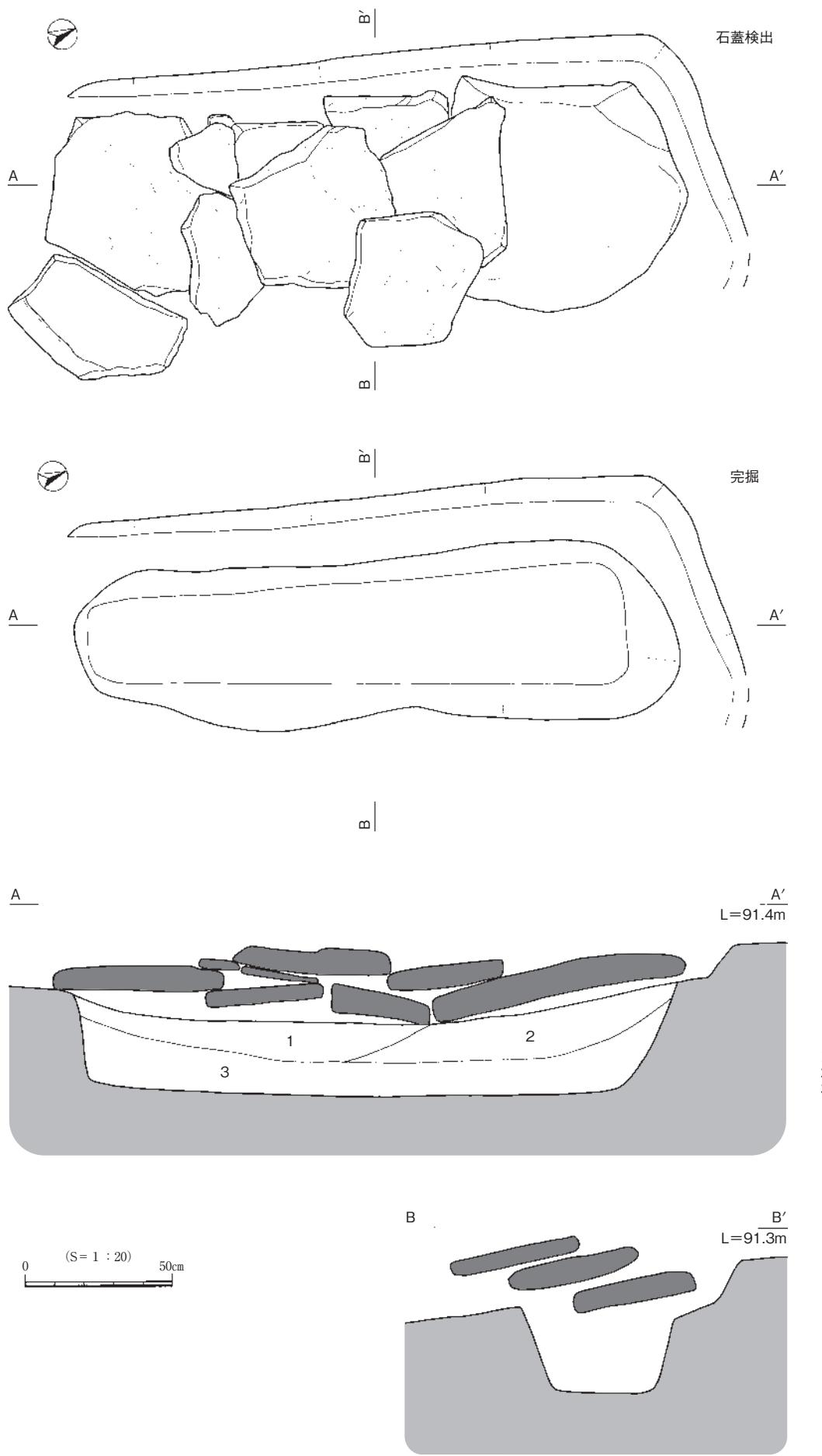


第41図 越敷山130号墳 遺構図

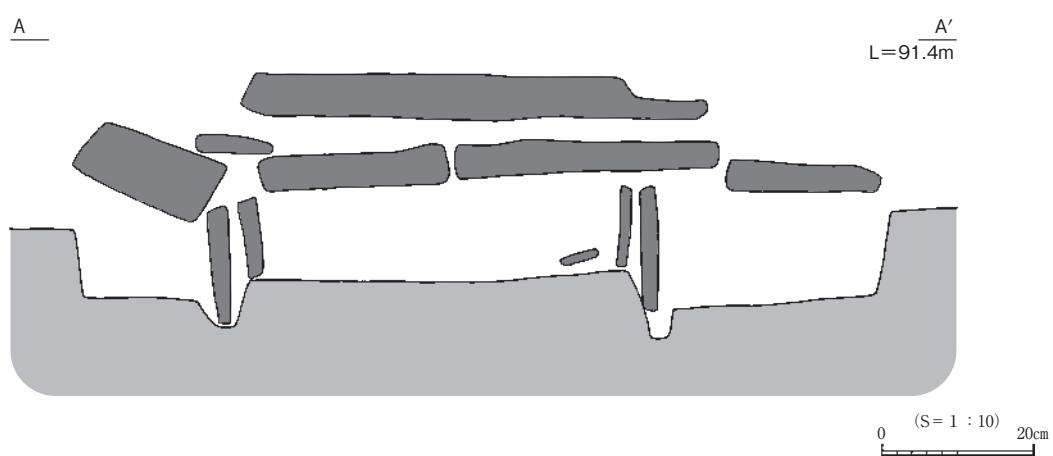
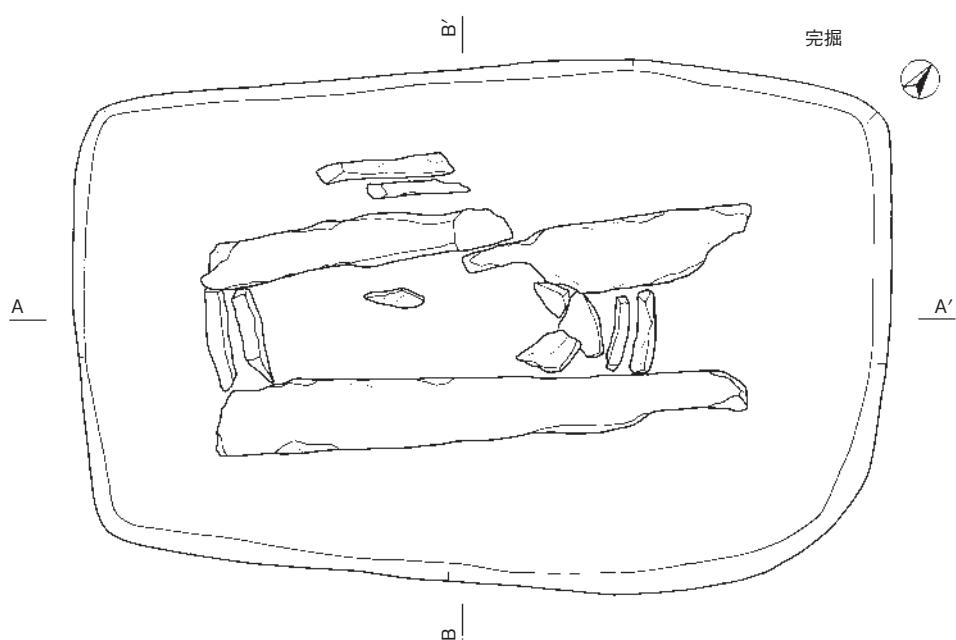
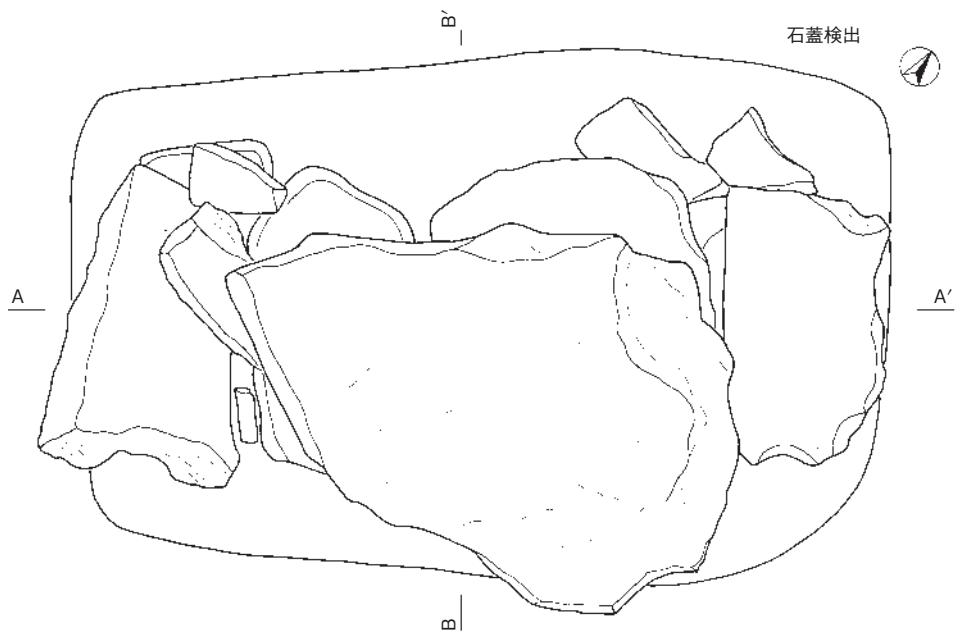


0 (S = 1 : 4) 10cm

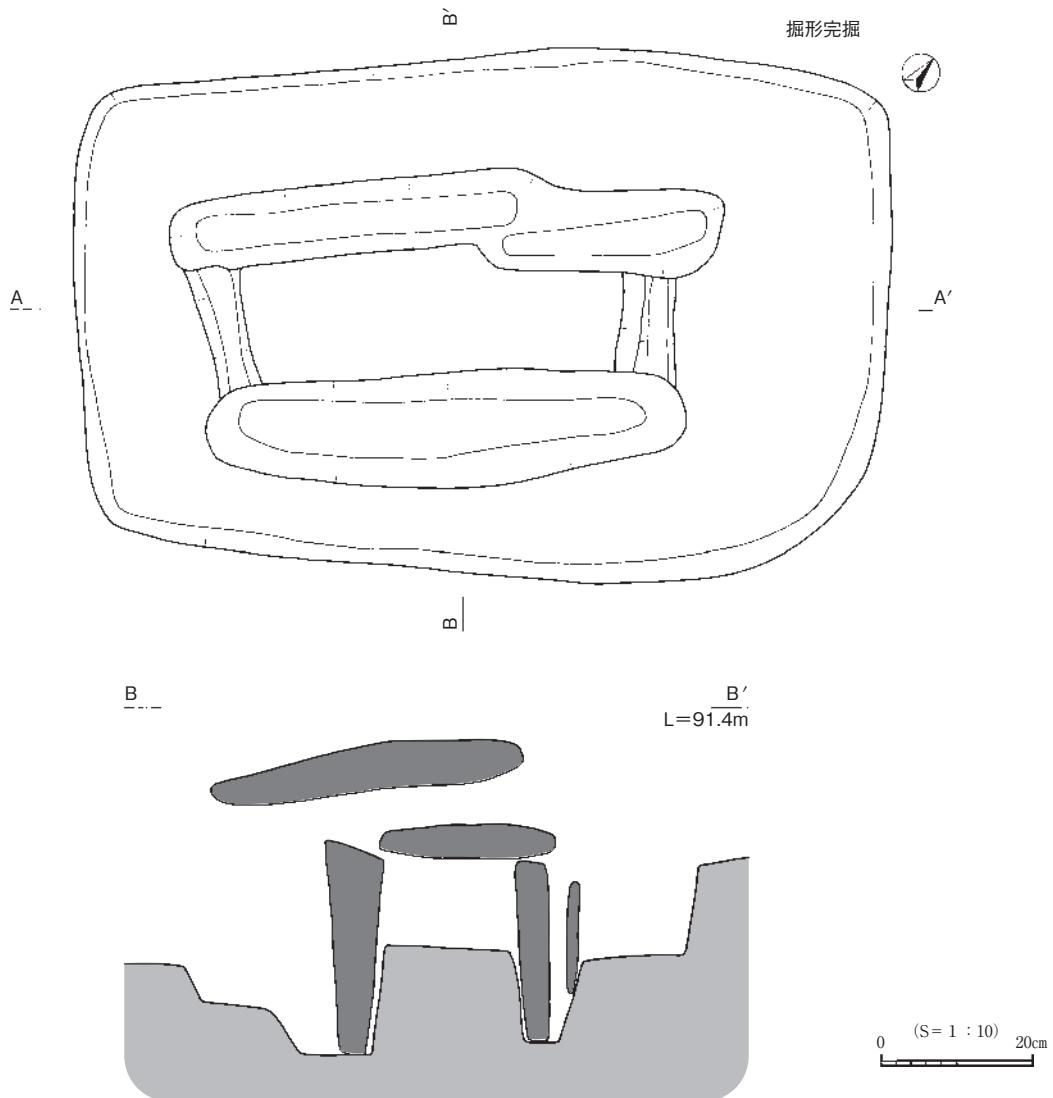
第42図 越敷山130号墳 遺物図



第43図 越敷山130号墳 1 主体部遺構図



第44図 越敷山130号墳 2 主体部遺構図



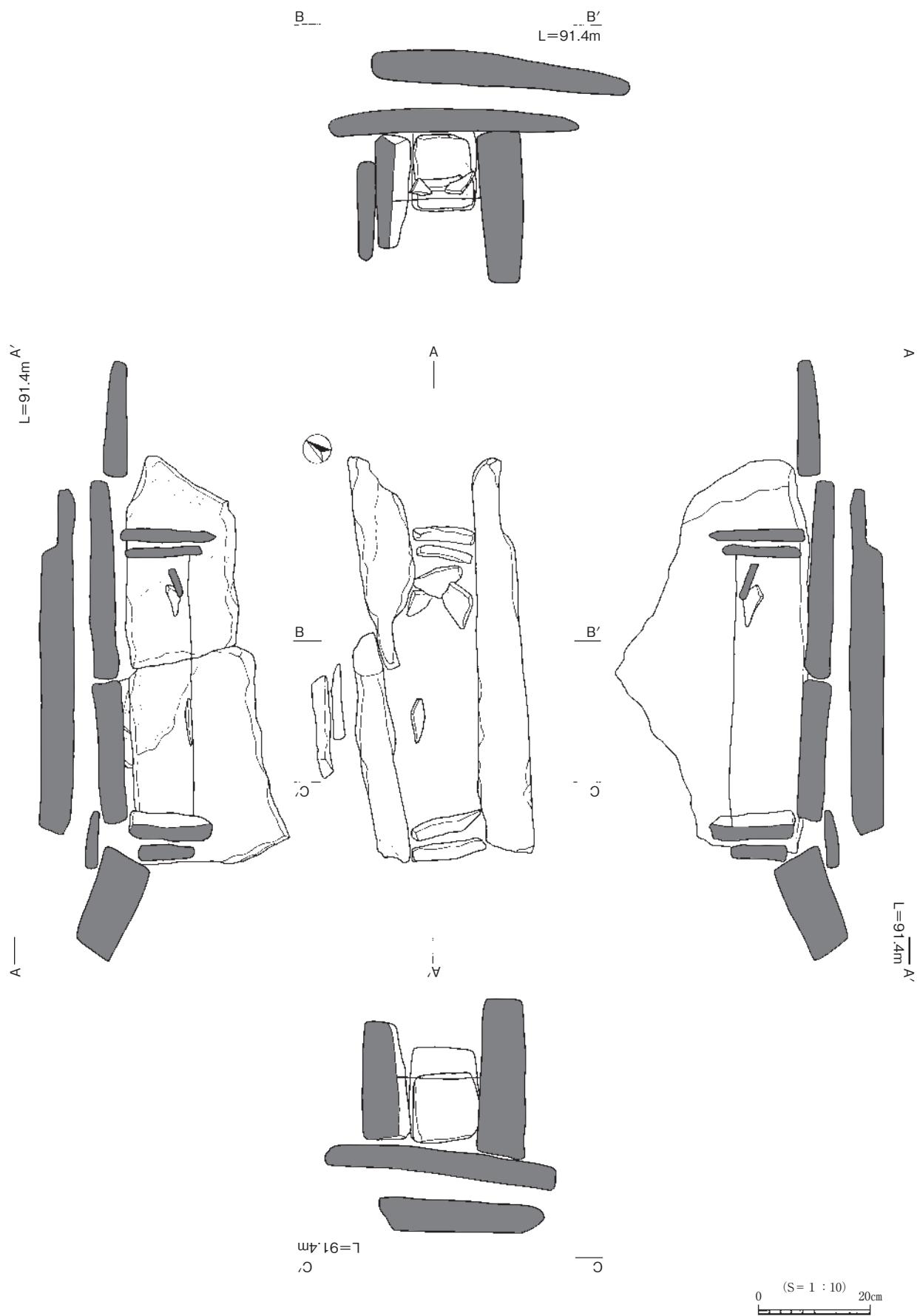
第45図 越敷山130号墳 2主体部遺構図

出土遺物

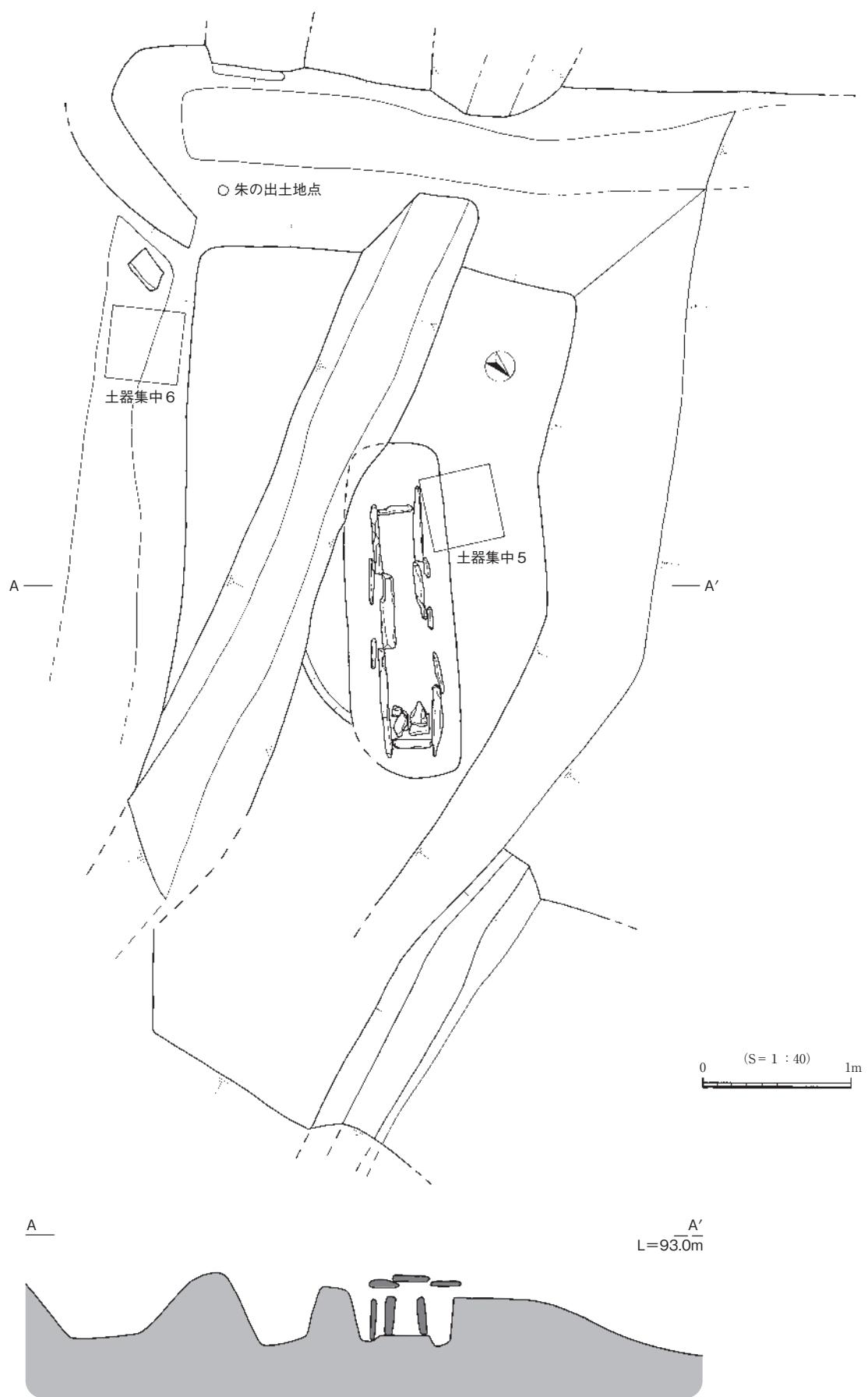
越敷山71号墳に接する周溝内から、土師器の壺と甕が出土した。

Po. 20は、土器集中3と北東側の周溝内底面から出土した、口径16.7cm、器高39.7cmを測る、土師器の二重口縁壺である。底部は丸底で、胴部から底部にかけて倒卵形を呈し、口縁端部は内面が肥厚する。Po. 21は、土器集中4の下層底面から出土した土師器の甕である。口縁部は「く」字形を呈し、口径16cm、器高25.6cmを測る。また、胴部外面の中位には、スヌが付着している。Po. 22は、土器集中4の上層から出土した、土師器の甕である。口縁部は「く」字形を呈し、口径は16.1cmである。この土器もPo. 21と同様に、胴部外面の中位から下半にかけて、スヌが付着している。Po. 23も、Po. 22と同じく土器集中4の上層から出土した土師器の甕である。口径は17cmを測るが、底部は大きく欠損している。口縁部は「く」字形を呈し、一部は風化しているが、端部内面に浅く沈線を巡らせている。Po. 24は、南端の周溝内から出土した、口縁部が外方に短く屈曲する土師器の小型壺である。復元口径は8.2cmを測り、色調は淡灰褐色を呈する。外面はかなり風化しているが、内面はヘラケズリの痕を留めている。

この古墳が埋没した時期は、土師器の甕が完全に球胴化する以前の青木VII期、古墳時代前期後半頃と考えられる。



第46図 越敷山130号墳 2主体部遺構図



第47図 越敷山131号墳 遺構図

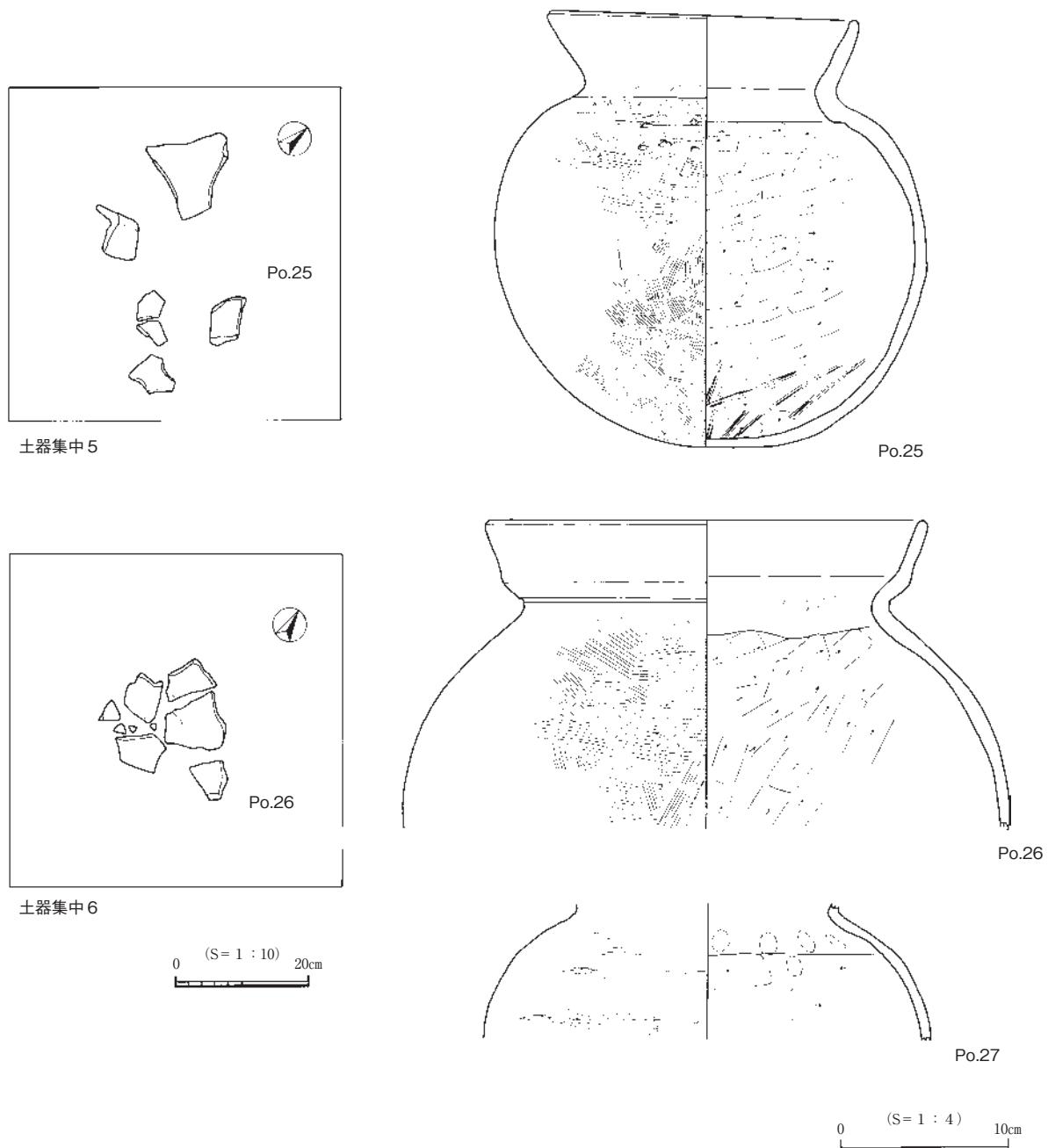
越敷山131号墳（第47～52図）

越敷山131号墳は、越敷山79号墳の北西に隣接する古墳である。調査前から塹壕によって墳丘の南側が分断され、石棺の一部が露出している状況が確認されていた。また、墳丘の北側も斜面となっているため大きく削平されている。

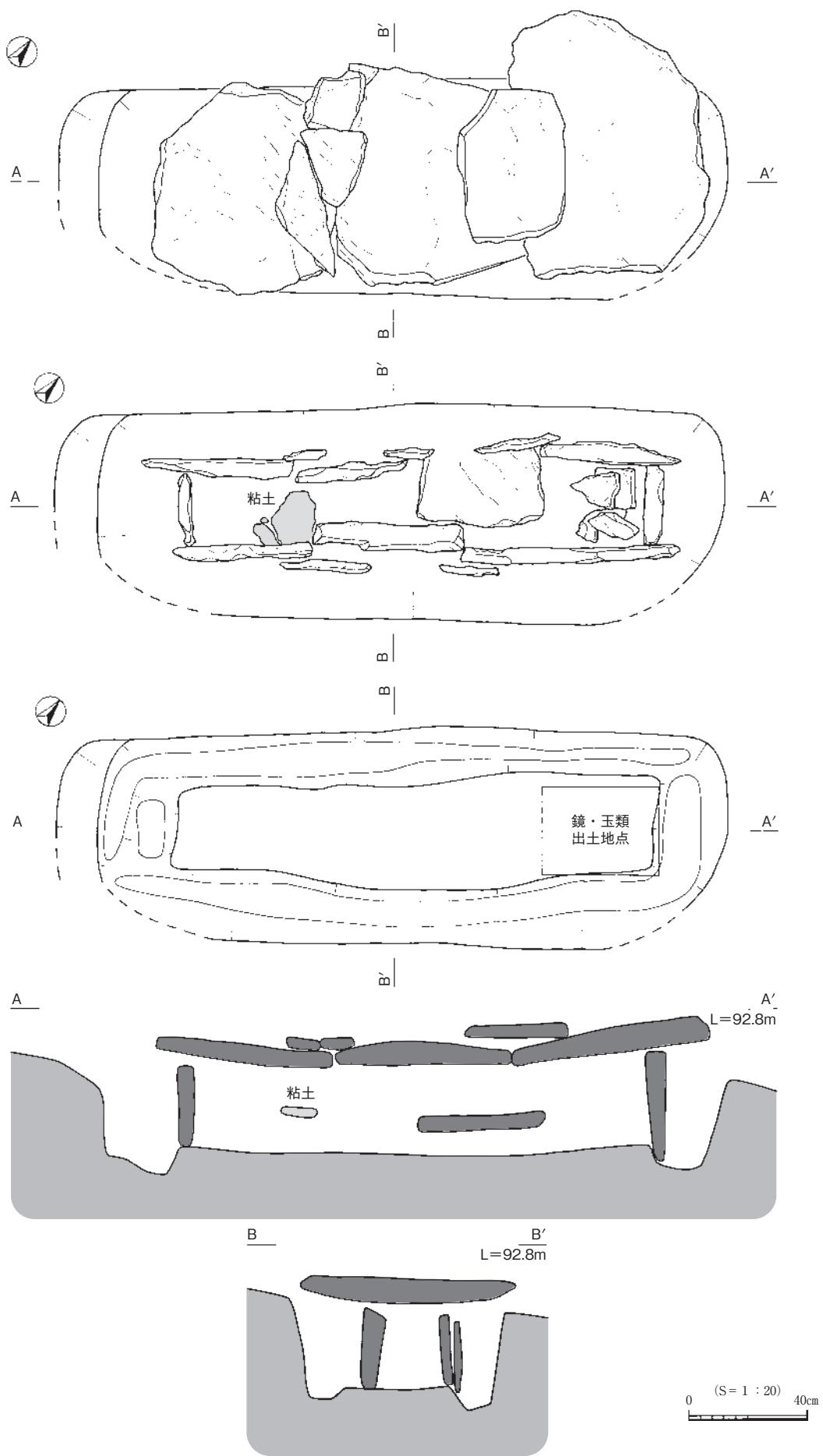
墳丘・周溝

墳丘の大半が失われているため正確な規模が判然としないが、東西方向の長さは、周溝底面の立ち上がりから7.5mほどと推測される。墳丘の盛土は地山も含めて北側が完全に流出しており、埋葬施設の部分のみが辛うじて残存している状況であった。

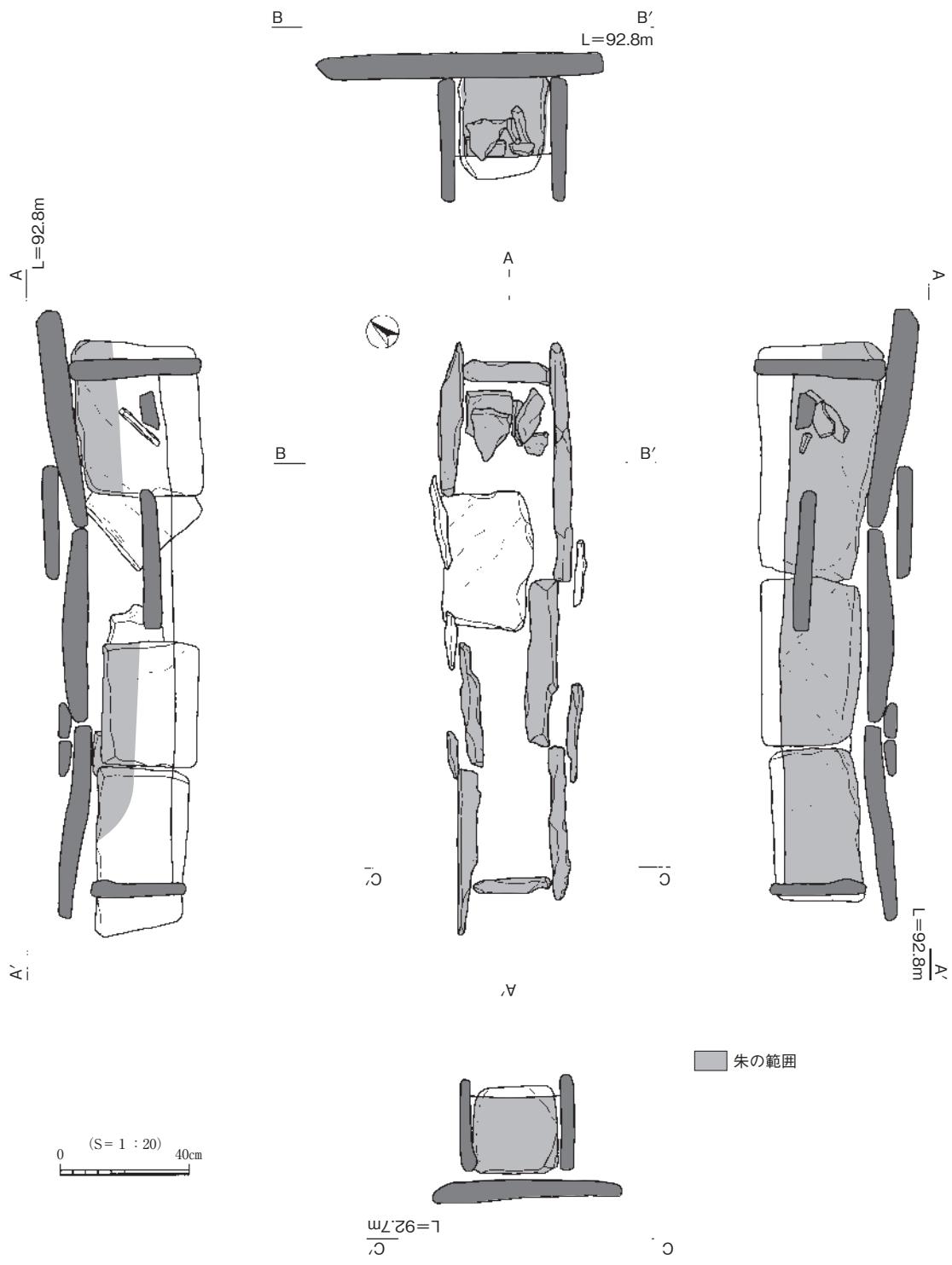
この古墳の周溝は、「コ」字形に掘られている。周溝の幅は、南東側の底面で50cm程あり、深さは50cm以上あったものと考えられる。また、周溝の南西部、壁面の一部に朱の付着が見られた。分析の結



第48図 越敷山131号墳 遺構・遺物図



第49図 越敷山131号墳 遺構図

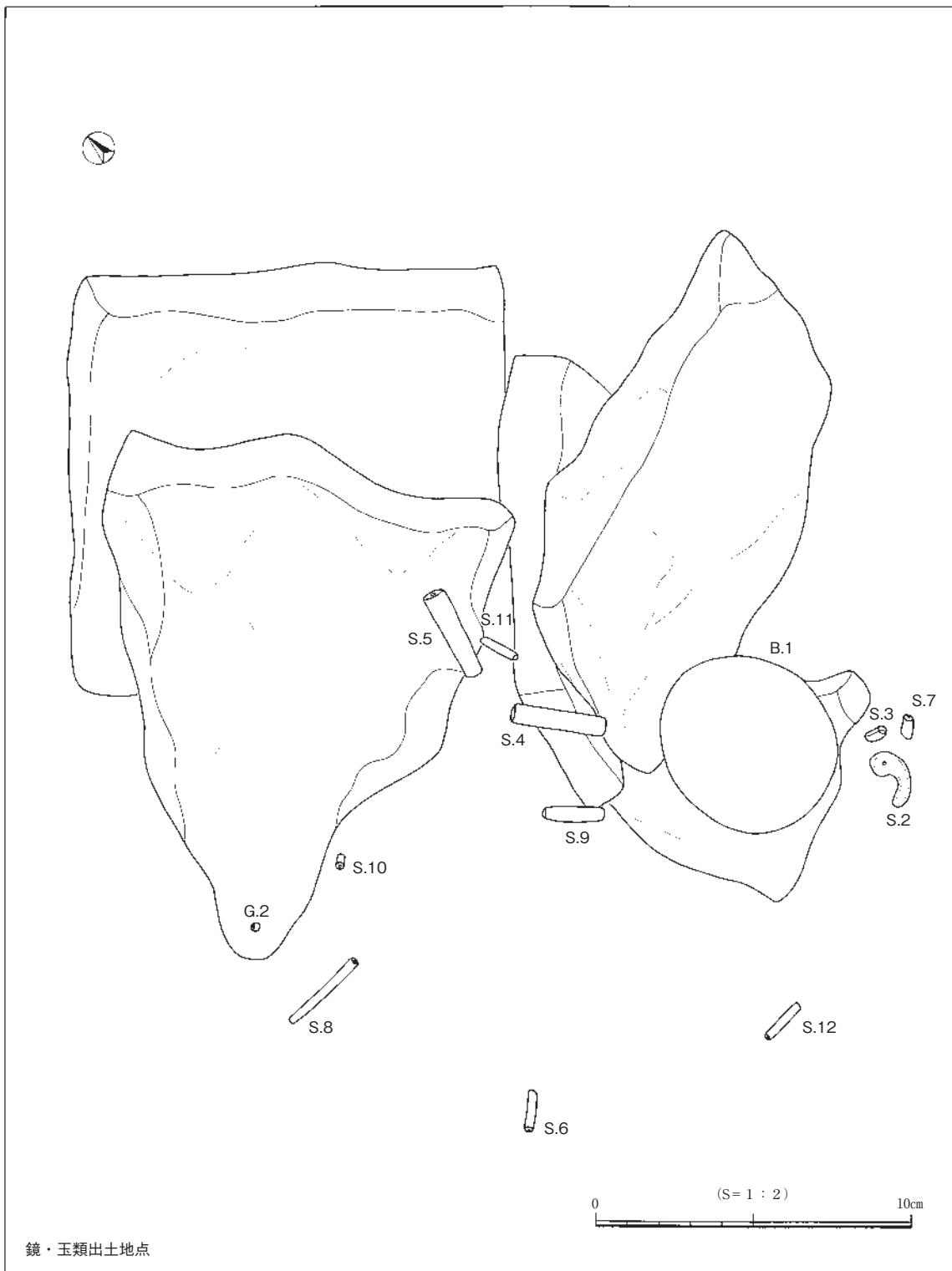


第50図 越敷山131号墳 遺構図

果、ここに使用された顔料はベンガラであることが判明している。検出した当初は周溝内埋葬などに伴うものかと考えたが、石棺内に塗布された顔料もベンガラであることから、中心主体部の埋葬時に付着した可能性も考えられる。

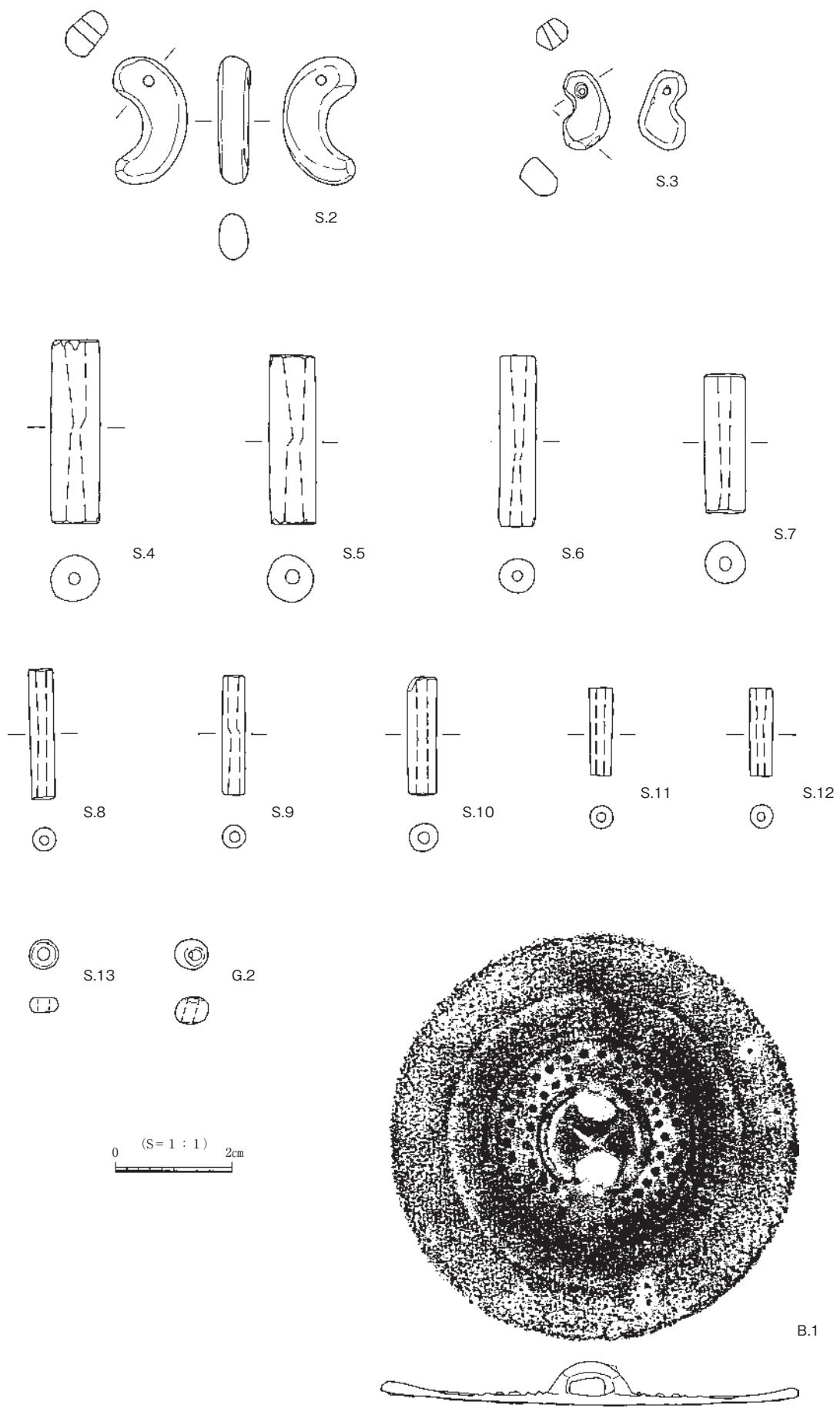
埋葬施設

この古墳の埋葬施設は、石棺墓1基のみである。石棺の掘形は、長さ2.2m、幅70cm、深さ30cmで、石棺の据え付け穴は、土壙の底面に「口」字形に深さ10cmほどの溝が掘られているが、北東部の小口



第51図 越敷山131号墳 遺構図

板や北西部の長側板はこの溝に嵌り込んでおらず、用意した石棺のサイズと合わない部分があったことが分かる。これが原因で、北西側の長側板は1枚が棺の内側に倒れ込んでいる状況であった。石蓋は3枚の平石を並べ、合わせ口の上面に平石を置いて閉塞している。石棺の規模は、内法で長さ1.56cm、幅30cm、高さ25cmを測る。棺材には一面に赤色顔料が塗られているが、裏込め部分には塗られていないことから、石棺を組み上げた後に塗布されたことが分かる。棺内の埋土は、赤色顔料の影響で赤味を帯びた暗褐色の砂質土が1層のみであり、開棺時には棺内の半ばまで埋もれていた。棺内の中



第52図 越敷山131号墳 遺物図

央南西部には20cmほどの範囲で暗褐色の粘土が水平に堆積している。棺床から10cmほど浮いた位置にあることから、埋葬時に敷かれたものではないと思われるが、この部分にのみ粘土が堆積している理由は分からなかった。

石枕は北側のみに置かれており、底面に2枚の平石を置き、左右に石を立てかけたものと考えられるが、検出時には北東側の石は倒れ込んだ状況であった。副葬品は、枕の周辺に鏡と管玉などの玉類がまとまって出土した。石枕を中心に環状に分布していることから、首飾りや髪飾りなどに使用されていたものと考えられる。また、S. 4とS. 5は棺床から15cmほど浮いた地点で検出しているが、この2点のみがなぜ棺床から遊離していたのか分からぬ。青銅鏡は石枕の東側上から、鏡面を上に向かって状態で置かれていた。

出土遺物

この古墳に伴う遺物は、埋葬施設内から小型の仿製鏡と玉類が出土し、塹壕の北側に盛られた排土内から土師器の破片が多数出土したほか、周溝内と墓壙上面で原位置を留める土器集中が2箇所見られた。Po. 25は、口径18cmの土師器甕である。Po. 26は、口縁部が退化した二重口縁形を呈する大型の甕である。復元口径は26cmを測り、外面をヨコハケ、内面をケズリ調整する。Po. 27は口縁部を欠く土師器の甕で、外面は風化しているが、内面はケズリ調整される。玉類は、棺内の埋土を水洗した際に見つかったS. 13を除いて、石枕の周辺から出土している。S. 2は、長さ2.2cm、厚さ0.6cmの蛇紋岩製と見られる勾玉である。S. 3は、薄い緑灰色を呈するヒスイ製と見られる小型の勾玉である。法量は、長さ1.4cm、厚さ0.5cm、重さ0.9gである。S. 4・5は、両面穿孔する花仙山産の碧玉製管玉である。S. 6～12は、緑色凝灰岩製の管玉である。S. 13は、直径0.5cm、厚さ0.3cmの滑石製臼玉である。G. 2は、ガラス製の小玉である。B. 1は、直径7.2cmの珠紋鏡である。外縁部は無紋で外区には鋸歯紋帯が廻り、内区との境に二重圈線が廻る。内区の珠紋帯は二列だが、一部は三列に並ぶ。鏡の端部は丸く、鈕には長方形の穴が開けられている。この古墳の時期は、Po. 26から青木Ⅲ期の古段階、古墳時代中期前半頃のものと考えられる。

越敷山132号墳（第53～56図）

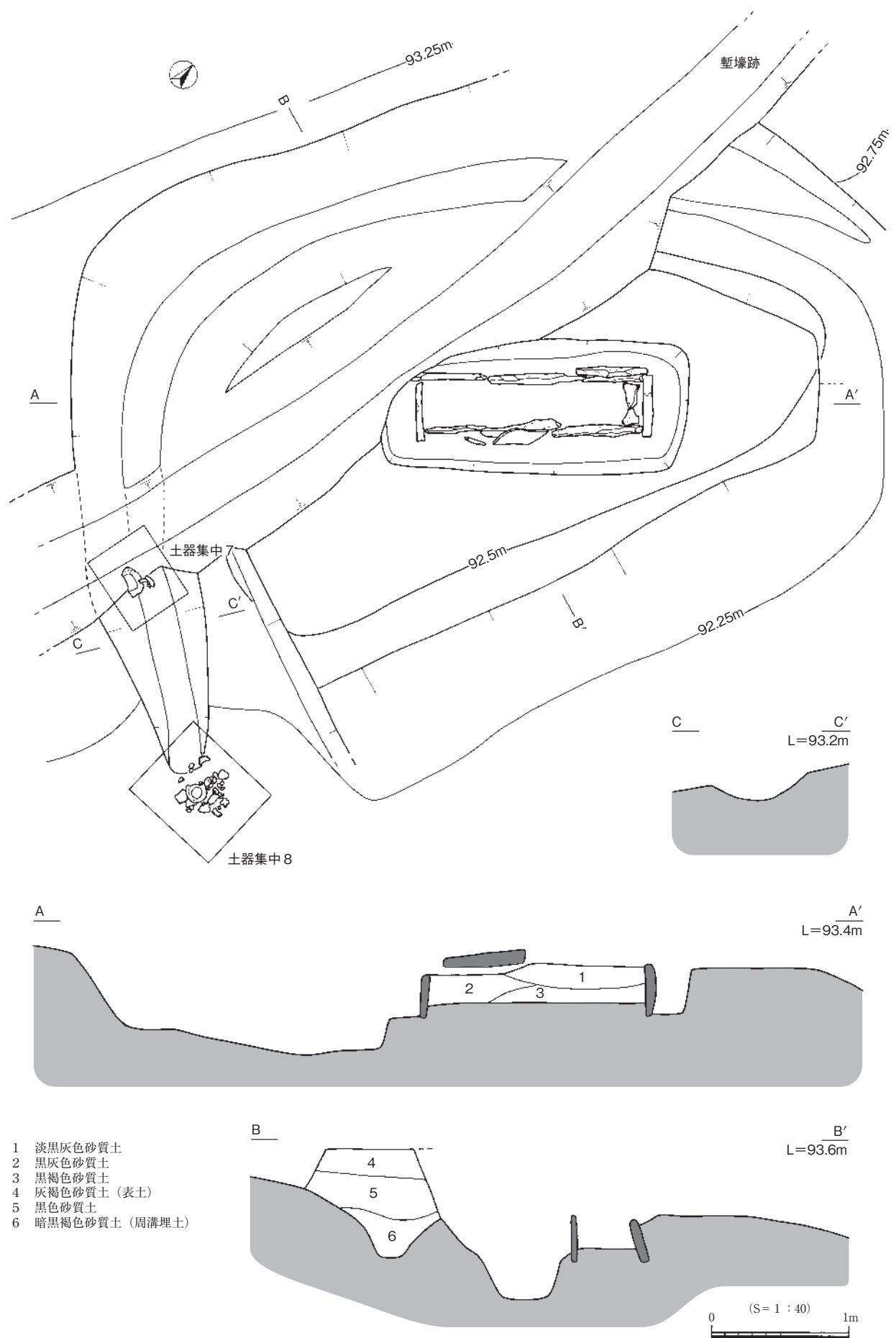
越敷山132号墳は、越敷山79号墳の東側、標高92.5m付近に位置する古墳である。この古墳は、塹壕の調査中に壁面から周溝状の落ち込みと、露出した石棺の一部を確認していたことから、既に盗掘されていると考えていたが、石棺内から青銅鏡が出土したことから、塹壕の掘削時にも棺内は荒らされていなかったことが判明した。

墳丘・周溝

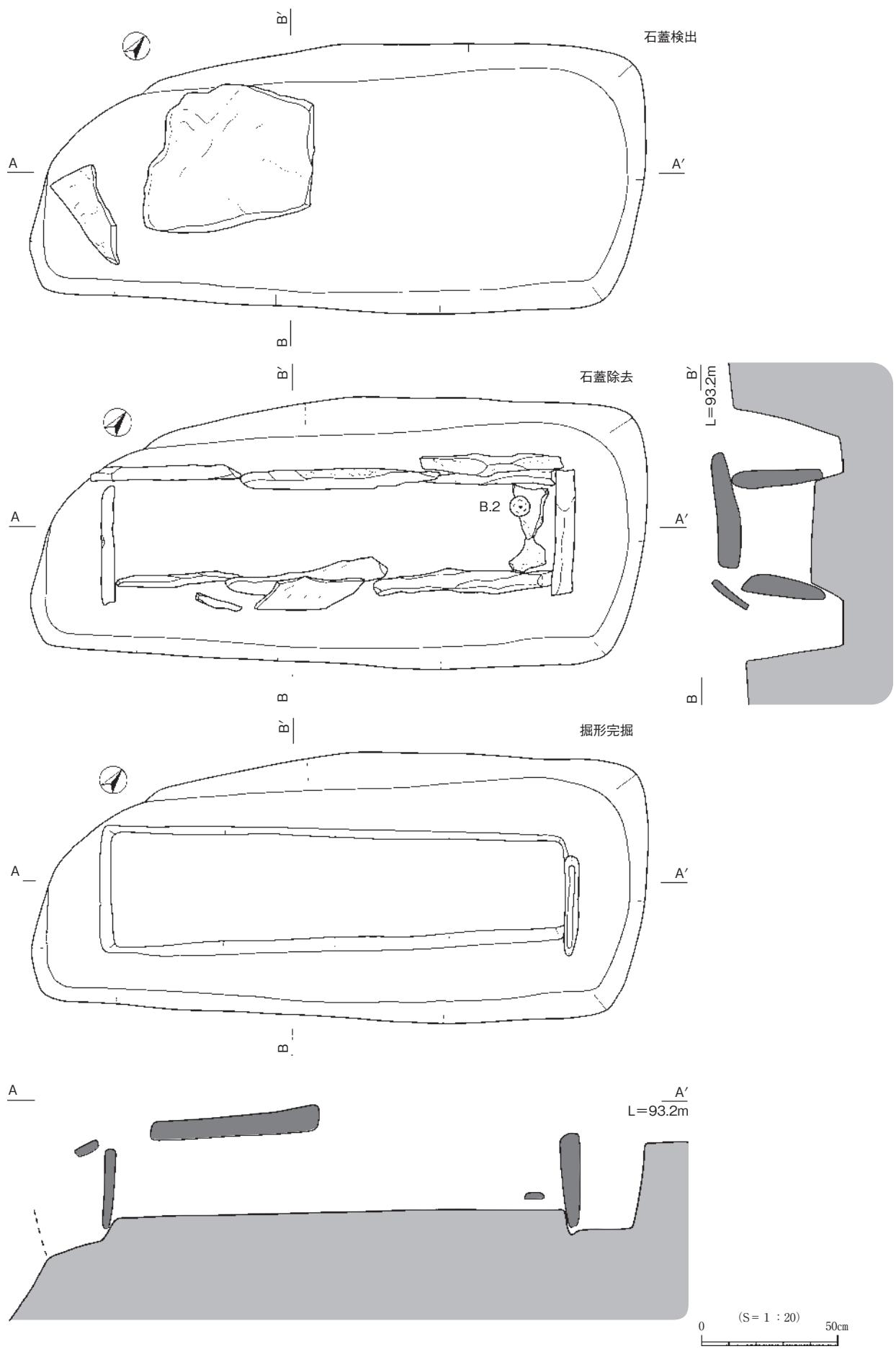
この古墳の外形は、周溝が隅丸方形となるが、西側の底面では直角に近い形で曲がることから方墳と考えられる。古墳の規模は、周溝底面の立ち上がりを起点とすると、一辺が5.5m程度と推測される。周溝の幅は、検出面で1m前後、底面で30cmあり、深さは50cm前後を測る。周溝内では南側の二箇所に土器集中があり、破碎された状態で土師器の壺と甕が出土した。墳丘の盛土は、表土直下で石棺の掘形を検出したことから、ほとんどが流出しているものと考えられる。

埋葬施設

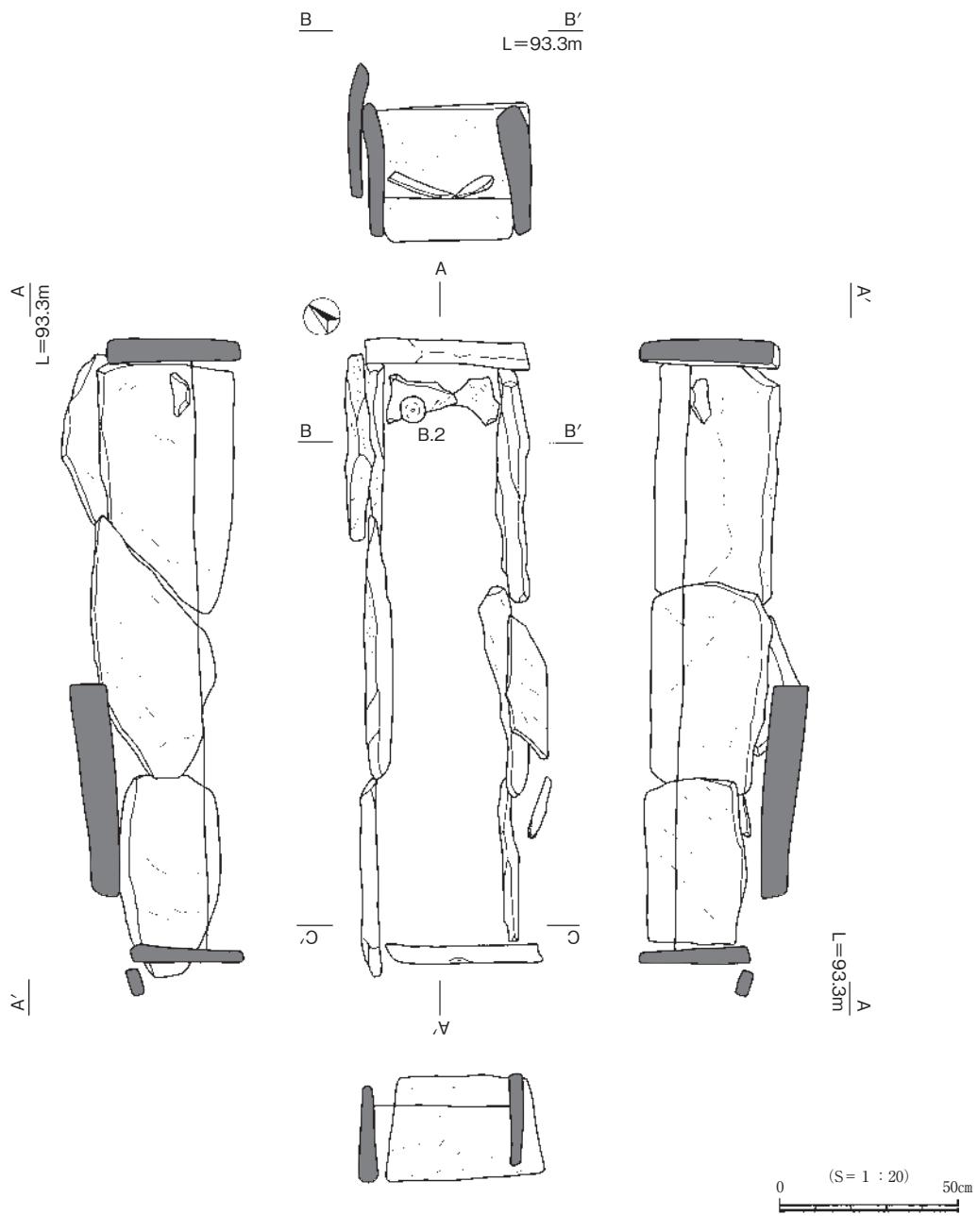
この古墳に伴う埋葬施設は、組み合わせ式の石棺墓1基である。石棺の掘形は、西側が塹壕によって削平されているが、残存する長さは2.2m、幅1m、深さは40cmを測る。石蓋は西側のみ1枚だけ



第53図 越敷山132号墳 遺構図



第54図 越敷山132号墳 遺構図

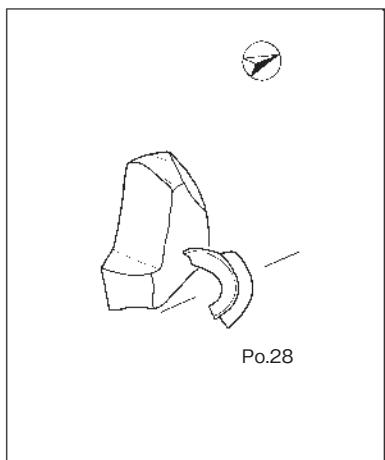


第55図 越敷山132号墳 遺構図

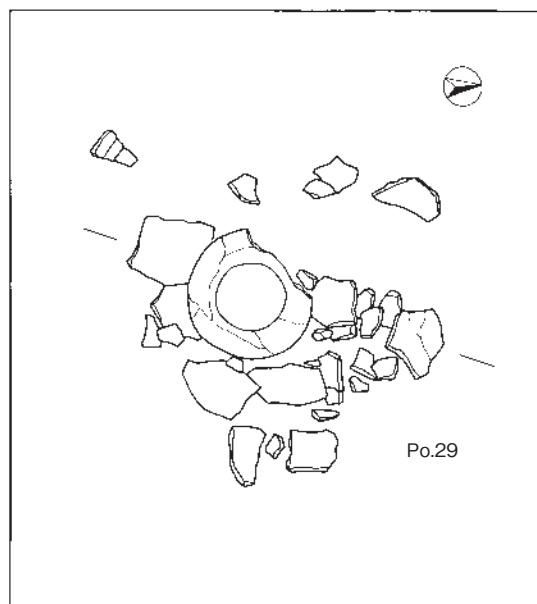
残っているが、原位置を留めているかは不明である。石棺の長側板はそれぞれ3枚の平石で組み上げられるが、小口部の組みかたは「口」字形となる。石棺の据え付け穴は、掘形の底面に「口」字形に溝が掘られている。石棺の内法は1.6m、幅35cm、高さ20cmで、東側の底面には二枚の平石を斜めに立てかけた石枕が置かれている。人骨は検出できなかったが、北側の石枕の上に背面を上に向かた状態で青銅鏡が1面出土した。

出土遺物

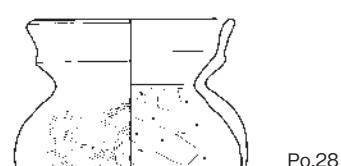
周溝内から二重口縁形を呈する土師器の甕と壺が出土しているほか、石棺内から青銅鏡が1面出土した。Po. 28は、口径10.4cmの土師器の壺である。Po. 29は、復元口径16cmの土師器の甕で、二重口縁となるが、口縁部の内面には段を持たない。B. 2は、石棺の枕石上に背面を上に向かた状態で置か



土器集中7

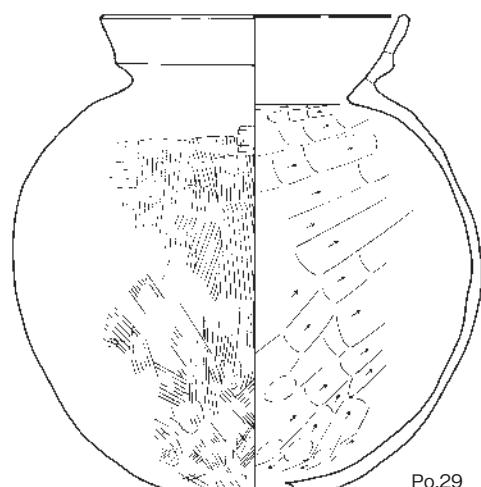


土器集中8

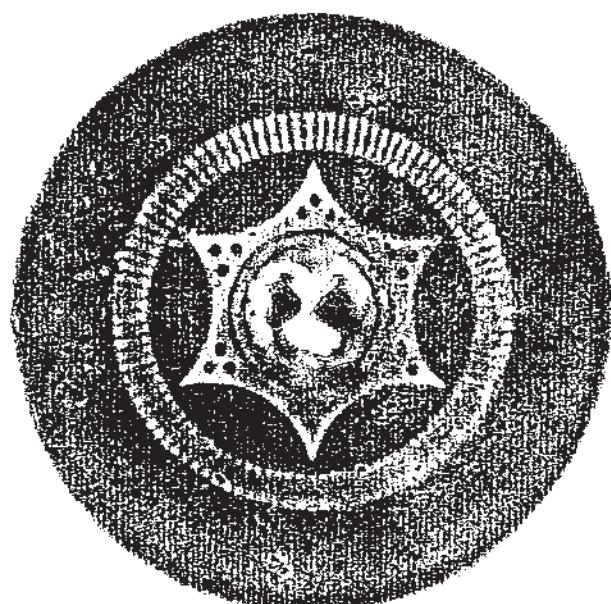


Po.28

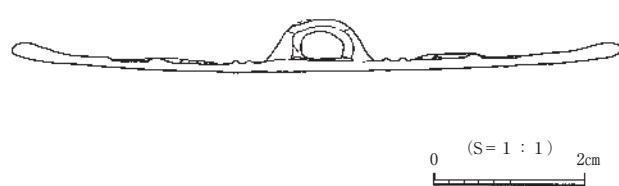
0 (S = 1 : 10) 20cm



0 (S = 1 : 4) 10cm

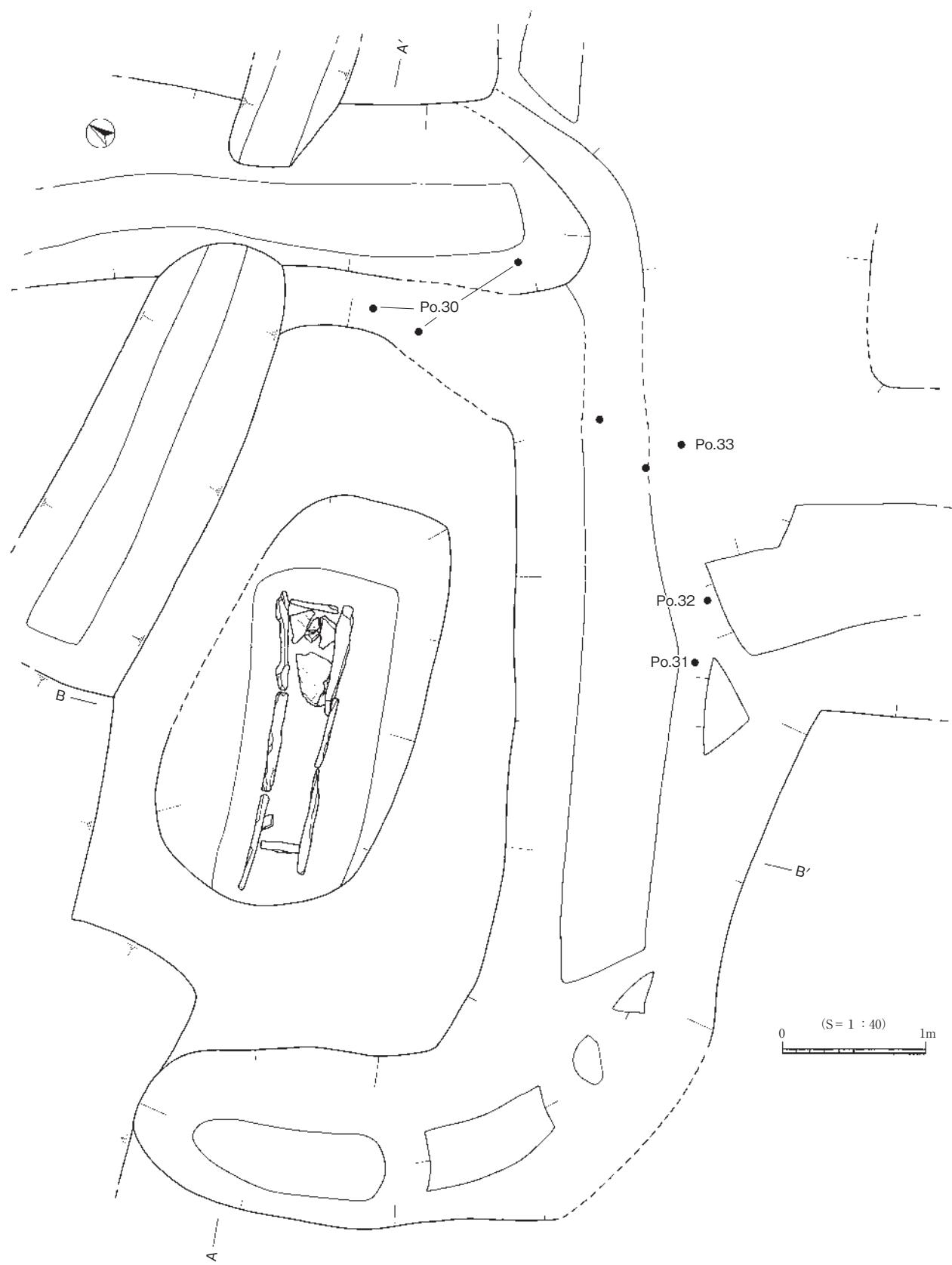


B.2

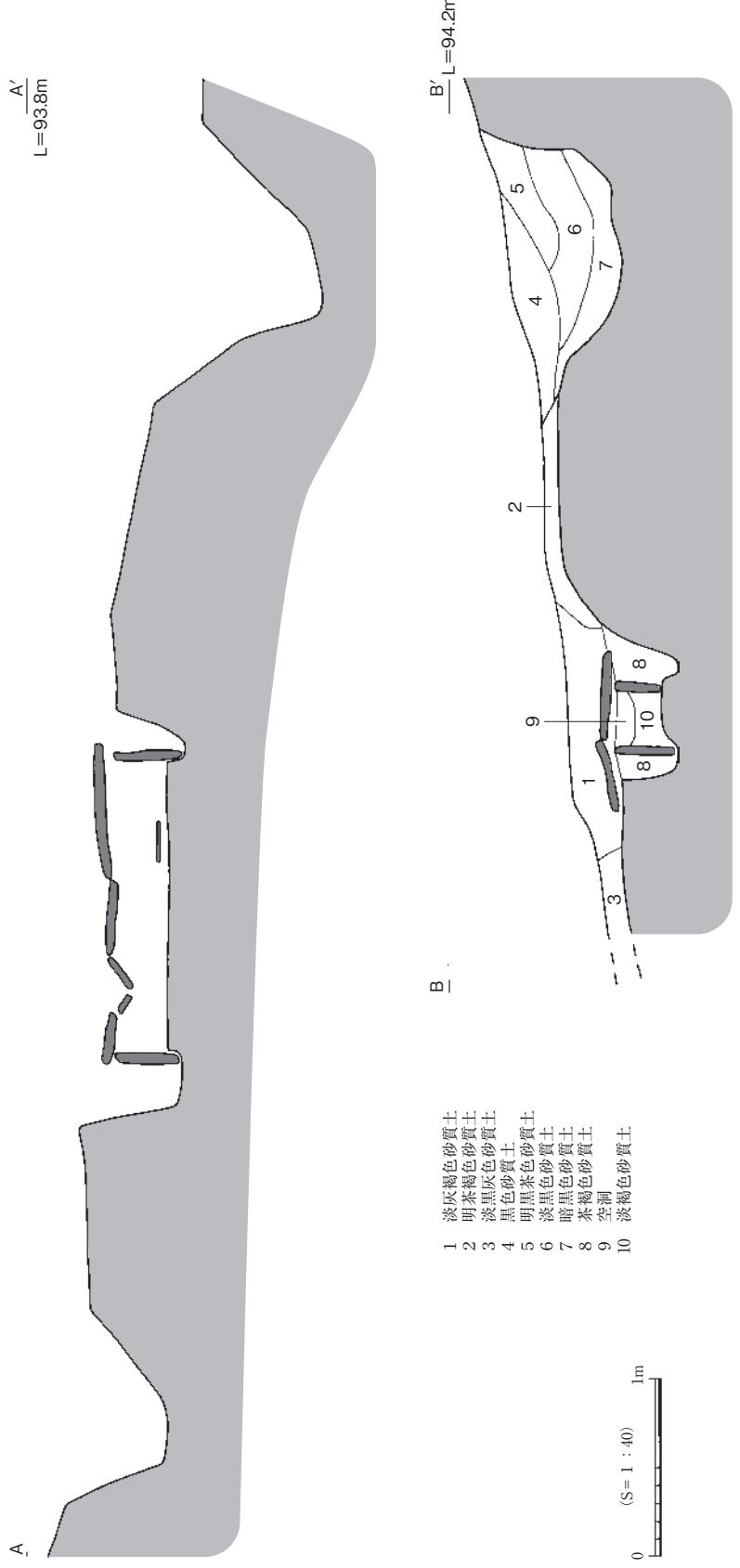


0 (S = 1 : 1) 2cm

第56図 越敷山132号墳 遺構・遺物図



第57図 越敷山133号墳 遺構図



第58図 越敷山133号墳 遺構図

れていた仿製の内行花紋鏡である。直径は8.1cmで、外縁部は無紋で端部は丸く、外区には鋸歯紋帶が廻る。内区は6弁花紋で、弧紋の隙間に3つの珠紋がちりばめられている。紐には、楕円形の穴が開けられている。この古墳の時期は、Po. 29から青木Ⅷ期の新段階、古墳時代中期前半頃のものと見られる。

越敷山133号墳（第57～61図）

越敷山133号墳は、越敷山79号墳の南西コーナー部から一段下がった緩斜面に立地する、周溝を持つ古墳である。

墳丘・周溝

この古墳の墳丘は、地山を「コ」字形に掘削して区画されており、一部が塹壕により削平されているが、一辺5mほどの方墳と考えられる。墳丘の盛土はほとんど無く、埋葬施設の掘形は表土直下で検出したが、本来は盛土がなされていたと考えられる。

周溝は、西側から南側へ「L」字形に掘られており、東側の周溝は越敷山131号墳と共有している。斜面の下側は調査区外のため未調査だが、斜面が急激に落ち込んでいることから、周溝が全周している可能性は無いと思われる。周溝の幅は、西側で1.2m、深さ60cm、南側で幅1.5～2m、深さ80cm、東側で幅1.5m、深さ1mを測る。

埋葬施設

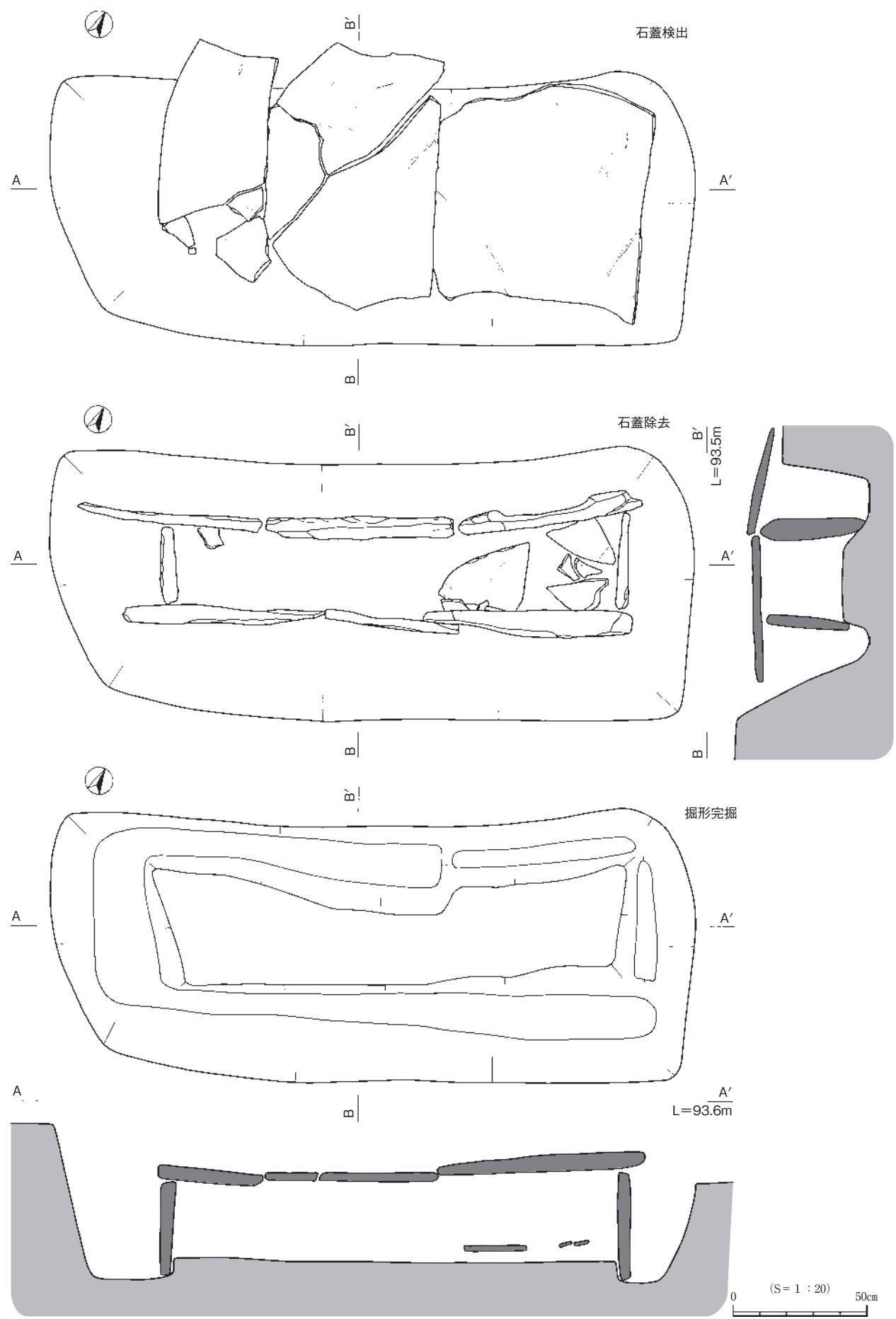
墳丘の盛土が失われているために墓壙の掘形が不明瞭だが、南北方向の堆積状況を見ると埋葬施設の掘形は二段墓壙になると考えられる。墓壙の規模は、長さ3m、幅1.7m以上あったものと推測される。石蓋は、3枚の平石を用いて閉塞している。

石棺はそれぞれ3枚の平石を立てて長側板とし、小口部は「H」字形になるように組み合わせられている。石棺の据え付け穴は、掘形の底面に「口」字形に深さ10cmほどの溝を廻らせていた。石棺の内法は、長さ1.65m、幅50cm、高さ30cmで、棺内の東側には二つの石を左右から挟み込むようにして石枕が置かれており、ここに頭蓋骨が遺存している。また、石枕の西側には薄い板石が置かれているが、この板石の上に下顎骨が乗っていることから、遺体が埋葬された当初からここに置かれていたものと考えられる。石棺内から見つかった人骨は頭蓋骨のみだが、それ以外の骨は土砂に埋もれていたために見つけることは出来なかった。恐らく、土に触れた部分から徐々に風化して失われたものと考えられる。頭蓋骨の頂部には、薄く朱が塗布されている。

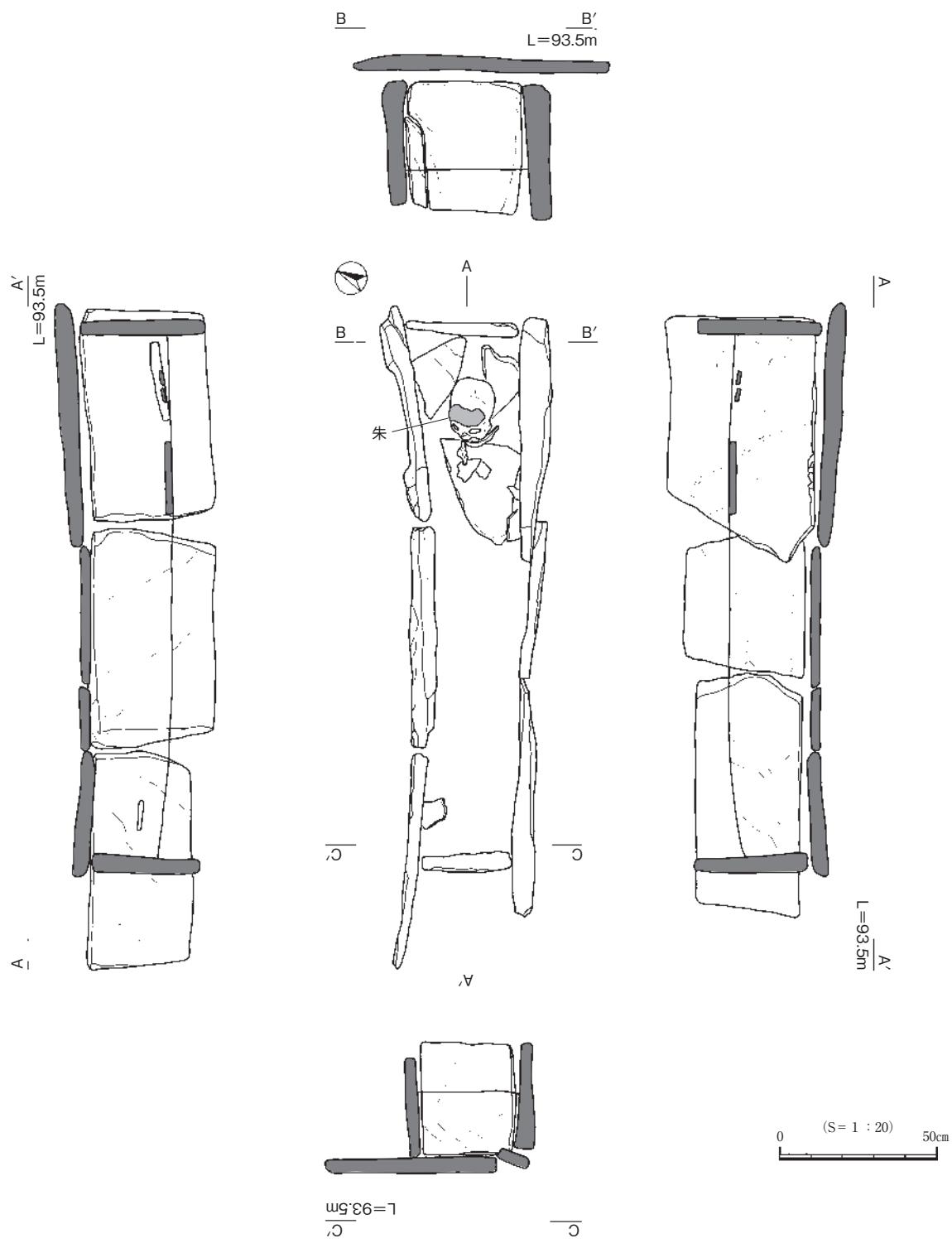
出土遺物

南東部の周溝内から、土師器の壺と甕が出土した。Po. 30は、口縁部に緩い段を残す、復元口径16cmの土師器甕である。Po. 31は、復元口径12.3cmの土師器甕。Po. 32は、土師器甕の胴部片。Po. 33は復元口径13.8cmの小型の土師器甕。Po. 34は、口径12.3cm、器高12.7cmの土師器長頸壺である。

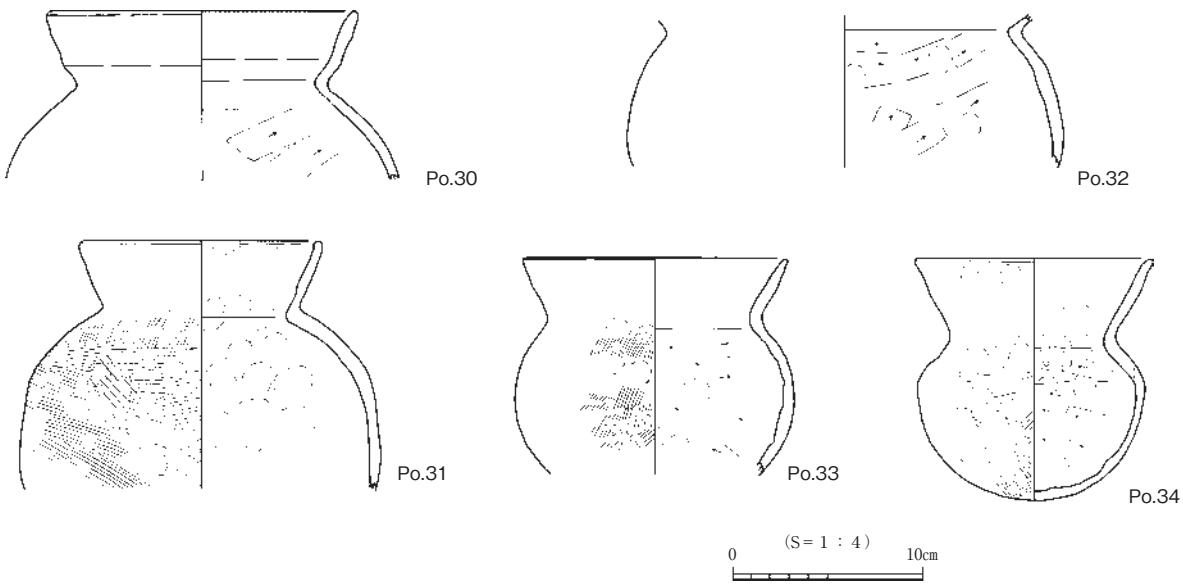
この古墳の時期は、出土した土器から青木Ⅷ期新段階から青木Ⅸ期の古段階、古墳時代中期中頃と考えられる。



第59図 越敷山133号墳 遺構図



第60図 越敷山133号墳 遺構図



第61図 越敷山133号墳 遺物図

越敷山134号墳（第62・63図）

越敷山134号墳は、越敷山79号墳の南西部に位置する、周溝を持つ古墳である。

墳丘・周溝

古墳の北側は越敷山79号墳の周溝に接しており、西側は133号墳、東側は135号墳と周溝を共有している。一辺が3.3m×1.3mの長方形墳と考えられる。

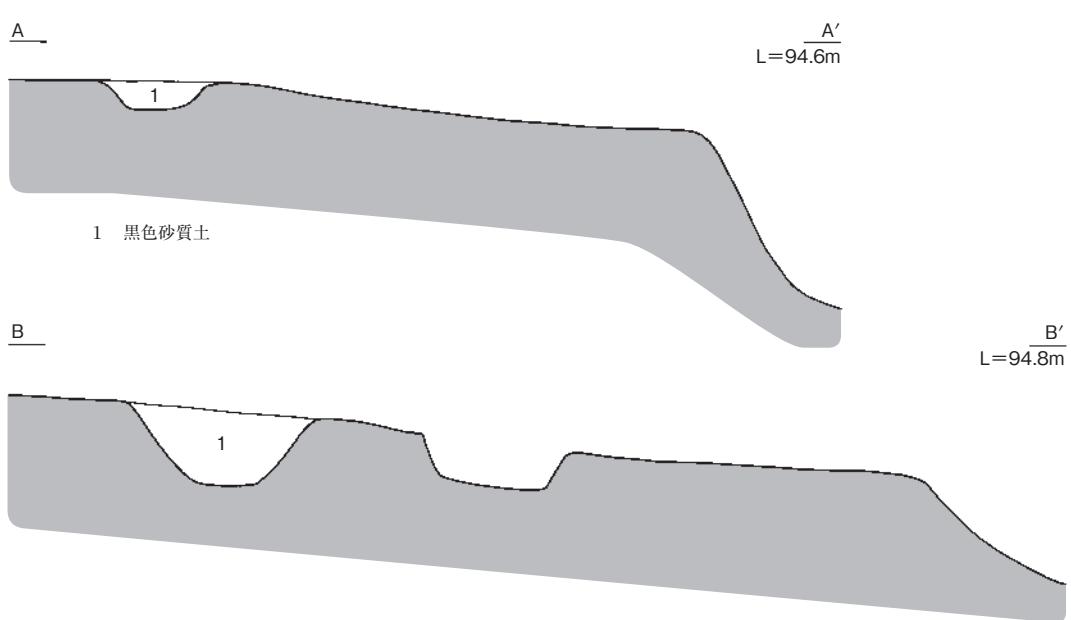
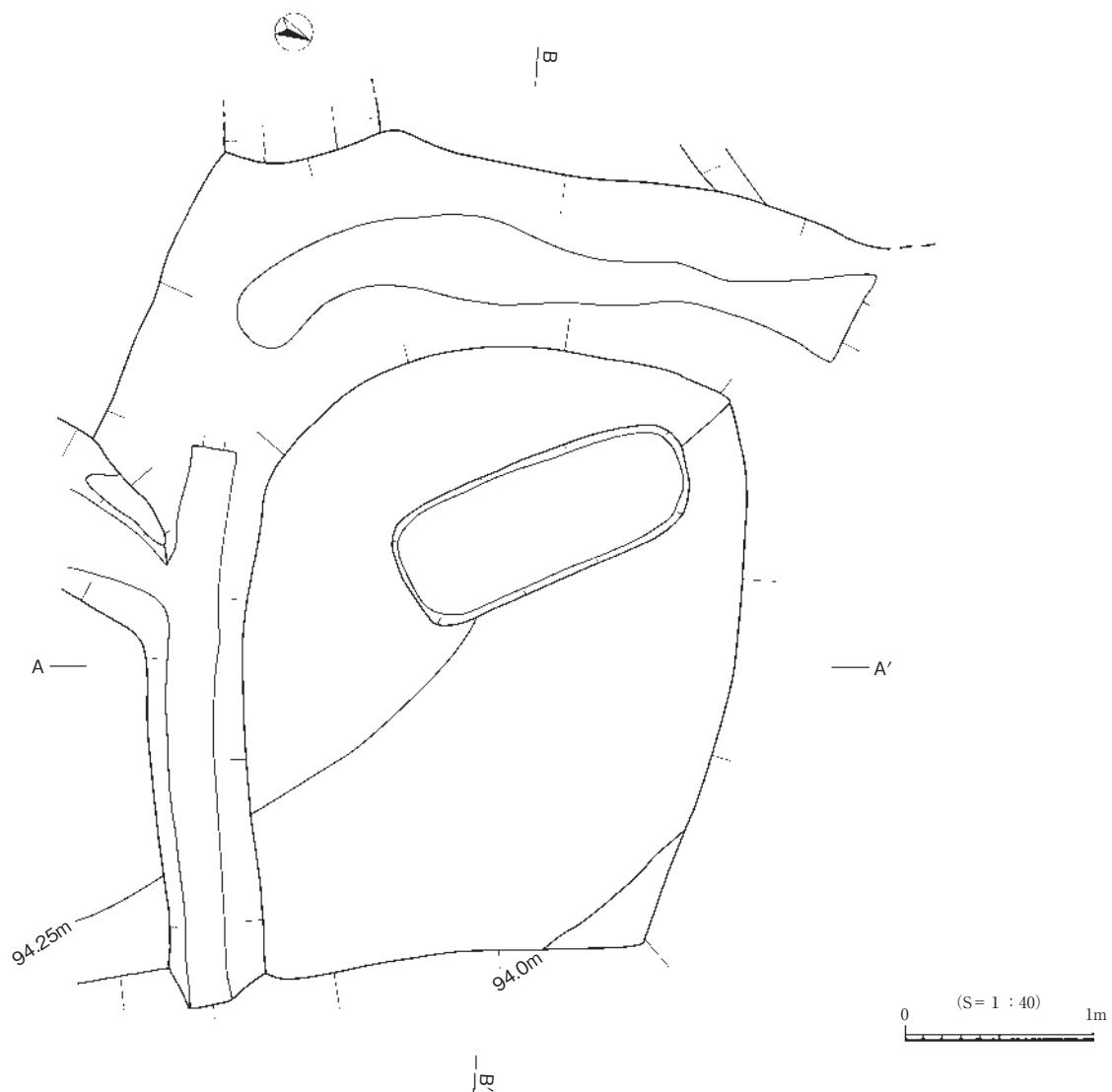
周溝同士の切り合い関係が無いので各古墳が築造された順序は分からぬが、古墳の位置関係から79号墳→134・135号墳→133号墳の順に築造されたと考えられる。主体部は、やや西に偏った位置に掘られており、周溝の方向ともずれているため平行にはならない。

埋葬施設

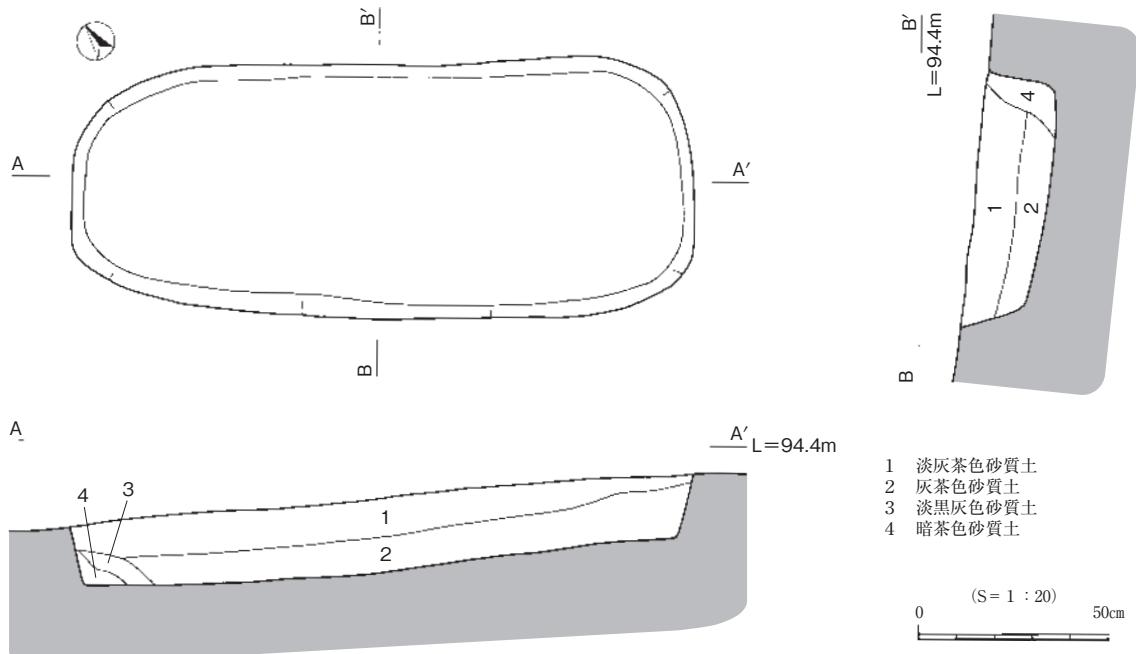
埋葬施設は隅丸方形の土壙墓で、掘形は長さ1.65m、幅65cm、深さ20cmを測る。検出面、断面とも木棺の痕跡は認められなかった。底面には石枕は見られないが、南東部に向かって高くなっていることから、南東頭位で埋葬されたものか。

出土遺物

この古墳に伴う遺物は、出土しなかった。



第62図 越敷山134号墳 遺構図



第63図 越敷山134号墳 遺構図

越敷山135・136号墳（第64～69図）

越敷山135・136号墳は、2基の小型古墳が周溝を共有しながら接続している。両古墳を合わせた平面形は、前方後円形を呈する。鳥取県西部地方では、全長20m未満の小型前方後円墳は極めて珍しいことと、周溝も完周していないことから、ここでは別個の古墳として扱う。

墳丘・周溝

越敷山135号墳は、東側を79号墳、北側を134号墳の周溝と共有し、北西側を円弧状の周溝が、更に南西側を136号墳に向かって周溝が伸びている。両古墳の周溝がきれいに繋がっていることから、ほぼ同時期に掘削された周溝と考えられる。周溝の規模は、135号の西側で長さ4m、幅1～1.2m、深さ50cmあり、136号墳の西側では長さ4m、幅1.2m、深さ30cmである。

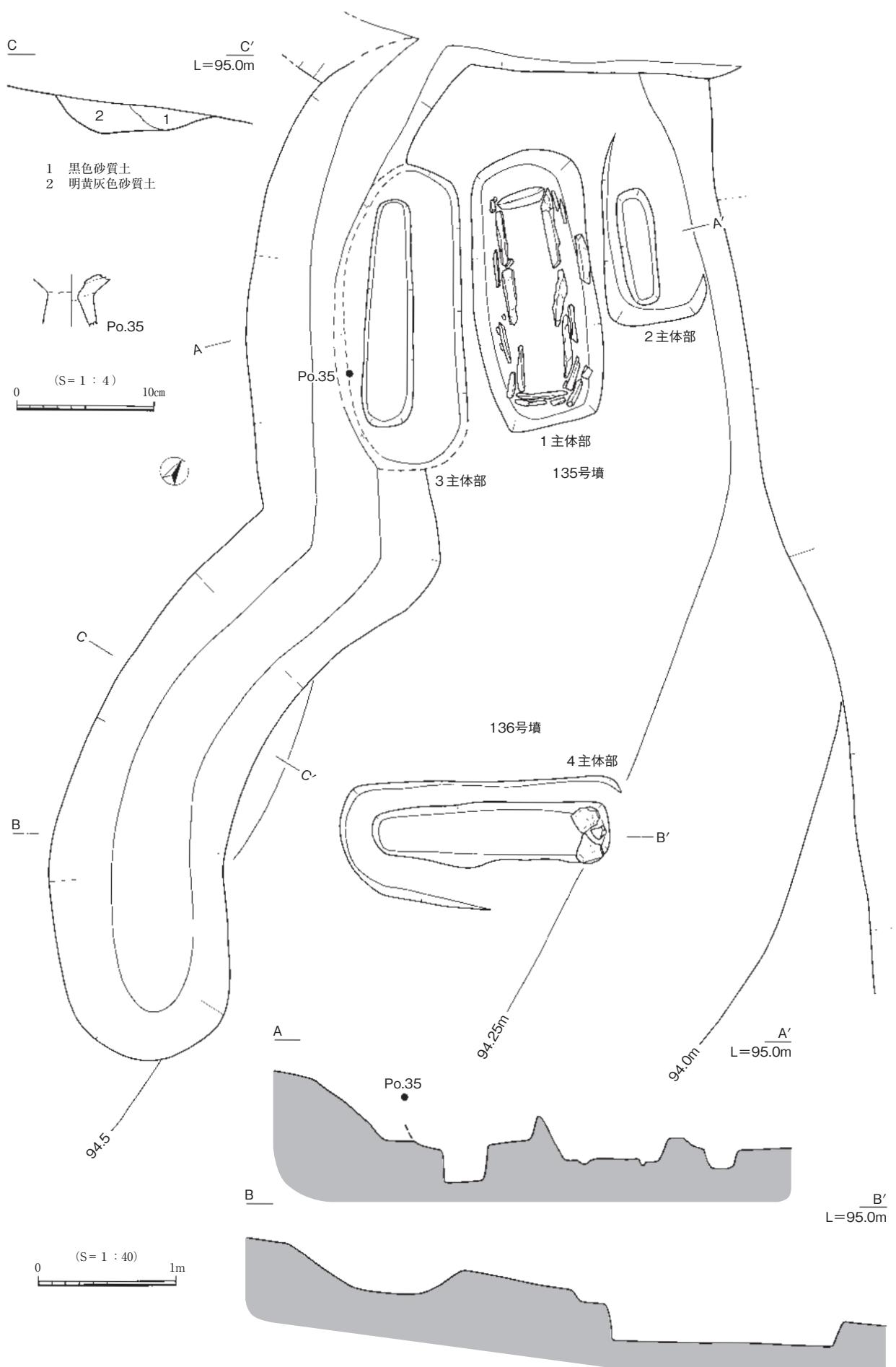
埋葬施設は、135号墳で3基の主体部が南北方向に並列しており、136号墳では東西方向に向いて1基の土壙墓が造られている。135号墳の3基の主体部は殆ど切り合い関係が認められないことから、それほど期間を置かずに埋葬されたものと考えられる。

埋葬施設

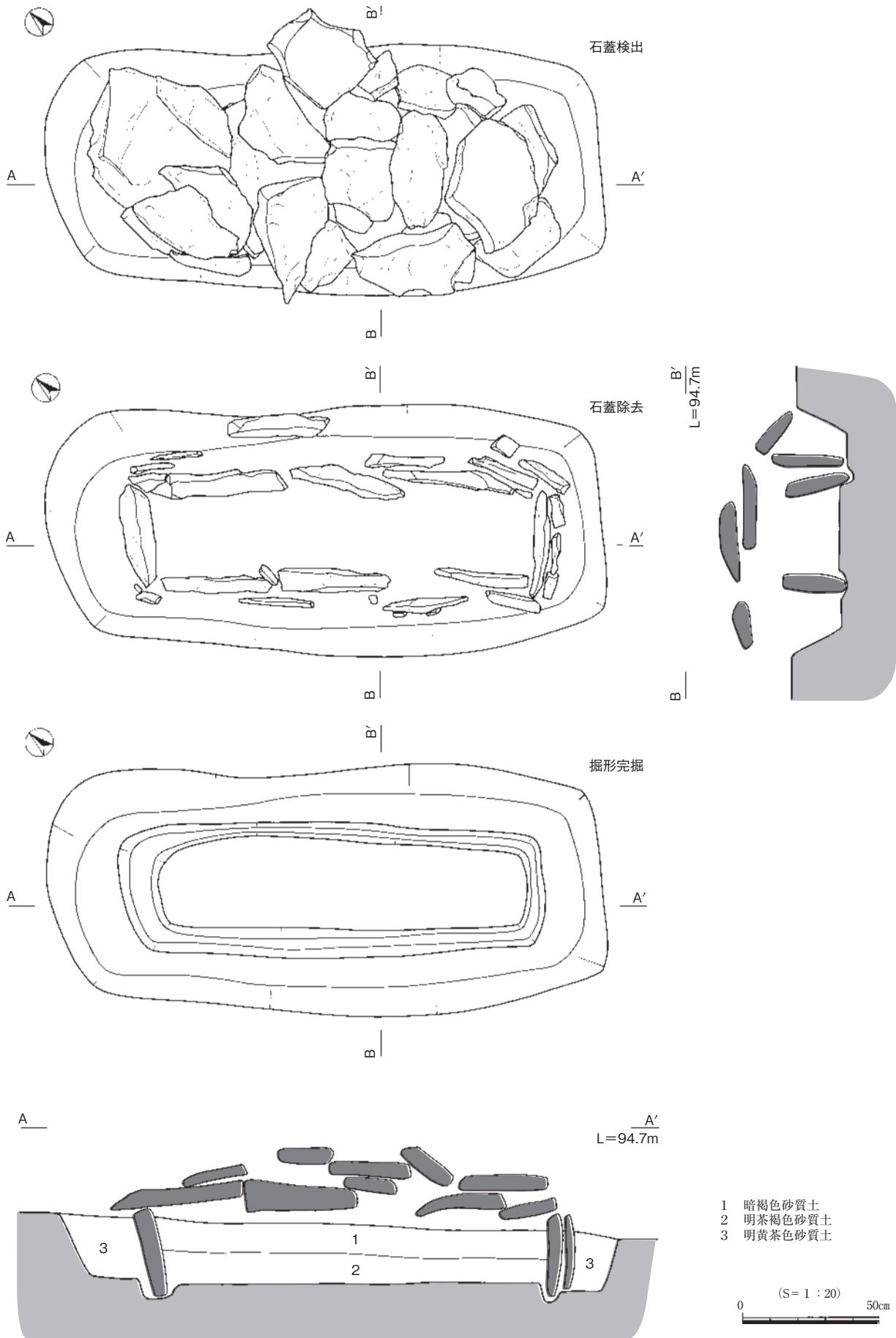
1 主体部 135号墳の中央で検出した、石棺墓である。石棺の掘形は長さ2m、幅90cm、深さ20cmで、石棺の据え付け穴は、墓壙底面に深さ5cmの「口」字形の溝が廻る。石蓋は4枚の平石を並べ、その上面に小割した平石を厚く載せて閉塞している。

石棺の構造は、長側板として4枚の平石を並べ、小口部を「口」字形に組み合わせているが、周囲の石棺と比べるとやや雑な印象を受ける。石棺の内法は、長さ1.35m、幅30cm、高さ25cmを測る。棺内に石枕は見られず、その他の副葬品も出土しなかった。

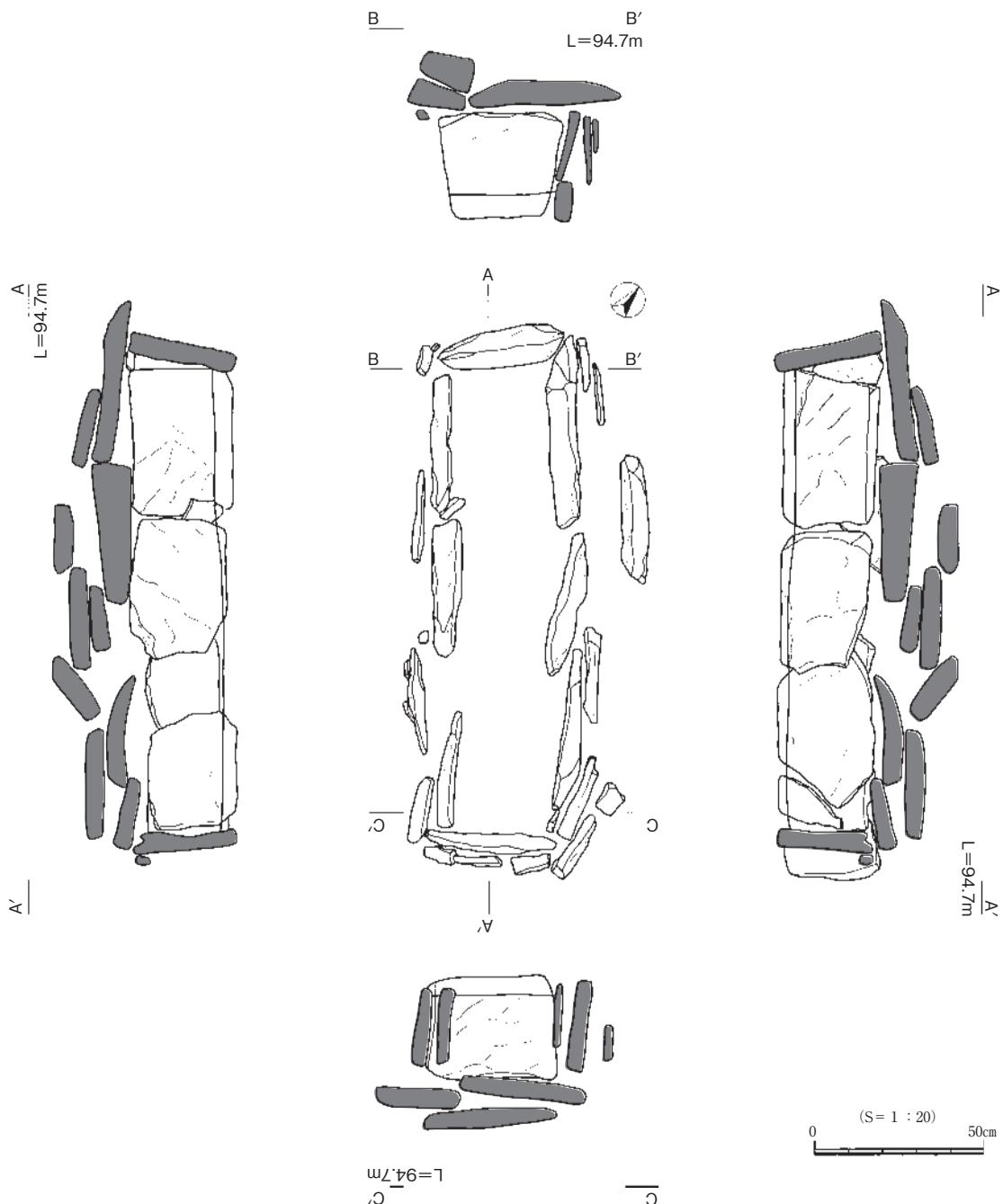
2 主体部 1主体部の北東に隣接して造られた、小型の石蓋土壙墓である。石蓋は4個の石を並べ、上面に大型の石を3個被せて閉塞されている。主体部の掘形は長楕円形を呈し、長さ90cm、幅25cm、深さ25cmである。主体部の底面には、石枕は置かれていなかった。



第64図 越敷山135号・136号墳 遺構図



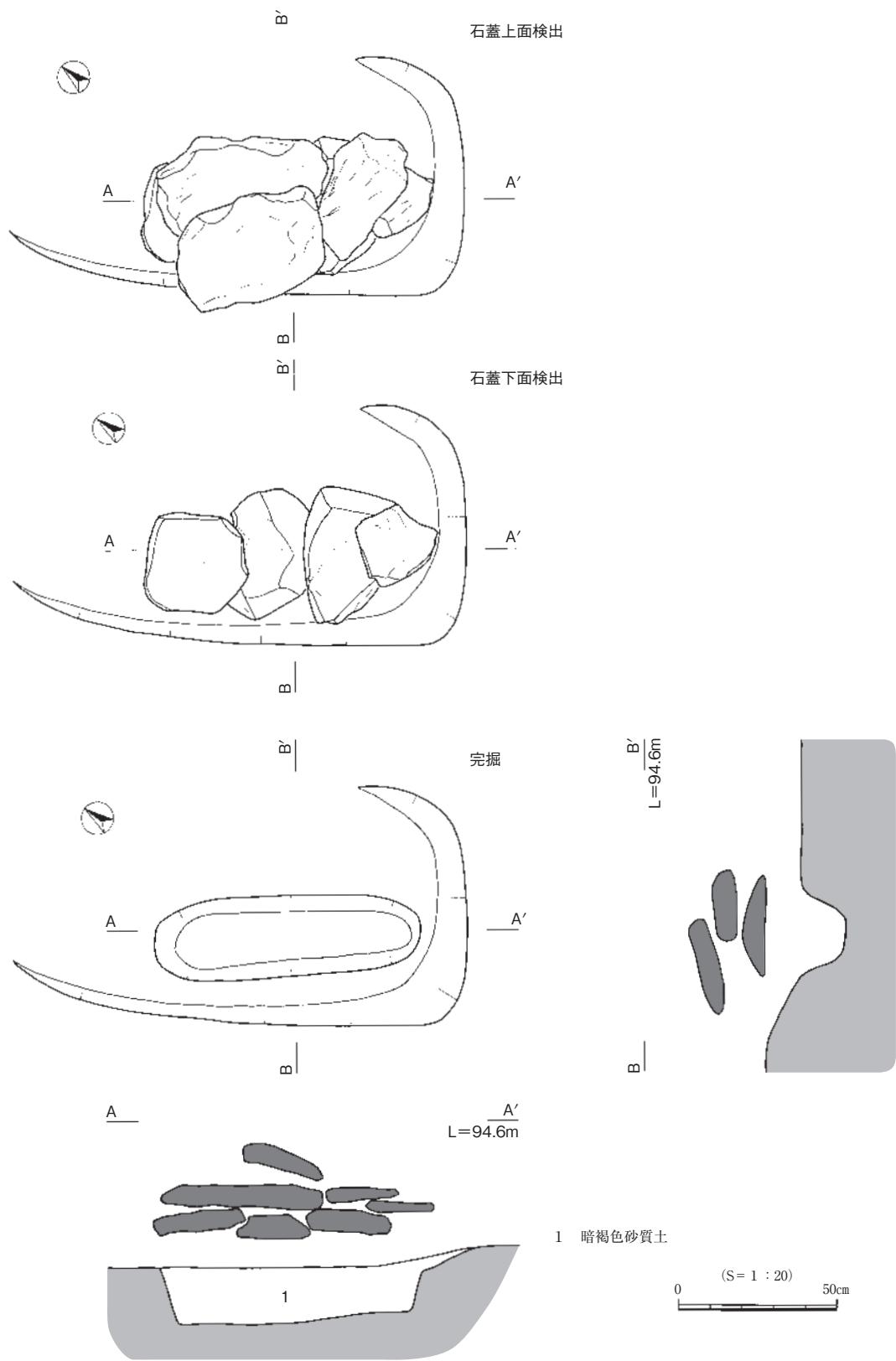
第65図 越敷山135号墳1主体部 遺構図



第66図 越敷山135号墳1主体部 遺構図

3主体部 135号墳の西側周溝に半分以上はみ出して造られた、石蓋土壙墓である。状況から判断して、埋葬終了後に周溝を埋めていると考えられる。墓壙の掘形は、長さ2.2m、幅90cm以上、深さ20cmの二段墓壙で、石蓋は4枚の平石を並べ、合わせ口の上面に平石を置いて閉塞している。主体部は、北側が細くなる長楕円形で、長さ1.65m、幅25~40cm、深さ25cmである。底面に石枕は置かれていなかったが、主体部の形から、南頭位で埋葬されたものと考えられる。

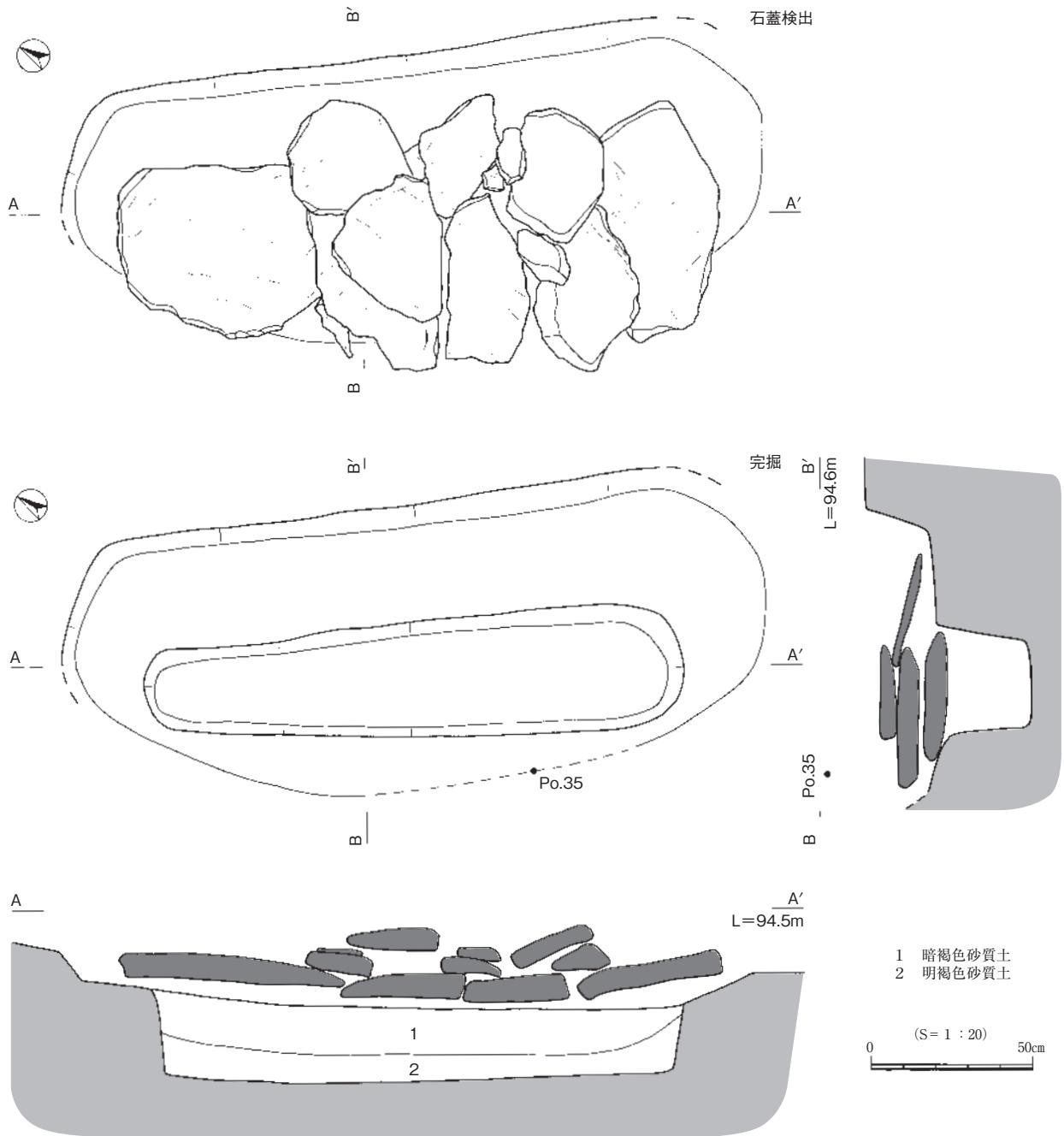
4主体部 136号墳の墳丘中央部で検出した、石蓋土壙墓である。墓壙は二段墓壙で、長さ2.2m以上、幅1m、深さ10cm以上の規模と推測される。石蓋は東側に大型の平石を置き、西側に小型の平石を並べ、合わせ口の上面に平石を被せて閉塞している。主体部は、長さ1.74m、幅35~45cm、深さ25cmを測る。主体部の東側底面には、石枕が置かれていることから、東頭位で埋葬されている。



第67図 越敷山135号墳2主体部 遺構図

出土遺物

この古墳に伴う遺物は、3主体部を被覆する周溝内埋土の上層から土師器の高坏片が出土した。Po. 35は、土師器高坏の脚柱部片である。



第68図 越敷山135号墳 3主体部 遺構図

越敷山137号墳（第70・71図）

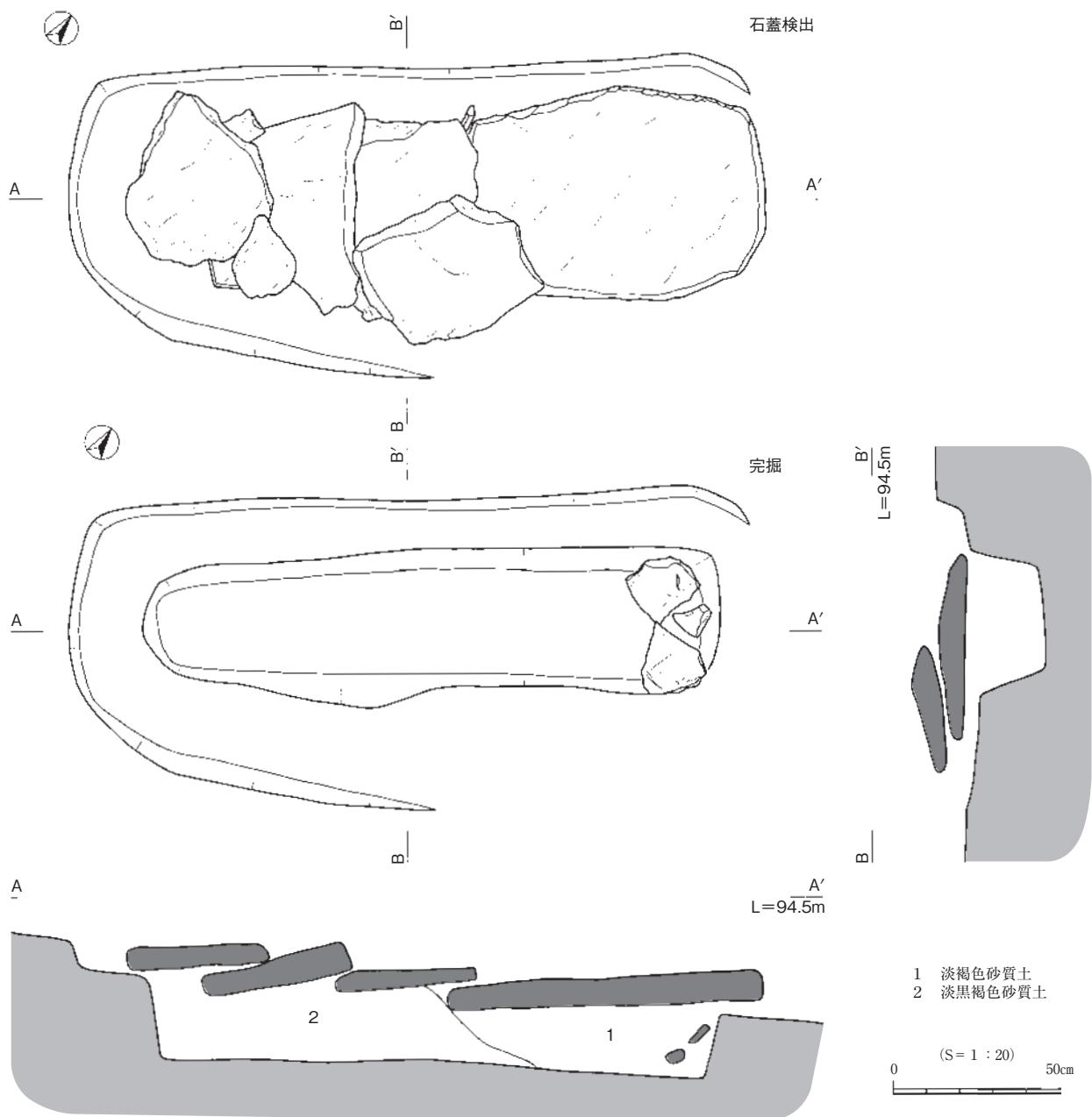
越敷山136号墳と142号墳の東側の斜面下、標高94m付近で検出した周溝を持つ石蓋土壙墓である。

墳丘・周溝

検出した周溝は三日月形を呈し、長さ5.7m、幅1m、深さ20cmを測る。古墳の東側が越敷山80号墳の周溝によって大きく削平されているため全形が分からぬが、直径7mほどの円墳に復元可能である。

埋葬施設

この古墳の埋葬施設は、越敷山80号墳の周溝を完掘した際に、断面に輪郭が見えていたが、淡黒褐色土の上面では面的に検出できなかったことから、改めて断ち割りを入れて範囲を確定させた。主体部は石蓋土壙墓で、墓壙の掘形は二段墓壙となる。墓壙上面の規模は、残存する長さ2.2m、幅1.3

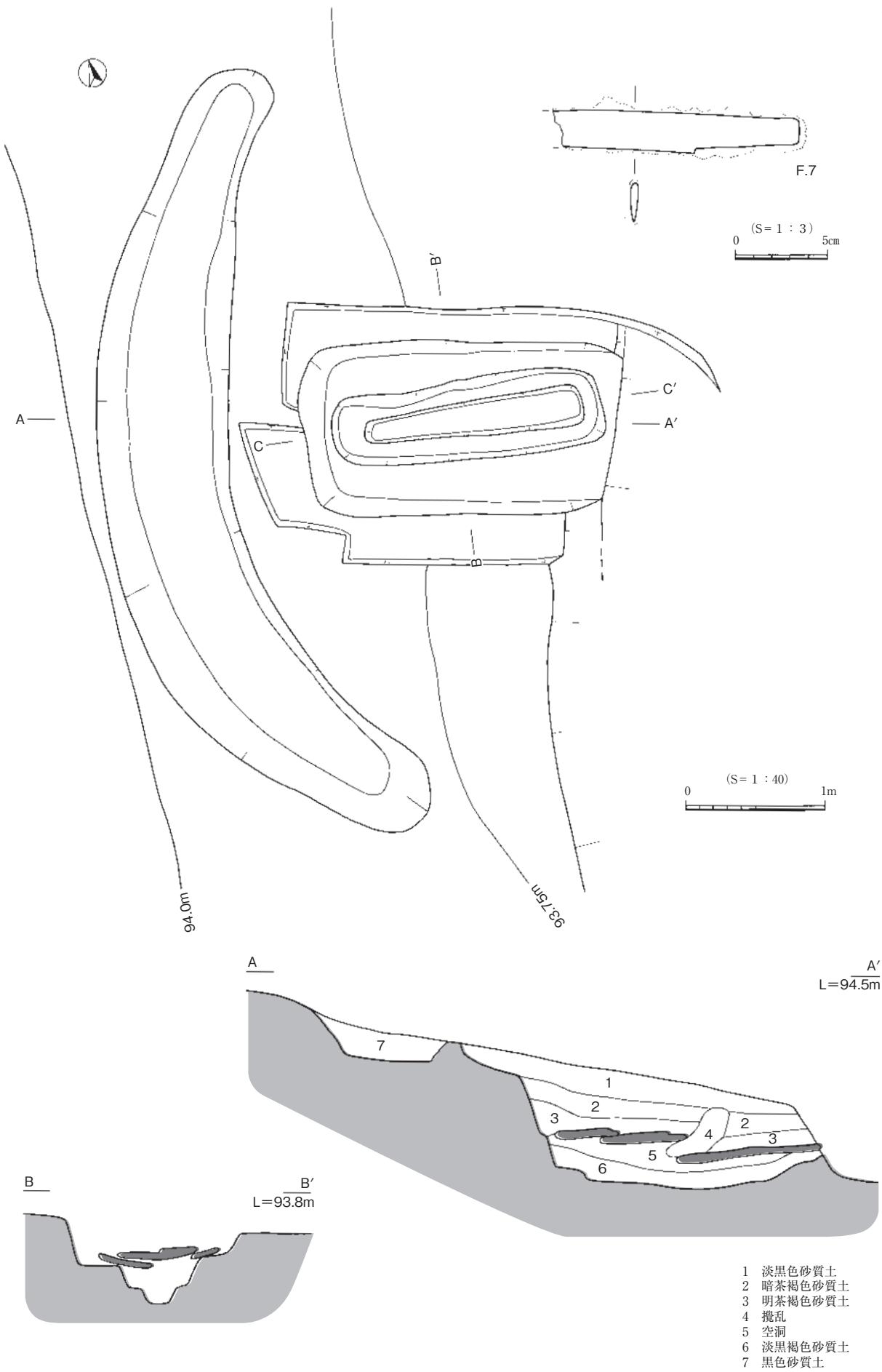


第69図 越敷山135号墳 4 主体部 遺構図

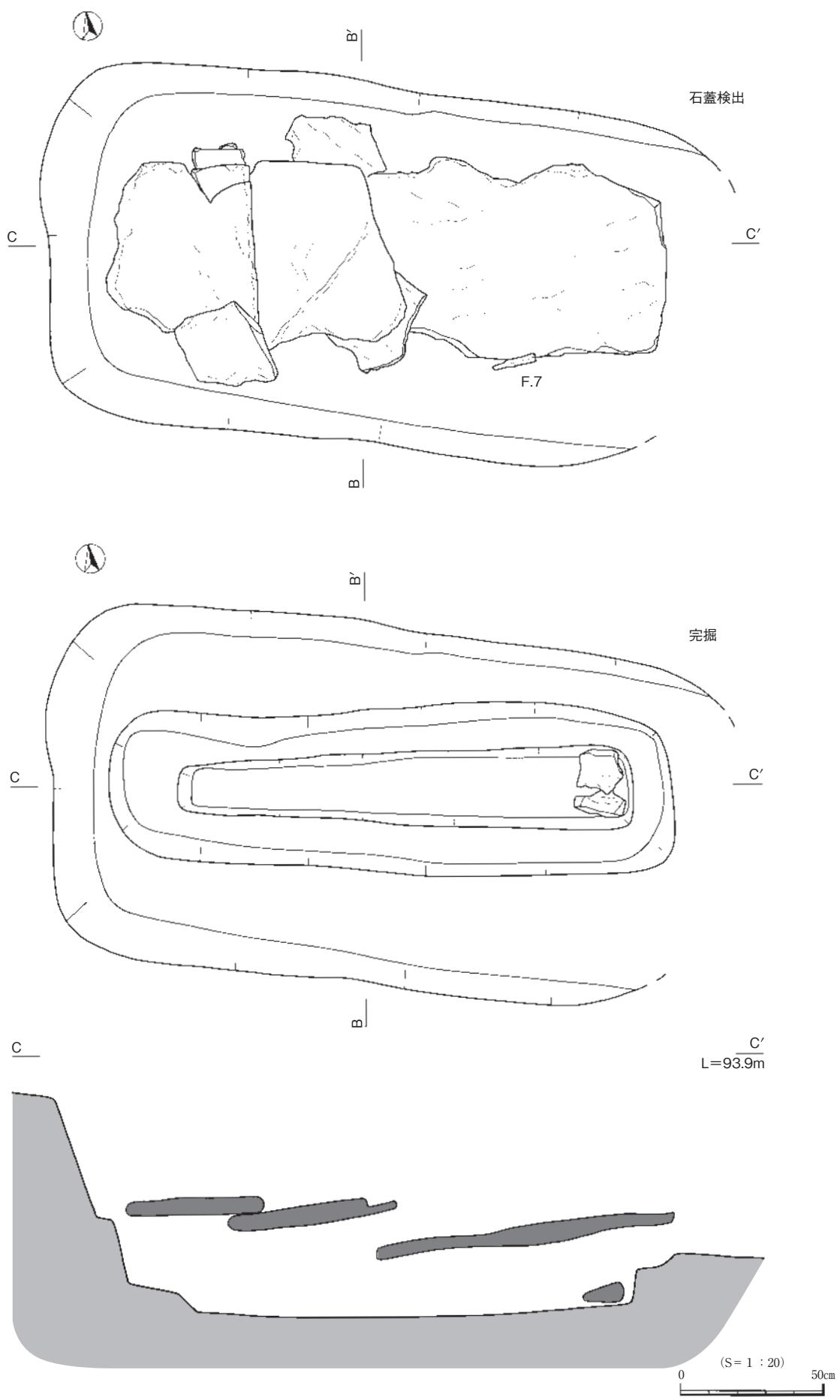
m、深さ50cmである。石蓋は3枚の平石を用い、隙間に小型の平石を詰めて閉塞している。主体部は二段の掘込があり、上段の長さは2m、幅60cm、深さ20cm、下段の長さが1.6m、幅18~30cm、深さ10cmである。底面の東側には二つの石を置いて石枕としている。

出土遺物

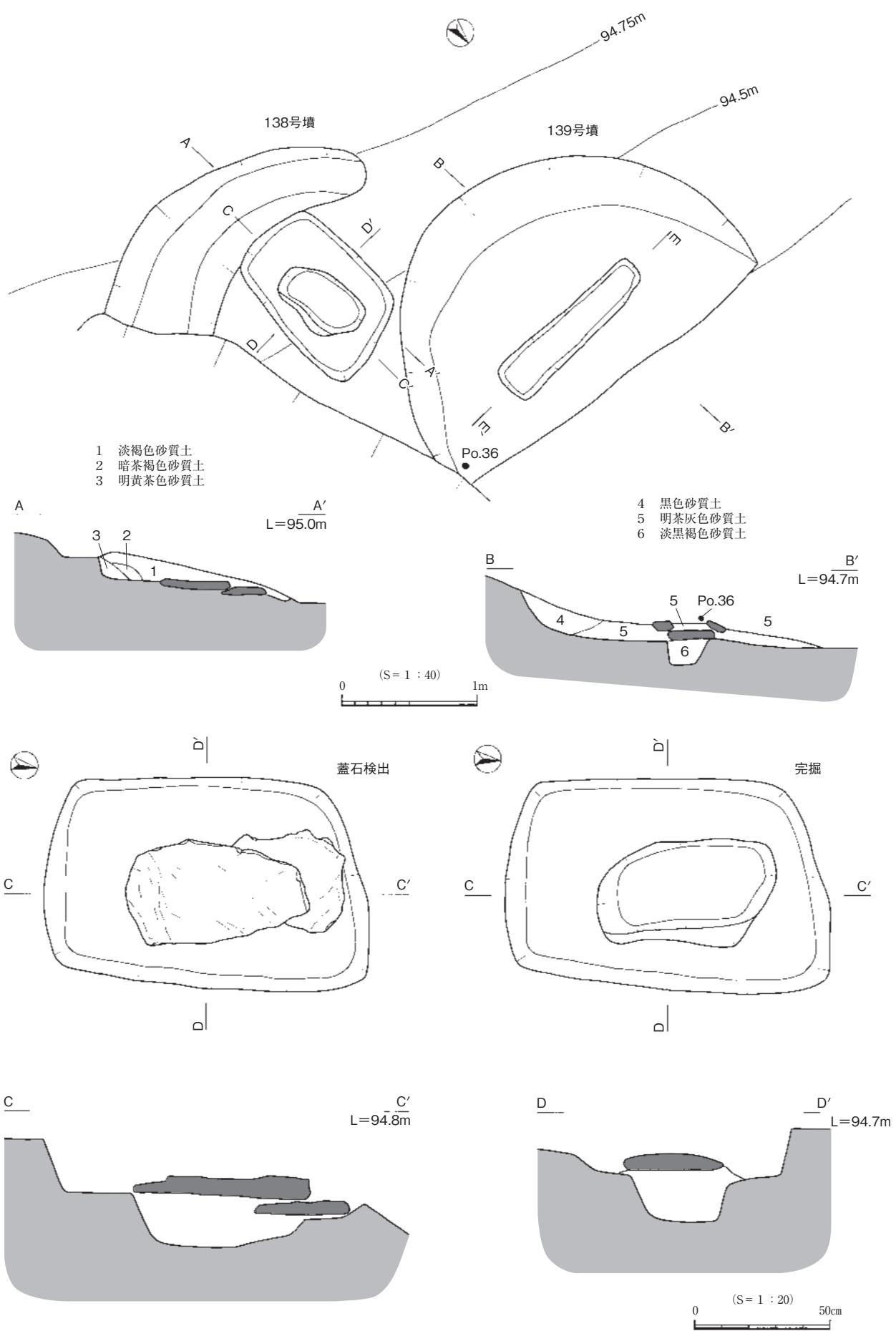
墓壙の埋土中から、刀子が1点出土した。F.7は刃先を欠損する刀子で、柄は鹿角製と見られる。両面の刃部に木質が残ることから、鞘に収められていたと考えられる。



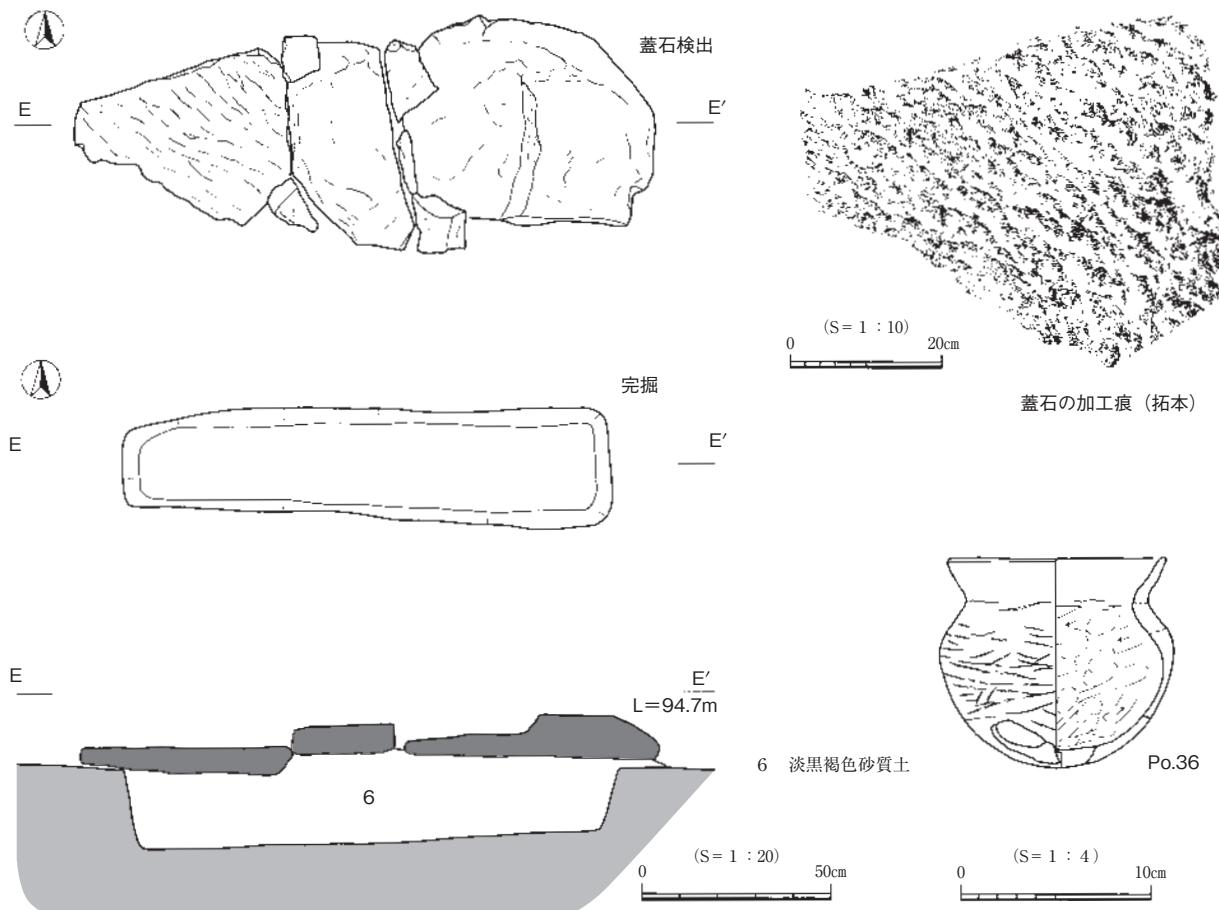
第70図 越敷山137号墳 遺構・遺物図



第71図 越敷山137号墳 遺構図



第72図 越敷山138・139号墳 遺構図



第73図 越敷山139号墳 遺構・遺物図

越敷山138号墳（第72図）

越敷山139号墳に隣接して造られた、周溝を持つ小型古墳である。139号墳とは明瞭な切り合い関係が認められないが、138号墳の埋葬施設のすぐそばまで掘削されていることから、138号墳が先行して造られたと考えられる。

墳丘・周溝

丘陵の斜面上側に、長さ2mほどの三日月形の溝を掘削して周溝としている。周溝と埋葬施設の掘形が近接していることから、後述する139号墳と同様に小規模な盛土をもつ古墳と考えられる。

埋葬施設

墓壙の掘形は二段墓壙で、上面の長さは1.2m、幅80cm、深さ20cmを測る。石蓋は2枚の平石を用いて閉塞されており、主体部の規模は、長さ70cm、幅40cm、深さ20cmである。底面に石枕は見られないが、北側の底面が若干高くなっている。

越敷山139号墳（第72・73図）

越敷山139号墳は、越敷山134号墳の周溝と接する小型の古墳で、すぐ南東部に越敷山138号墳が造られている。

墳丘・周溝

丘陵の斜面、直径2.8m程の範囲を丸くカットして平坦面を造り、石蓋土壙墓を構築している。明瞭な墳丘や周溝は認められなかったが、断面観察では南側に「U」字形に黒色土が堆積していること

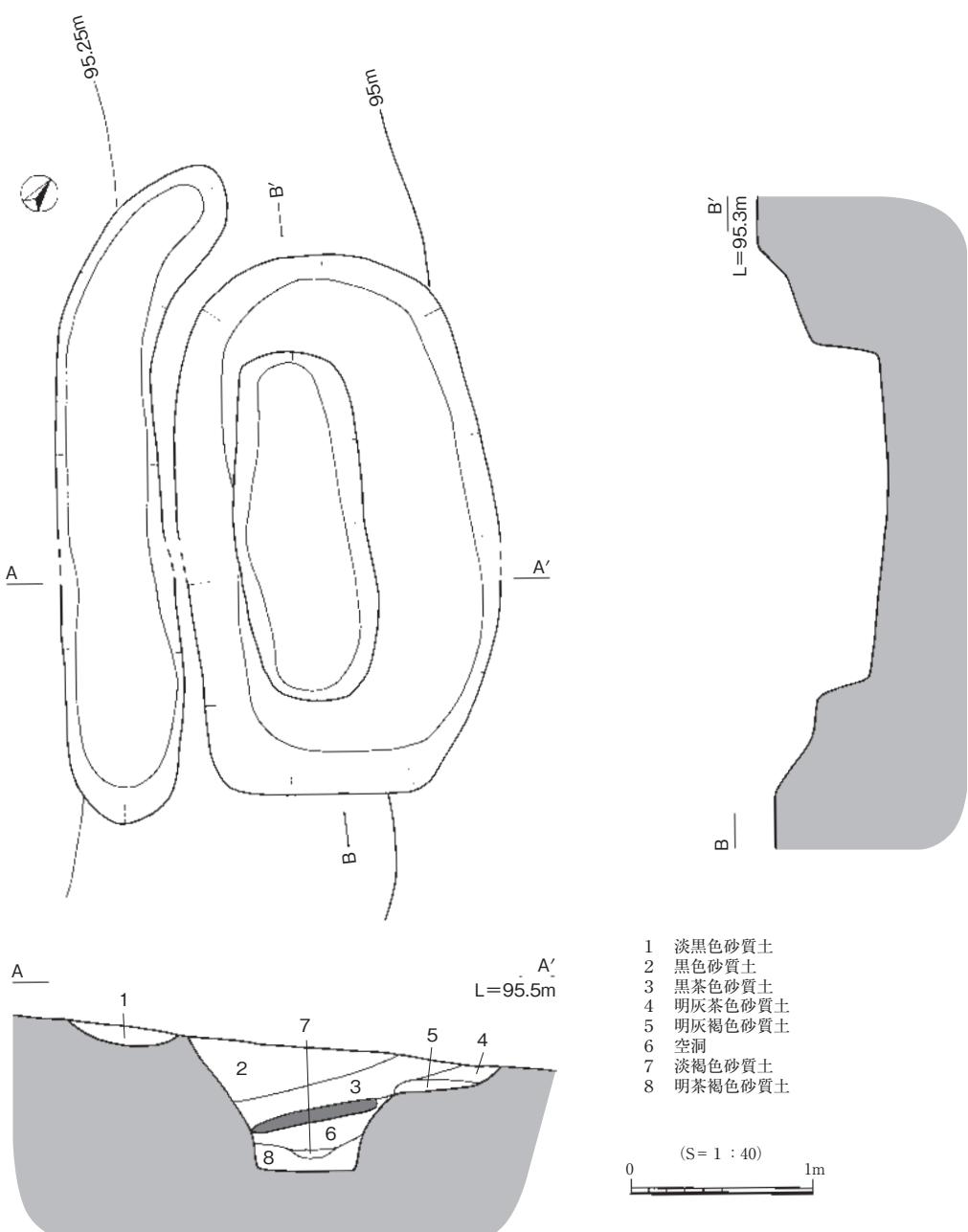
から、石蓋を閉じてから主体部の上に盛土をして小規模な墳丘を造っていたと考えられる。

埋葬施設

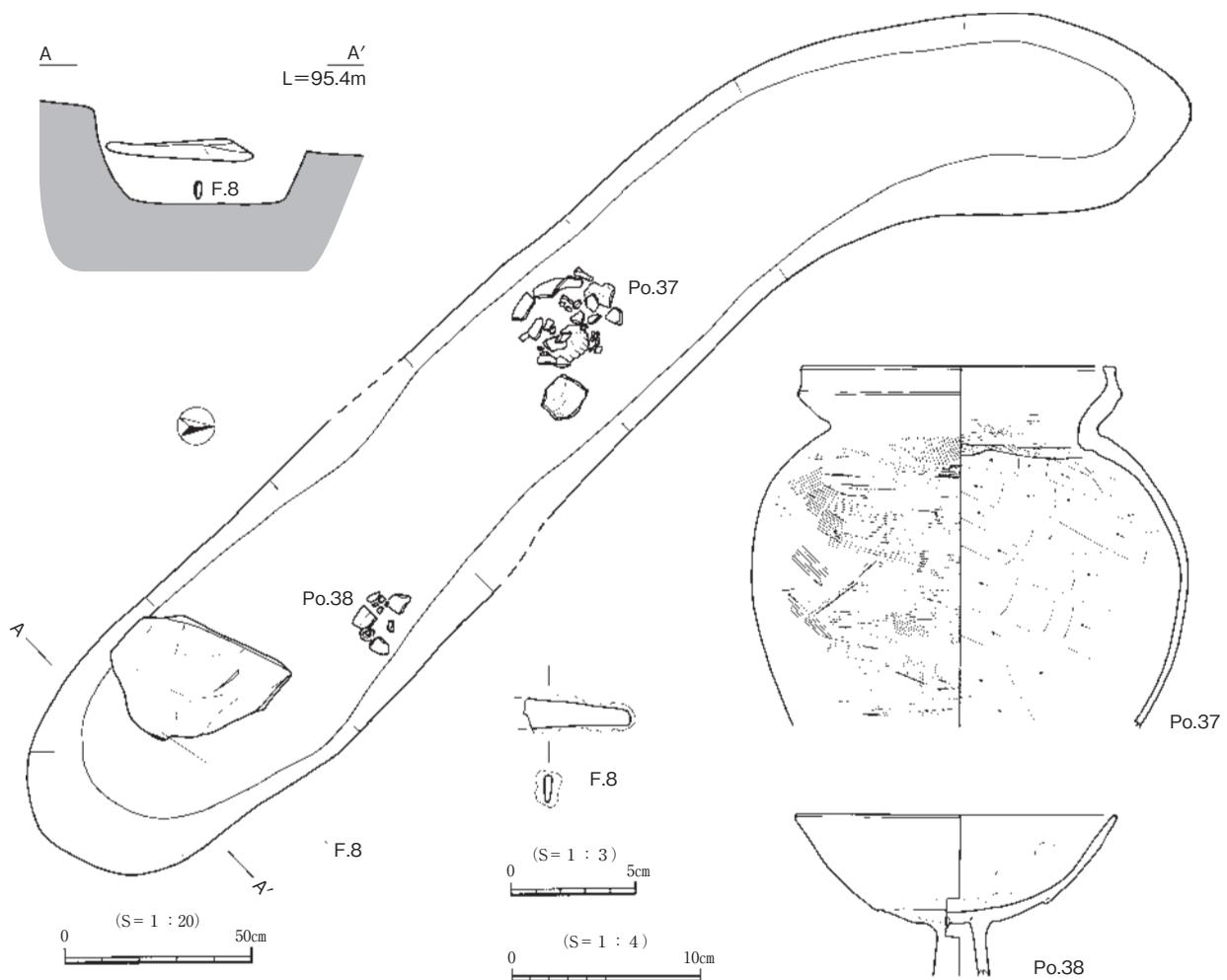
埋葬施設は石蓋土壙墓で、斜面をカットして造られた平坦面に、直接墓壙を掘り込んでいる。石蓋は3枚の平石を置き、合わせ口の隙間に小割した平石を詰めて閉塞している。石蓋の表面には、工具で調整した痕跡が見られた。主体部は長さ1.9m、幅40~50cm、深さ30cmだが、東側の底面が高くなっている。底面に石枕は見られなかったが、東側の石蓋が最も大きいことと、主体部東側の幅が広くなっていること、東側の底面が高くなっていることから、この主体部は、東頭位で埋葬されたものと考えられる。

出土遺物

Po. 36は、周溝に相当すると考えられる範囲から出土した土師器の壺である。口径は11.3cm、器高は11cmを測る。底部には、焼成後に直径3cm程の穴が開けられている。



第74図 越敷山140号墳 遺構図



第75図 越敷山140号墳 遺構・遺物図

越敷山140号墳（第74～77図）

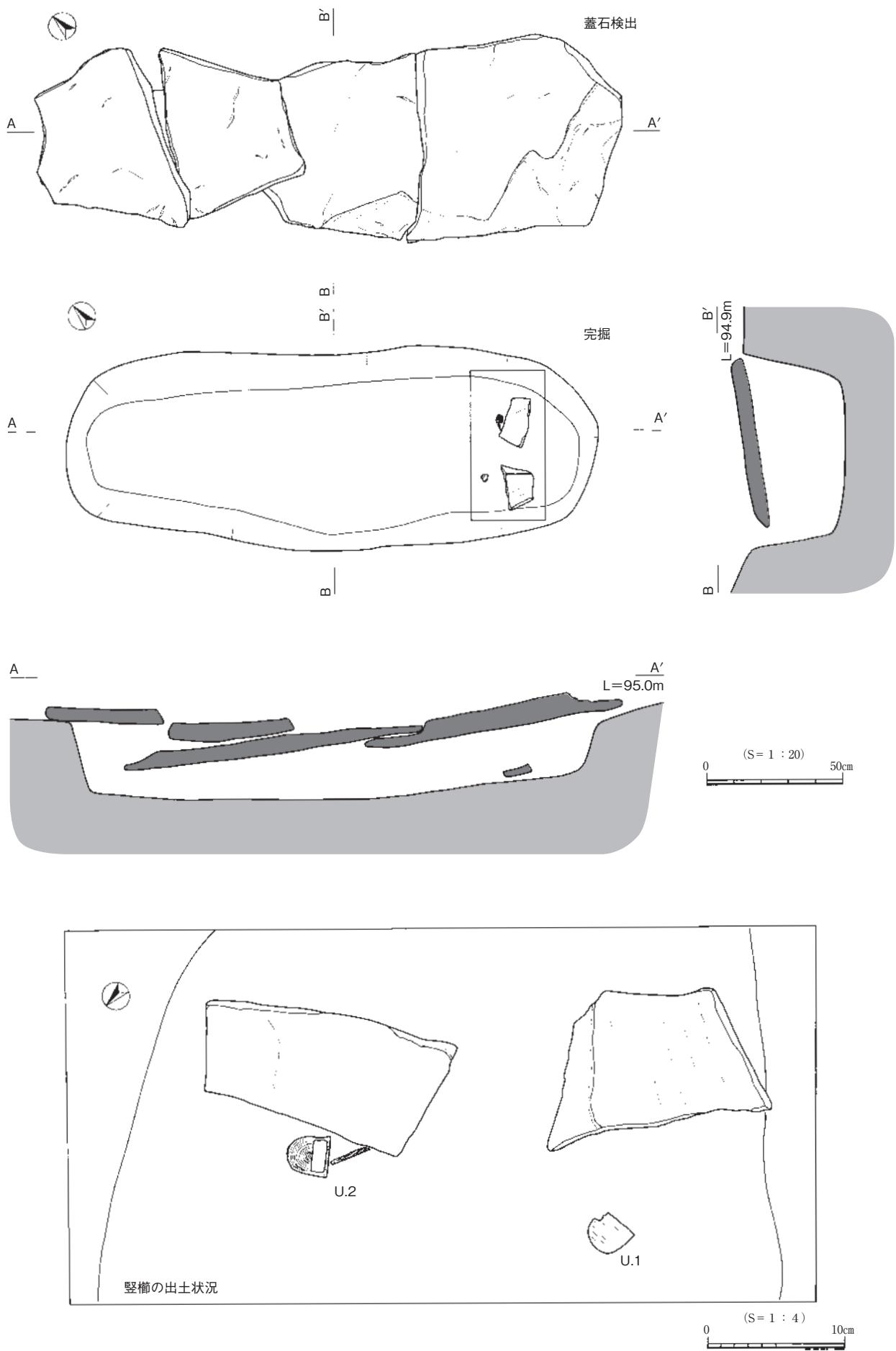
越敷山140号墳は、143号墳の北側、標高95m付近に所在する古墳である。

墳丘・周溝

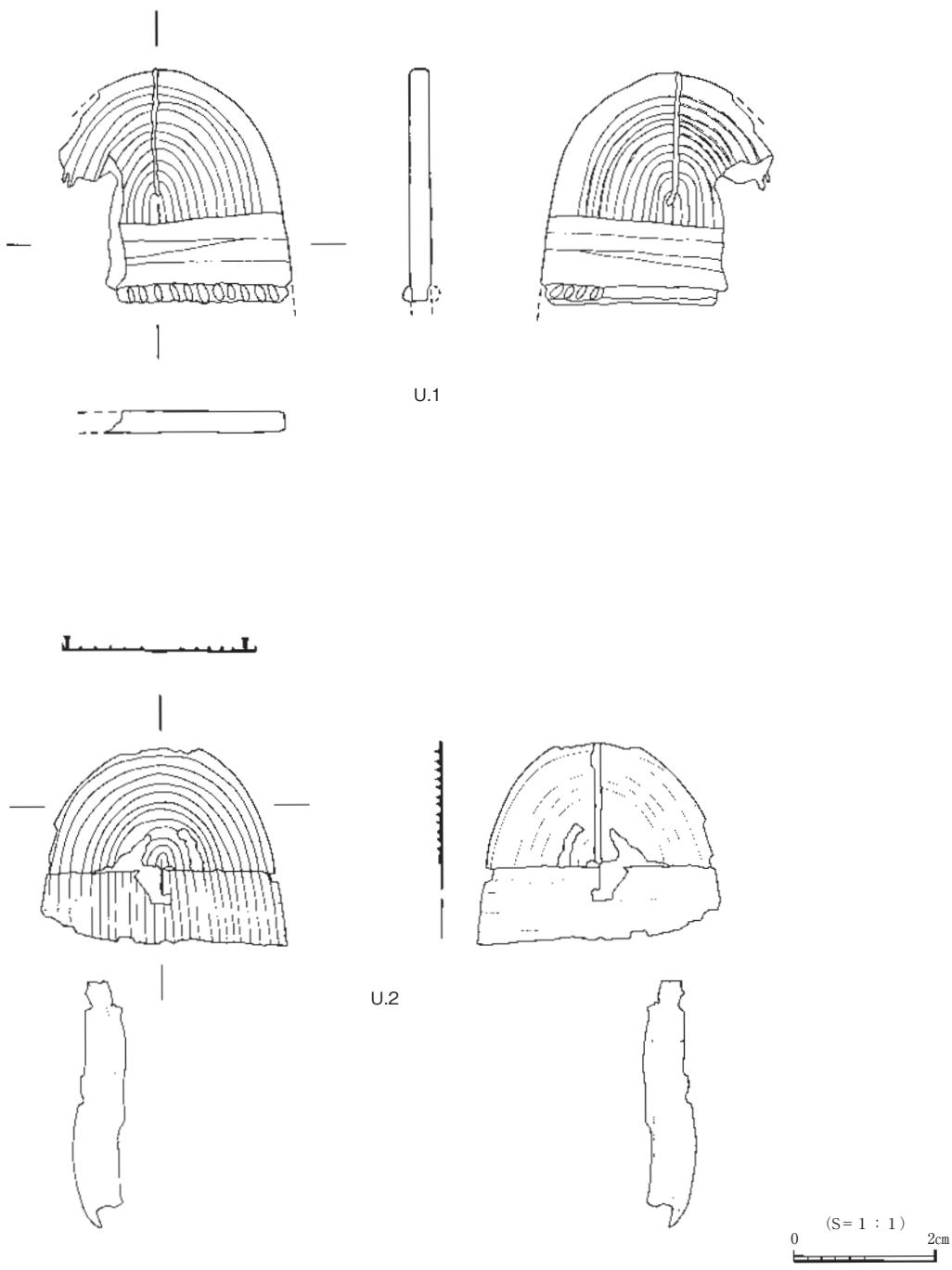
明瞭な墳丘は認められなかつたが、逆「し」字形に掘削された周溝と埋葬施設の掘形を確認した。周溝は、長さ3.7m、幅60cm、深さ25cmで、断面は「U」字形を呈する。周溝内には、破碎された土師器の甕と高坏が底面からやや浮いた状態で出土している。埋葬施設が周溝に接して造られていることと、遺物の出土状況から見て、高さは分からないが埋葬施設の上には盛土がなされていたと考えられる。また、周溝の南西部には最大長50cmの平石が置かれており、その下から刀子の破片と見られる鉄片が立った状態で出土したが、この石の下に掘込が見られなかったことから、周溝内埋葬に伴う遺物ではないと考えられる。

埋葬施設

墓壙の掘形は、主体部が南西側に偏っているために、北東側にのみ段が付く二段墓壙である。上面の長さは3m、幅1.7mで深さは50cm程度と推測される。石蓋は大型の平石を2枚合わせて、更に北西部に2枚の平石を置いて閉塞している。検出時には、蓋石は一部が主体部内に落ちこんだ状況であった。主体部の規模は、長さ1.9m、幅70cm、深さ25cmで、石枕のある南東側がやや広くなっている。石枕は二つの平石を用いており、すぐそばから二つの豎櫛が出土した。状況から見て、遺体に髪



第76図 越敷山140号墳 遺構図



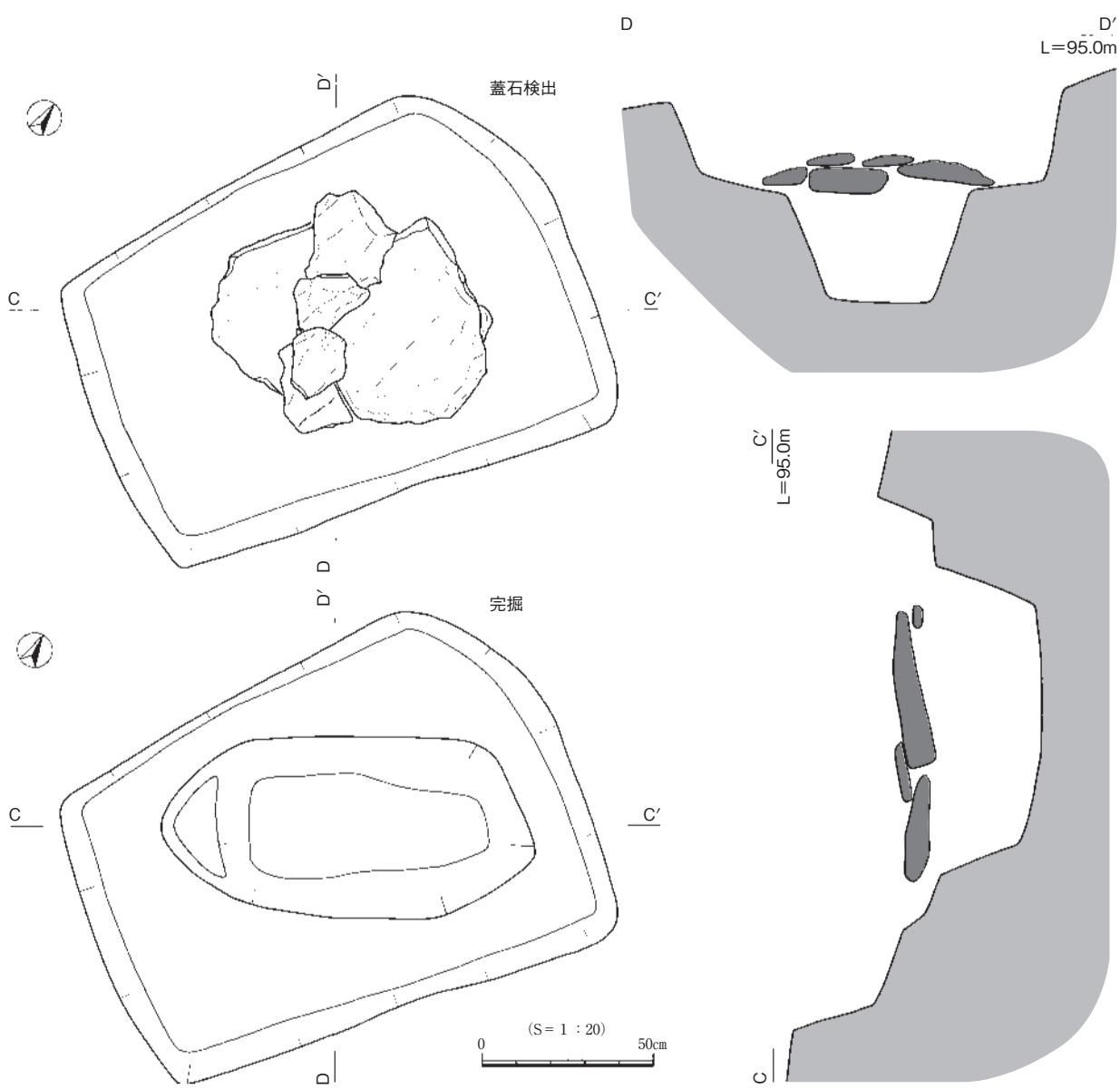
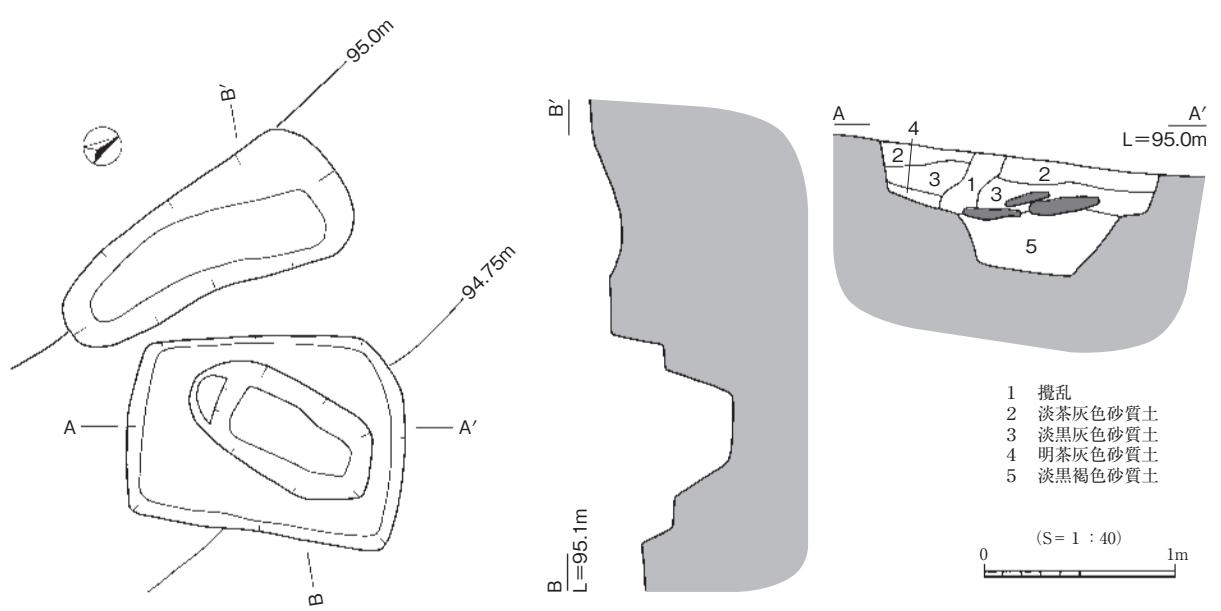
第77図 越敷山140号墳 遺構図

飾りとして装着されていたものと考えられる。

出土遺物

Po. 37は、復元口径16.1cmの土師器の甕。Po. 38は、壺部の底部に段を持つ、復元口径17.1cmの土師器の高壺。F. 8は、長さ4.3cmの鉄製品で、両面には木質が残っている。刃部の欠損した刀子の破片と考えられる。豎櫛は2点出土しており、U. 1は歯が欠損しているが、ほぼ完全な形で残っている。U. 2は、片面の漆膜と歯の破片が残っており、櫛を「U」字形に束ねて漆で固めた状況が観察できる。歯は遊離しているが長さ3.5cmであることから、全体の長さは6cm以上あったと考えられる。

この古墳の時期は、出土した土器から青木Ⅷ期の新段階、古墳時代中期前半頃と推測される。



第78図 越敷山141号墳 遺構図

越敷山141号墳（第78図）

越敷山141号墳は、越敷山143号墳の東側斜面下に位置する、小型の周溝を持つ埋葬施設である。

墳丘・周溝

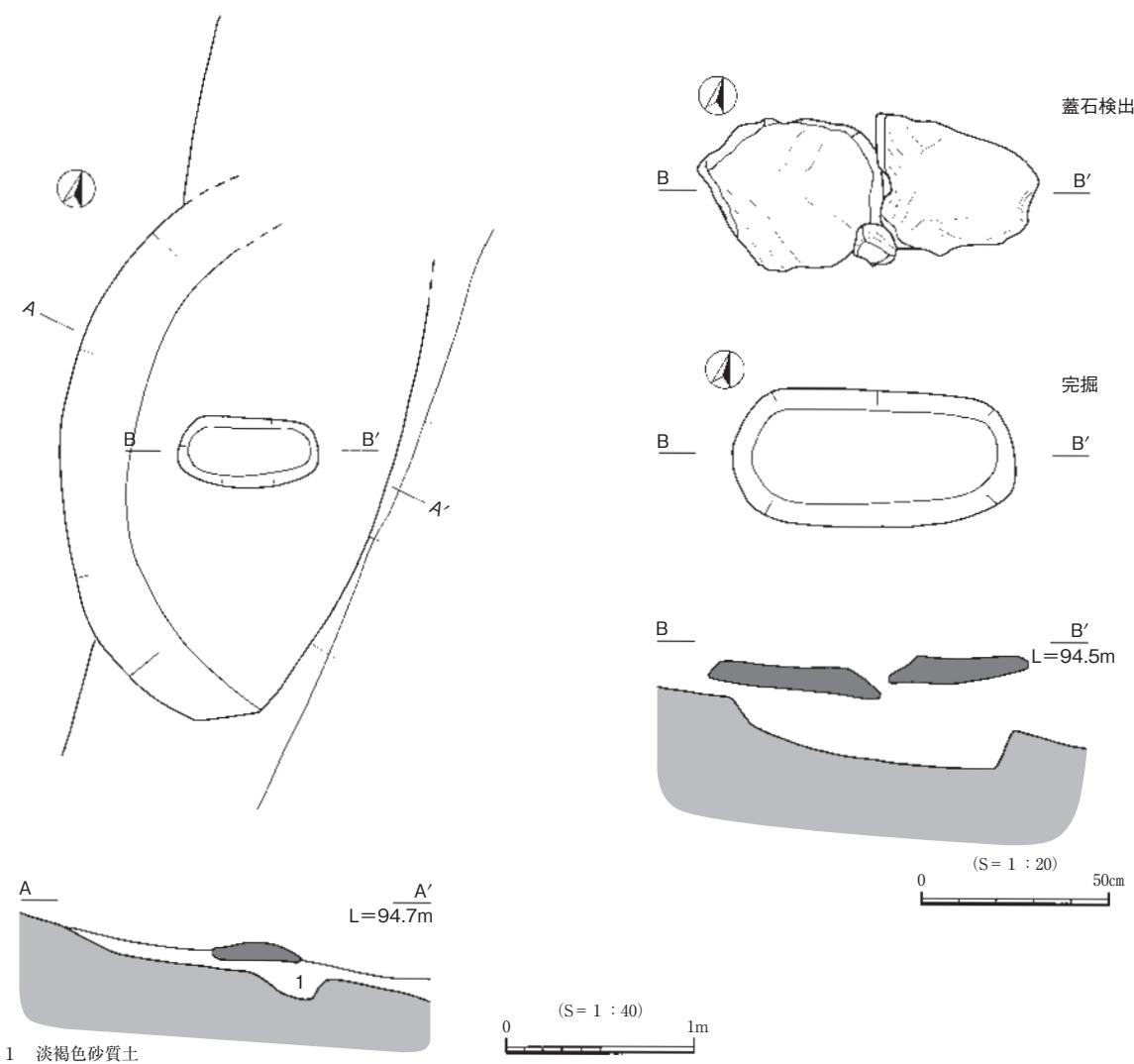
検出した周溝は、斜面上側に長さ1.7m、幅50cm、深さ10cmほど残存している。残存状況が悪いため、全周していたかは分からぬが、周溝と埋葬施設の距離を見ても直径3mを超えるものではないと考えられる。

埋葬施設

埋葬施設は石蓋土壙墓で、二段墓壙状の掘込を持つが、上面の掘形は主体部の方向とややずれてい る。上面の掘形は、長さ1.5m、幅1.1m、深さ30cmの長方形を呈する。石蓋は、2枚の平石を使用し、更に合わせ口の上面に小割した平石を置いて閉塞する。主体部は、長さ90cm、幅50cm、深さ30cmを測る。また、底面には石枕は見られなかった。

出土遺物

この古墳に伴う遺物は、出土しなかった。



第79図 越敷山142号墳 遺構図

越敷山142号墳（第79図）

越敷山142号墳は、越敷山137号墳の南西斜面上に隣接する、丸く段状に平坦面を造る古墳である。周溝の痕跡は見られないが、越敷山139号墳と同様に、主体部の上面に土を盛り上げて墳丘を構築する古墳と推測した。

墳丘・周溝

墳丘、周溝の痕跡とも見られないが、丘陵の斜面を3mほど丸くカットして平坦地を造り、石蓋土壙墓を中心埋葬施設としている。

埋葬施設

検出した埋葬施設は、小型の石蓋土壙墓1基である。斜面に沿って直交するように配置され、石蓋は2枚の平石を並べて閉塞している。主体部の長さは75cm、幅35cm、深さ20cmを測る。底面には石枕は見られないが、西側が高くなっていることから西頭位で埋葬された可能性がある。

出土遺物

この古墳に伴う遺物は、出土しなかった。

越敷山143号墳（第80・81図）

越敷山143号墳は、越敷山140号墳と145号墳に挟まれた丘陵の尾根上に立地している。

墳丘・周溝

周溝は丘陵の斜面上側の南西部のみ、三日月形に掘削されている。隣接する越敷山140号墳との位置関係から、当初から周溝は全周せずに斜面上側にのみ掘られていたと考えられる。周溝の長さは6m、幅0.7~1.5m、深さ10cm程度である。墳丘の有無は、分からなかった。出土遺物は、周溝内の埋土から土師器壺が出ているほか、周溝の外側から土師器の甕が出土している。

埋葬施設

主体部は石蓋土壙墓で、墓壙の掘形は二段墓壙となる。墓壙の上面は、長さ3.2m、幅2.1m、深さ10~20cm程度であるが、東側は石蓋のレベルまで土を埋め戻している。石蓋は、最大長70cmほどの平石を上下二段に積み重ねて閉塞している。主体部は長さ1.9m、幅50cm、深さ35cmで、南東側に二つの平石を置いて石枕としている。

出土遺物

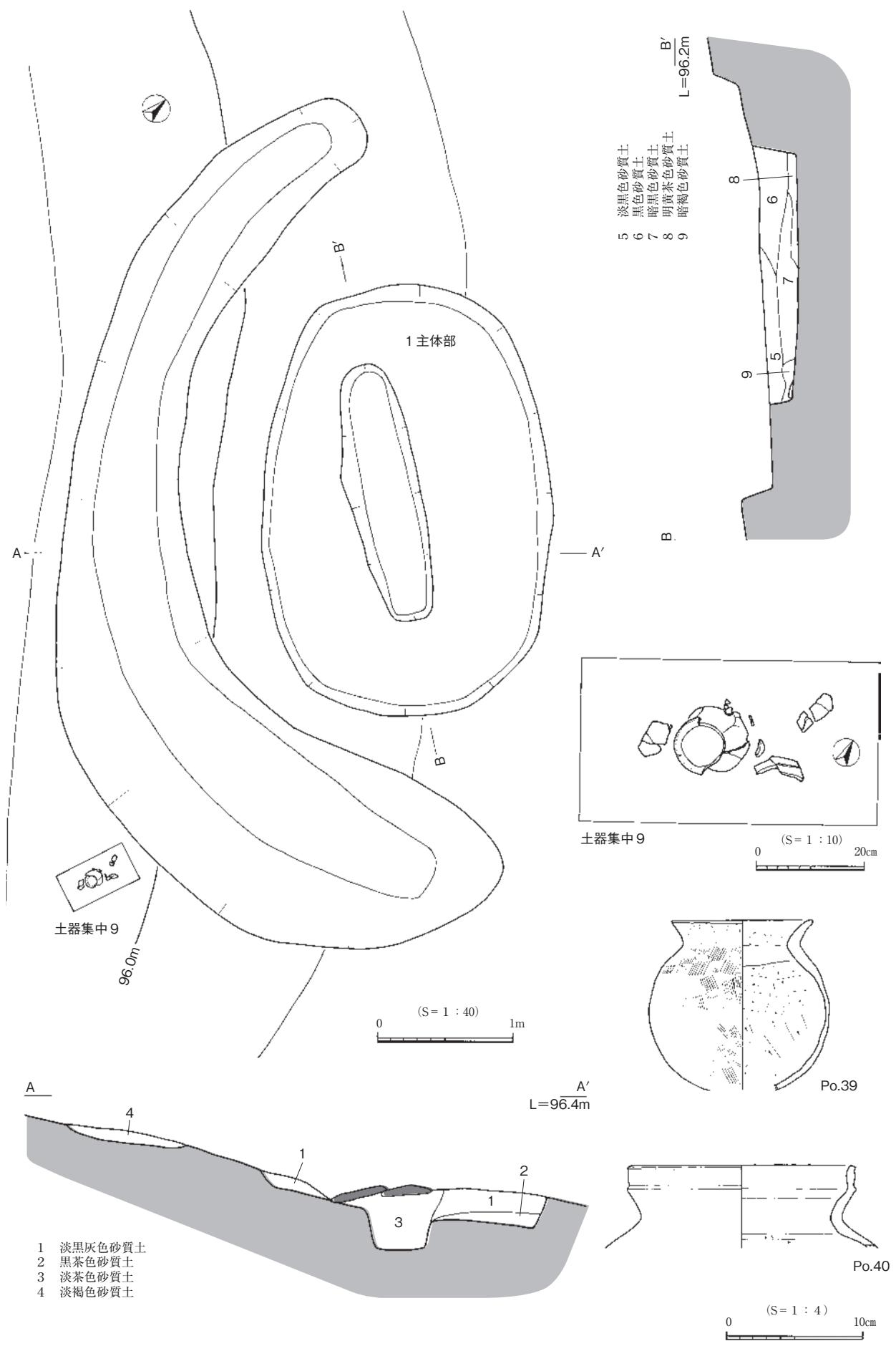
Po. 39は、復元口径12cmの小型甕である。Po. 40は、口縁部が立ち上がる、復元口径16.2cmの土師器壺である。この古墳の時期は、Po. 40から青木VII期新段階、古墳時代中期前半と推測される。

越敷山144号墳（第82~84図）

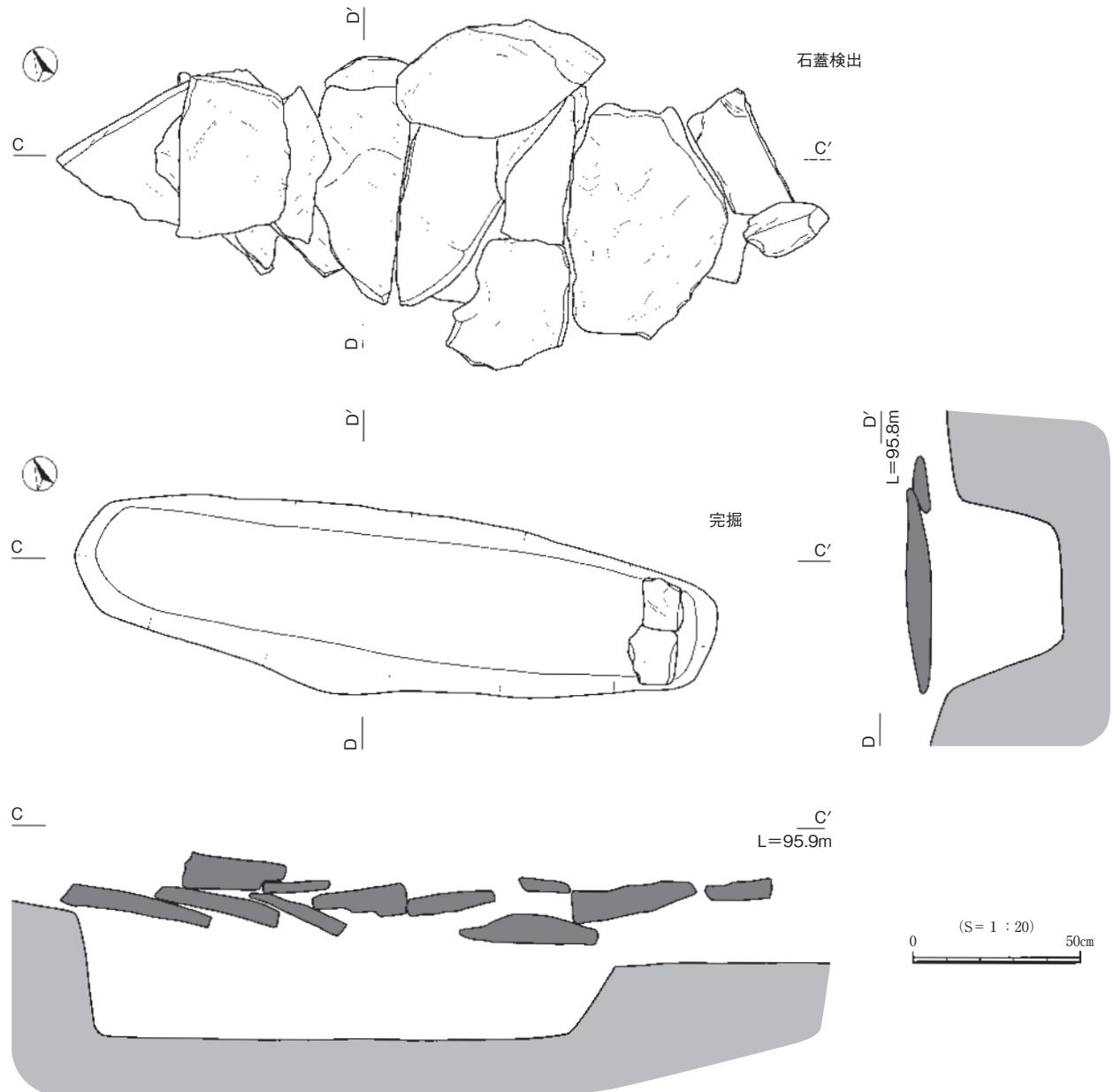
越敷山144号墳は、越敷山145号墳の西側、標高96.5m付近の斜面部で検出した、周溝を持つ古墳である。

墳丘・周溝

周溝は、斜面上側に長さ8.8m、幅1~1.8m、深さ30cmの三日月形に掘削され、断面は緩やかな「U」字形を呈する。周溝の底面には東西の二箇所に土器が置かれており、埋葬時に使用した供献土器と推測される。墳丘の痕跡は全く残っていないが、古墳の立地が急斜面にあることから、段状に成形したのみで、周溝も全周していなかったと考えられる。



第80図 越敷山143号墳 遺構・遺物図



第81図 越敷山143号墳 遺構図

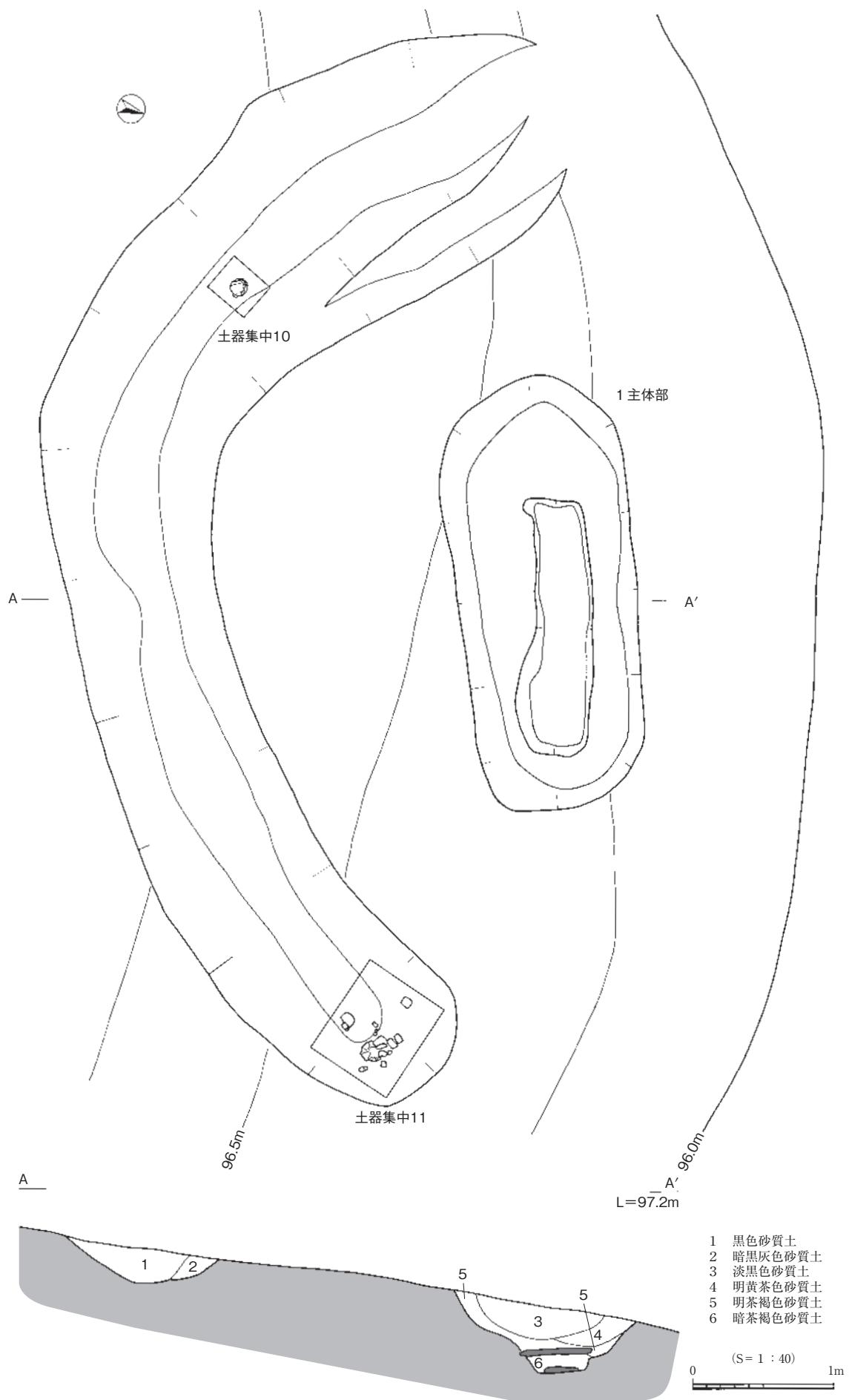
埋葬施設

検出した埋葬施設は、石蓋土壙墓1基のみである。墓壙は二段墓壙で、上面の長さ3.1m、幅1.3m、深さ15~50cm程度を測る。石蓋は最大長70cmの平石を4枚並べ、合わせ口の上部に石を置いて閉塞しているが、中央部の閉塞石が底面まで落ち込んでいることから、追葬時に落下したものと考えられる。主体部は、長さ1.8m、幅40~50cm、深さ25cmで、底面の東側には石枕となる平石が2個置かれている。このことから、この主体部は東頭位で埋葬されたと考えられる。

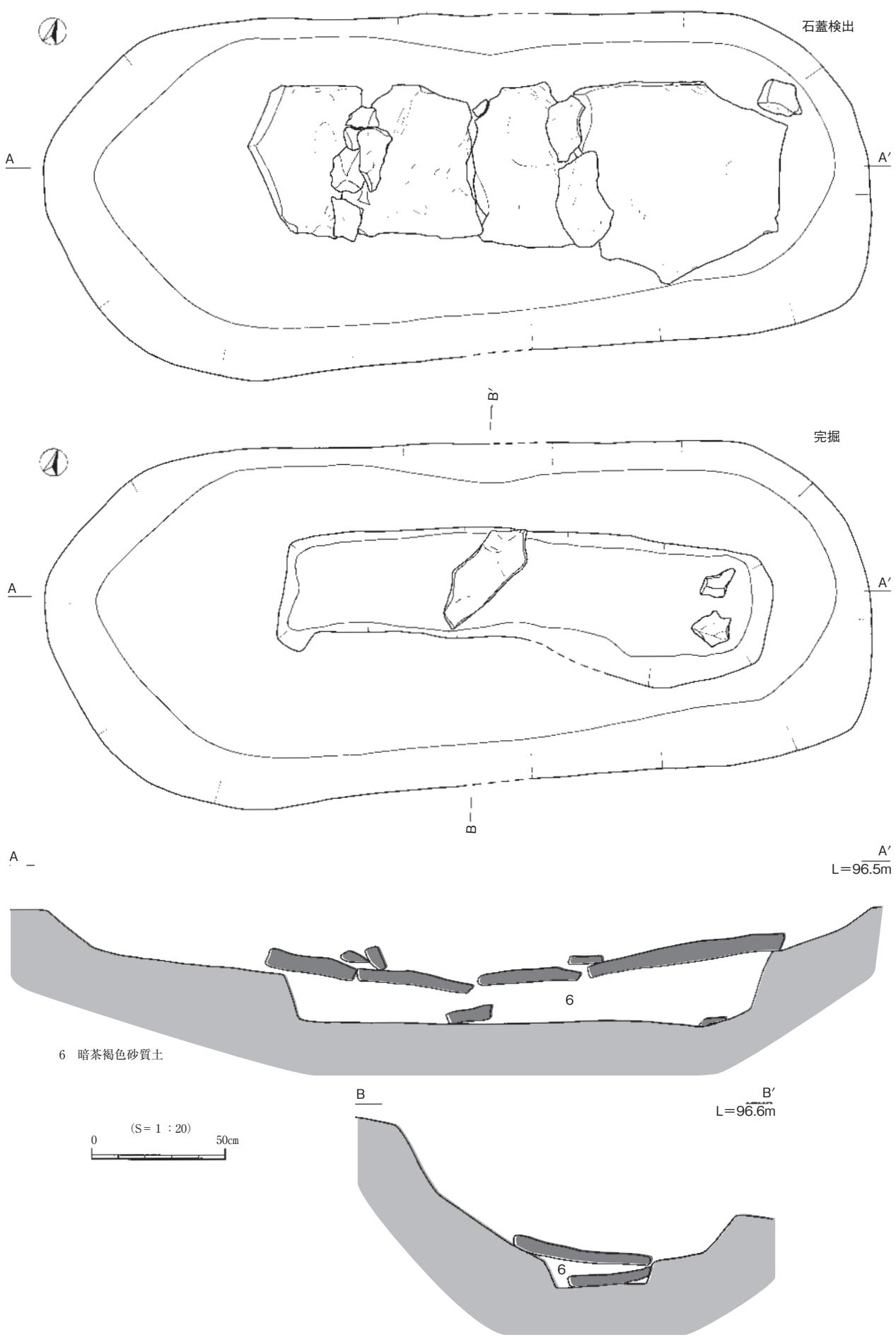
出土遺物

周溝内から、土師器の甕が出土した。Po. 41は、周溝内の底面から10cmほど遊離し、口縁部を下に向けた状態で出土した、口径7.7cm、高さ9.3cmの小型壺である。Po. 42は、口径14.8cmの甕である。

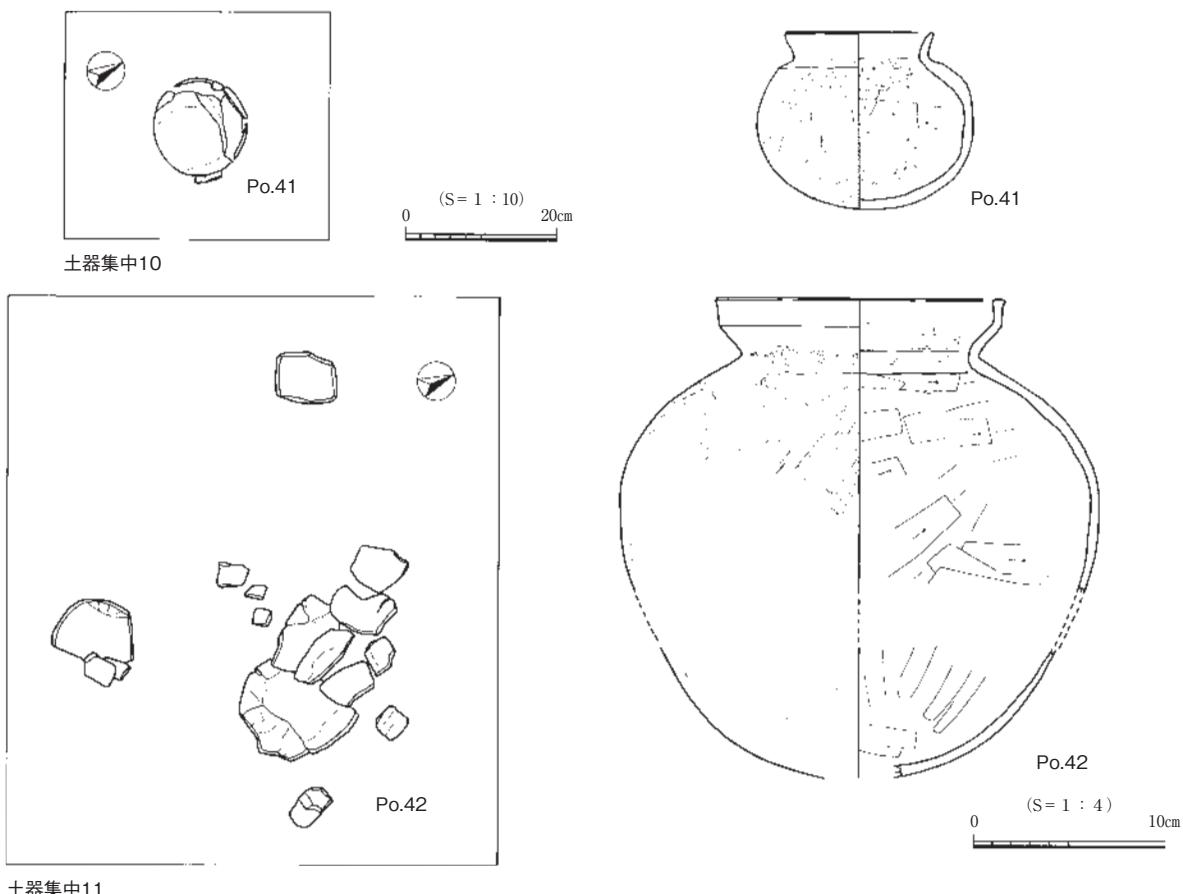
この古墳の時期は、Po. 42から青木Ⅷ期新~Ⅸ期古段階、古墳時代中期中頃と推測される。



第82図 越敷山144号墳 遺構図



第83図 越敷山144号墳 遺構図



第84図 越敷山144号墳 遺構・遺物図

越敷山145号墳（第85～87図）

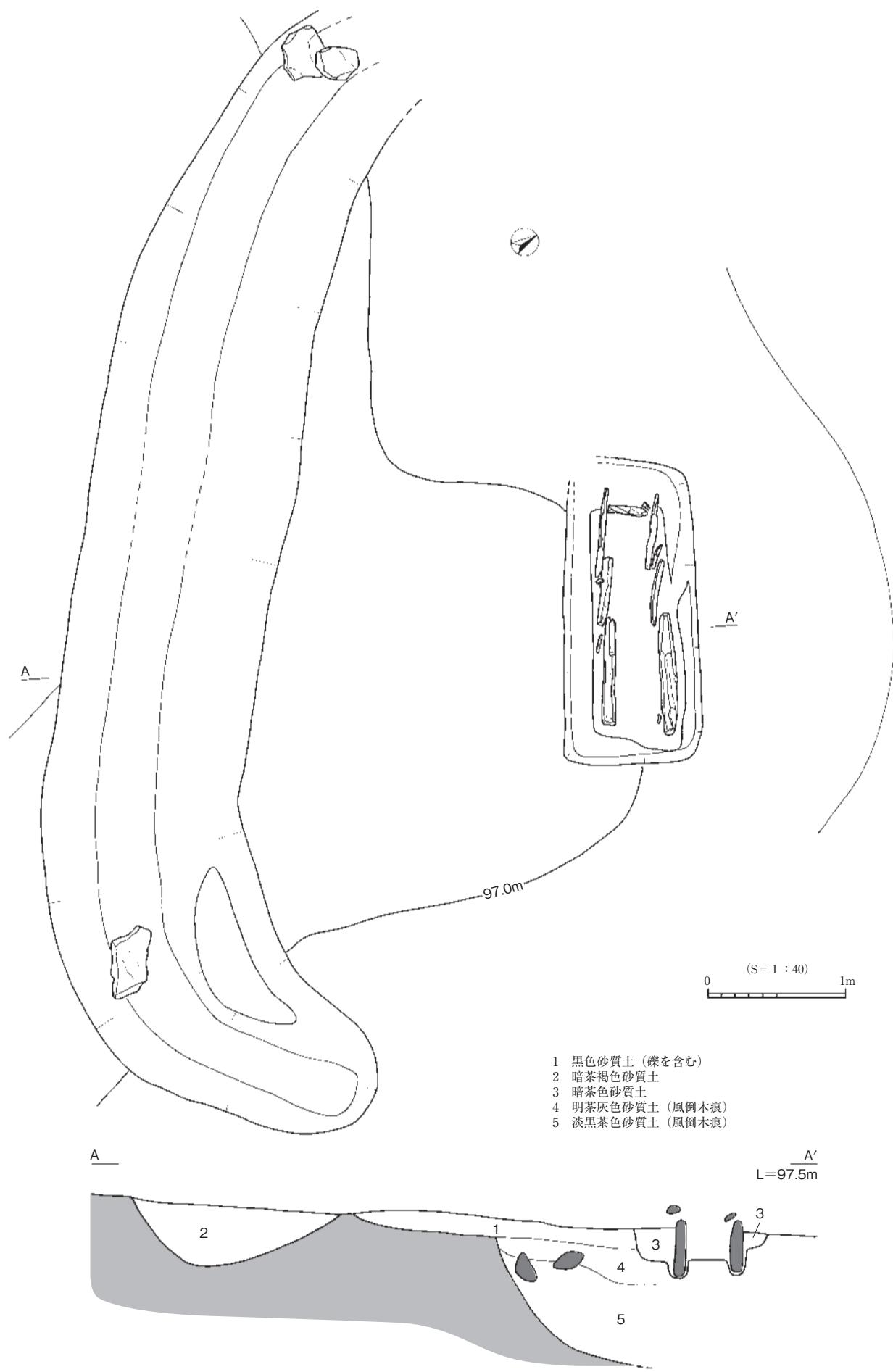
越敷山145号墳は、丘陵尾根の中心部、標高97m付近で検出した、石棺墓を中心主体とする方墳である。調査前から石棺の石蓋が露出していたため、主体部の検出は容易であったが、墳丘の盛土は完全に流出している。

墳丘・周溝

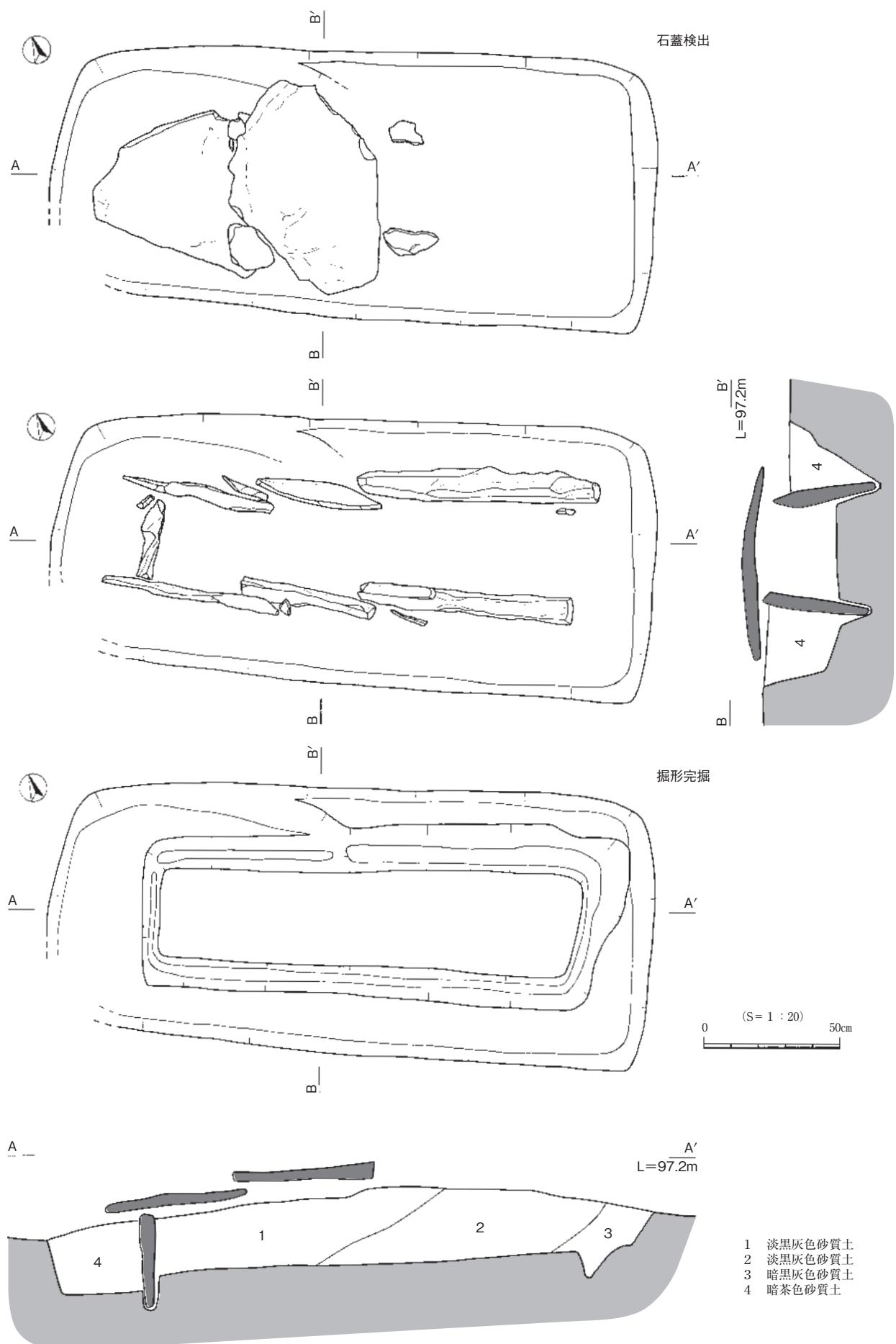
周溝は東西方向に真っ直ぐ伸び、西側は越敷山144号墳の周溝と接続しているが、東側が鉤状に屈曲していることから、一辺が9mほどの方墳であったと考えられる。検出できなかった周溝は、地形が北側に向かって傾斜しているために流出していると思われるが、築造された当初から全周囲にあったかは不明である。西側に接している越敷山144号墳の周溝の形状からすると、当初から現状のような周溝であった可能性も考えられる。残存している周溝は、幅1.5m、深さ50cm程度で、断面形は「U」字形を呈する。周溝の屈曲部底面には東西方向共に平石が置かれていることから、周溝内埋葬かと思われたが、土壙状の掘込が無いことから、埋葬施設とは断定できなかった。

埋葬施設

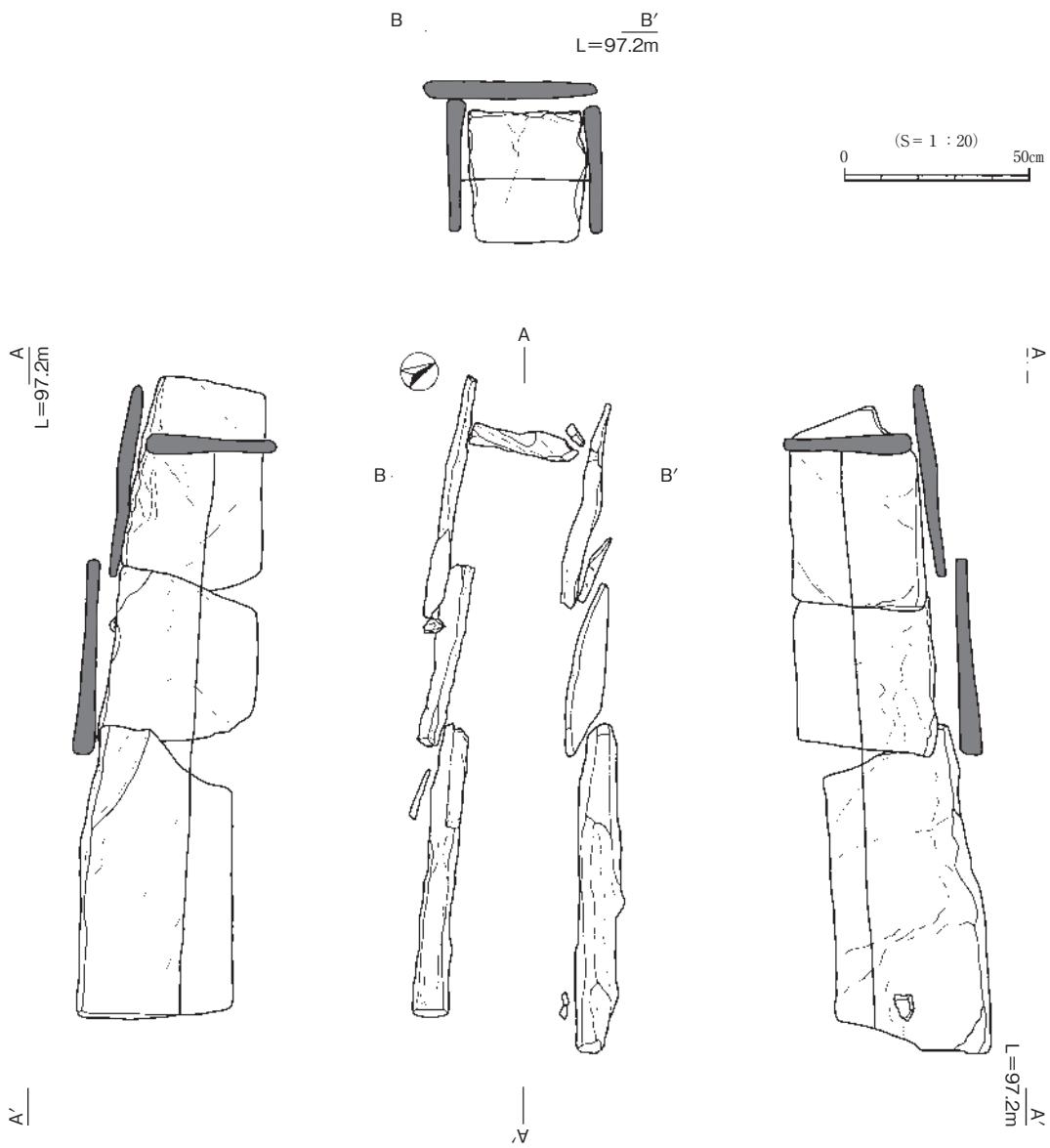
越敷山145号墳の埋葬施設は、石棺墓1基のみである。検出した段階で、東側の石蓋と小口板が抜き取られていたことから、盗掘に遭っているものと考えられる。石蓋は2枚のみが残り、長側板と西側の小口板は原位置を留めていた。墓壙の形状は二段墓壙と考えられるが、墓壙上面の掘形が削平されているため、石棺の掘形のみ確認できた。石棺の掘形は、長さ2.2m、幅1m、深さ25cmで、底面には石棺材を据え付けるために、深さ10cm程度の溝が「口」字形に掘られている。棺底に石枕は見られなかったが、東側が高くなっていることから、こちらが頭位方向の可能性がある。また、主体部の



第85図 越敷山145号墳 遺構図



第86図 越敷山145号墳 遺構図



第87図 越敷山145号墳 遺構図

下には風倒木の痕跡が見られた。

出土遺物

この古墳に伴う遺物は、出土しなかった。

越敷山146号墳 (第88・89図)

越敷山146号墳は、越敷山147号墳の西側斜面で検出した、周溝を持つ古墳である。

墳丘・周溝

周溝は、斜面上でのみ検出した。斜面部に立地する古墳であることから、当初から斜面下側には周溝は掘削されていなかったと考えられる。検出した周溝の長さは4.8m、幅1.1m、深さ40cmで、断面形は緩やかな「U」字形をなす。

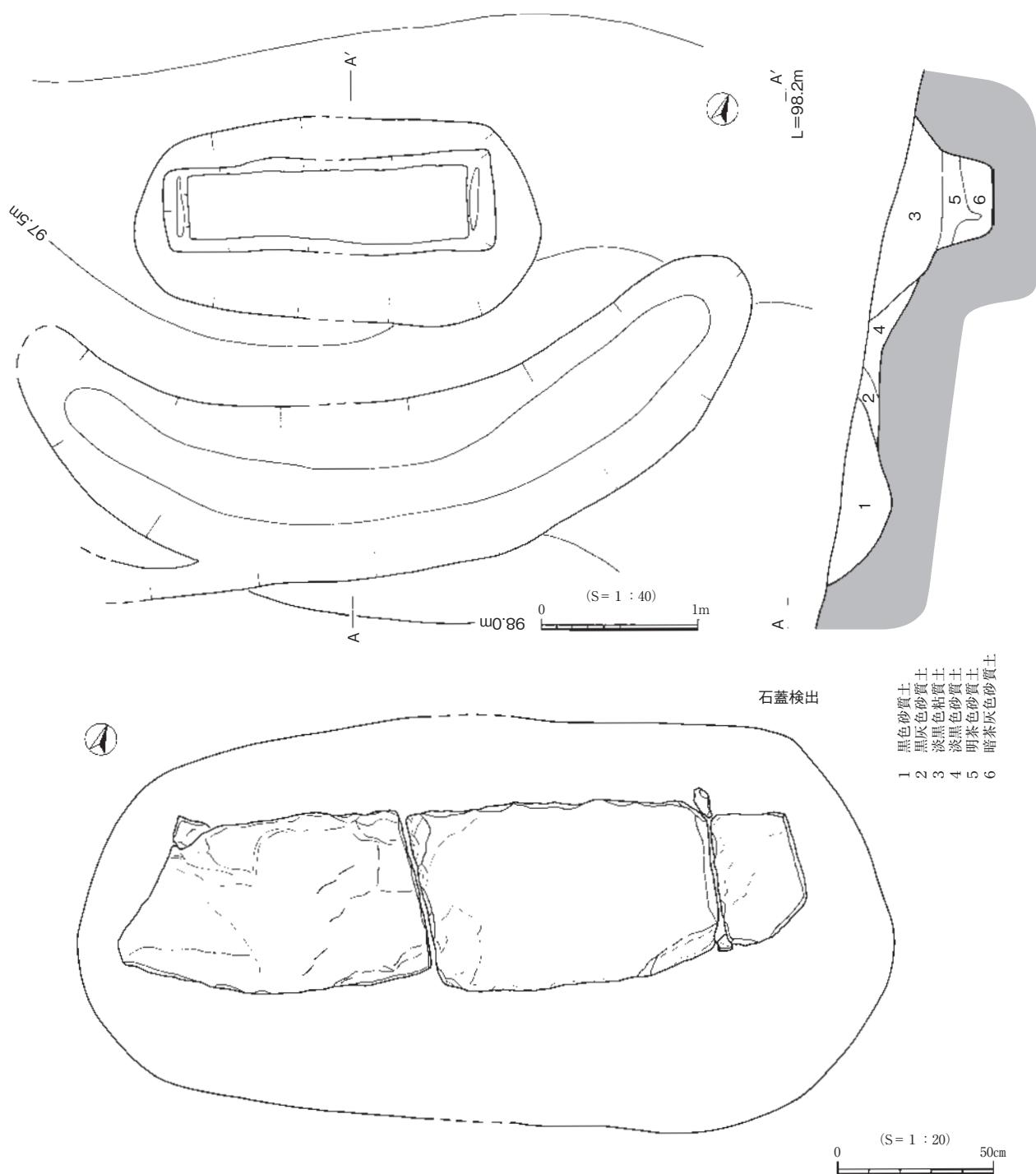
埋葬施設

埋葬施設は両端の小口部にのみ板石を用いる折衷型の石棺墓で、墓壙は擂鉢状の二段墓壙となる。墓壙の長さは、2.6m、幅1.3m、深さ40cmを測る。石蓋は最大長1mの板石を2枚使用し、東側に小

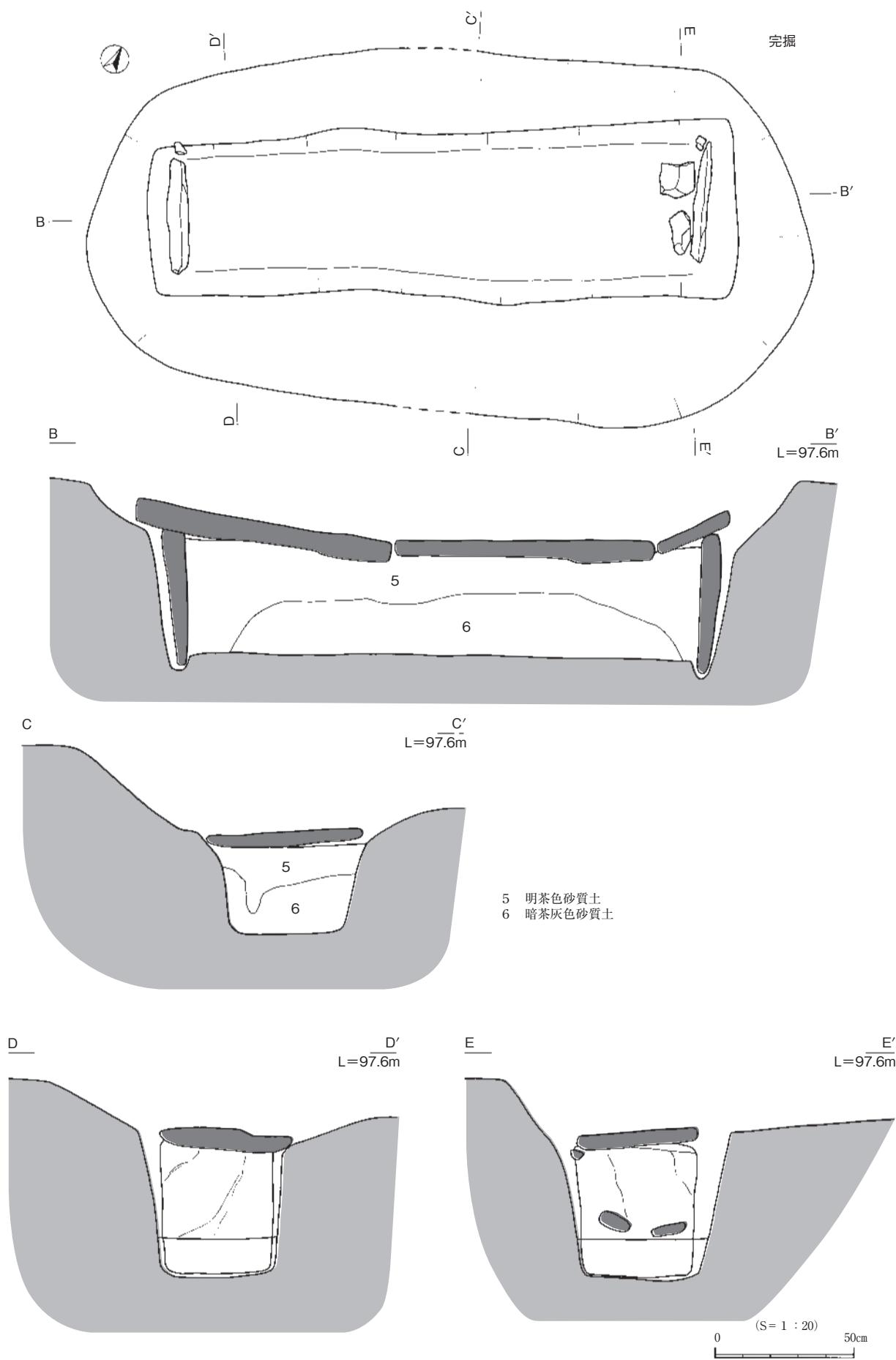
型の平石を合わせて閉塞している。主体部は、両端の小口部を掘込み、長方形の平石を埋め込んでいる。長側板は、木棺の痕跡が見られないことから当初から使用されておらず、土壙墓と石棺墓を折衷した様式と考えられる。主体部の規模は、内法で長さ1.82m、幅50cm、高さ32cmである。棺内には東側に2個の石を並べた石枕が置かれていることから、こちらが頭位方向と推測される。

出土遺物

この古墳に伴う遺物は、出土しなかった。



第88図 越敷山146号墳 遺構図



第89図 越敷山146号墳 遺構図

越敷山147号墳（第90図）

越敷山146号墳と148号墳との中間、標高98m付近で検出した、三日月形の周溝を持つ小型の古墳である。

墳丘・周溝

周溝と埋葬施設は、地山を覆う淡黒褐色土の上面で検出した。周溝の長さは3.2mで、西側は越敷山146号墳の周溝に繋がっている。幅は65cm、深さ15cm程度と浅いが、石蓋の検出レベルとほぼ同じであることから、主体部の上には盛土がなされていたと考えられる。

埋葬施設

この古墳の埋葬施設は石蓋土壙墓で、墓壙は二段墓壙状となる。墓壙は長さ3m、幅2.1m、深さ10cmと主体部の大きさと比べて異様に広いが、石蓋のレベルと墓壙の検出面が同じであることから、この墓壙を埋め戻してから石蓋を置いたものと考えられる。石蓋は、最大長が60cmとなる5枚の平石を並べて閉塞している。

主体部は長さ1.35m、幅36cmの長楕円形を呈し、深さは石蓋の底面から30cmほどである。主体部の底面には石枕は見られず、副葬品なども出土しなかった。主体部の底面は、西側のレベルが若干高くなっているが、石蓋は東側の方が大型の石が使用されているため、頭位方向についてはどちらとも判断がつかない。

出土遺物

この古墳に伴う遺物は、出土しなかった。

越敷山148号墳（第92・92図）

越敷山148号墳は、丘陵上の標高98m付近で検出した、石蓋土壙墓を中心主体とする古墳である。南側の周溝は、調査区外に伸びるため調査できなかった。

墳丘・周溝

調査前の観察では明瞭な墳丘が確認できず、表土掘削後に地山の上を覆っていた淡黒褐色土の面で周溝を検出した。墳丘の周溝は斜面上側のみ掘削されており、直径8mほどの円墳に復元できるが、斜面の傾斜がきついことと、埋葬施設と周溝との距離が1.2mほどしか離れていないことから、当初から山側にのみ周溝があったものと考えられる。周溝の検出長は6m、幅1.4m、深さ40cmで、周溝の断面形は緩やかな「U」字形をなす。

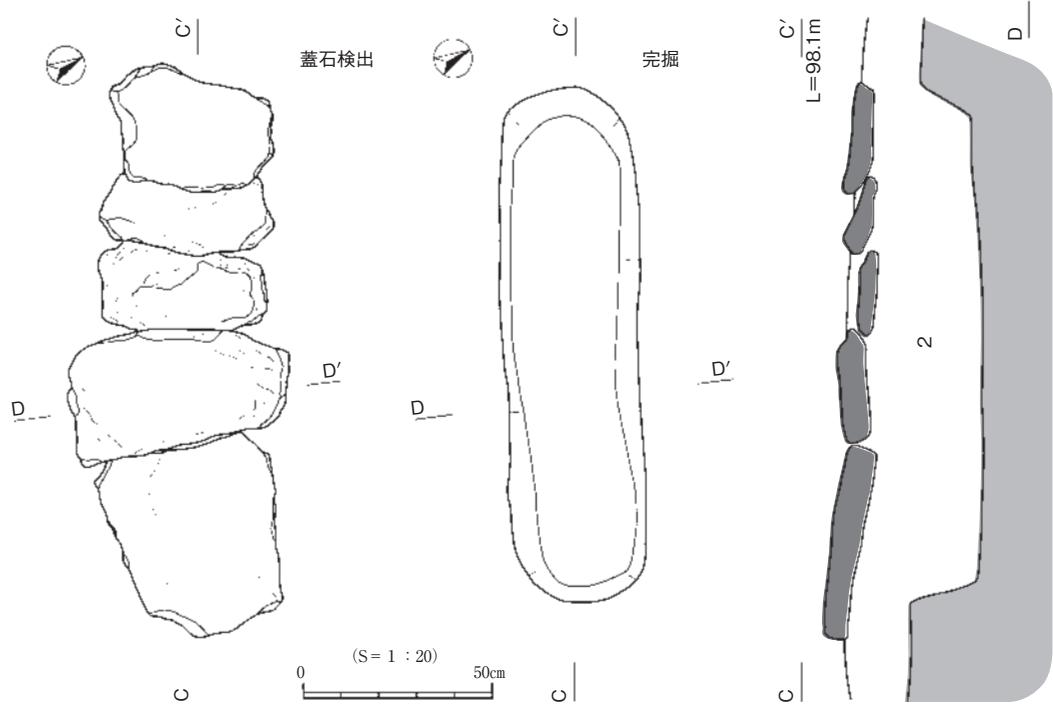
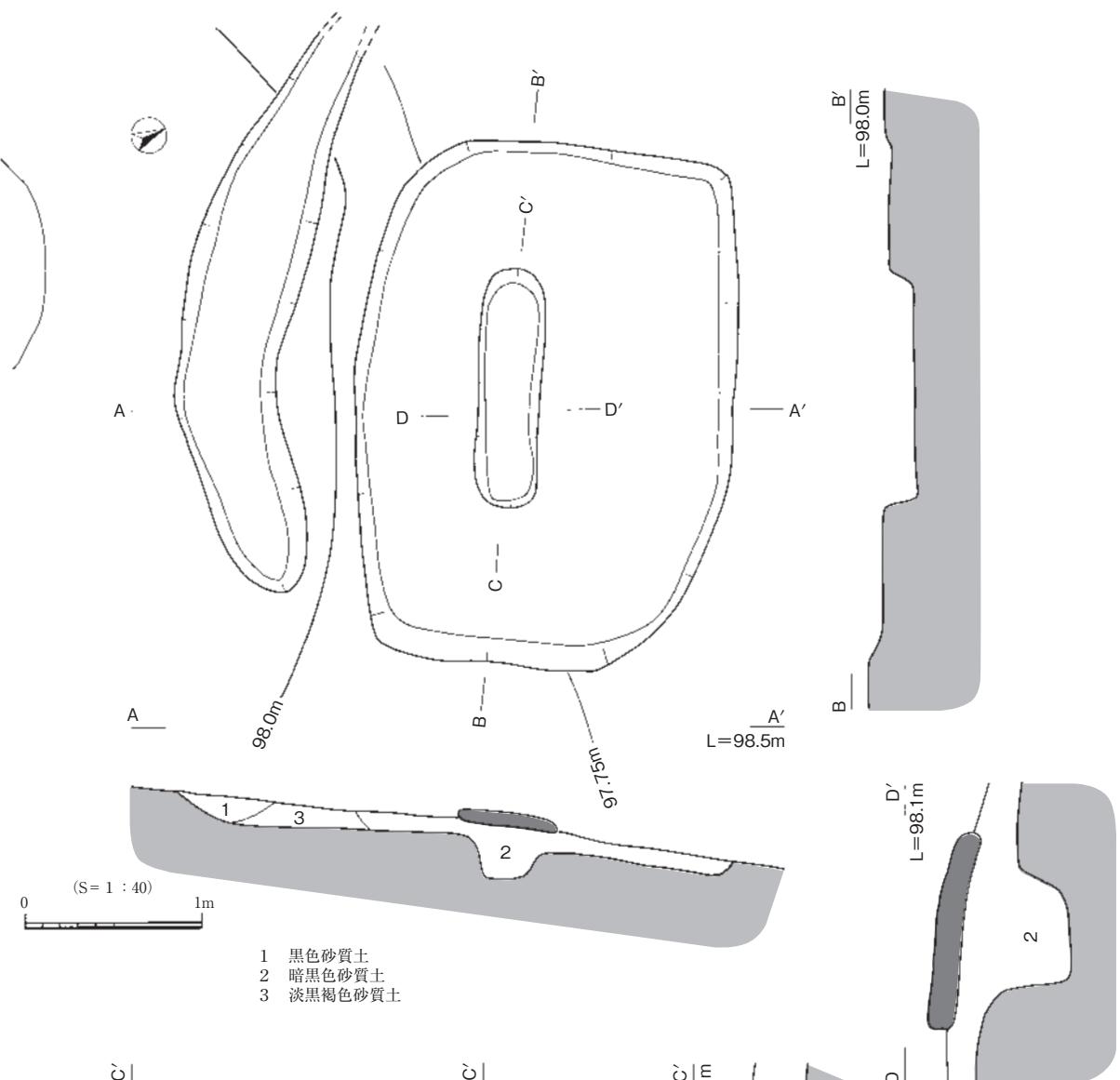
埋葬施設

埋葬施設は石蓋土壙墓で、墓壙は二段墓壙である。二段墓壙の上段の長さは2.7m、幅1.2m、深さ20cmとなる。主体部は3枚の平石によって蓋がなされ、更に合わせ口の上部に平石を置いて閉塞しているが、検出時には中央の石蓋は西側が主体部内に落ち込んで斜めになっていた。

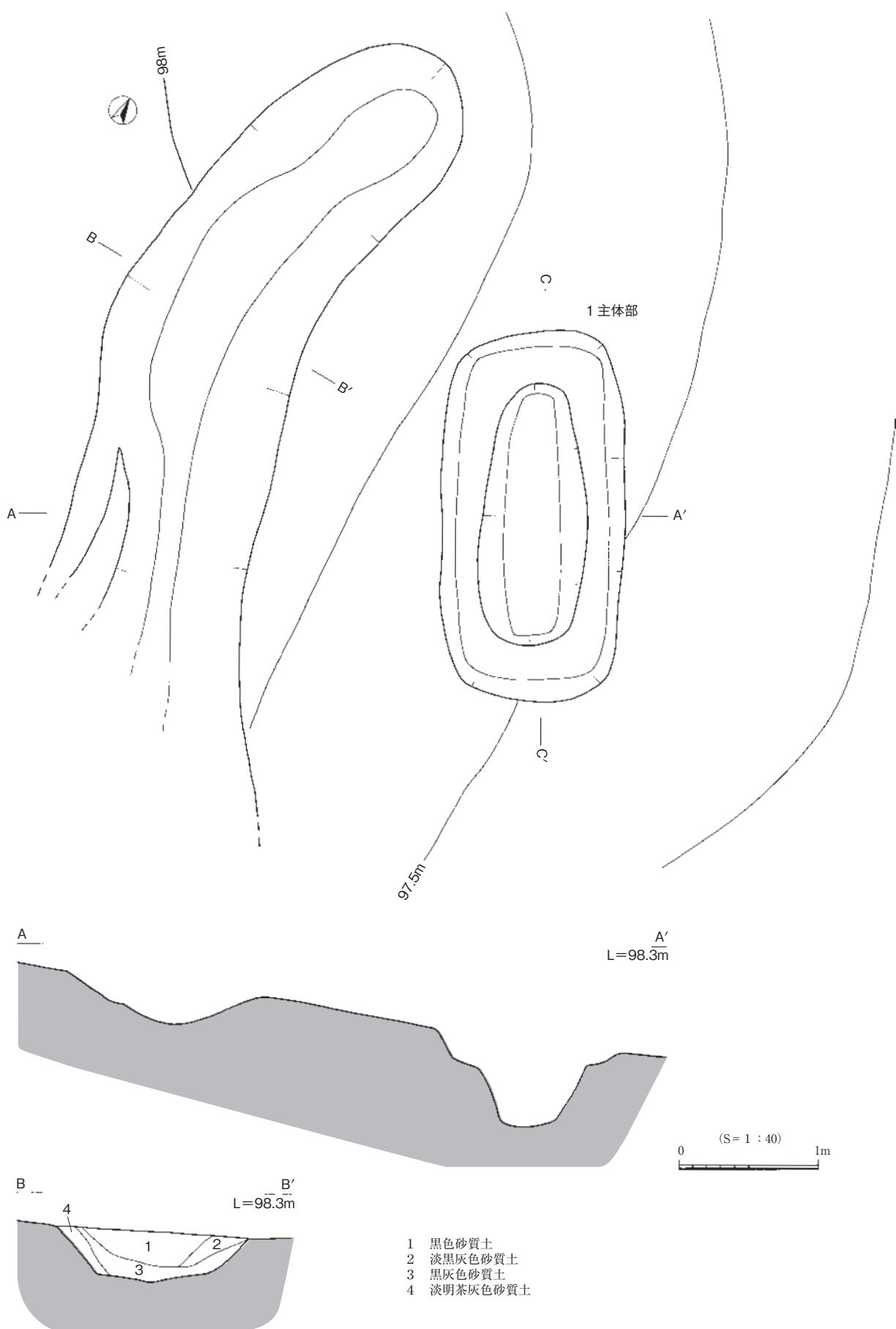
主体部の規模は長さ1.9m、幅75cm、深さ36cmを測る。主体部の底部には南側に石枕が1個置かれていることから、こちらが頭位方向と推測される。また、主体部の平面形も南側の方が広くなっている。

出土遺物

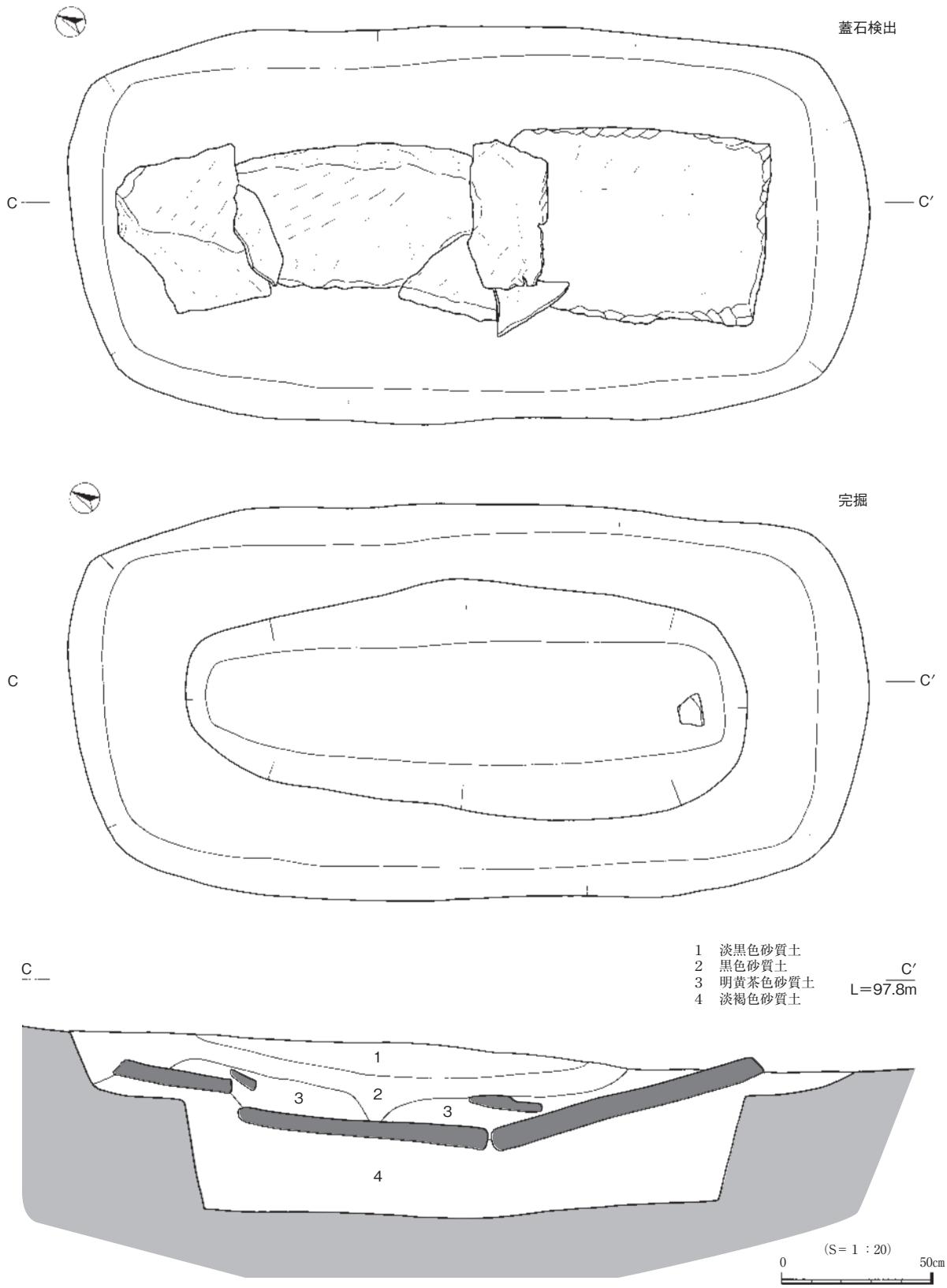
この古墳に伴う遺物は、出土しなかった。



第90図 越敷山147号墳 遺構図



第91図 越敷山148号墳 遺構図



第92図 越敷山148号墳 遺構図

越敷山149号墳（第93～97図）

越敷山149号墳は、越敷山130号墳の東斜面下、標高87m付近で検出した方墳である。古墳の北側は、調査区外に伸びるため未調査である。

墳丘・周溝

調査前には明瞭な墳丘は見られなかつたが、表土に石棺の石蓋の一部が露出していたことから、事前に埋葬施設の存在が予想された古墳である。墳丘の盛土は上記のような状況から、調査前にはほぼ流出していたものと考えられる。

周溝は、西側の斜面を段状にカットして平坦面を造り、更に南側に向かって直角に溝が伸びている。西側の周溝は、墳丘の盛土が流出しているため明瞭ではないが、周溝部分を1mほどの幅を残して掘り残し、石棺上に盛土を行つて墳丘としていたと考えられる。また、周溝南西部のコーナー部分が直角に曲がっていることから、埋葬施設が中心にあるものと仮定すると、一辺8mほどの方墳に復元することが出来る。

埋葬施設

墓壙の掘形は、西側周溝の底面と同一レベルで検出している。墓壙の掘形は、長さ3m以上、幅2.4mで、石棺の石蓋までの深さは50cmである。墓壙の掘形は二段墓壙状だが、石棺材を据え付ける際に埋め戻している。石棺の石蓋は3枚の平石を置き、合わせ口の上部に石を置いて閉塞している。また、石蓋の上面の一部に赤色顔料が付着しているほか、石蓋の隙間から鉄器の破片（F.9）が1点出土した。

石棺の棺材は、四角く整形された平石を用いており、内法で長さ1.96m、幅40cm、高さ34cmを測る。棺内には、東西に二つの石枕があることから、複数の遺体が埋葬されたものと考えられる。西側の石枕は、2枚の三角形の平石の上に平石を置いている。東側の石枕は棺床に平石を置き、左右に二つの平石を立てかけている。

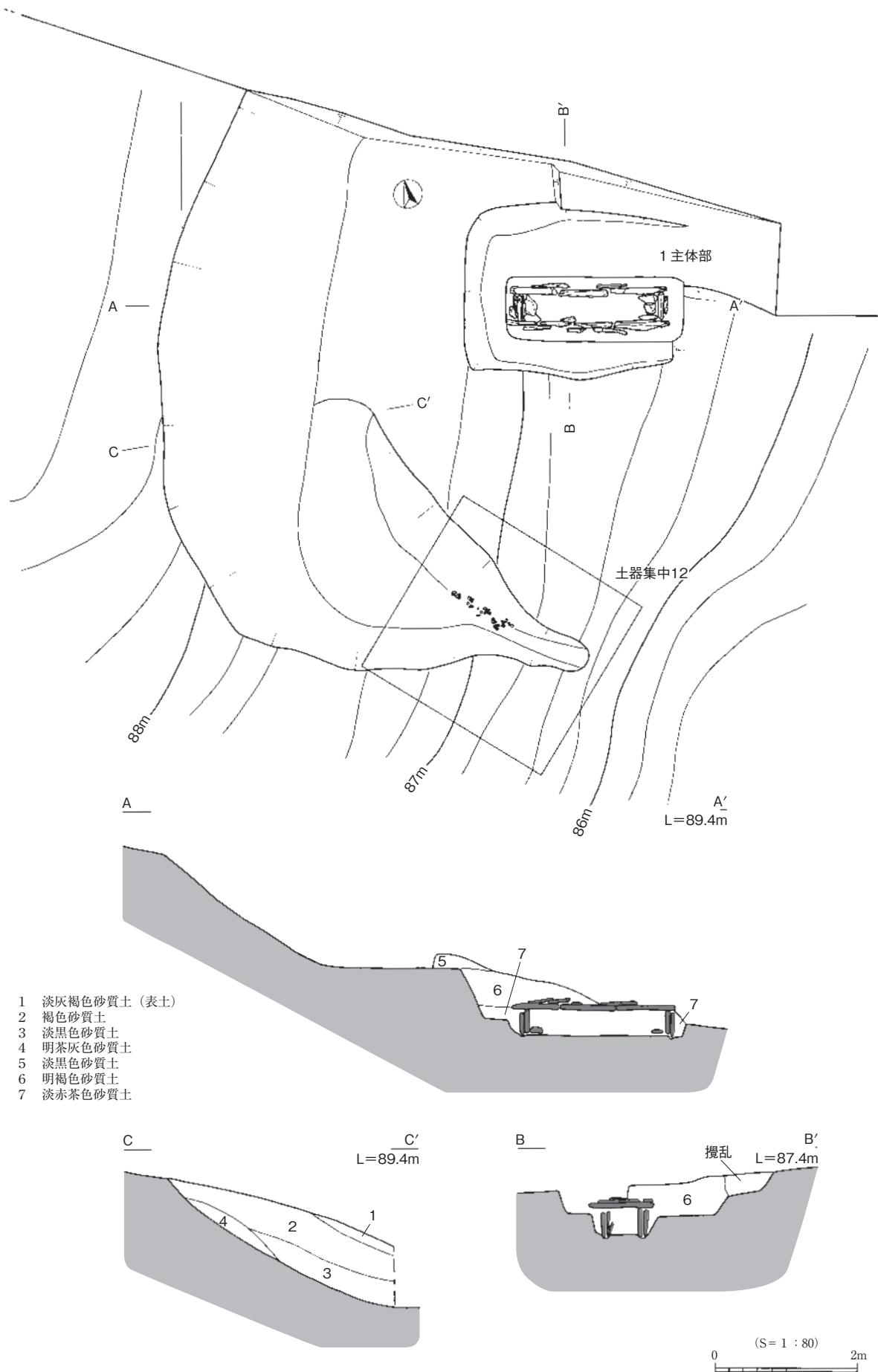
石棺の掘形は、整った隅丸方形を呈し、長さ2.5m、幅90cm、深さ20cmを測る。丘陵上で検出した石棺と比較すると、石棺材を据え付ける溝が浅く掘られている。

出土遺物

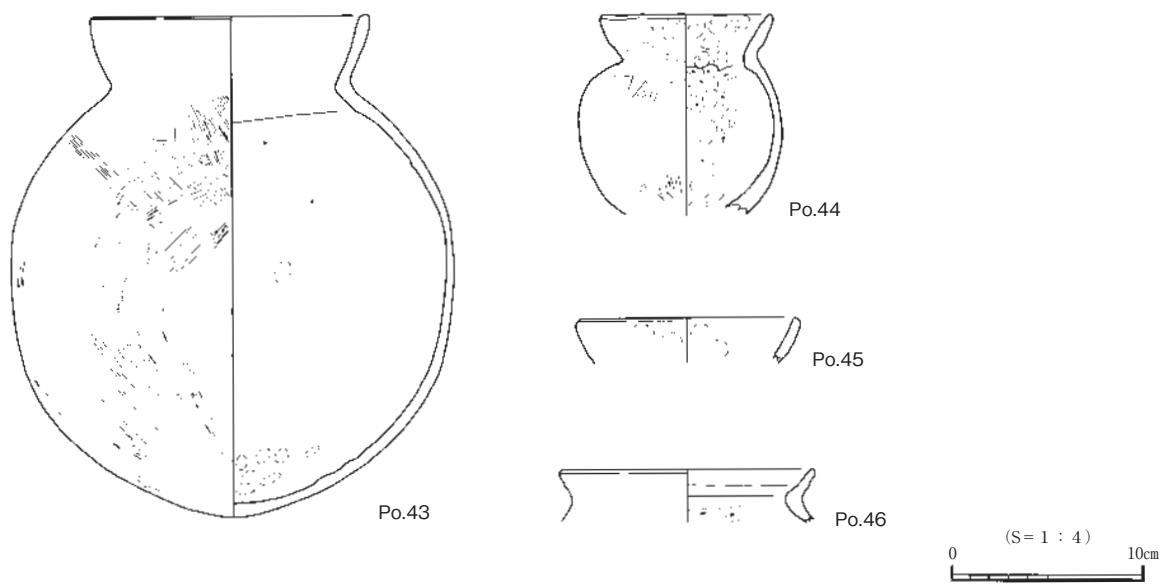
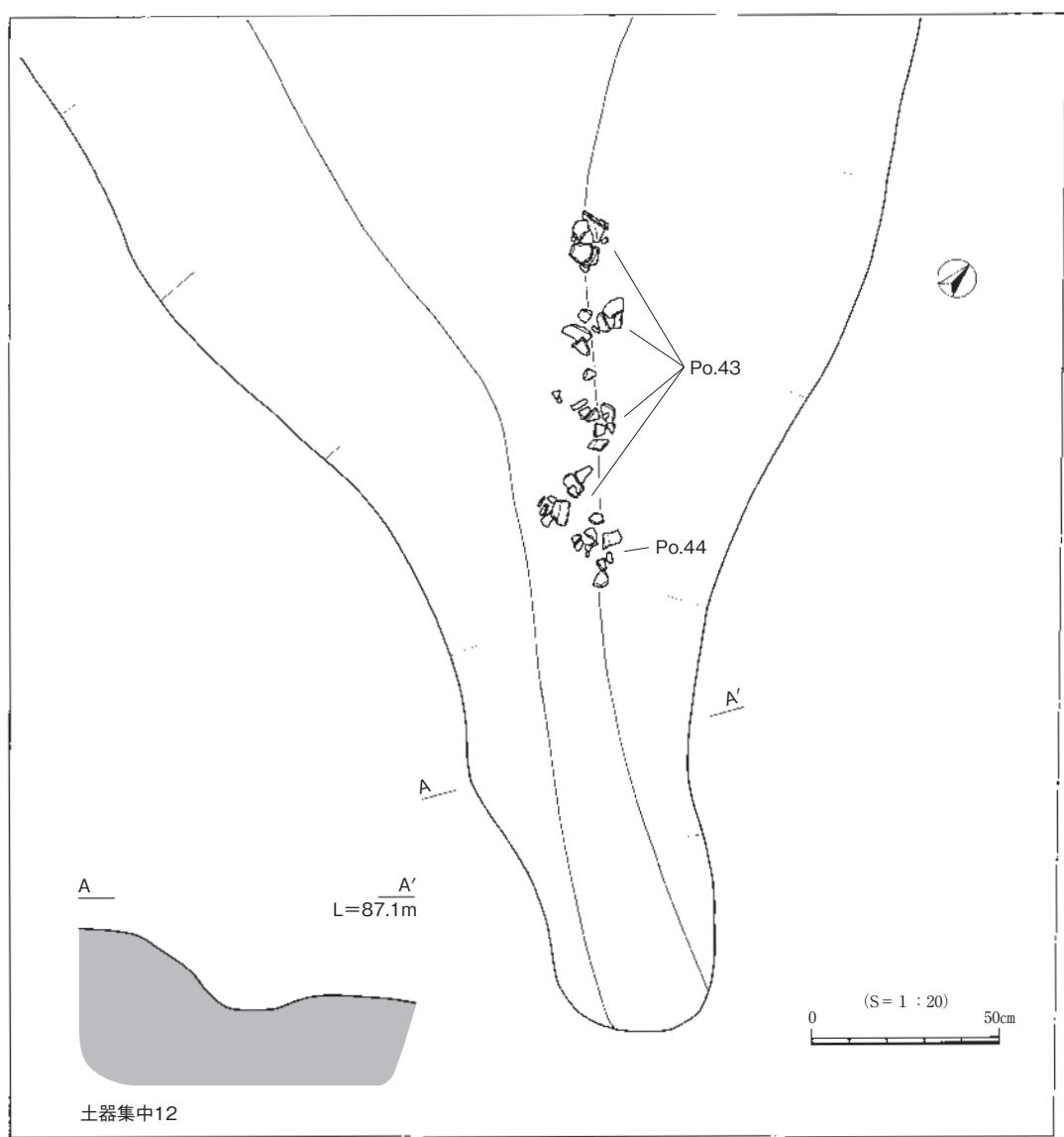
石棺の石蓋の隙間から、刀子の一部と思われる鉄製品の破片が1点出土したほか、周溝内から土器が出土している。

F.9は、現存長3.2cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmの鉄製品の破片で、刀子の刃先と推測される。蓋石を置く際に、工具が破損したものか。

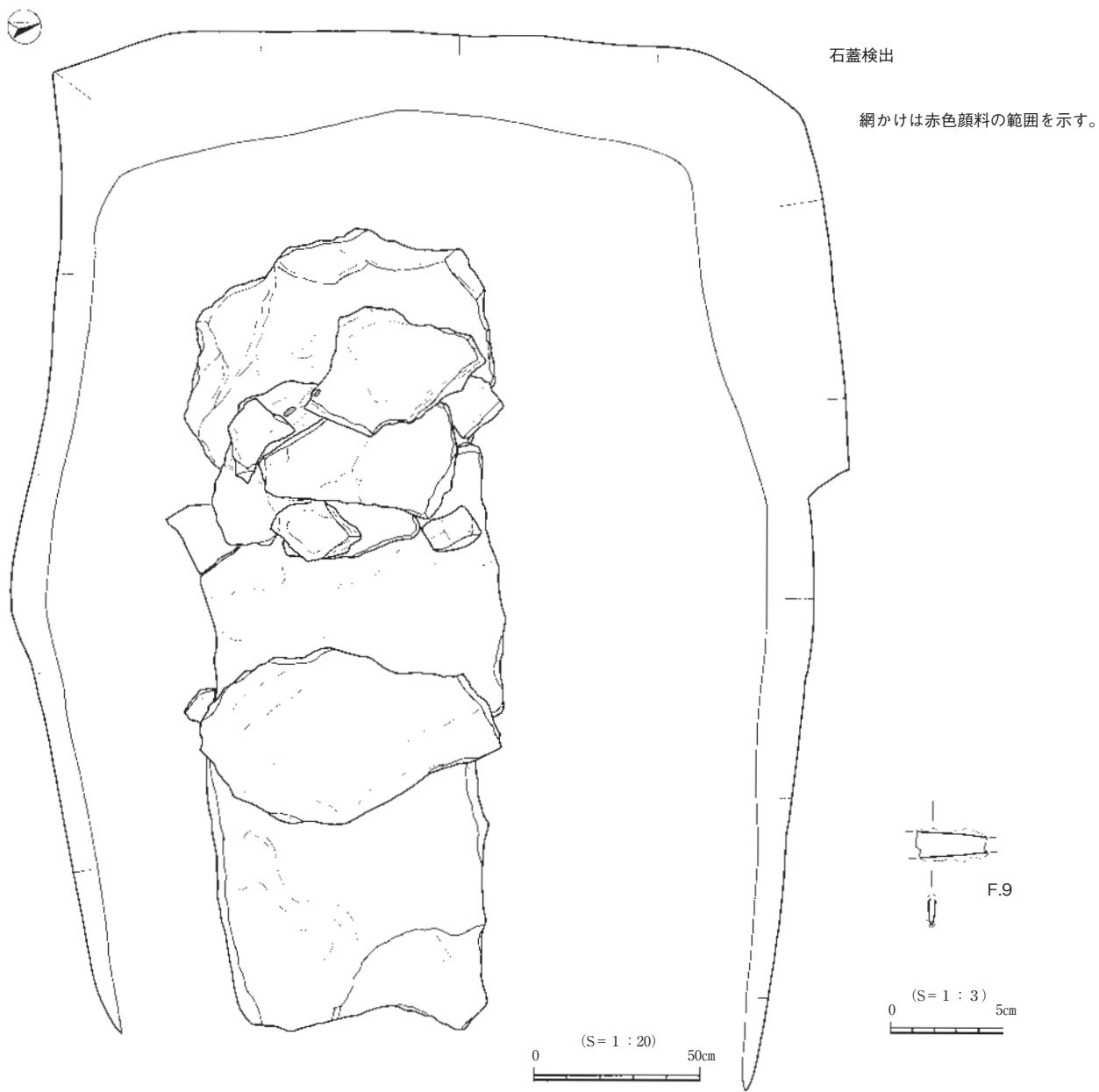
土器は、南側の周溝内から土師器の甕と壺が出土した。Po. 43は口縁部が「く」字形に上方へ立ち上がる土師器の甕で、口径14.6cm、器高26.5cmを測る。胴部外面にはススが付着し、外面をハケ、内面をヘラケズリ調整する。実測図では底部が尖底に見えるが、実際は丸底の土器である。P.44は、胎土が暗褐色を呈し、外面をナデ、内面をヘラケズリ調整する、復元口径8.8cmの小型壺である。Po.45は、口縁部が内彎気味に立ち上がる土師器甕の口縁部片。Po.46は、端部が短い「く」字形に伸びる土師器甕の口縁部片である。この古墳の時期は、周溝内から出土した遺物から青木IX期、古墳時代中期後半頃と推測される。



第93図 越敷山149号墳 遺構図



第94図 越敷山149号墳 遺構・遺物図



第95図 越敷山149号墳 遺構・遺物図

越敷山150号墳（第98図）

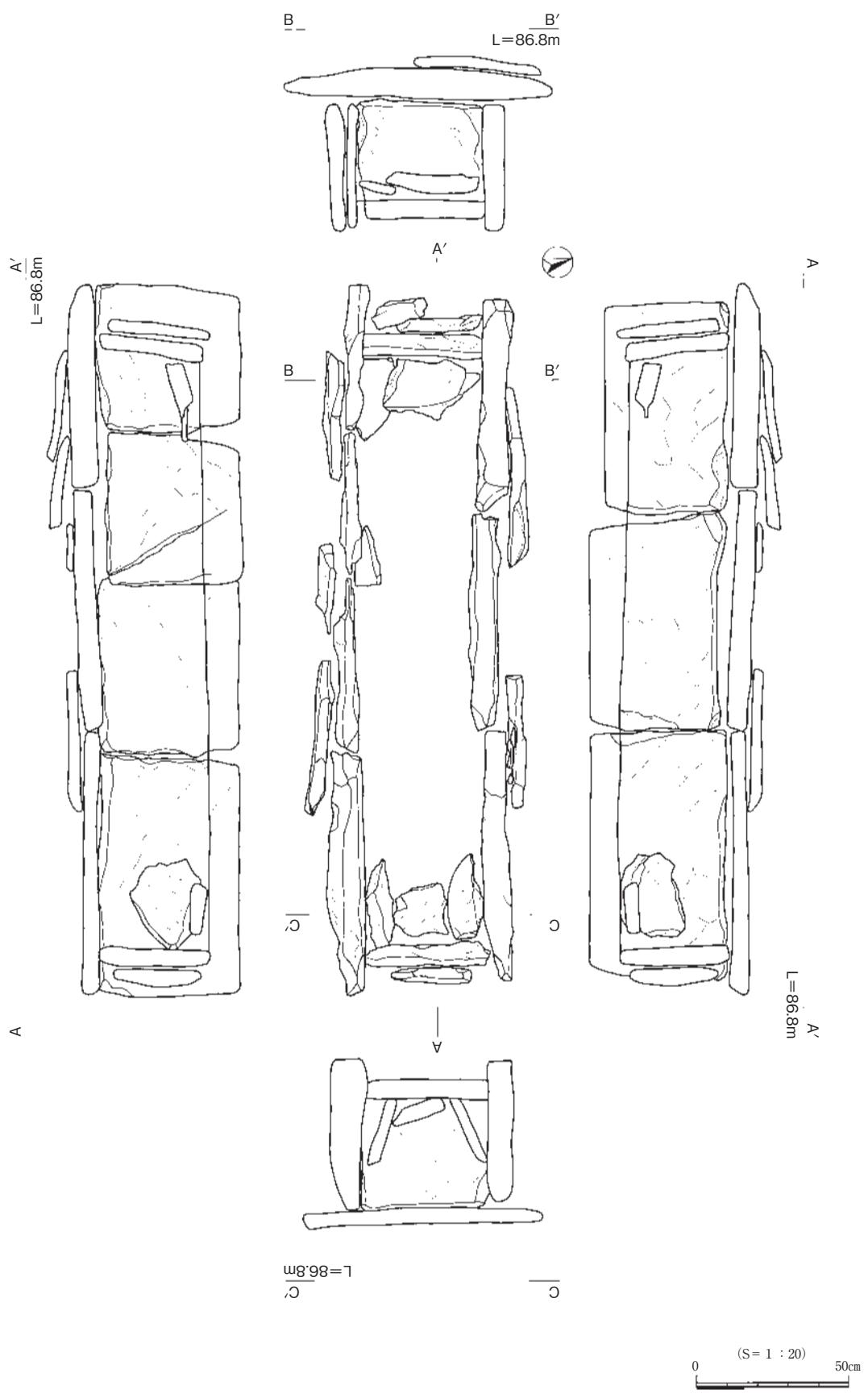
越敷山150号墳は、越敷山80号墳から南へ10mほどの調査区境、標高92m付近の斜面部で検出した古墳の周溝部分と推測される。

墳丘・周溝

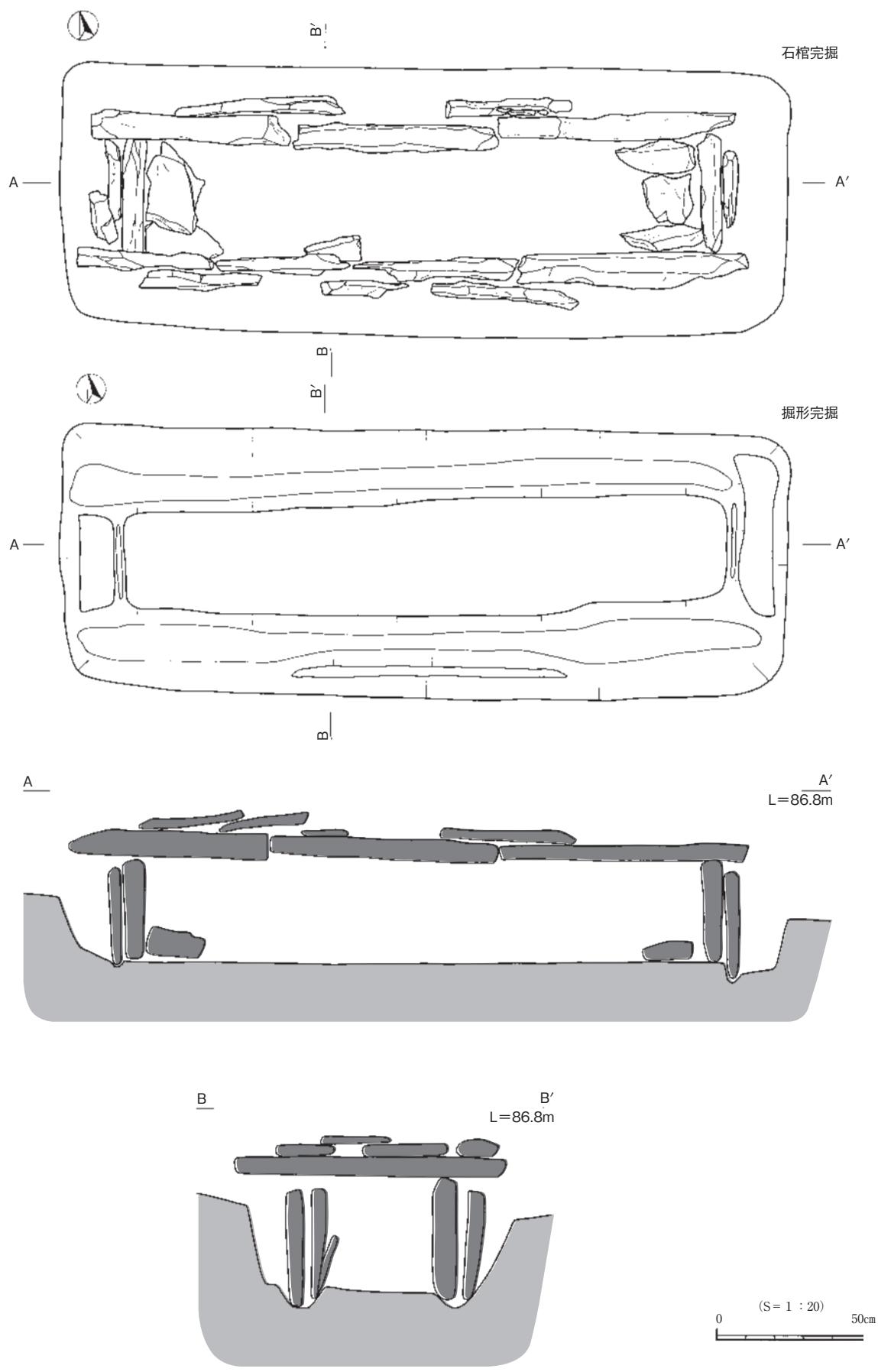
調査区内の堆積状況を確認するため、G-1 グリッド南側の調査区境に設定したトレンチから、地山である明黄茶色粘質土の上面に、明らかな土坑状の掘込みが見られたことから、この地点を面的に拡張して遺構を確認した。

検出した土坑は、北側の壁面に犬走り状の段が掘り残されているが、底面がフラットになっていることから、越敷山130号墳の東側斜面下で検出した、越敷山149号墳と同様に斜面を段状にカットして整形した古墳の周溝部分と推測した。

本調査区内では、周溝の一部のみを検出しただけだが、周溝外側の直径が6m前後の円墳と推測される。



第96図 越敷山149号墳 遺構図



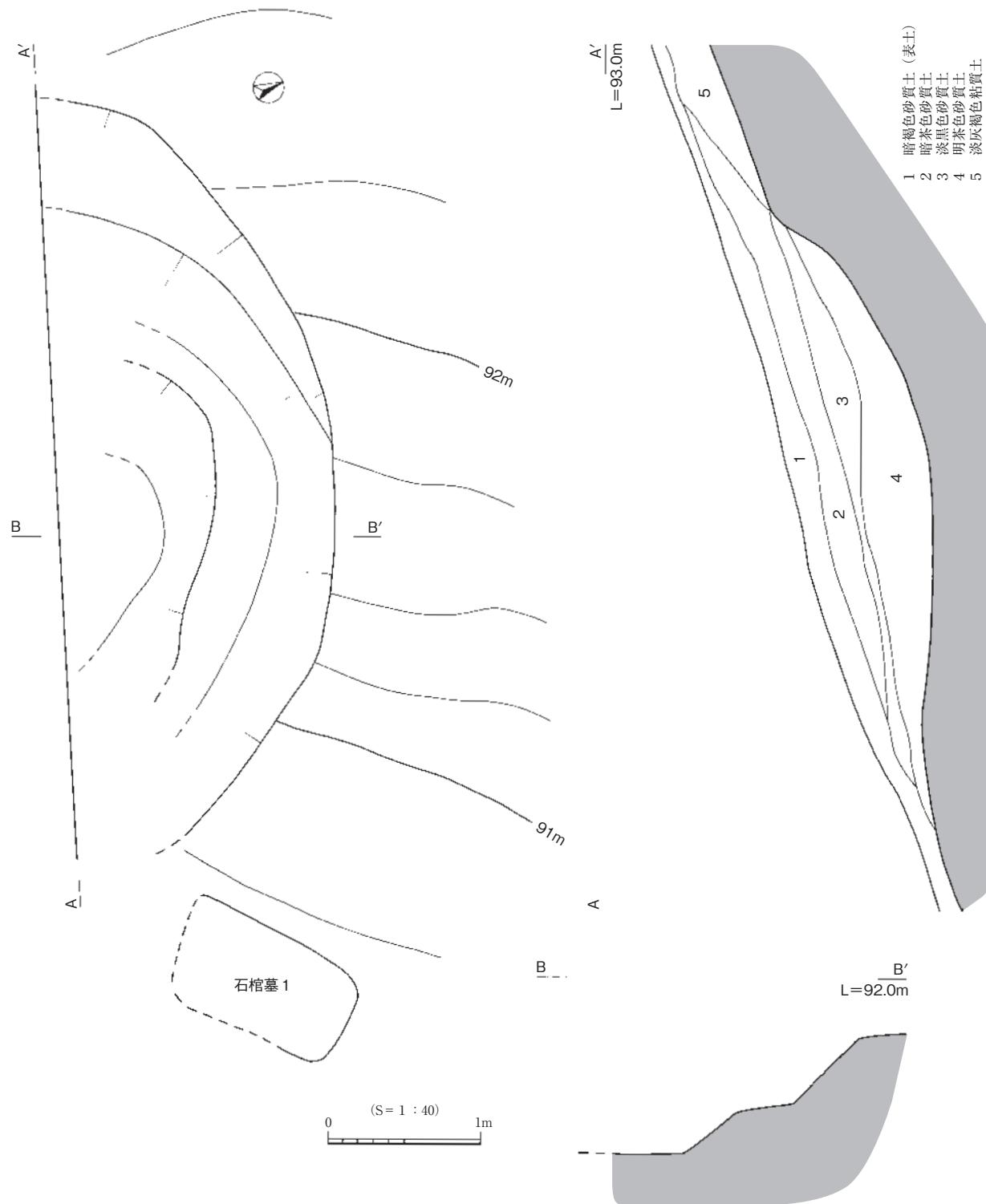
第97図 越敷山古墳群149号墳 遺構図

埋葬施設

遺構を検出したのが周溝外側の壁面と周溝の底面のみのため、墳丘と埋葬施設は南側の調査区外に存在すると考えられる。

出土遺物

この古墳に伴う遺物は、出土しなかった。



第98図 越敷山150号墳 遺構図

石棺墓 1 (第99図)

越敷山150号墳の東、標高91m付近で検出した小型の石棺墓である。150号墳の周溝に接していることから、150号墳の築造後に造られたものと考えられる。

やや急峻な斜面に位置しているため、蓋石と南側の長側板は既に流出しており、調査前には北側の長側板の一部が地上に露出している状況であった。

墓壙の掘形は、西側が調査区境のトレーニングによって削平されたため不明だが、長さ1.2m以上、幅70cm程度と推測される。石棺の長側板は、2枚の平石を用いて構築されており、棺床に石枕は置かれていなかったが、直径1~3cmほどの円礫が敷き詰められていた。

石棺の棺材を据え付けた掘形は「口」字形を呈し、長さ94cm、幅50cm、深さは南側のみ棺床から20cm以上掘り下げられているが、それ以外の部分は10~15cmほどである。この石棺墓からは、遺物の出土は見られなかった。

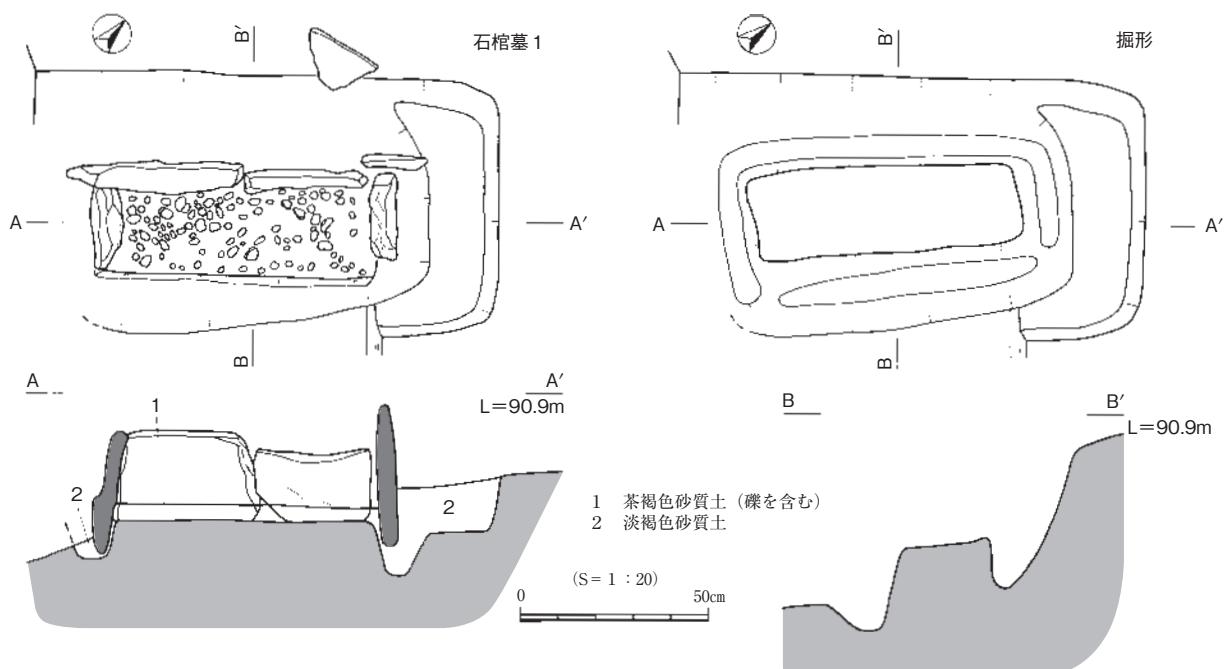
土器棺墓 1 (第100図)

越敷山143号墳の南東部、標高95.8m付近で検出した土器棺墓である。

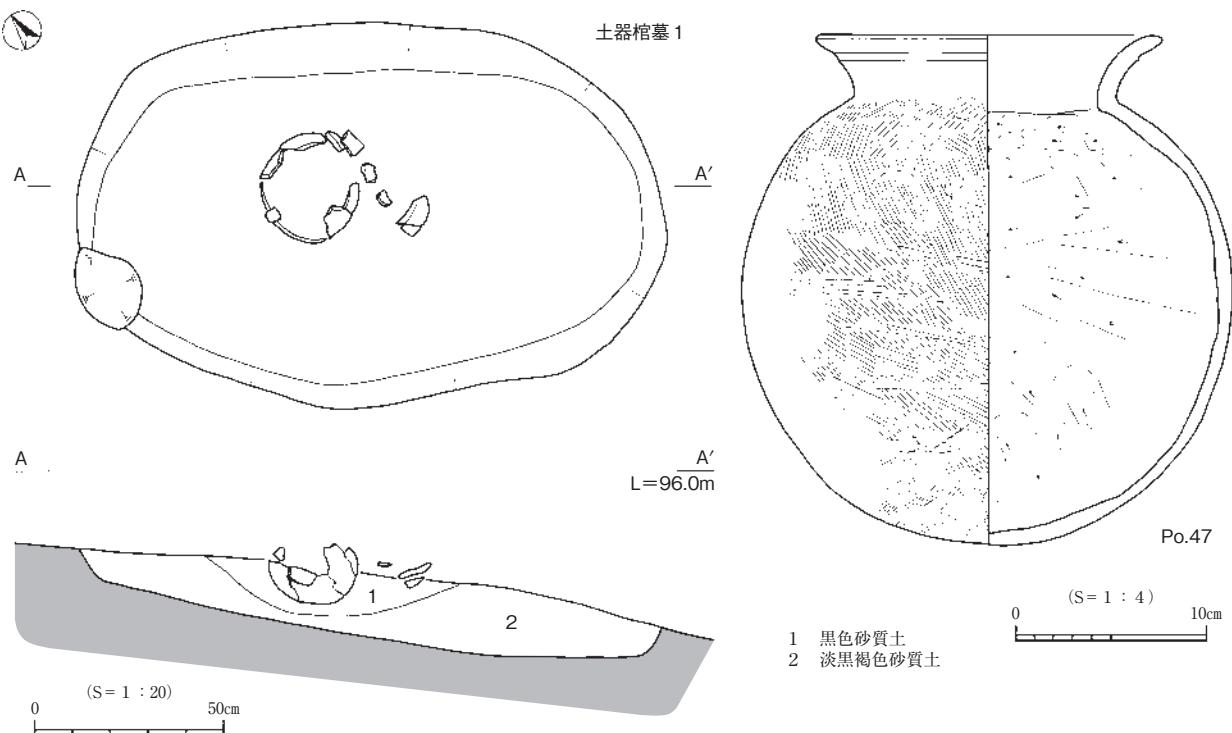
墓壙の掘形は楕円形を呈し、長径1.6m、幅1m、深さ20cm程度である。土器棺は、墓壙の中央部に口縁部を東側に向けた状態で埋められている。墓壙の掘形が土器の大きさと比較して大きすぎるところから、他の土壙墓との重複も考えられるが、土壙の底面が傾斜していることから、その可能性は低いと思われる。

棺に転用されている土器は、底部外面にススが付着し口縁部が外反する土師器の甕で、口径17.5cm、器高は26.8cmを測る。土器のプロポーションは球形で、口縁部の外面は段をなし、体部外面はハケ調整、内面はヘラケズリされる。

この土器の年代は、青木IX期の新段階、古墳時代中期後半頃と推測される。



第99図 石棺墓 1 遺構・遺物図



第100図 土器棺墓1 遺構・遺物図

土壙墓1 (第101図)

越敷山144号墳と146号墳の中間点、標高97.3m付近で検出した石蓋土壙墓である。

検出した石蓋は3枚の平石を用いるが、西側の石蓋は東側の2枚の石蓋と比べて小型の平石であり、周囲にも小割した平石を置いて閉塞していることから、途中で資材が不足したものか。墓壙の掘形は、二段墓壙で楕円形を呈し、長径2.85m、幅1.2m、深さ20cmを測る。

埋葬主体部は、長さ1.7m、幅45cm、深さ25cmである。墓壙の底面には、石枕は見られなかった。この土壙内からは、遺物の出土は見られなかった。

土壙墓2 (第102図)

越敷山145号墳と147号墳の中間点、標高97.5m付近で検出した石蓋土壙墓である。

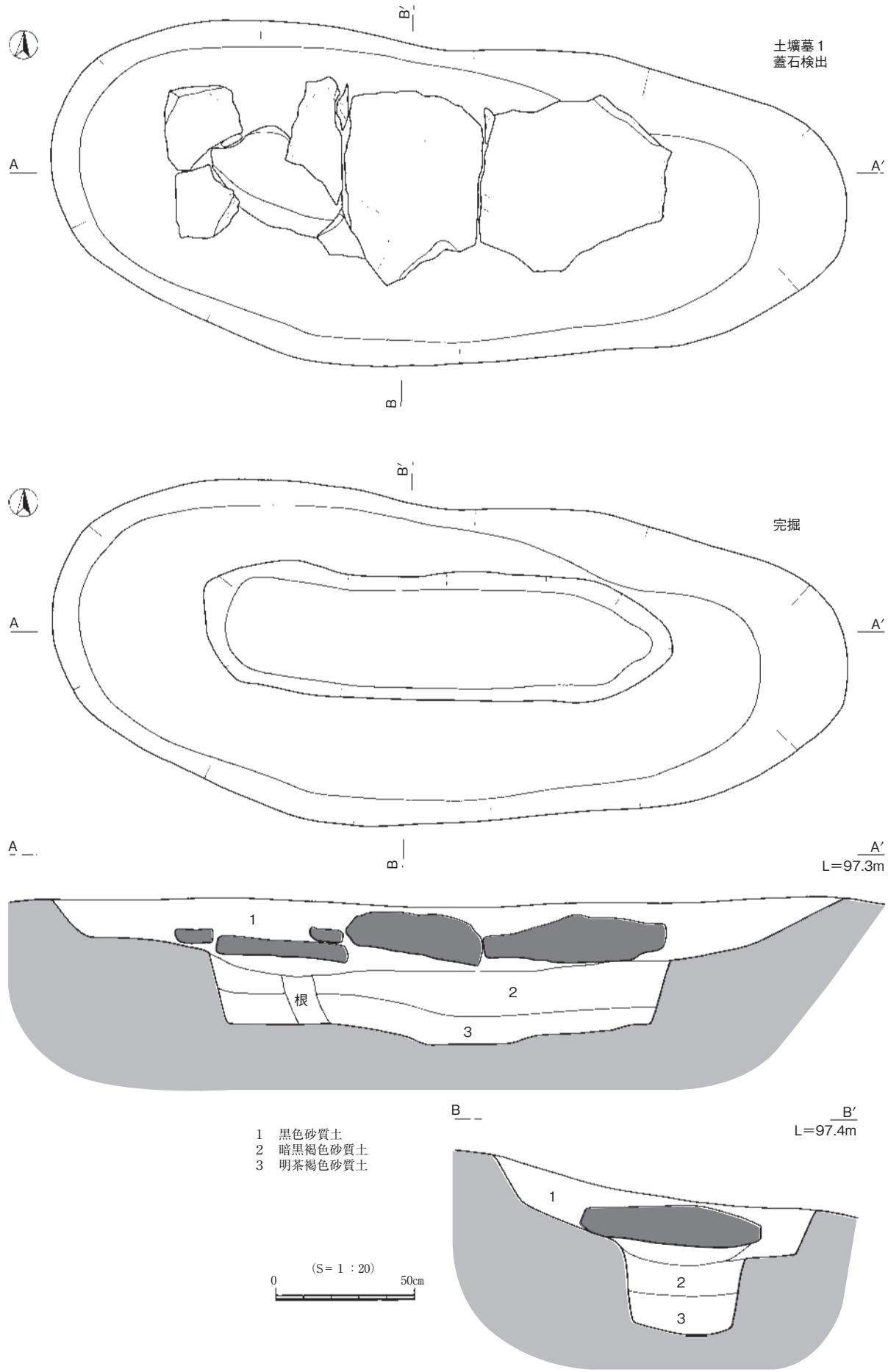
検出した石蓋は3枚の平石を置き、更に合わせ口の上部にも2枚の平石を置いて閉塞している。墓壙の掘形は、擂鉢状の二段墓壙で楕円形を呈し、長径1.3m、幅95cm、深さ30cmを測る。

埋葬主体の規模は、長さ65cm、幅15cm、深さ15cmと、極めて小さい。主体部の底面には、東側に二つの小石を置き石枕としているが、石の大きさも数cm程度の小型品であり、生後間もない子供が埋葬されたことは想像に難くない。この土壙内からは、遺物の出土は見られなかった。

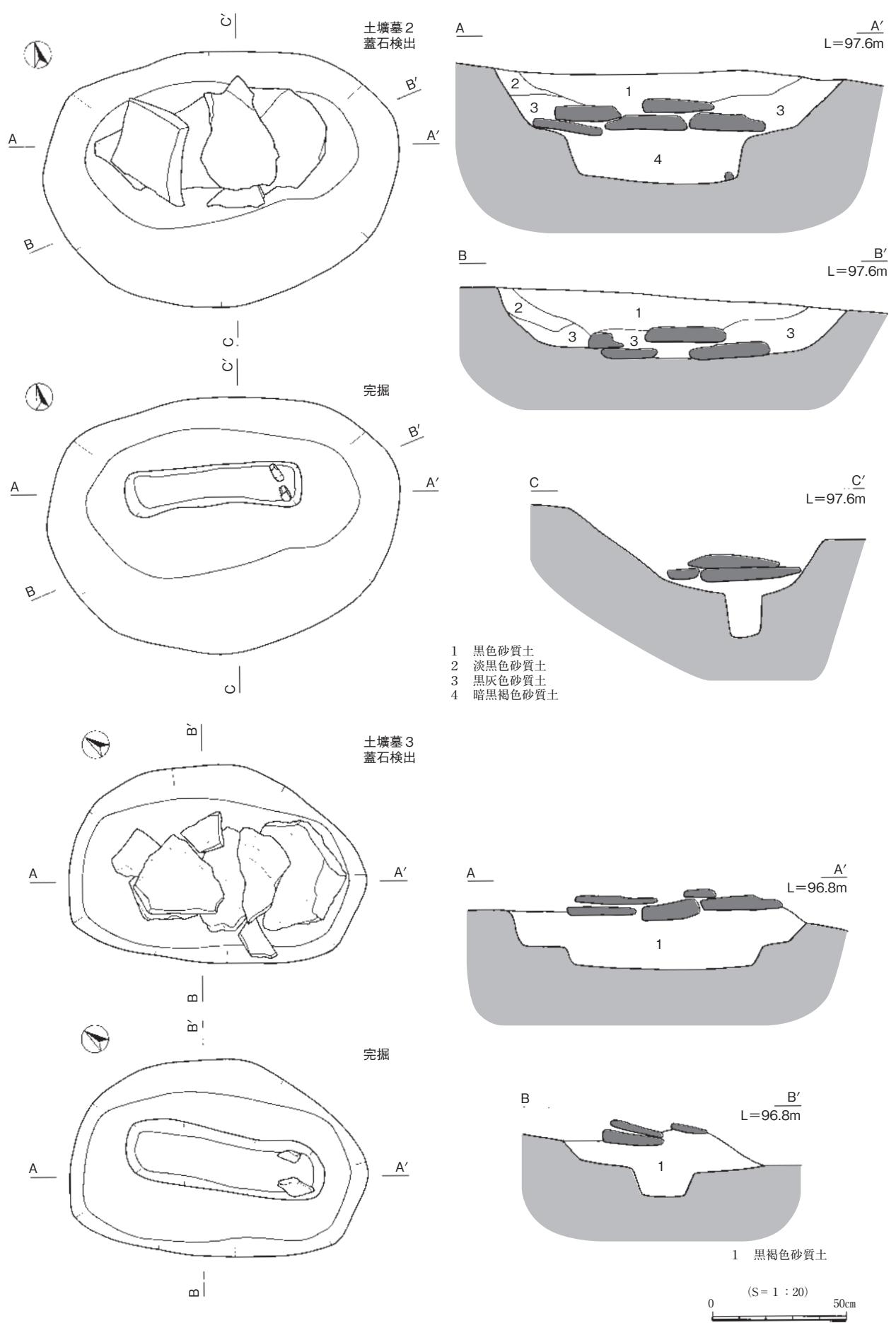
土壙墓3 (第102図)

越敷山145号墳の周溝南東部コーナー付近、標高96.7m付近で確認した石蓋土壙墓である。

墓壙の掘形は、陥穴3と切り合っている。石蓋は、最大長40cm、厚さ6cmの3枚の平石を並べ、更に合わせ口の上部にも平石を置いて閉塞する。墓壙は二段墓壙となるが、石蓋の検出面が10cmほど高いことから、一旦、掘形を埋めてから石蓋を置いたものと考えられる。墓壙の掘形は楕円形を呈し、長さ1.1m、幅70cm、深さ10cmを測る。



第101図 土壌墓 1 遺構図



第102図 土壙墓2・3 遺構図

主体部は長方形で、長さ75cm、幅25cm、深さ10cmと浅いが、上記の通り段を埋めているため、石蓋の設置面からは20cm程度の深さがあったと考えられる。墓壙の底面には、南側に2個の平石が石枕として置かれている。この土壙内からは、遺物の出土は見られなかった。

土壙墓4（第103図）

越敷山145号墳の東側、標高96.5m付近で検出した石蓋土壙墓である。

石枕のある南側小口部のみ平石が立てられているが、それ以外に木棺の痕跡が認められないことから、一部にのみ石を使用した折衷型の墓と考えられる。石蓋は大型の平石を2枚使用し、合わせ口の上部と南西端に平石を置き閉塞している。墓壙の掘形はいびつな円形で、二段墓壙状をなし、直径は1.8m程度、深さ40cmを測る。

埋葬部は長さ90cm、幅32cm、深さ30cmで底面には四角い平石を二つ置き、石枕としている。この土壙内からは、遺物の出土は見られなかった。

土壙墓5（第104図）

越敷山143号墳の周溝の南東部、標高96m付近で検出した石蓋土壙墓である。

古墳群の調査終了後に、陥穴を調査するために古墳時代の遺構面から地山面まで掘り下げて検出した。恐らく二段墓壙状の掘込があったと考えられるが、西側部分しか確認できなかった。石蓋は1枚のみで、長さ85cm、幅50cm、厚さ14cmを測る。

埋葬部の掘形は隅丸方形を呈し、長さ70cm、幅40cm、深さ20cmを測る。墓壙の底面西側には石枕と見られる三角形の平石が2枚置かれているが、それ以外には副葬品など遺物の出土は見られなかった。

土壙墓6（第104図）

越敷山143号墳の南東部、標高95.7m付近で検出した石蓋土壙墓である。

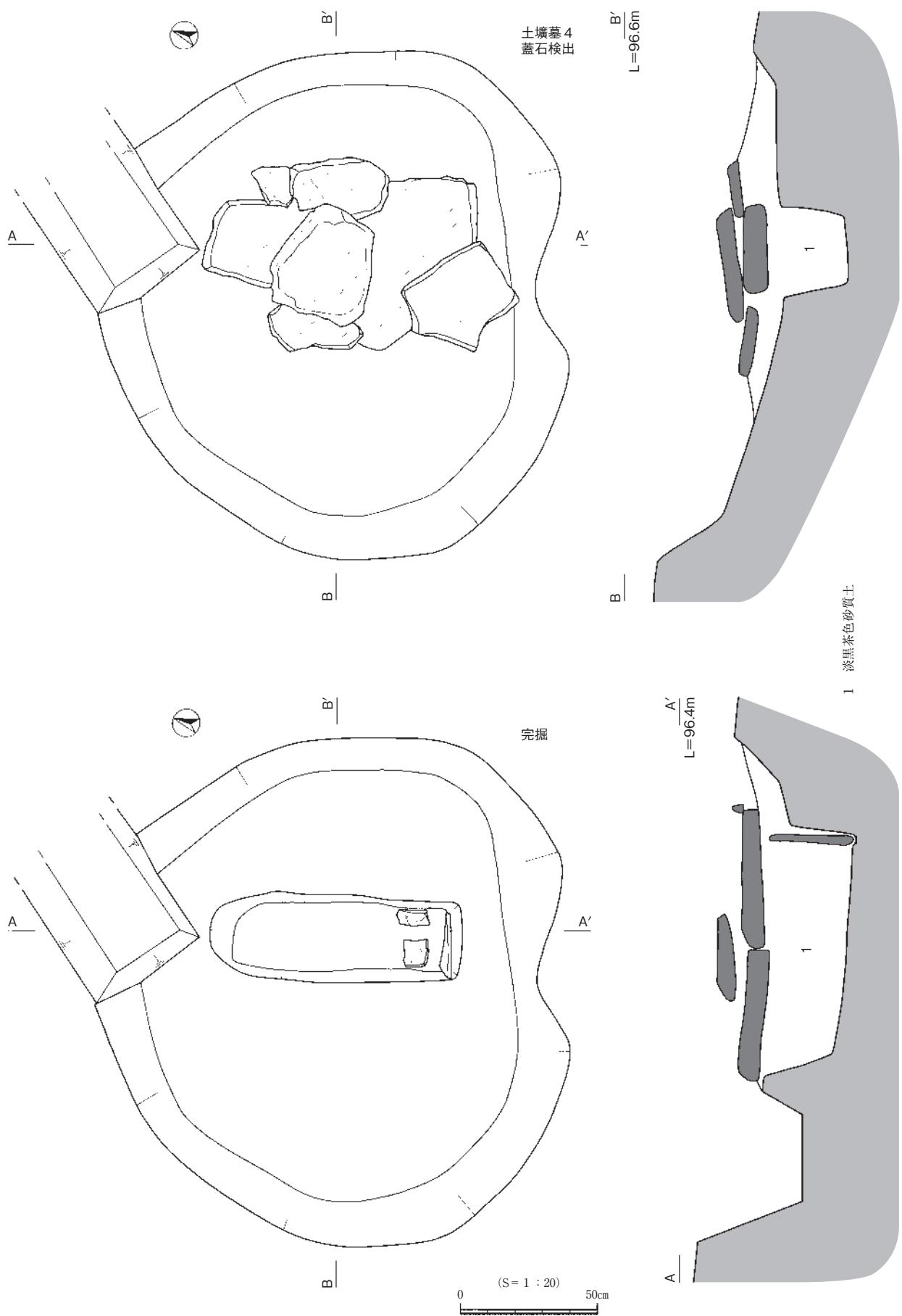
この土壙墓6の南には、隣接して土器棺墓1が作られているが、掘形の切り合いは見られなかった。墓壙の掘形は、二段墓壙でいびつな台形状を呈し、検出面で長さ1.25m、幅1m、深さ40cmを測る。墓壙の掘形が変形しているのは、蓋石の形に合わせて掘形を拡張したためと考えられる。蓋石は大型の平石を2枚使用しており、上面に小割した石を置き閉塞している。

埋葬部は、長さ60cm、幅28cm、深さ20cmの隅丸方形状だが、底面には石枕は見られない。この土壙内からは、遺物の出土は見られなかった。

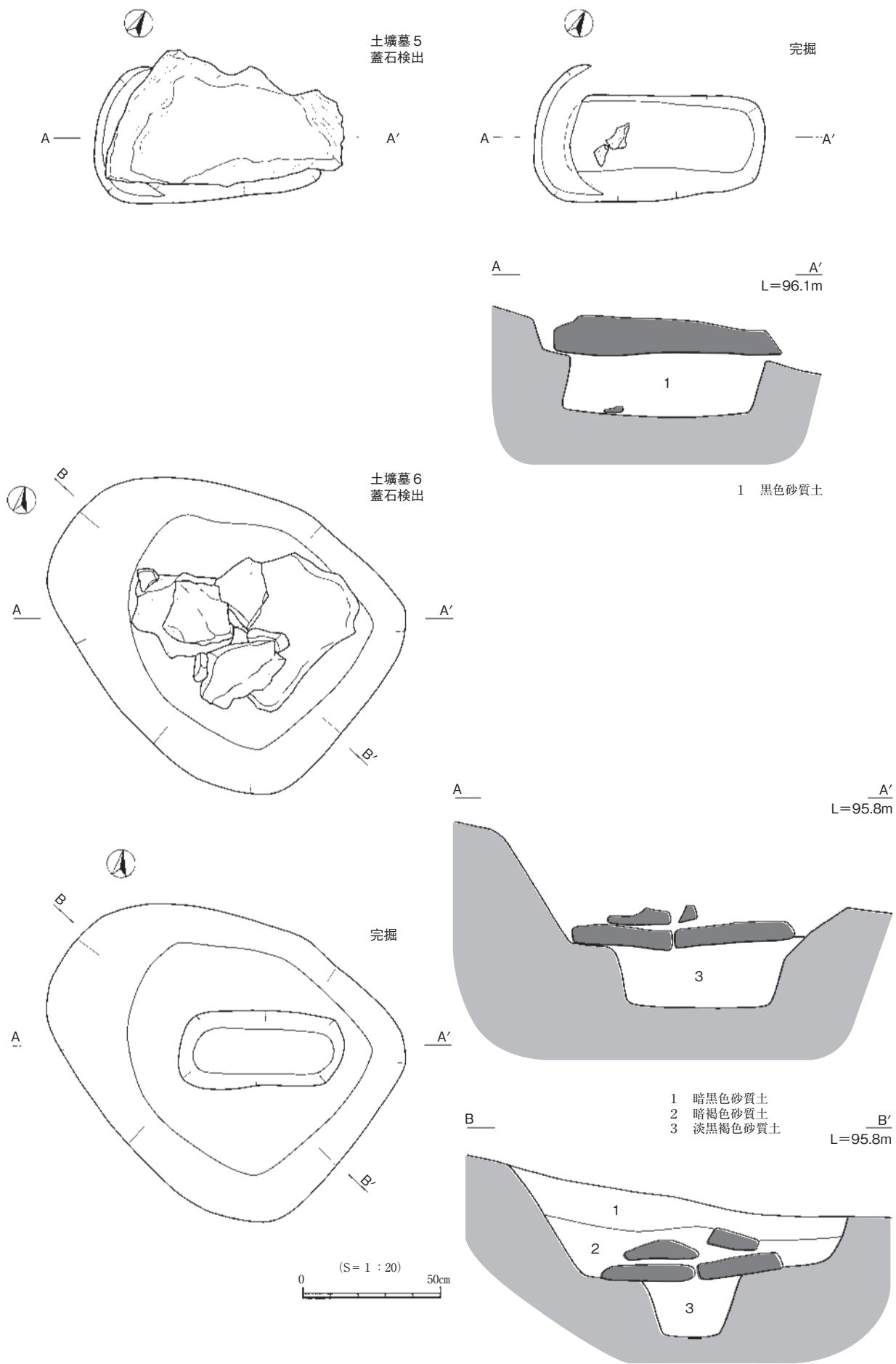
土壙墓7（第105図）

越敷山140号墳から西へ8m、標高95m付近で検出した土壙墓である。

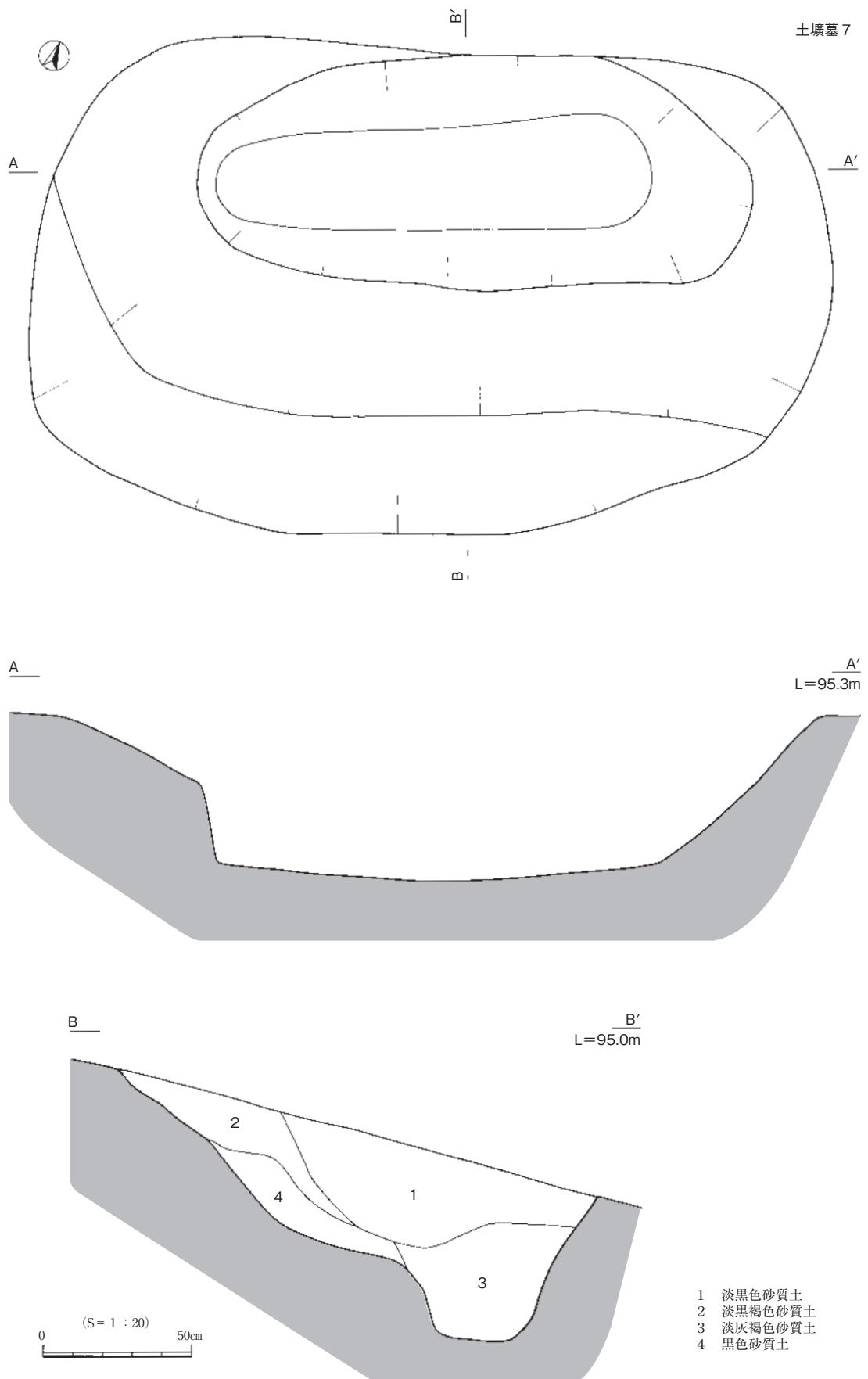
墓壙の形状は楕円形を呈し、南側は段状に掘り残される。掘形の規模は、検出面で長さ2.7m、幅1.6mで、主体部は長さ1.8m、幅80cm、深さ30cmを測る。墓壙の底面は、ほぼフラットだが石枕は見られず、その他の遺物も出土しなかった。



第103図 土壙墓4 遺構図



第104図 土壌墓5・6 遺構図



第105図 土壙墓 7 遺構図

土壙墓8（第106図）

越敷山79号墳と133号墳に挟まれた周溝内で検出した、土器蓋土壙墓である。

墓壙の掘形は、大半が陥穴11と切り合っている。墓壙の掘形は橢円形を呈し、長径1.3m、短径80cm、深さ25cmを測るが、周溝の底面で蓋石の一部が露出していることから、越敷山133号墳が築造されてから、ある程度周溝が埋没した段階で埋葬されたものと考えられる。また、墓壙の西側では墓壙の埋め戻し後に新たに掘削された掘込が見られるが、この土壙墓に直接関わるものではないと見られる。

土器蓋に転用された土器は、胴部の外面にススが付着する土師器の甕を半裁して使用していることから、実際の煮炊きに用いられていたものが埋葬施設の蓋に転用されたものと考えられる。土器の半裁方法は、口縁端部に対向する2箇所の穴を開けて、そこから少しずつヒビを広げながら割っていったことが読み取れる。埋葬時には、半裁した甕の口縁を合わせて蓋としており、更に合わせ口の上部に石を置いて閉塞している。

蓋に転用された土器は、口径15.2cm、高さ32.2cmの土師器甕で、口縁部は緩やかな「く」字形を呈するが、外面には二重口縁の痕跡を留める凹線が廻る。内面はヘラケズリし外面はハケ調整される。また、外面にはススが付着している。土壙内からは、この土器蓋に転用された甕以外の遺物の出土は見られなかった。

この土器の年代は、青木VII期の新段階、古墳時代中期前半のものと考えられる。

土壙墓9（第107図）

越敷山130号墳の周溝から南へ1mほど離れた斜面部、標高92m付近で検出した石蓋土壙墓である。この土壙墓9と土壙墓10・11の3基の土壙墓は、南東方向に向かって1.5m程の間隔をおいて直線的に配置されている。

検出した石蓋は、最大長76cm、厚さ10cmの平石が3枚用いられ、更に石の隙間の上部を小割した平石で閉塞している。

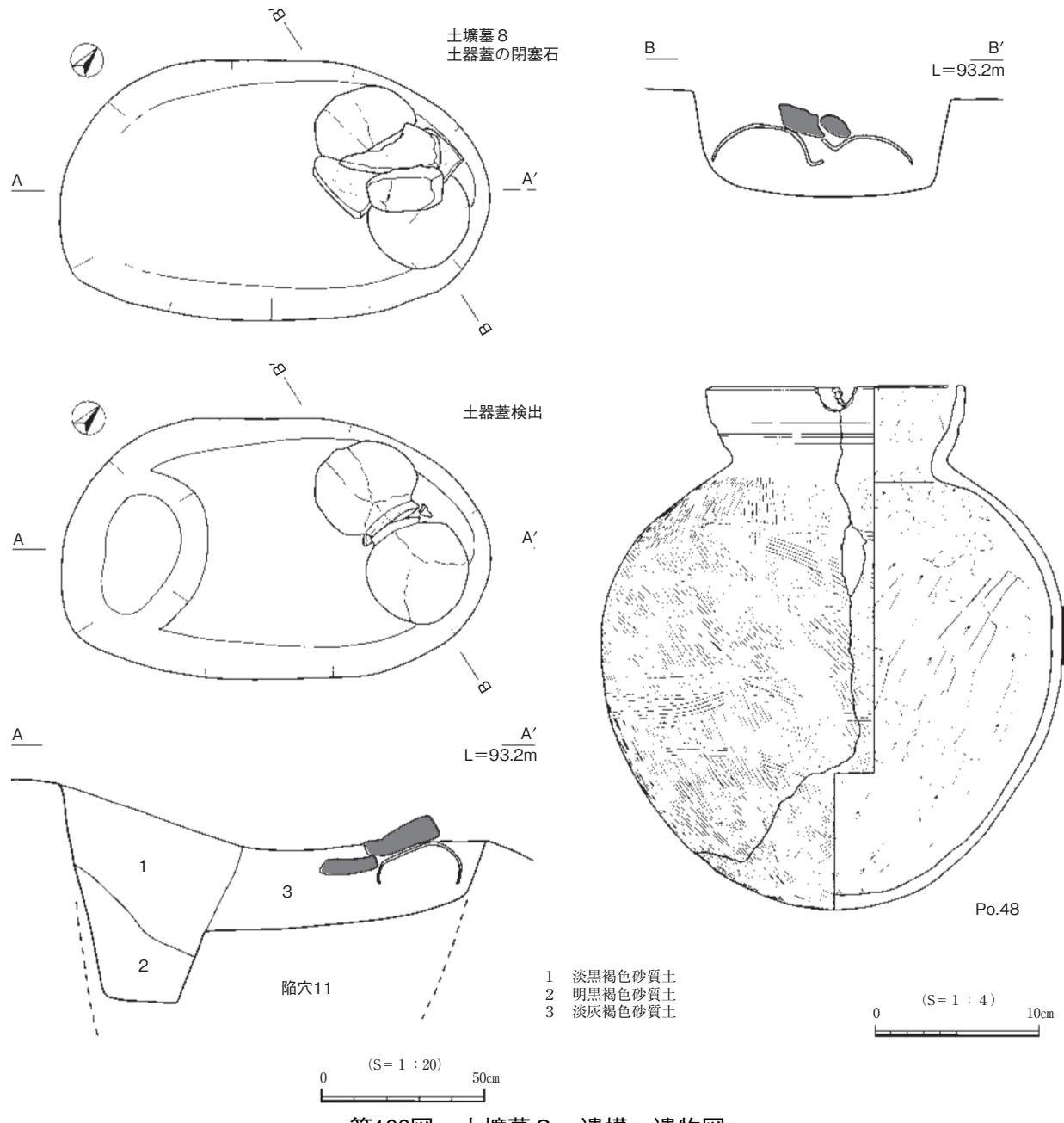
墓壙の規模は、上面の長さ1.2m、幅70cmの二段墓壙状を呈し、主体部は隅丸方形で、長さ90cm、幅24～30cm、深さ28cmを測る。墓壙の底面は南東部がやや高くなり、石枕と見られる平石が1枚置かれていることから、南東頭位で埋葬されたと考えられる。この土壙内からは、遺物の出土は見られなかった。

土壙墓10（第107図）

越敷山130号墳の周溝から南へ1.5mほど離れた斜面部、標高91.7m付近で検出した石蓋土壙墓である。

石蓋は3つの自然石が用いられ、墓壙検出面の中心に置かれている。これらの石は、墓壙を埋め戻した後に置かれていることから、蓋と言うよりは標石のような印象を受ける。

墓壙の掘形は隅丸方形を呈し、長辺70cm、短辺65cm、深さ20cm程度を測る。墓壙の底面に石枕が見られないことから土壙墓ではない可能性もあるが、土壙墓9と11に挟まれた場所にあることから土壙墓と考えた。この土壙内からは、遺物の出土は見られなかった。

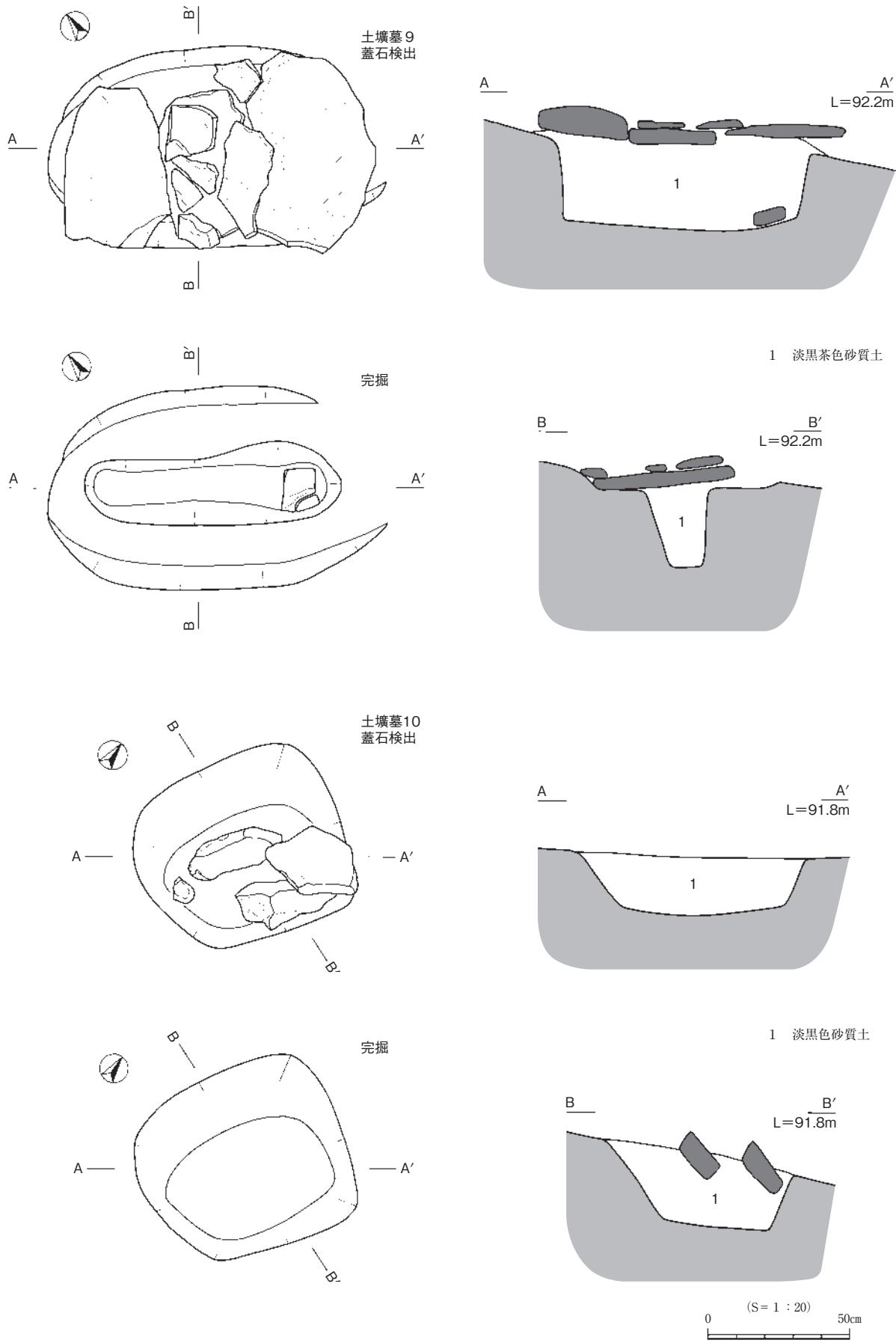


第106図 土壙墓8 遺構・遺物図

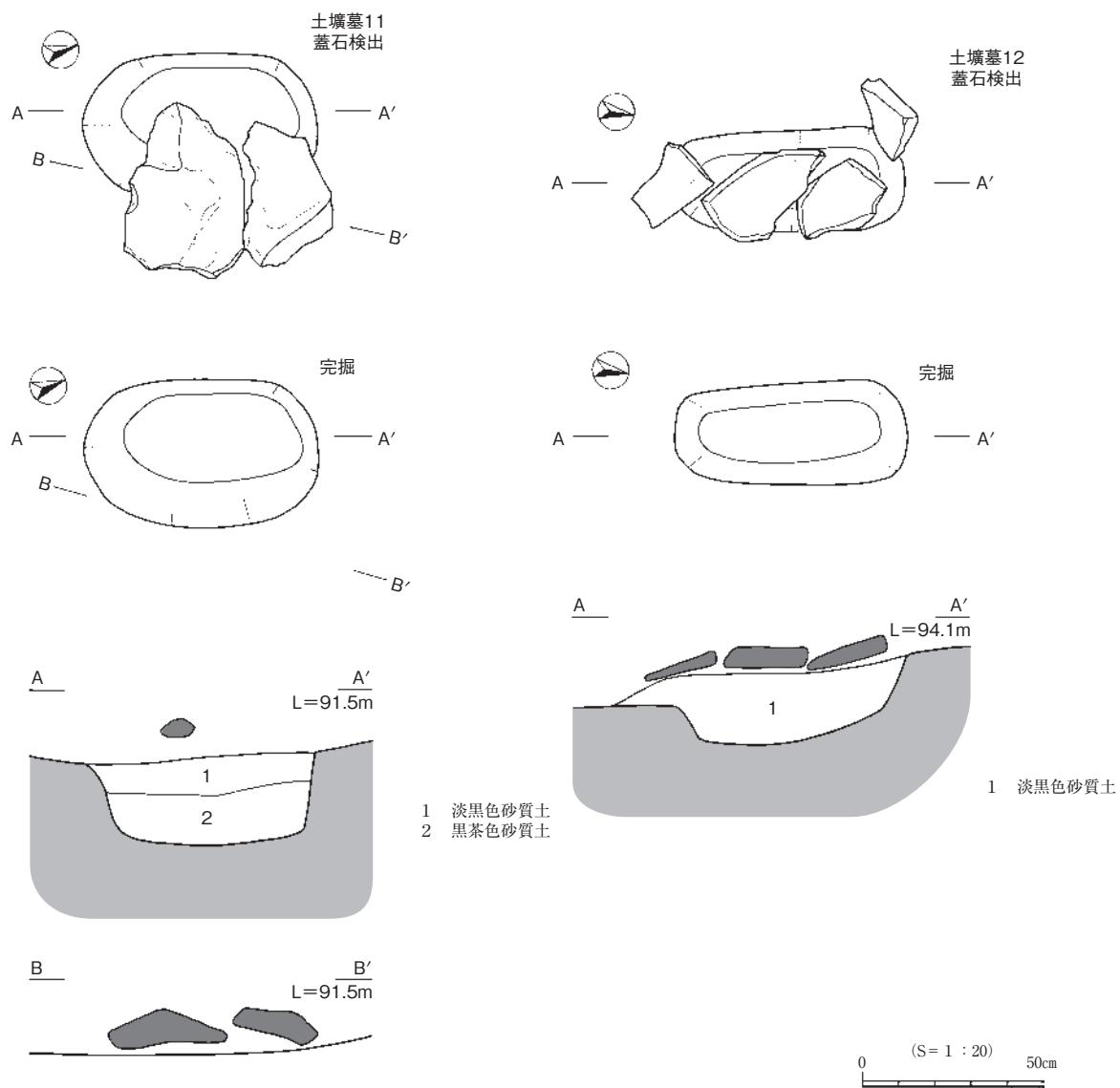
土壤墓11（第108図）

越敷山130号墳の周溝から南へ3mほど離れた斜面部、標高91.4m付近で検出した、石蓋土壙墓である。

検出した土壙は楕円形を呈し、検出面で長径64cm、短径40cm、深さ24cmを測る。石蓋は最大長46cmの自然石2枚が使用されているが、土壙の掘形から東へずれた位置に置かれていることから、遺体を埋葬して土を被せた後に置かれたと考えられる。この土壙内からは、遺物の出土は見られなかった。



第107図 土壙墓9・10 遺構図



第108図 土壙墓11・12 遺構図

土壙墓12（第108図）

越敷山137号墳から南へ10mほど離れた斜面部、標高94m付近で検出した、石蓋を持つ土壙墓である。

土壙は長楕円形を呈し、検出面で長径64cm、短径30cm、深さ20cmを測る。石蓋は最大長50cm、厚さ6cmほどの平石が4枚使用されている。石蓋は、土壙の検出面とほぼ同じレベルで検出されたことから、遺体を埋葬して土を被せた状態で石蓋を置いたものと推測される。

土壙内底面に石枕が置かれていなかったため頭位方向は不明だが、東側が高くなっていることから、東頭位で埋葬されたものと考えられる。土壙内からは、遺物の出土は見られなかった。

越敷山80号墳（第109～113図）

越敷山80号墳は、越敷山79号墳の南側、標高93m付近の緩斜面に位置する、横穴式石室を主体部とする古墳である。調査に着手する前から天井石が露出し、石室は開口して内部に入ることが出来る状況であった。

墳丘・周溝

墳丘は、直径8m程の円墳ないし、一辺3m程の多角形墳の可能性が高いが、塹壕により羨道部の前面が破壊されているため六角形になるかどうか分からない。墳丘の盛土は、旧表土の第6層を残した状態で石室を構築した後、周溝を掘削して盛土を行っている。

周溝は、底面の幅0.5～1.5mで、北側の周溝内が広くなっている。周溝の断面は、「U」字形を呈し、周溝の立ち上がりの部分には外護石などは用いられておらず、素掘りである。また、南側の周溝底面には、須恵器の大甕の破片が散乱しており、意図的に破碎されたものと考えられる。

古墳の外表施設は存在しないが、表土掘削後に塹壕に沿って石が置かれている状況を確認している。この石は、周溝の延長上にも置かれていることから、外護列石ではなく、塹壕の掘削時に出てきた石を作業の邪魔にならないよう、外側に並べたものと考えられる。

羨道部の天井石と側壁は塹壕によって破壊されており、塹壕東側の斜面下に側壁の石材が投げ捨てられ、更に天井石も斜面側に引きずり落とした状況で放置されていた。取り外されていた天井石の長さは1.58m、幅0.9mである。

埋葬施設

埋葬施設は、南東方向に開口し、羨道部から奥壁まで同じ幅のプランで、玄門に板状の袖石（玄門立柱）を2枚立てて両袖型（疑似両袖式）とし、下部に樋石（しきみいし）を埋め込む横穴式石室である。石材は全て、周囲に散在する組み合わせ式石棺に用いられているのと同じ「かんらん石玄武岩」を使用している。

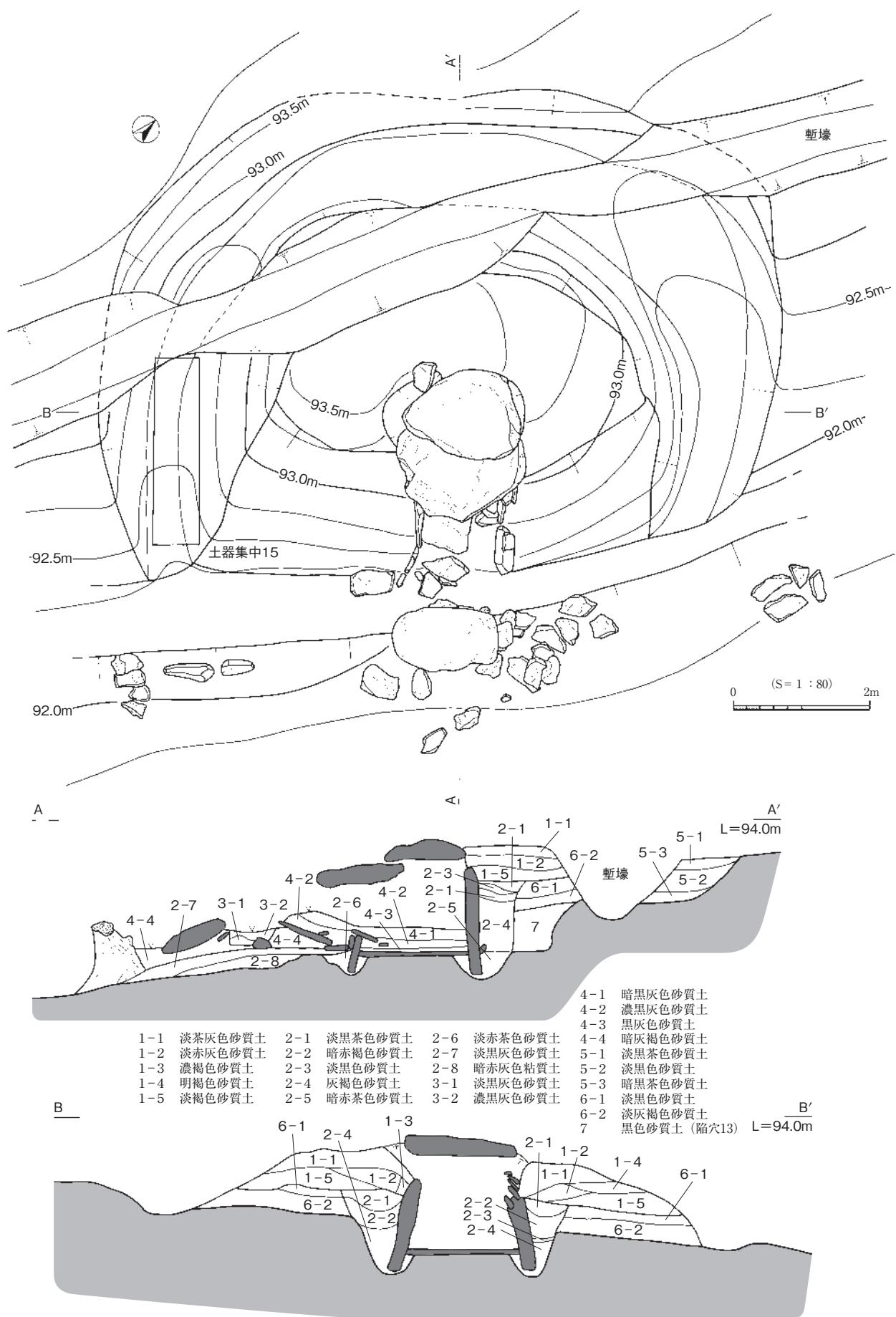
石室の規模は、全長で3.3mあり、玄室の長さは樋石から奥壁まで1.65m、奥壁の幅が1.3mである。玄室の最大幅は1.5m、玄室の高さは1.3mで、背の高い大人では立ち上がれないほど低い。

現存する羨道部の長さは1.5m、最大幅1.5m、高さ0.9mを測る。左側の袖石は、露出している長さ92cm、幅40cm、厚さ8cmで、右側の袖石は、露出している長さ98cm、幅60cm、厚さ10cmを測る。樋石は、露出している高さ25cm、長さ1.3m、厚さ10cmである。玄門部の高さは75cm、幅35～40cmと小型なので、棺を入れるのは難しいサイズと言える。

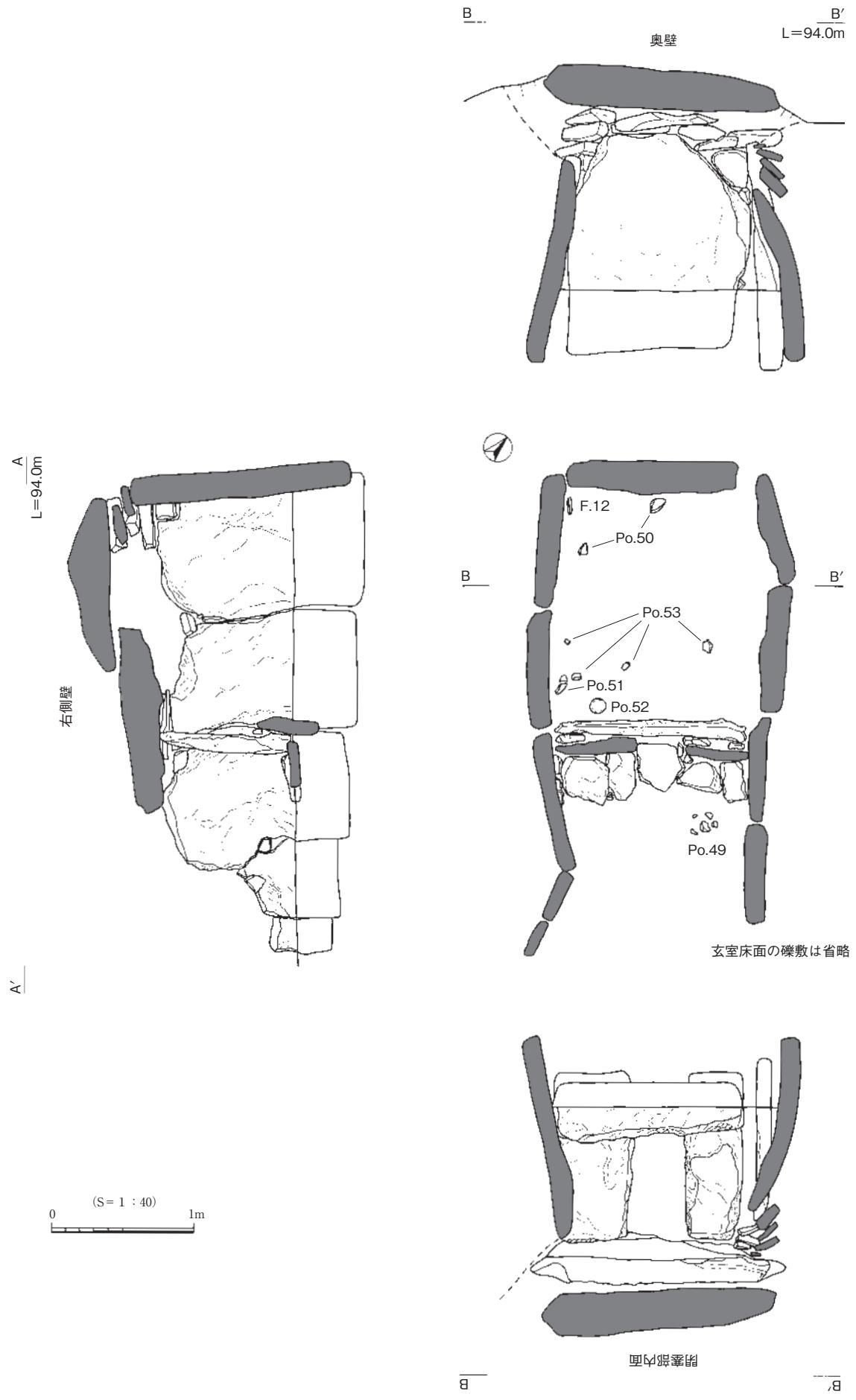
玄室の奥壁は、板状の一枚石をやや内傾させて立たせ、側壁は奥壁から樋石まで3枚の板石を内傾させて立ち並べて構築されている。羨道部左側の側壁は、高さ60cm程が残存しているが、塹壕によって取り外された羨道部の部材があることから、玄門部の高さとほぼ同じ高さで組まれていたと考えられる。玄室内の天井石は、袖石の上に一石を載せ、更に奥壁側にもう一石を載せるため一段高くなる。ただし、袖石の上部は天井石と接触していない。

天井石と側壁上部との間を詰める積み石は、一部、石室内に崩落して抜けている部分があるが、基本的に長方形の石材を持ち送りにして積み上げている。また、奥壁と右側壁のコーナー部分と左側壁の一部には、角に四角い切り込みを入れる切組みが用いられる。

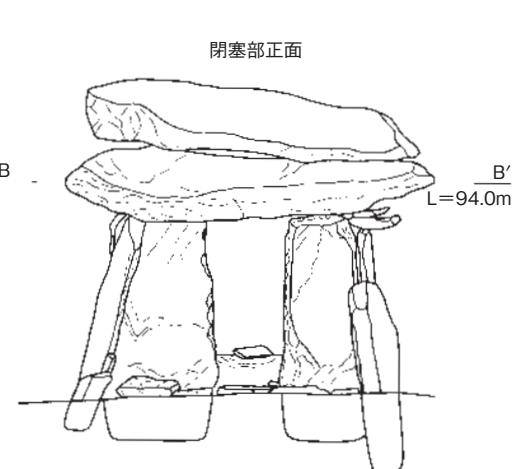
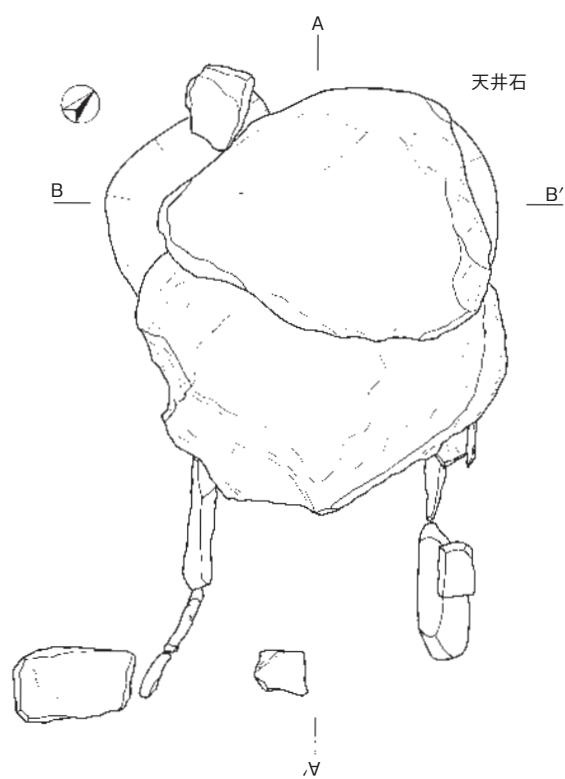
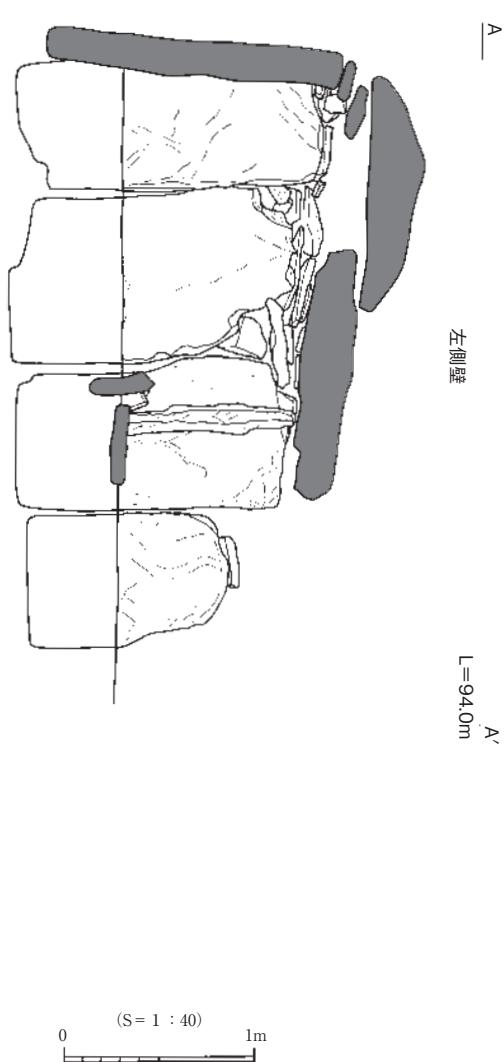
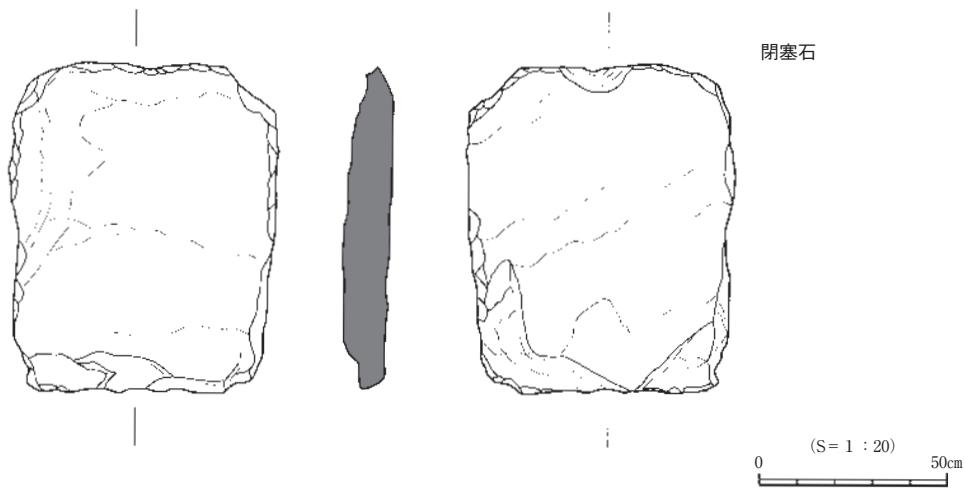
羨道側の玄門部には、床面に5枚の平石をタイル状に敷き、玄室内には直径5～10cmの円礫が全面に敷き詰められている。



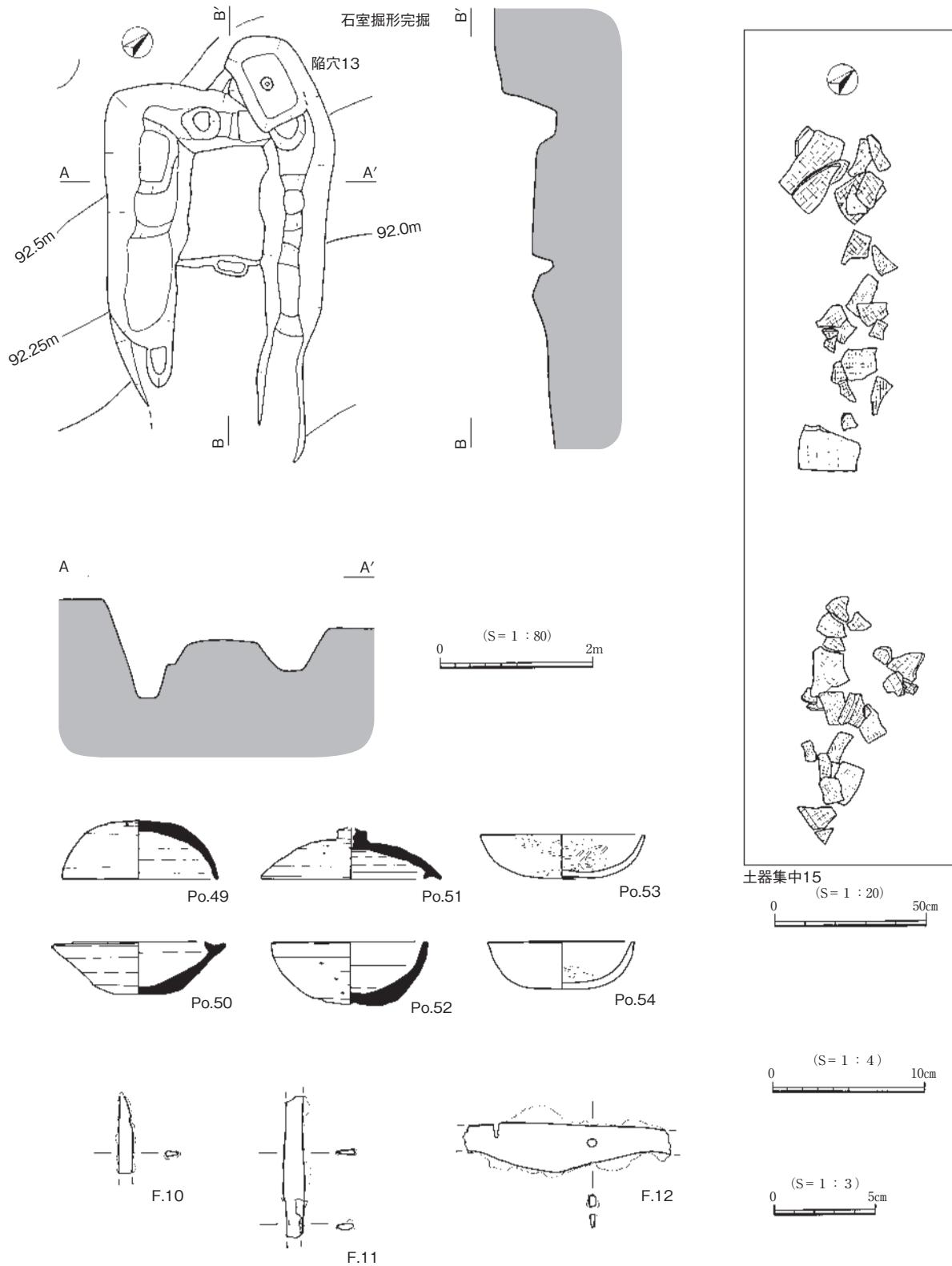
第109図 越敷山80号墳 遺構図



第110図 越敷山80号墳 遺構図



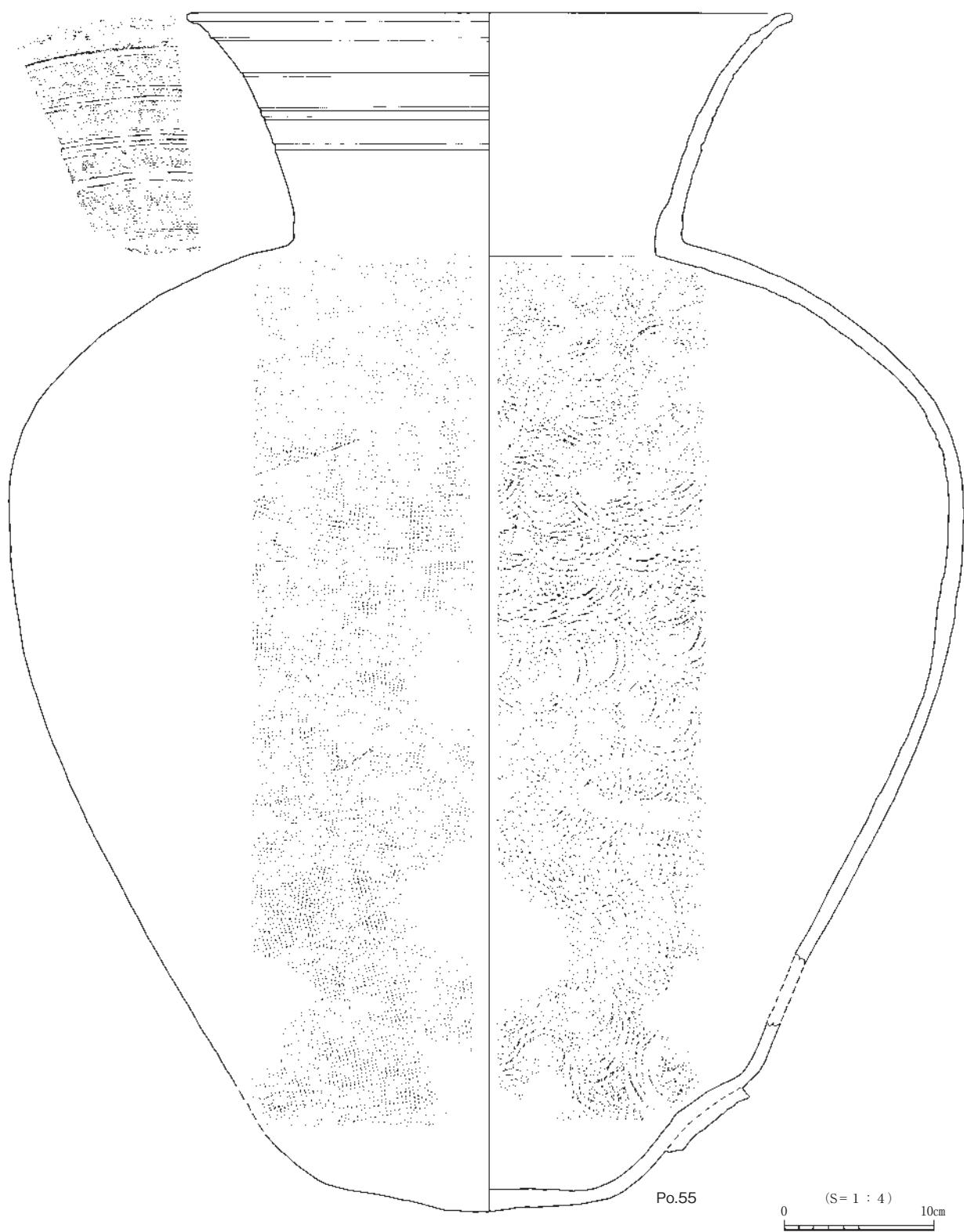
第111図 越敷山80号墳 遺構図



第112図 越敷山80号墳 遺構・遺物図

閉塞石は、縦85cm、横70cm、厚さ12cmの板石を玄門に向かって外側から立て掛け、羨道部を埋め戻して閉塞していたと考えられる。後の盗掘者は、この閉塞石を外側に引き倒して内部に侵入している。

石室の掘形は陷穴13を切っており、斜面に長さ5m、幅3m、深さ1mの段状の土坑を掘り、更に底面の周囲に「コ」字形となる、深さ50cm程の溝を廻らせて据え付け穴としている。旧表土を残した



第113図 越敷山80号墳 遺物図

状態で掘形を掘削していることから、最初に石室の掘形を掘削し、斜面上部から掘形内に落とし込むようにして石材を立て、底部に石を噛ませて固定している。このため、周溝の掘削は石室の構築が終わった後になされたと推測される。

遺物の出土状況は、羨道部から破損した須恵器壺蓋（Po. 49）が破損した状態で出土したほか、玄

室内の床面上から須恵器や土師器の坏と鉄製品が出土している。また、奥壁掘形の裏込め土から土師器の坏身（Po. 54）が出土したことから、石室を構築する際の祭祀に用いられたものと推測される。

出土遺物

越敷山80号墳から出土した遺物は、玄室内から出土したものと、羨道部から出土した須恵器坏蓋、周溝内から出土した須恵器大甕、石室の裏込めから出土した土師器杯身がある。

Po. 49は、羨道部の床面から出土した、口径10.2cm、器高3.9cmを測る須恵器坏蓋である。内面から口縁部は丁寧に回転ナデ調整しているが、天井部は回転ヘラケズリを省略しており、ヘラ起こし後に粗くナデ調整するのみである。色調は淡灰色を呈し、口縁の一部には焼け歪みがある。Po. 50は、口径8.7cm、器高3.5cmの須恵器坏身である。底部はヘラ起こし後、丁寧にナデ調整する。また、底部外面には暗緑色の自然釉が付着している。色調は灰色を呈し、胎土には黒く光るガラス質の砂粒を含む。Po. 51は宝珠つまみを持つ、口径11.8cm、器高3.4cmの須恵器坏蓋である。内面から口縁部は回転ナデ調整し、天井部は3分の2を回転ヘラケズリ調整している。焼成はやや不良で、色調は淡赤灰色を呈し、内外面とも重ね焼きの痕跡が残る。重ね焼きの痕跡から、蓋を天地逆の状態にして身の上に置き、更に同じ製品を上に重ねて窯詰めしていたと推測される。Po. 52は口径10.1cm、器高4.1cmの須恵器の坏身である。口縁部と内面は回転ナデ調整し、底部はヘラ起こし後に粗くナデ調整する。色調は灰色を呈し、胎土には黒く光るガラス質の砂粒を含む。Po. 53は、玄室内の床面から破損した状態で見つかった、口径10.7cm、器高2.9cmの土師器の坏身である。内外面ともミガキ調整し、底部を窪ませている。色調は淡橙褐色を呈し、胎土は緻密だが石英粒を含む。Po. 54は、石室の裏込めから出土した土師器の坏身である。口径9.6cm、器高3.1cmの小型品で、外面は風化しているが、内面は一部をミガキ調整する。色調は橙褐色を呈し、胎土は緻密で砂粒をほとんど含まない。Po. 55は、周溝内から破碎された状態で出土した須恵器の大甕である。法量は復元口径40.8cm、器高80.6cmを測り、色調は灰色を呈する。口縁は外方に向かって逆「ハ」字形に広がり、沈線で区画された中に波状紋が施される。外面はタタキ整形され、内面には同心円状の当て具痕が残る。

F. 10は、現存長3.8cmの鉄製品で、刀子の刃部片である。F. 11は、現存長6.9cm、幅1cm、厚さ0.3cmを測る鉄製品で、先端部を欠く刀子の柄である。X線写真では、直角の関を確認できる。柄には木質が残るが、刃部には木質が見られないことから、抜き身で副葬されたと考えられる。F. 11とF. 12の破断面には接点が無いため、同一個体かどうかは分からず。F. 12は、長さ10.2cm、高さ2.3cm、厚さ0.3cmの鉄製品で、目釘穴が見られる。形態的には火打金によく似ているため、中世以降の盗掘時に混入したものか。

この古墳が使用された時期は、出土した須恵器から、7世紀中葉に相当するものと考えられる。

第3節 古墳以外の調査

古墳以外の調査は、縄紋時代のものと推測される陥穴を24基、弥生時代前期の土坑1基、時期不明の溝状遺構4条、アジア・太平洋戦争末期に掘削された塹壕を検出した。このうち、陥穴3～8は古墳群の調査が終了した後、地山面の直上まで掘り下げて検出した。また、埋土中から遺物が出土したのは土坑1と溝4のみであり、その他の遺構からは遺物は出土しなかった。

陥穴1（第114図）

陥穴1は、越敷山148号墳の東、標高96m付近で検出した、一辺1m、深さ1.5mの隅丸方形の土坑である。底部の中央には直径17cm、深さ20cmの小穴が掘られている。形態的な特徴と埋土から、縄紋時代に掘削された陥穴と推測した。

陥穴2（第114図）

陥穴2は、越敷山145号墳の東側、標高96.5m付近で検出した、長方形の土坑である。遺構の規模は、長辺1.4m、短辺95cm、深さ1.1mを測る。土坑の底部中央には、直径15cm、深さ17cmの小穴が掘られている。

陥穴3（第114図）

土壙墓3の下層を地山面まで掘り下げて検出した、楕円形の土坑である。遺構の規模は、長径1.2m、短径1m、深さ1.2mを測る。土坑の底部には、直径20cm、深さ45cmの小穴が掘られている。

陥穴4（第114図）

上面の一部が越敷山140号墳の周溝に切られる、検出面が円形を呈する土坑である。遺構の検出面は、周溝の掘形を除去した地山面の標高95m付近である。土坑の検出面は直径1.1m、底面は長径95cm、短径70cmで、深さは90cmである。土坑の底面中央の小穴は、長径30cm、短径15cm、深さ40cmを測る。

陥穴5（第114図）

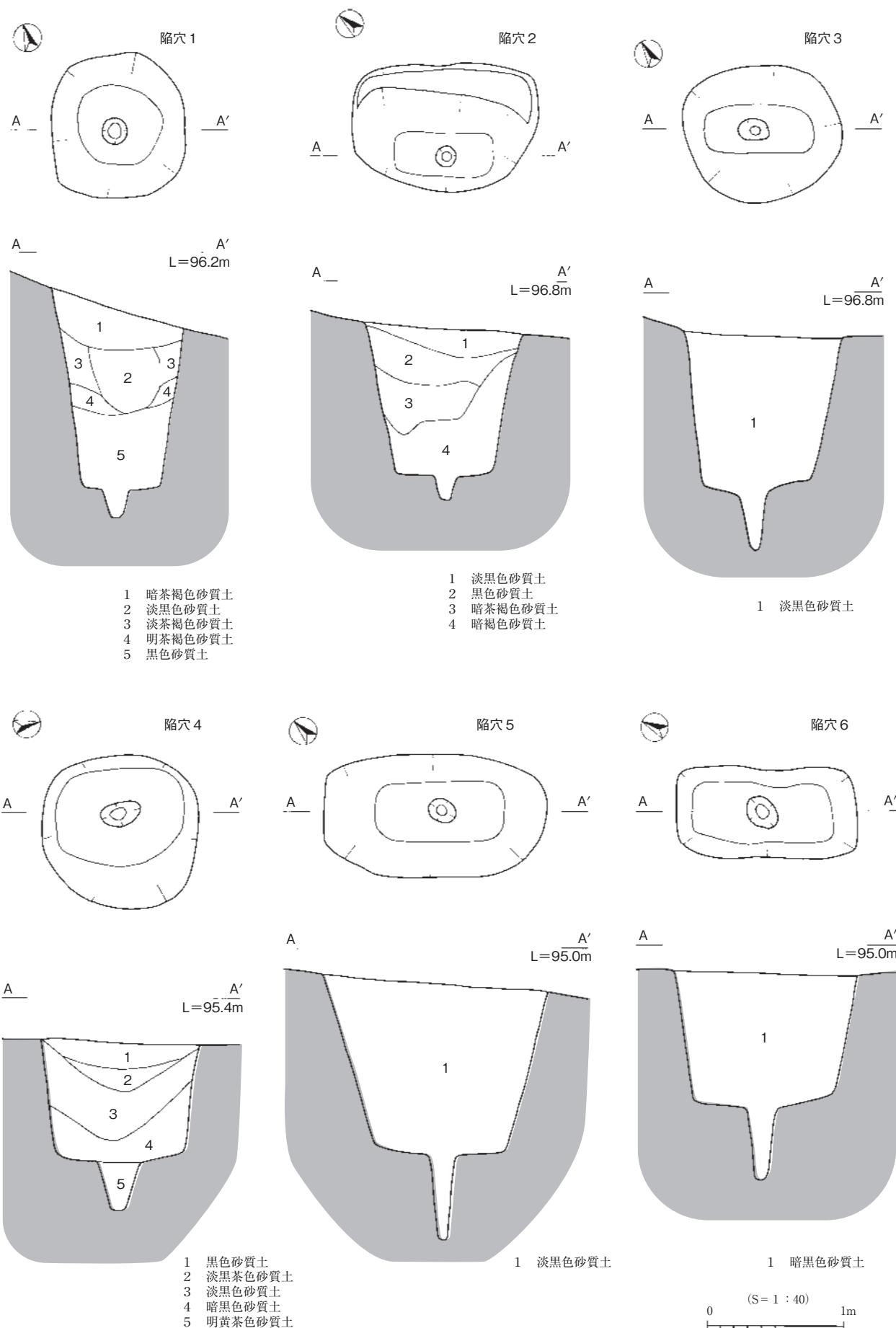
越敷山141号墳の南に位置する長楕円形の土坑で、地山面まで掘り下げて検出した。土坑の規模は、長径1.65m、短径90cm、深さ1.3mであり、底部中央の小穴は、直径20cm、深さ60cmを測る。

陥穴6（第114図）

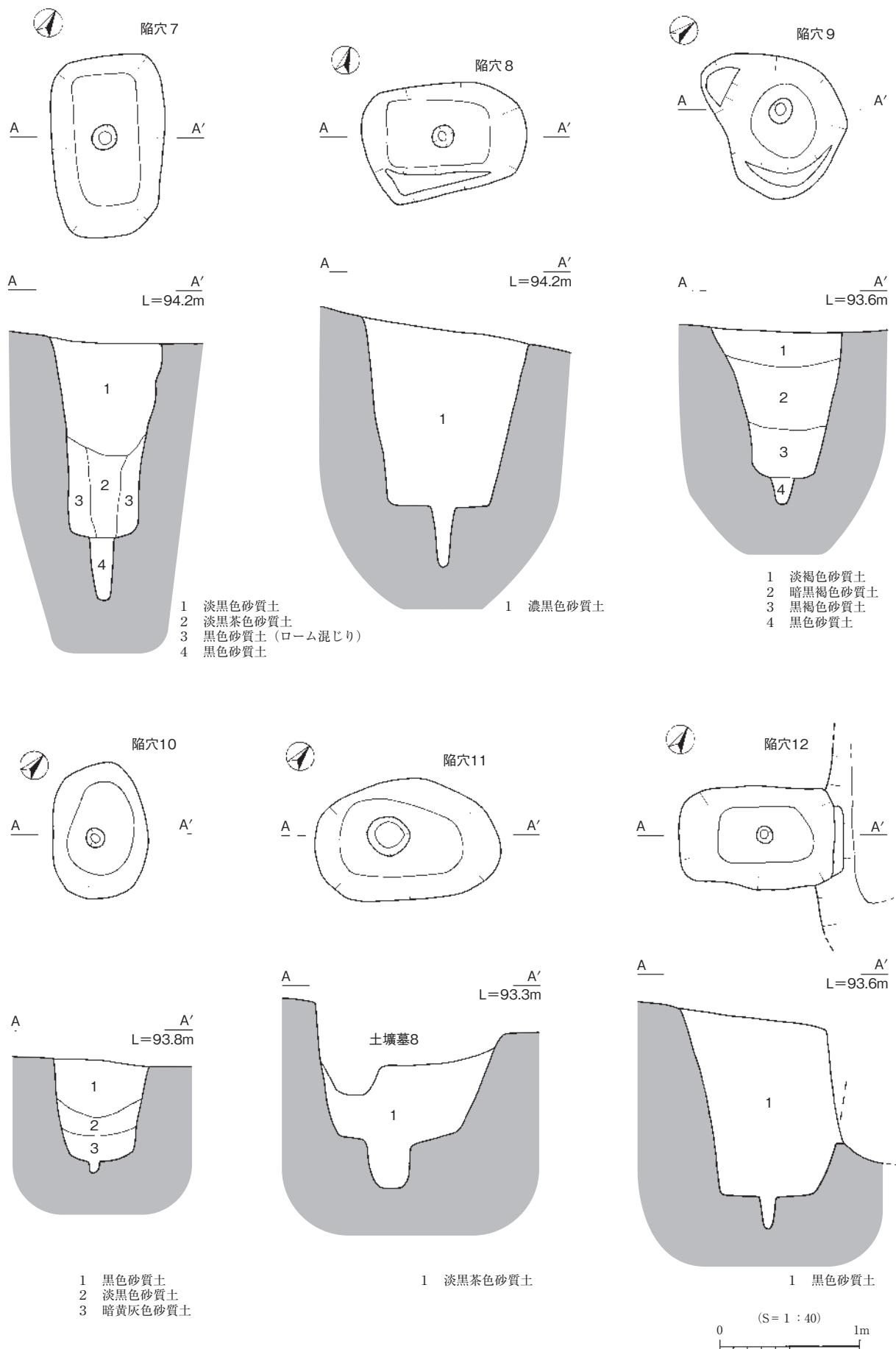
越敷山142号墳の南に位置する長方形の土坑で、標高94.8mの地山面まで掘り下げて検出した。土坑の規模は、長辺1.3m、短辺65cm、深さ1mを測る。底部の小穴は、直径20cm、深さ55cmである。

陥穴7（第115図）

越敷山137号墳の下層を地山面まで掘り下げて検出した、長方形の土坑である。土坑の規模は、長辺1.3m、短辺80cm、深さ1.4mを測り、底部の小穴は、直径17cm、深さ45cmである。



第114図 陷穴1～6 遺構図



第115図 陷穴7～12 遺構図

陥穴8（第115図）

越敷山137号墳周溝西側を、標高94m付近の地山面まで掘り下げて検出した長方形の土坑である。遺構の規模は、長辺1.2m、短辺80cm、深さ1.4mを測り、底面の小穴は、直径15cm、深さ45cmである。

陥穴9（第115図）

越敷山79号墳の周溝内、南隅部の標高93.2m付近で検出した、不整円形の土坑である。検出面の直径は0.8～1m、底面の直径は45cm、深さは1mを測り、底面の中央に掘られた小穴は、直径15cm、深さは20cmを測る。

陥穴10（第115図）

越敷山79号墳の西側墳丘斜面で検出した、楕円形の土坑である。長径1m、短径70cm、深さ75cmを測る。底部中央の小穴は、直径14cm、深さ8cmである。

陥穴11（第115図）

越敷山79号墳と133号墳を隔てる周溝内で検出した、楕円形の土坑である。半裁した土師器甕を蓋に転用した土壙墓8と切り合っているため、土坑の中位までは攪乱されている。遺構の規模は、検出面で長径1.3m、短径90cm、深さ1mを測る。土坑の底面には直径30cm、深さ30cmの小穴が掘られている。

陥穴12（第115図）

越敷山133号墳の墳丘上、標高93.5m付近で検出した、長1.2m、短辺75cm、深さ1.3mの長方形土坑である。遺構の東側は、古墳の周溝によって大きく削平されている。土坑の底面中央に掘られた小穴は、直径10cm、深さ20cmを測る。

陥穴13（第116図）

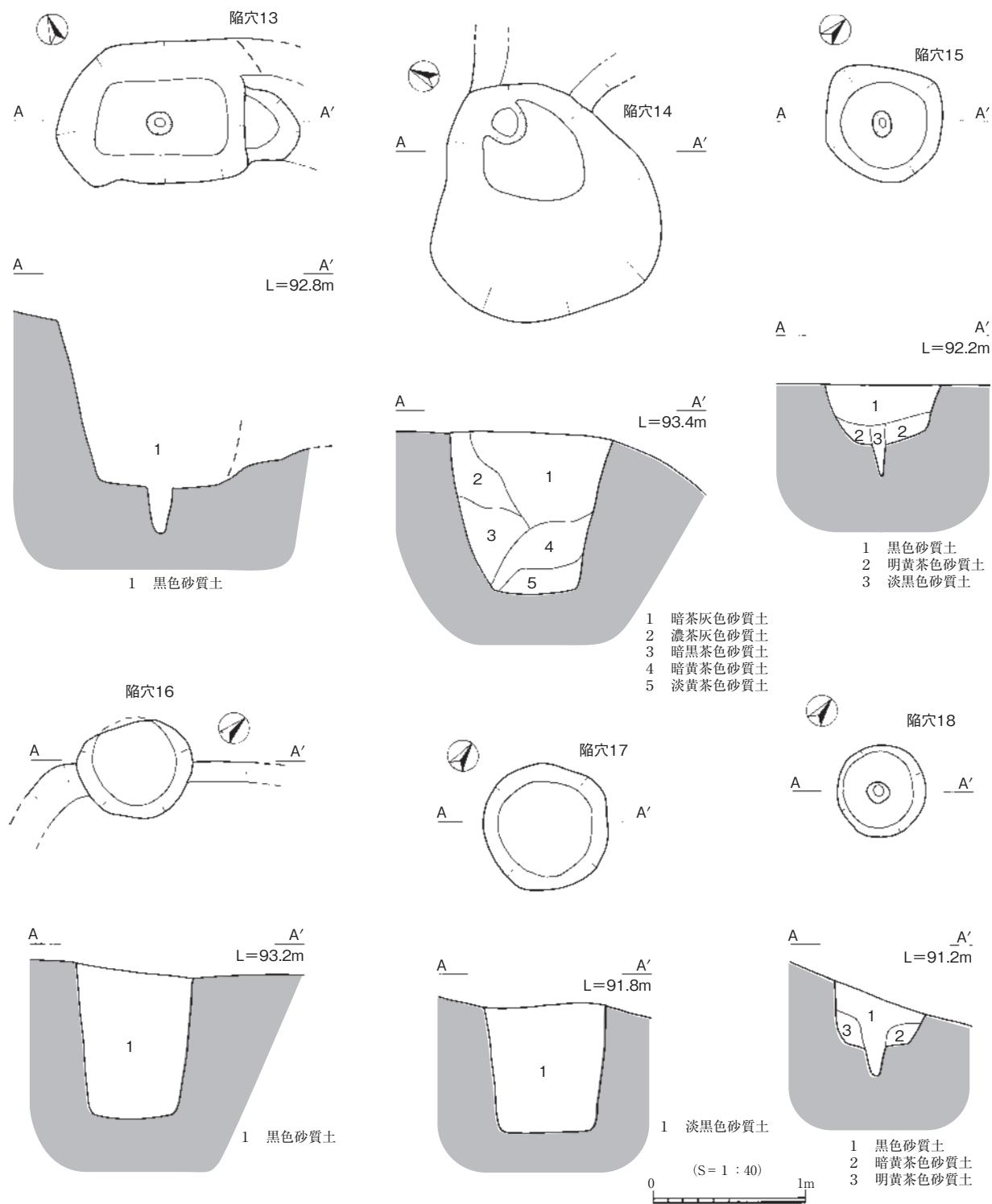
越敷山80号墳の墳丘内で検出した、楕円形の土坑である。石室の掘形によって、遺構の東側が削平されているが、長辺1.3m以上、短辺90cm、深さ1m以上の規模と推測される。土坑底面の小穴は、直径15cm、深さ30cmである。

陥穴14（第116図）

越敷山79号墳の東側周溝内、標高93.3m付近で検出した、直径1.5m前後と推測される不整円形の大型土坑である。土坑の東側は、越敷山132号墳の周溝によって削平されている。深さは1mで、土坑の底面東端部に直径30cm、深さ15cmの小穴が掘られている。

陥穴15（第116図）

越敷山71号墳の墳丘西側の斜面で検出した、直径80cmを測る不整円形の土坑である。越敷山71号墳の造成により、地山面が大きく掘削されているため現存する深さは40cmである。



第116図 陥穴13~18 遺構図

陥穴16（第116図）

越敷山71号墳の墳丘中央部の盛土を除去した後の地山面で検出した、円形の土坑である。土坑の東側は、越敷山71号墳1主体部の墓壙掘形によって一部が削平されている。土坑の規模は、直径70cm、深さ1mで、底面に小穴は見られなかった。土坑内の埋土は、クロボクに類似した黒色砂質土が堆積している。

陥穴17（第116図）

越敷山71号墳の墳丘西側の斜面、標高91.6m付近で検出した、円形の土坑である。検出面の直径は80cm、深さ80cmを測るが、土坑の底面に小穴は見られない。土坑内の埋土は、クロボクに類似した淡黒色の砂質土が堆積しており、柱などを立てた痕跡が認められなかったことから、縄紋時代の陥穴と推測した。

陥穴18（第116図）

越敷山71号墳の墳丘北側の斜面、標高91m付近で検出した、直径60cmの円形土坑である。越敷山71号墳の造成により地山面が大きく掘削されているため、現存する深さは40cmとやや浅くなっている。遺構の底面に、直径10cm、深さ30cmの小穴が掘られていることから、縄紋時代の陥穴と推測した。

陥穴19（第117図）

越敷山130号墳と149号墳の間の緩斜面、標高95.5m付近で検出した、不整円形の土坑である。遺構の規模は、直径80cm、深さ1mを測るが、底面には小穴は見られない。

陥穴20（第117図）

溝状遺構2の東側、標高85m付近で検出した、円形の土坑である。遺構の規模は、直径1.1m、深さ1.2mで、底面中央には、直径20cm、深さ25cmの小穴が掘られている。

陥穴21（第117図）

越敷山149号墳の東斜面、標高84.7m付近で検出した円形の土坑である。遺構の規模は、直径80cm、深さ90cmを測るが、底面に小穴は見られない。

陥穴22（第117図）

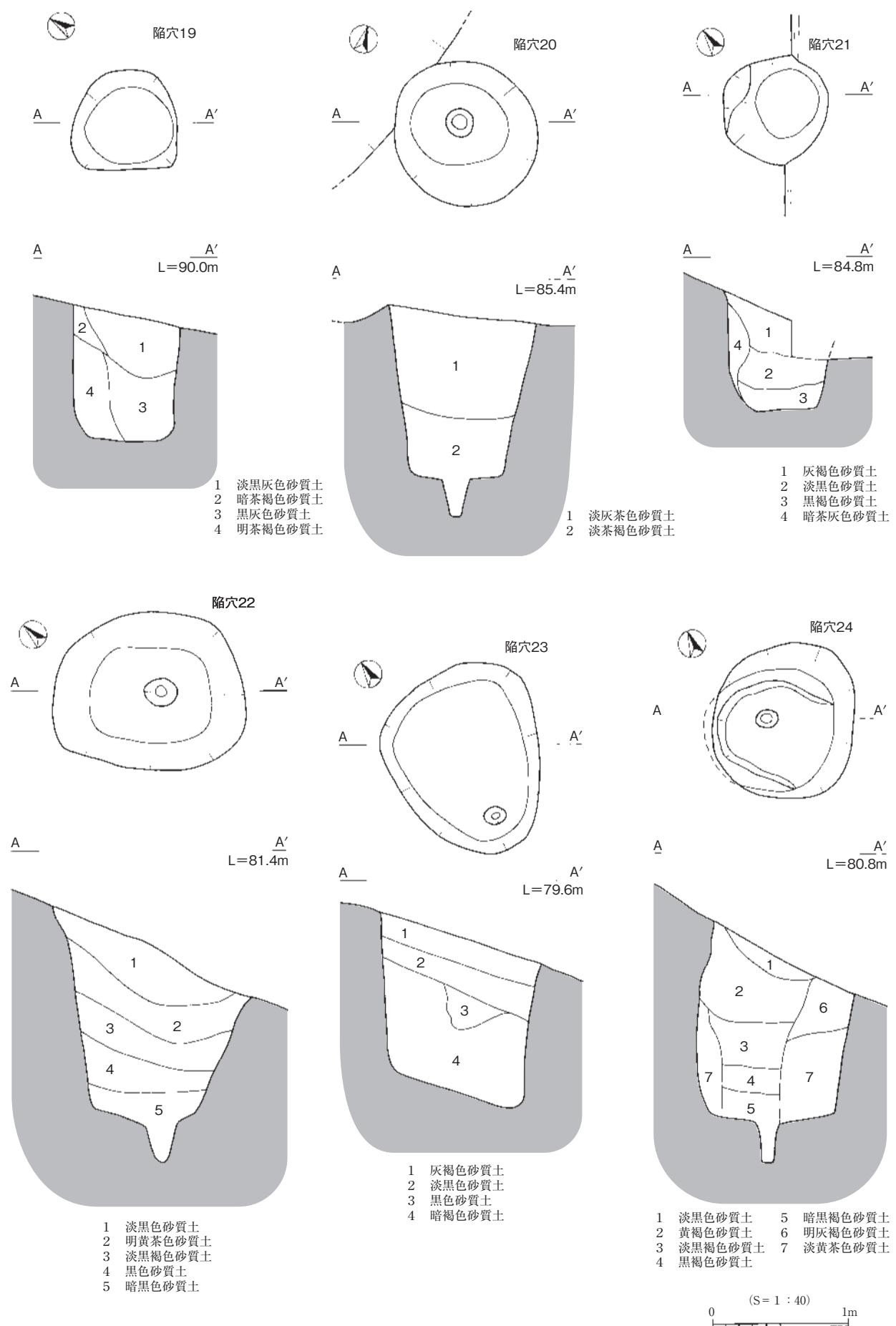
C-10区の標高80m付近で検出した橢円形の土坑である。遺構の規模は、長径1.4m、短径1.1m、深さ1.5mを測り、底面には直径20cm、深さ30cmの小穴が掘られている。

陥穴23（第117図）

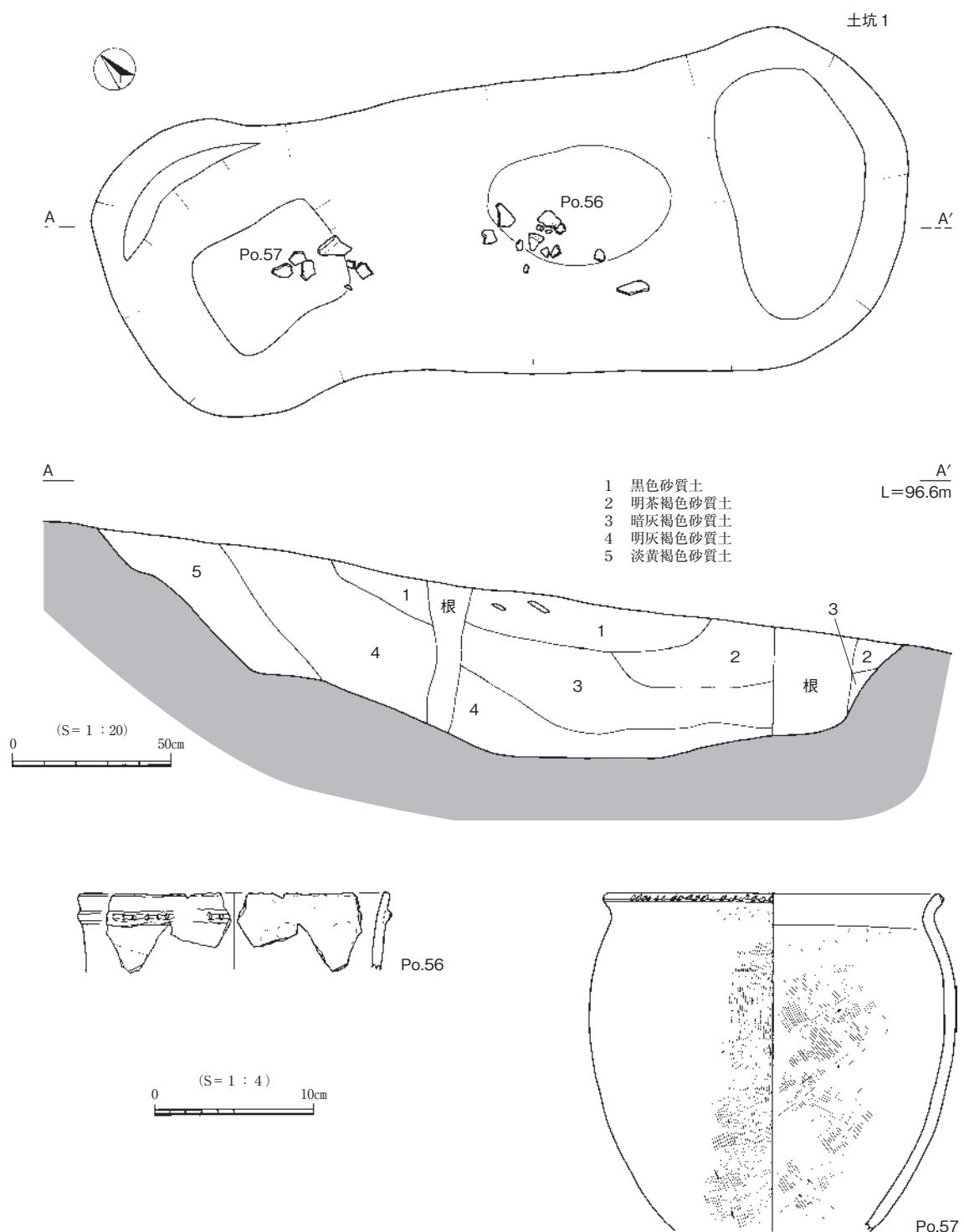
C-1区の標高80m付近で検出した不整円形の土坑である。遺構の規模は、検出面で1.1～1.4m、深さ1.2mを測り、底面は傾斜している。底面の南端には、直径10cm、深さ10cmほどの小穴が掘られている。

陥穴24（第117図）

C-2区の標高80m付近で検出した、直径1.1mの円形土坑である。深さは1.5mで、底面の中央には、直径10cm、深さ30cmの小穴が掘られている。陥穴22～24は、10m程の間隔をおいて同一の標高に配置されているが、全ての土坑の形態が異なることから、同時期に掘削されたものではないと考えられる。



第117図 陷穴19~24 遺構図

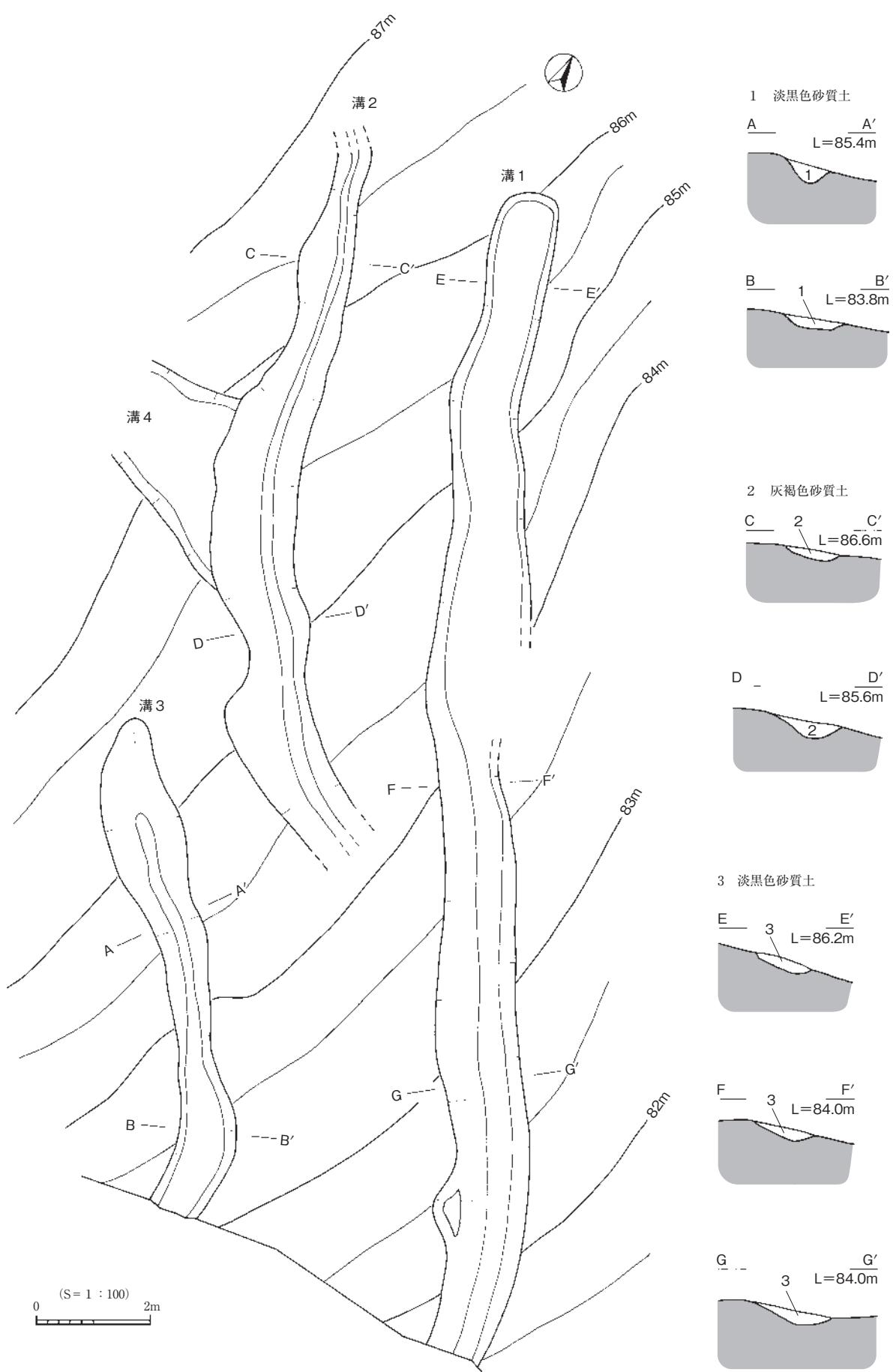


第118図 土坑 1 遺構・遺物図

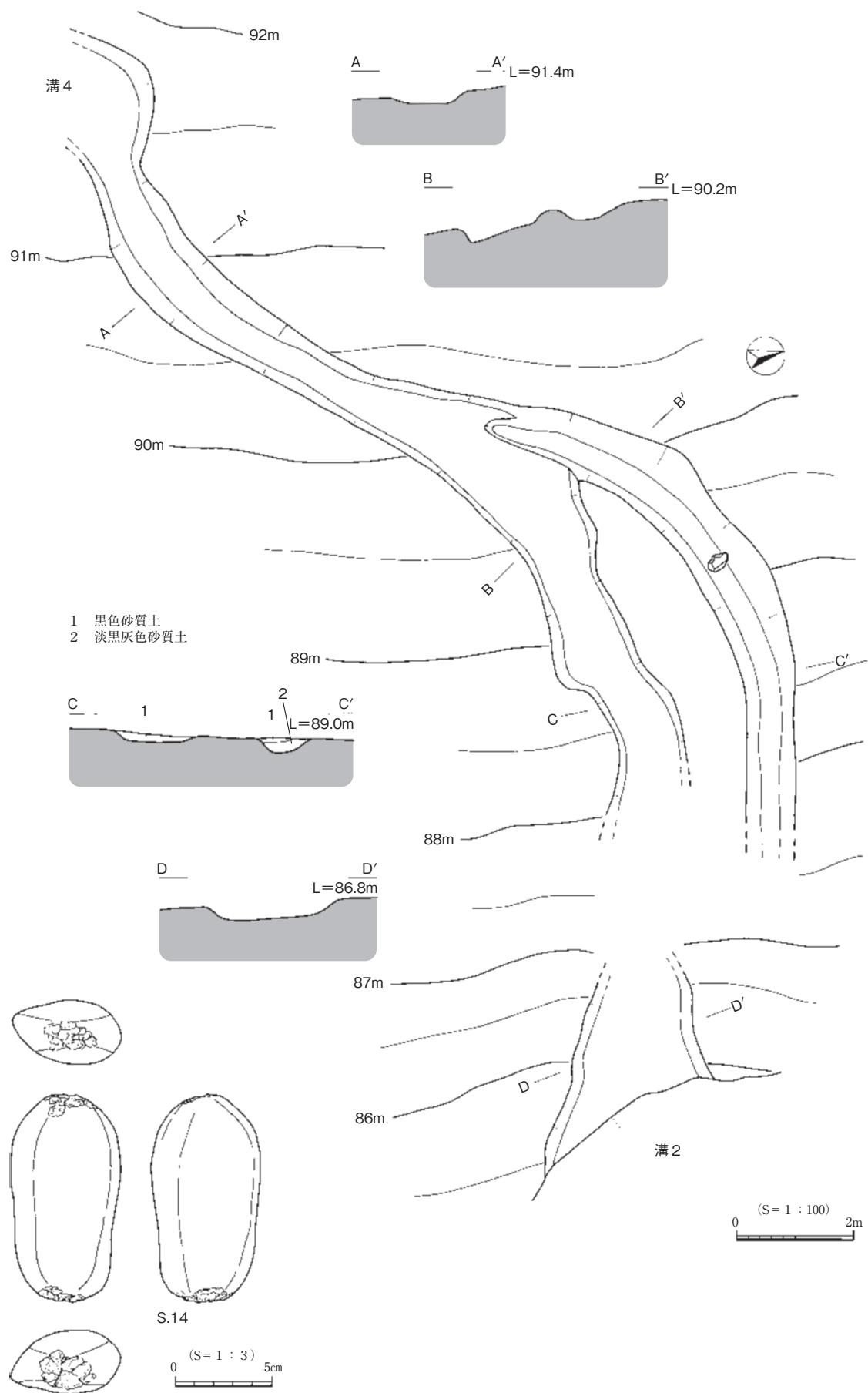
土坑 1 (第118図)

越敷山145号墳東側の斜面で検出した、長径2.5m、短径1m、深さ50cmの橢円形土坑である。この遺構に伴う遺物は、埋土の上層から突帯紋土器と甕の破片が出土した。

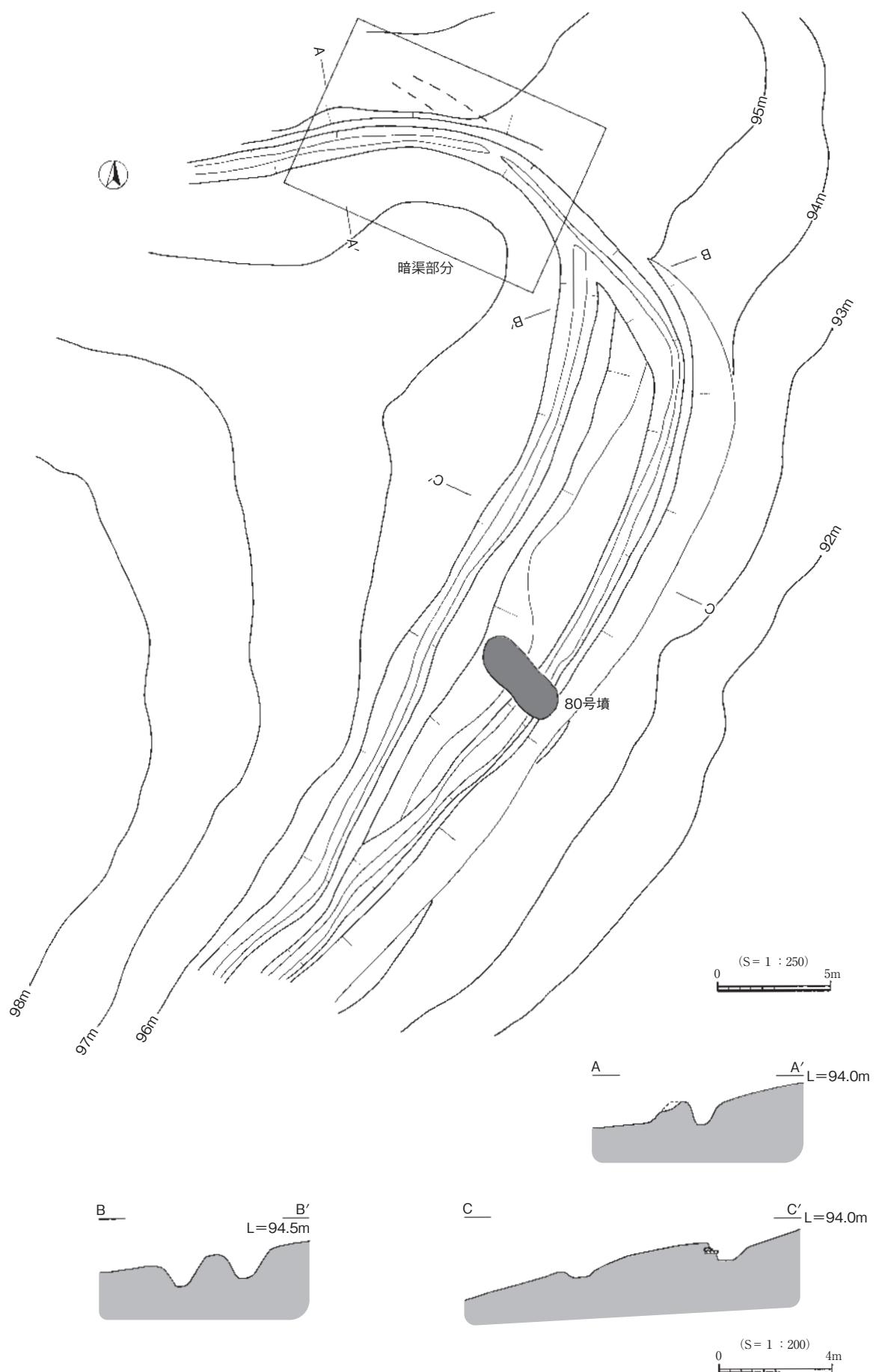
Po. 56は、口縁が真っ直ぐ外方に立ち上がり、口縁端部から少し下がった位置に突帯を貼り付ける。貼り付けられた突帯には、刺突が施されている。Po. 57は、復元口径20.9cmの弥生土器の甕である。口縁部は「く」字形に緩やかに外反し、端部に右上がりの刺突紋を施す。この遺構の性格については、周辺に同時代の遺構が存在しないことから不明である。



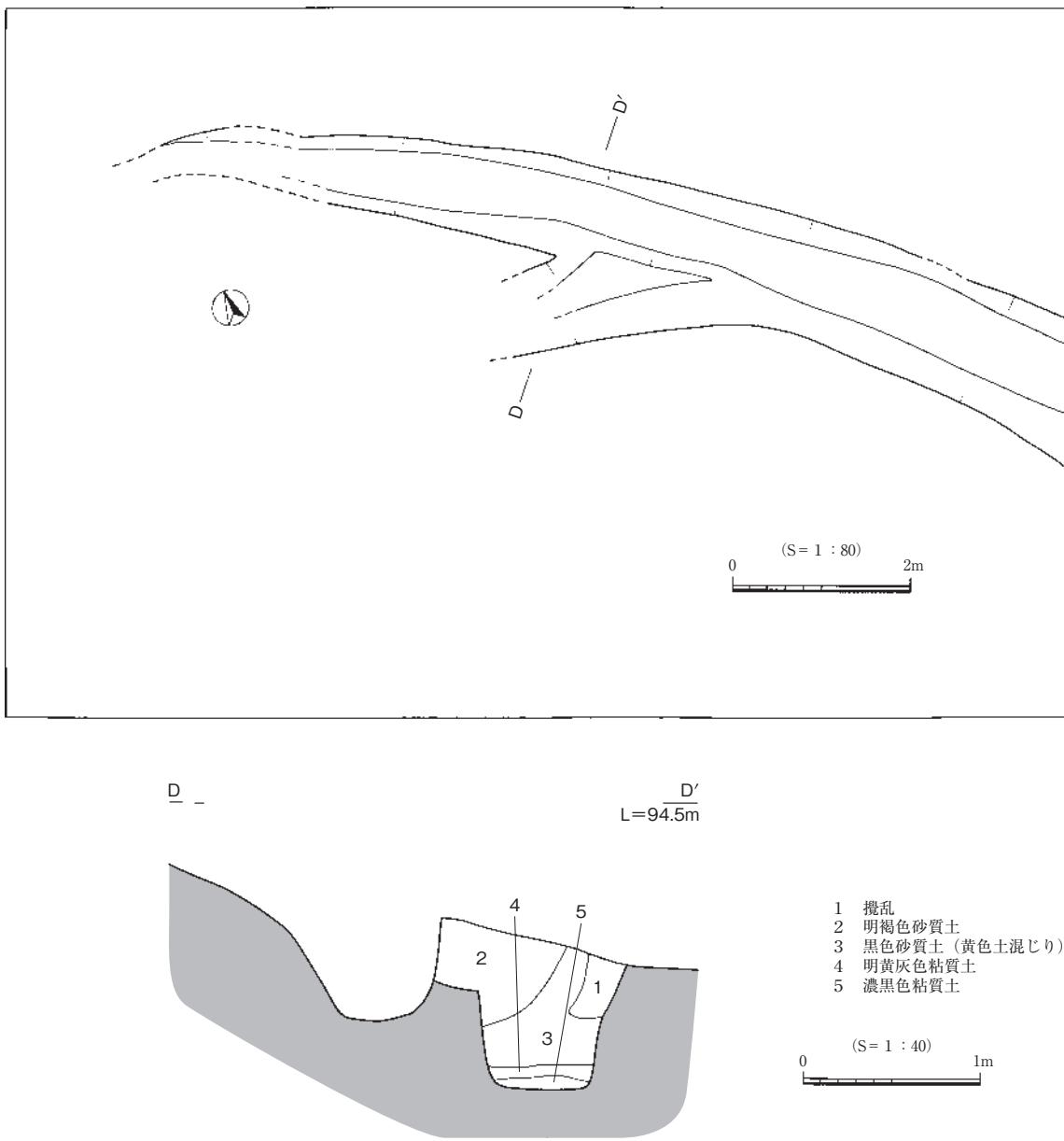
第119図 溝1～3 遺構・遺物図



第120図 溝4 遺構・遺物図



第121図 墓塚 遺構図



第122図 淫壕（暗渠部分）遺構図

溝1（第119図）

2-E区で検出した、長さ8.8m、幅0.5~1.4m、深さ20cmの溝状遺構である。溝の埋土は、やや締まりのない淡黒色砂質土が堆積している。

溝2（第119図）

溝1の北東部で検出した、現存する長さ12m、幅0.5~1.5m、深さ20cmの溝状遺構である。溝の中央部西側は溝4と接続するが、遺構の切り合いは認められなかった。

溝3（第119図）

溝2の東側で検出した、長さ21m、幅1~1.5m、深さ20cmの溝状遺構である。

溝4（第120図）

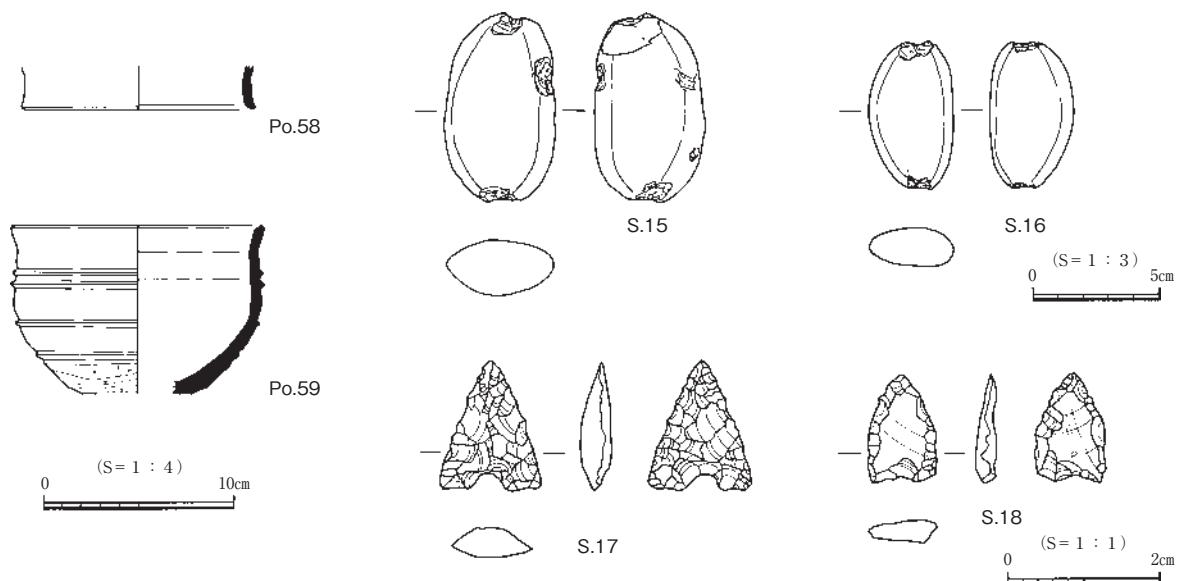
溝2から西側の斜面上へと伸びる溝である。途中で二又に分岐するが、切り合い関係ははっきりしなかった。この遺構に伴う遺物は、埋土中から楕円形礫の両端部を敲打した珪岩製の叩石が出土した。これら溝状遺構の性格については、古墳時代以降に造られた、斜面を登るための道路と推測される。

塹壕（第121・122図）

塹壕は、越敷山71号墳と79号墳の間から馬蹄形に伸びる溝状の遺構である。調査前からその存在は認識されていたが、当初は伐採した木を運ぶための道路と推測していた。しかし、カーブがきつく、あまりにも深いため、長尺の木を運ぶのは不可能であり、人が通るための道としても幅が狭く不自然な状況であった。調査着手後に表土を掘削したところ、埋土は腐葉土が主体で大半が完全には埋まりきっていない状況であることから古い時代の遺構でないことは明白であった。このため、周辺での情報を探索したところ、アジア・太平洋戦争の末期に連合国軍との本土決戦に備えて、鳥取県内の各地に海岸防衛線として塹壕が掘られていたことから、この溝状の遺構が敵の動きを監視し、兵員の移動を行うために掘削された塹壕（交通壕）と推測した。

検出した遺構は、全長58m、上面で幅1～2m、下面の幅は0.5m、深さは0.5～1m程度である。越敷山71号墳と79号墳の中間点では東西方向に分岐して2条に分かれているが、この地点は40cmほど深く掘り込まれており、下層の濃黒色粘質土の上に明黄灰色粘質土を敷き詰めることで、更に南に伸びる塹壕の底面とレベルを合わせている。この分岐点から東南側に伸びる塹壕は、斜面下側に盛土が無く、越敷山80号墳の羨道部付近では溝状ではなく道路状になっていることから、塹壕の構築途中で放棄された可能性がある。また、分岐点から北西方向に伸びる塹壕は完全に埋められ、更に土壘が盛られていたことから、雨水が溜まらないように浸透させる工夫が凝らされていたと考えられる。

塹壕の壁面に複数の古墳の石棺が露出しているが、完全に石蓋まで開けて中を盗掘した痕跡が見られないことから、塹壕の構築作業が優先されたものと考えられる。当時の記録では、越敷山での陣地構築は主に日野郡の義勇隊が日帰りと夜勤の二交代制で担当しており、昭和20年の5月頃から8月の終戦間際までの短期間で陣地構築が進められたことが判明している。



第123図 金廻芦谷平遺跡 遺物図

第4節 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物は、須恵器片と数点の石器である。これまでに調査した越敷山麓の遺跡と比較して出土点数が少ないが、当該遺跡が集落などの生活空間ではなかったためと考えられる。

Po. 58は、復元口径13cmの須恵器壺蓋の口縁部片。Po. 59は、底部外面を手持ちヘラケズリする須恵器の鉢である。接合面を欠くが、取手付きの鉢と推測される。S. 15は、重量74.9gのデイサイト製の打欠石錘。S. 16は、重量41.8gの頁岩製の打欠石錘である。S. 17とS. 18は、黒曜石製の石鎌である。

第3章 自然科学分析等

第1節 越敷山古墳群における顔料分析（株式会社古環境研究所）

1. はじめに

伯耆町金廻・坂長地区に所在する越敷山古墳群より出土した赤色顔料について蛍光X線分析を行い、顔料の種類を検討した。

2. 試料と方法

分析対象は、各遺構より出土した赤色顔料計3点である（表1）。実体顕微鏡下で、セロハンテープに赤色部分を極少量採取して分析試料とした。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000TypeⅡを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が100μmまたは10μm、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪い。

本分析での測定条件は、50kV、0.36～0.78mA（自動設定による）、ビーム径100μm、測定時間500sに設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（FP法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

さらに、蛍光X線分析用に採取した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認した。

3. 結 果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を図1に示す。

試料Aからは、ケイ素（Si）、硫黄（S）、鉄（Fe）、水銀（Hg）が検出された。

試料Bからは、アルミニウム（Al）、ケイ素、硫黄、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、鉄が検出された。

試料Cからは、アルミニウム、ケイ素、硫黄、カリウム、カルシウム、チタン、マンガン（Mn）、鉄が検出された。

また、生物顕微鏡観察により得られた画像を写真図版74の1に示す。赤色パイプ状粒子は観察されなかった。

4. 考 察

赤色顔料の代表的なものとしては、朱（水銀朱）とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀（HgS）で、鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄（ Fe_2O_3 、鉱物名は赤鉄鉱）を指すが、広義には鉄（Ⅲ）の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬、

表1 分析結果一覧

試料	出土位置
A	70号墳出土人骨付着
B	131号墳石棺材
C	131号墳周溝の底

2004)、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約1 μm のパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリア起源であると判明しており(岡田、1997)、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す(成瀬、1998)。鉄バクテリア起源のパイプ状粒子は、湿地などで採集できる。

今回分析した試料のうち、試料Aは水銀と硫黄が多く検出されたことから、赤色顔料は水銀朱であったといえる。

試料B、Cは、ケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。鉄がかなり多く検出されており、赤い発色は鉄によるものであると推定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたる。パイプ状粒子は観察されず、いわゆるパイプ状ベンガラではなかった。

5. まとめ

赤色顔料について分析した結果、試料Aからは水銀と硫黄が多く検出され、顔料は水銀朱と判明した。試料B、Cからは、鉄が多く検出され、鉄(Ⅲ)による発色と推定された。顔料としてはベンガラにあたる。

引用文献

- 成瀬正和(1998)縄文時代の赤色顔料I—赤彩土器—、考古学ジャーナル、438、10-14、ニューサイエンス社。
成瀬正和(2004)正倉院宝物に用いられた無機顔料。正倉院紀要、26、13-61、宮内庁正倉院事務所。
岡田文男(1997)パイプ状ベンガラ粒子の復元。日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集、38-39。

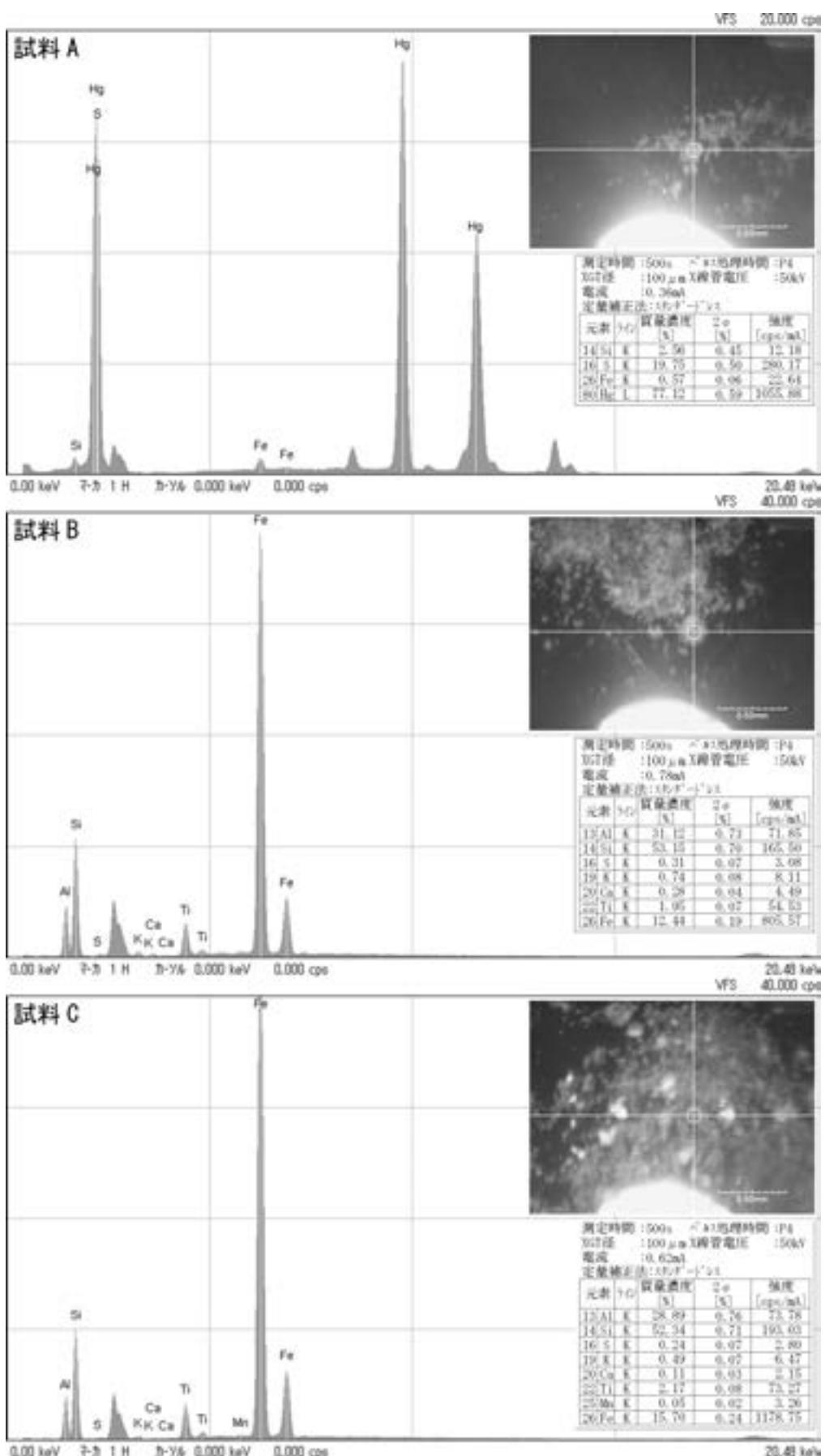


図1 赤色顔料の蛍光X線分析結果

第2節 越敷山古墳群出土ガラス玉の成分分析（株式会社古環境研究所）

1. はじめに

越敷山古墳群は、鳥取県西部の伯耆町と南部町に広がる越敷山丘陵に分布する。ここでは、伯耆町に所在する越敷山79号墳と越敷山131号墳より出土したガラス玉について、蛍光X線分析による元素分析を行い、材質の検討を行った。

2. 試 料

分析対象は、79号墳の周溝内から出土した青緑色ガラス玉（G. 1）と、131号墳の石棺（SX44）の棺内下層より出土した青緑色ガラス玉（G. 2）の計2点である（表1）。古墳の時期は、中期前半頃とみられている。

表1 分析対象一覧

分析No.	色調	試料No.	出土位置
1	青緑	115	79号墳東周溝内
2	青緑	145	131号墳石棺墓SX44棺内下層

3. 方 法

分析装置はエスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1000μAのロジウム（Rh）ターゲット、X線照射径が8mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器である。また、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することでS/N比の改善を図ることができ。検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）であるが、ナトリウム、マグネシウム（Mg）、アルミニウム（Al）といった軽元素は、蛍光X線分析装置の性質上検出感度が悪い。

測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが15kV（一次フィルタ無し）・50kV（一次フィルタPb測定用・Cd測定用）の計3条件で、測定時間は各条件500～1700s、管電流自動設定、照射径1mm、試料室内雰囲気真空に設定した。定量分析は、酸化物の形で算出し、ノンスタンダードFP法による半定量分析を行った。得られる半定量値は、同装置での測定結果を相対的に比較するための値である。

測定は、試料をエタノールで軽く洗浄し、実体顕微鏡下での観察後、非破壊で実施した。なお、ガラス製遺物は、透明で風化がないように見える箇所でも表面の風化が進んでおり、酸化ナトリウム（NaO₂）、酸化カリウム（K₂O）の減少など化学組成に変化が生じている（肥塚、1997）。人為的に露出させた完全な新鮮面でない場合は、解釈の際に風化の影響を考慮する必要がある。

4. 分析結果

実体顕微鏡観察では、ガラス中に気泡が多くみられた（写真図版73の2）。蛍光X線分析により得られた半定量値を表2に示す。

表2 半定量分析結果 (mass %)

分析No.	色調	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	Br	SrO	ZrO ₂	SnO ₂	BaO	PbO
1	青緑	2.26	0.36	10.15	78.13	0.36	0.15	1.34	2.36	0.61	0.06	1.61	1.66	—	0.09	0.13	0.08	0.34	0.31
2	青緑	—	0.49	10.73	73.71	0.64	0.35	1.87	4.98	0.90	0.10	1.86	1.56	0.01	0.12	0.16	0.19	1.68	0.64

分析の結果、ガラス玉はいずれもアルカリ金属と二酸化ケイ素 (SiO_2) を主成分とするアルカリ珪酸塩ガラスに属するガラスであった。

検出できた元素は試料によって若干異なるが、酸化ナトリウム (NaO_2) と、酸化マグネシウム (MgO)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、二酸化ケイ素 (SiO_2)、酸化リン (P_2O_5)、酸化硫黄 (SO_3)、酸化カリウム (K_2O)、酸化カルシウム (CaO)、酸化チタン (TiO_2)、酸化マンガン (MnO)、酸化鉄 (Fe_2O_3)、酸化銅 (CuO)、臭素 (Br)、酸化ストロンチウム (SrO)、酸化ジルコニウム (ZrO_2)、酸化スズ (SnO_2)、酸化バリウム (BaO)、酸化鉛 (PbO) の合計18元素である。

5. 考 察

実体顕微鏡観察では、2点とも孔に平行な気泡列（引き伸ばし法）など、技法を推定できるような特徴が確認できず、製作方法は不明であった。古代のガラスについては、肥塚（1997など）により、材質を中心に研究がなされてきた。近年、中井・阿部ら（白瀧ほか、2012など）、田村（2013など）、大賀（大賀ほか、2015など）により、さらに詳細な分類がなされている。

今回分析した2点は、酸化アルミニウム (Al_2O_3) の量が多く、酸化カルシウム (CaO) をある程度含有し、酸化ルビジウム (Rb_2O) が検出されず、酸化ストロンチウム (SrO) と酸化ジルコニウム (ZrO_2) が比較的多いなどの特徴がみられた。以上のことから、基礎ガラスはアルミナソーダ石灰ガラス ($\text{Na}_2\text{O}\text{-}\text{Al}_2\text{O}_3\text{-}\text{CaO}\text{-}\text{SiO}_2$ 系) に属すると考えられる。色は、主に銅イオンと鉄イオンによる着色と考えられる。青緑色ガラス玉は、酸化銅 (CuO) に加えて酸化スズ (SnO_2) や酸化鉛 (PbO) も少量検出される傾向があり（肥塚、1997）、今回分析した試料にもその傾向がみられた。

6. まとめ

越敷山79号墳と131号墳より出土したガラス玉2点について、蛍光X線分析による材質分析を行った。その結果、ガラス玉はいずれもアルカリ珪酸塩ガラスと判明した。さらに、化学組成の特徴からアルミナソーダ石灰ガラスに属する可能性が高いと判断された。

引用・参考文献

- 肥塚隆保（1997）日本で出土した古代ガラスの歴史的変遷に関する科学的研究。132p、東京藝術大学博士学位論文。
- 肥塚隆保（2003）日本出土ガラスから探る古代の交易—古代ガラス材質の歴史的変遷—。沢田正昭編「遺物の保存と調査」：145–158、クバプロ。
- 中井 泉編（2005）蛍光X線分析の実際。242p、朝倉書店。
- 大賀克彦・田村朋美（2015）弥生時代後期におけるガラス玉の地域性に関する考古科学的研究。日本文化財科学会 第32回研究発表要旨集、24–25。
- 作花清夫・境野照雄・高橋克明編（1975）ガラスハンドブック。1072p、朝倉書店。
- 白瀧絢子・阿部善也・K.タンタラカーン・中井 泉・池田朋生・坂口圭太郎・後藤克博・荒木隆宏（2012）熊本県出土の古代ガラスの考古化学的研究。考古学と自然科学、63、29–52。
- 田村朋美（2013）日本出土インド・パシフィックビーズの化学組成の時期変化に関する研究。日本文化財科学会第30回大会研究発表要旨集、74–75。
- 山根正之（1989）はじめてガラスを作る人のために。195p、内田老鶴園。

第3節 越敷山古墳群出土鏡の分析（公益財団法人元興寺文化財研究所）

1. 分析対象

越敷山古墳群出土鏡 2点（B. 1珠文鏡（図1）、B. 2内行花文鏡（図2））

2. 分析内容

エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて鏡の定性成分分析を行った。

3. 使用機器および方法

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（XRF）【株日立ハイテクサイエンスEA6000VX】

試料にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。

ロジウム（Rh）のX線管球を用いて、コリメータ□ $0.5 \times 0.5\text{mm}$ 、管電圧50kVで180秒間測定した。

4. 結果と考察

越敷山古墳群出土鏡 2点をそれぞれXRFにて成分分析した。

分析の結果、B. 1珠文鏡表面に付着した赤色顔料部分からは鉄(Fe)、銅(Cu)、スズ(Sn)、鉛(Pb)を検出した（図3）。地金部分からも同様の元素を検出したが、鉄のピークは赤色顔料部分に比べて弱かった（図4）。したがって、B. 1珠文鏡は青銅製で、表面に酸化鉄（べんがら）の赤色顔料が付着していたと考えられた。

また、B. 2内行花文鏡からは鉄、銅、銀(Ag)、スズ、鉛を検出した（図5）ため、青銅製であると考えられた。

（文責 川本耕三）

5. 分析データ

[分析箇所]

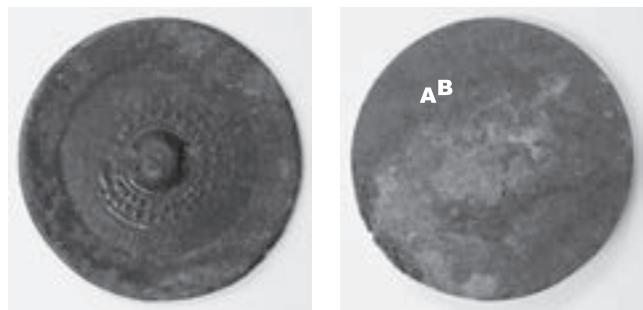


図1 越敷山古墳群出土珠文鏡（B. 1）の分析箇所



図2 越敷山古墳群出土内行花文鏡（B. 2）の分析箇所

[蛍光X線分析スペクトル]

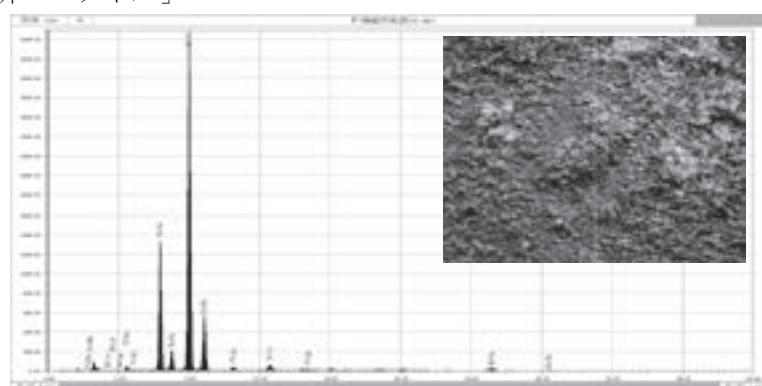


図3 B. 1珠文鏡鏡面赤色部（分析箇所A）の蛍光X線分析スペクトル

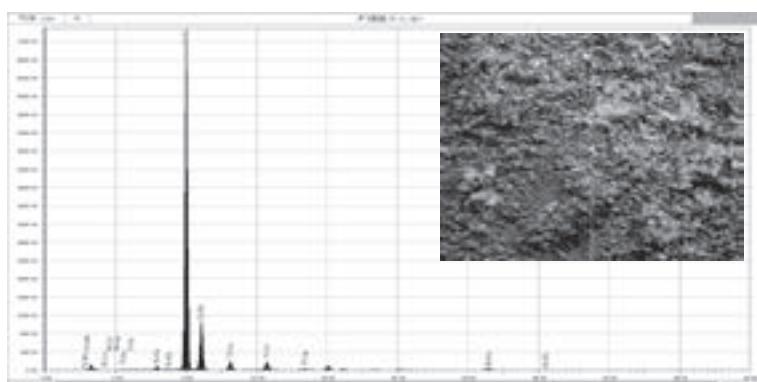


図4 B. 1珠文鏡鏡面（分析箇所B）の蛍光X線分析スペクトル

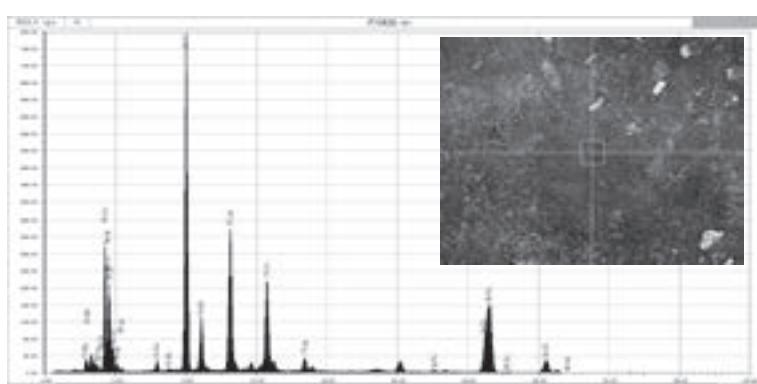


図5 B. 2内行花文鏡鏡面（分析箇所C）の蛍光X線分析スペクトル

第4節 越敷山80号墳における樹種同定（株式会社古環境研究所）

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。本報告では、越敷山80号墳で出土した炭化材について、木材組織の特徴から樹種同定を行う。

2. 試料と方法

試料は、越敷山80号墳の周溝内より出土した炭化材1点である。

樹種同定の方法は、次のとおりである。まず、試料を割り折りして新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面を作製した。同定は、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察し、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結 果

表1に結果を示し、顕微鏡写真を写真図版74の3に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

・コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。以上

表1 越敷山80号墳における樹種同定結果

特徴からコナラ属コナラ節に同定される。

遺跡名	遺構名	遺物	結果（学名／和名）
越敷山80号墳	周溝	炭化材	<i>Quercus sect. Prinus</i> コナラ属コナラ節

4. 所 見

同定の結果、越敷山80号墳の周溝内より出土した炭化材は、コナラ属コナラ節であった。温帯を中心に広く分布する落葉広葉樹で、日当たりの良い山野に生育する。コナラ属コナラ節には、ミズナラなどの冷温帶落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帶性のナラガシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。二次林化していたことも予想され、本試料はコナラである可能性が高い。コナラ属コナラ節の木材としての特徴は、弾力に富む強い材であり、建築材としても用いられる。本試料は焼き膨れが著しいものの比較的硬質であり、製炭された木炭である可能性が高い。なお、製炭は一般的には律令期からとみられている。

参考文献

- 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学、雄山閣、p. 449。
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造、文永堂出版、p. 49–100。
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p. 296。
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号

第5節 越敷山80号墳における放射性炭素年代測定（株式会社古環境研究所）

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、越敷山80号墳の構築年代を検討する目的で、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料は、越敷山80号墳の周溝内より出土した炭化材1点である。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）で測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

試料名	試料の詳細	種類	前処理・調整	測定法
No.1	80号墳周溝内	炭化材	超音波洗浄、酸—アルカリ—酸洗浄	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3. 測定結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。また、図1には暦年較正結果を示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表2 測定結果

試料名	測定No. (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (年BP)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦) 1σ (68.2%確率)	暦年代 (西暦) 2σ (95.4%確率)
No.1	28245	-25.81 ± 0.13	1020 ± 19	1020 ± 20	cal AD 995–1024 (68.2%)	cal AD 987–1030 (95.4%)

BP : Before Physics (Present)、AD : 紀元

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (年BP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の

宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴Cの半減期5730±40年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所 見

越敷山80号墳構築年代に関する資料を得る目的で、加速器質量分析法（AMS法）により放射性炭素年代測定を行った。その結果、周溝内より出土した炭化材は、 1020 ± 20 年BP（2σの暦年代でAD 987～1030年）の年代値であった。越敷山古墳群の構築年代はおよそ1600年前とされることから、試料となった炭化材は後代のものが周溝に混入したものと判断される。

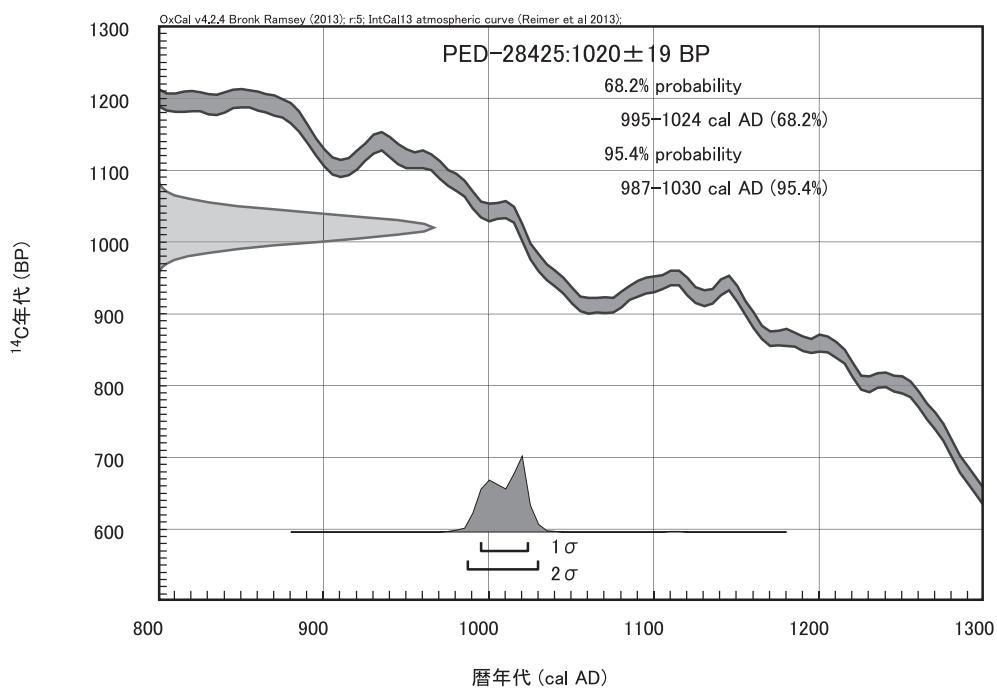


図1 暦年較正結果

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, p. 355–363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」、p. 3–20、日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E. M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869–1887.

第6節 越敷山古墳群から検出された人骨について

井上貴央

1 はじめに

本報告は、鳥取県西伯郡伯耆町の越敷山古墳群から出土した古墳時代中期と考えられる古人骨に関するものである。この古墳群からは平成25年の発掘調査でも人骨が検出され、その概要はすでに報告しているところであるが、このたび新たに4基の箱式石棺から人骨が検出されたので、その概略について報告する。

2 越敷山70号墳 1主体部の人骨

北東～南西に長軸方向を有する箱式石棺で、石棺の蓋を開けると、礫床の上に1体分と思われる人骨がほぼ交連状態を保ちながら検出された。頭蓋骨は石棺の北東端に枕石を伴った状態で検出された。

頭蓋は前頭部から顔面頭蓋に至る部分と、左右の頭頂部が割れたように解離していたが、この解離は人為的なものではなく、骨の風化とともに生じたものであると推察された。前頭部から顔面頭蓋にかけては赤色顔料の付着が認められた。頭蓋の検出状況をみると、顔面頭蓋がほぼ垂直な状態で検出されており、埋葬された遺体がそのまま朽ちたものとは考えられない。伸展仰臥位で埋葬されたままだとすると、頭蓋骨の顔面が床と垂直になることはあり得なく、この頭蓋の頭位は明らかに二次埋葬によるものであると考えられる。頭蓋以外の体幹、上肢、下肢の骨は仰臥伸展位を保った状態で検出されている。

接合した頭蓋骨を見ると、頭蓋骨は右頭頂部から右側頭部の一部、顔面頭蓋の右側の一部、および頭蓋底を欠くが、ほかはほぼ完存している。また、右頬骨片が検出されているが、接合できない。前頭部は膨隆しており、眉間はやや突出しているが眉弓は平坦である。眼窓上縁は鋭である。側頭骨の乳様突起は左右ともに先端を欠くが、大きさは中等度である。

三主縫合を見ると、冠状縫合は外板内板ともに癒合閉鎖が進んでいる。矢状縫合は開離した状態にあるので本来の閉鎖状況は不明であるが、外板は未閉鎖の部分があり、内板では癒合閉鎖をきたしているように見受けられる。人字縫合は、外板は未閉鎖であるが内板では癒合閉鎖が進んでいる。骨口蓋の後半は欠損していて縫合の閉鎖状況は不明であるが、切歯縫合は完全に閉鎖しているようである。

下顎骨は、前部から左下顎頭に至る部分が残存しており、歯牙が釘植している。上顎歯は歯根部分のみが上顎骨に釘植しているが、咬耗によるものかあるいは風化によるものかについては判断できない。下顎歯の咬耗はかなり進んでおり、象牙質が全面にわたって露出している。

歯式は以下の通りであるが、左上顎側切歯には $8 \times 10\text{mm}$ の歯根嚢胞を伴っている。その他に下顎小臼歯片が遊離状態で検出されている。

脱	I ₁	I ₂	C	P ₁	閉	閉
I ₂	I ₁		I ₁	I ₂	C	

頭蓋の下から第1～3頸椎が検出されている。第12胸椎に至る下位胸椎が7個、腰椎片が2個検出されている。右肋骨が4本、左肋骨は5本検出されている。

上肢帯および上肢骨のうち右側では、肩甲骨の一部、上腕骨、橈骨の鉤状突起片が残っている。右肩甲骨は関節窩から肩甲棘にかけての外側角の一部が残っている。右上腕骨は上腕骨頭の大部分と大結節を欠く。また骨体の後面は風化して残っておらず、骨体中央付近が風化欠損していて接合できない。大結節稜はよく発達していて、全体的に太い印象がある。右橈骨は近位端付近から骨体にかけての部分が残っている。左側の骨は残りが悪く、骨の同定は困難である。上肢骨では上腕骨片が同定されたのみである。また、左寛骨の付近から手の基節骨が1点検出されている。

下肢帯の骨では左右の寛骨と仙骨がほぼ伸展仰臥位の原位置を保ったまま検出されている。右寛骨は耳状面から大坐骨切痕にかけての部分と恥骨片が、左寛骨は耳状面から大坐骨切痕にかけての部分と寛骨旧の前方部分が残っている。左右ともに大坐骨切痕は完存していないが、その形状は広いようである。また、右寛骨の耳状面の前方に妊娠痕が認められた。

下肢の骨では、左右の大腿骨が大腿骨頭から大腿骨体の遠位側にかけて残存している。大腿骨頭は大きくなない。小転子はよく発達しているが、粗線の発達は不良である。残存している左右の脛骨はいずれも骨体のみである。

頭蓋骨に塗布された赤色顔料は蛍光X線分析によって、水銀朱であることが確認されている（別章参照）。水銀朱の付着している部分は、前頭骨、鼻骨、上顎骨の前面、側頭鱗の部分である。この中でも、眉弓・眉間から鼻骨にかけての部分は特に厚い付着が認められる。また、眼窩の上壁には付着は認められず、下壁には付着が著しい。下顎骨では、左右切歯の頬側面および左臼後三角部にわずかな赤色顔料の付着が認められた。水銀朱の顔面塗布の方法は不明であるが、眼窩内の上壁にはまったく付着を認めず、下壁に著しい付着が認められたことは興味深い。それは、水銀朱を液体に溶いて上方から注いだり、頭蓋骨を手にとって顔面に水銀朱を塗布したものではなく、洗骨後顔面を垂直にして再埋葬した後に粉末状の水銀朱を上方から振りかけた可能性を示唆するからである。今後類例の検討を待ちたい。

本人骨の性別は骨の特徴から女性と推定され、年齢は熟年後半～老年と考えられる。



第1図 越敷山70号墳1主体部の人骨検出状況

3 越敷山71号墳3主体部の人骨

北東～南西に長軸方向を有する箱式石棺で、石棺の北東端と南西端の両側から頭蓋骨が検出されている。また、石棺の中央からは左大腿骨が、中央よりやや南西寄りの場所から寛骨と右橈骨片が検出

されている。

石棺内の床面には10cm程度の土砂が堆積しており、その土砂の上からこれらの骨が検出されている。これらの土砂は自然流入によるものと考えられるが、検出された人骨の上には土砂の堆積は認められず、どのような状況で流入土の上に人骨が載るようになったのかは明らかではない。

石棺の両端から検出された頭蓋骨は明らかに別人のもので、2体の埋葬がおこなわれたことは明らかである。北東端の頭蓋骨を1号頭蓋、南西端の頭蓋骨を2号頭蓋と呼ぶことにする。また、石棺中央部から検出された長幹骨と寛骨は石棺中央部人骨としてその特徴を述べ、後にいずれの頭蓋に属するものであるかを考察したい。

1) 1号頭蓋

頭蓋冠の前方から右頭頂部にかけての部分と右側頭骨の鱗部の一部が残存していた。頭蓋付近から歯牙は検出されていない。頭蓋冠は全体に小さく、女性骨を窺わせる。冠状縫合と矢状縫合は残存しているが、その外板は未閉鎖であるのに対し、内板は完全に癒合閉鎖をきたしている。前頭骨右側の冠状縫合に近い部分と右頭頂骨の冠状縫合に近い部分には、わずかながら赤色顔料の付着が認められた。

本人骨の性別は女性、年齢は壮年後半から熟年前半と推定される。

2) 2号頭蓋

前頭骨から頭頂骨にかけての頭蓋冠の一部が残存しているのみである。頭蓋付近から歯牙は検出されていない。冠状縫合と矢状縫合の一部が残存している。冠状縫合の外板は未閉鎖であるが、内板は完全に癒合閉鎖をきたしている。また、残存する人字縫合を見ると、内板・外板ともに未閉鎖の部分が多いが一部で癒合閉鎖をきたしている。残存する頭蓋冠は華奢で女性骨を窺わせるが確言できない。本頭蓋の性別は女性で、年齢は壮年と推定される。

3) 石棺中央部人骨

石棺の北西壁石寄りから大腿骨が1点検出されている。この大腿骨は左側のもので、大腿骨頭内側部から小転子の一部および大腿骨体にかけての部分であり、遠位骨端を欠く。全体的に小さくて華奢で粗線の発達も悪く、女性骨を窺わせる。この大腿骨の近位骨頭は南西側に位置し、骨が大きく動いていないとすると、2号頭蓋の被埋葬者のものである可能性が高い。また、大腿骨からさらに南西に離れたところから検出された寛骨は、寛骨臼を中心とする左寛骨片で、残存する大坐骨切痕は広くて、女性骨を窺わせる。寛骨臼は上方を向いた状態で検出されていて、原位置をとどめていないこと



第2図 越敷山71号墳3主体部の人骨検出状況

は明らかである。この寛骨の直下から右橈骨片が検出されている。遠位側を北東に向けた状態で検出されている。

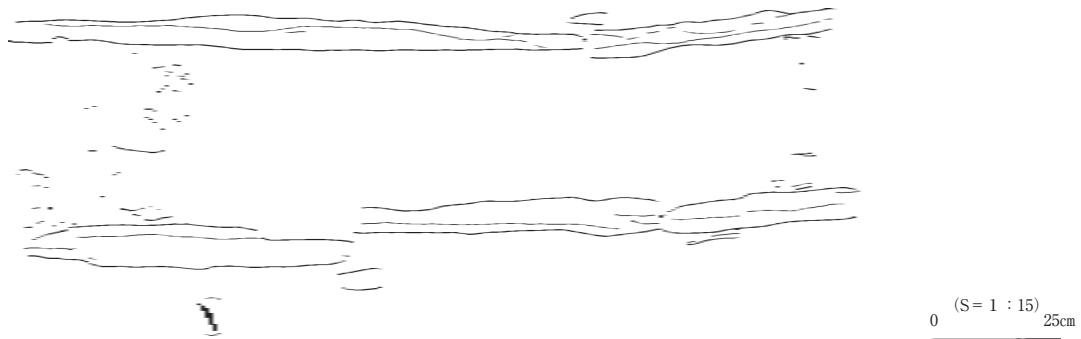
以上の石棺中央部人骨は、骨の形態学的特徴や骨の配列状況から判断すると2号頭蓋のものとして矛盾はない。ただし、寛骨の位置は本来の位置から頭蓋方向にずれており、土砂の堆積に伴って動いたのか、あるいは再埋葬に伴って動かされたのかは不明である。

4 越敷山73号墳2主体部の人骨

東南東～西南西に長軸方向を有する箱式石棺で、石棺の東南東側から枕と考えられる石とともに、頭蓋骨片が検出されているのみである。

残存している部位は、眼窓上縁から前頭鱗にかけての前頭骨の一部とそれに関節する左右の鼻骨、左側頭骨片および左頭頂骨片である。眉弓はよく発達しており、眉間もよく突出している。眼窓上縁は鈍であり、全体にがっしりしていて男性骨を窺わせる。左側頭骨の乳様突起は比較的よく発達しており、表面は粗造である。三主縫合は残存しておらず、縫合の閉鎖状況は不明である。

本頭蓋骨の性別は男性と考えられ、年齢の詳細は不明であるが成人骨であることには間違いない。



第3図 越敷山73号墳2主体部の人骨検出状況

5 越敷山133号墳1主体部の人骨

北東～南西に長軸方向を有する箱式石棺で、石棺の北東側に頭蓋骨と一部の頸椎が検出された。頭蓋骨の一部には赤色顔料が付着していた。頭蓋骨は頭頂部を上方に、顔面は南西側に向けて床面と垂直な状態で検出されている。自然の伸展仰臥位の埋葬状態では顔面は上方を向くので、頭蓋骨を洗骨後に再埋葬したものと考えられる。

頭蓋骨はほぼ完存しているが、頭頂部後方から後頭部および頭蓋底を欠く。頭蓋骨の前頭部はやや膨隆しており、眉間は突出していて眉弓もやや隆起している。眼窓上縁は鈍である。乳突部を左右ともに欠き、その発達具合はうかがい知ることはできない。

三主縫合を見ると、冠状縫合の外板は癒合閉鎖が進んでおり、内板は完全に癒合閉鎖をきたしている。矢状縫合は外板・内板ともに癒合閉鎖をきたしており、かなりの高齢者であることをうかがわせる。人字縫合は残存していない。骨口蓋縫合を見ると、切歯縫合は癒合閉鎖が進んでいる。横口蓋縫合も癒合閉鎖が進んでおり、正中口蓋縫合口蓋骨部でも全長にわたって癒合閉鎖が進んでいる。

下顎骨はオトガイ部から左下顎枝の一部にかけての部分が残存している。オトガイ隆起は発達しているが、下顎骨は全体的に小さく、華奢である。

本頭蓋骨の歯式は以下の通りであるが、その他に左下顎第3大臼歯が遊離歯として検出されてい

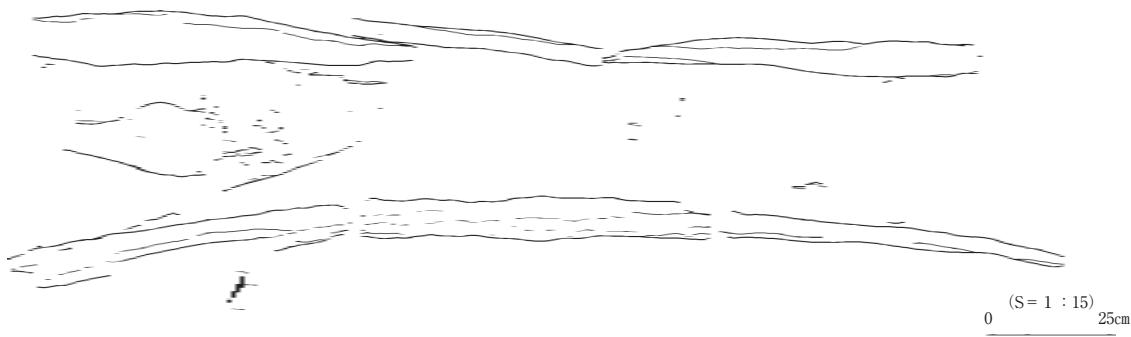
る。歯の咬耗はかなり進んでおり、前歯部は歯頸近くまで咬耗が進んでいる。

M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	脱	脱	C	P ₁	脱	閉	閉	M ₃
			P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁		

本頭蓋骨には赤色顔料の付着が認められ、骨化した後に赤色顔料が塗布されたものと考えられる。顔料の付着部位は、前頭骨、左眼窩の上・下・外側縁、左頬骨から左頬骨弓にかけての部分である。上顎骨の中切歯付近の歯槽部表面にも、わずかながら赤色顔料の付着が認められる。

頭蓋骨以外では、第7頸椎の椎体から左右の上関節突起の部分が検出されているのみである。

本人骨は男性骨を窺わせるが、確言できない。年齢は縫合の癒合閉鎖状況や歯牙の咬耗から考えて、熟年後半～老年と推定される。



第4図 越敷山133号墳1主体部の人骨検出状況

6まとめ

このたびの発掘調査によって検出された人骨の特徴は以下の通りである。

1) 70号墳1主体部

仰臥伸展位で埋葬された熟年後半～老年の女性と推察される。左上顎側切歯に歯根囊胞が認められた。頭蓋骨には水銀朱の赤色顔料の付着が認められ、軟部組織が朽ちた後に、頭蓋骨を取り出して水銀朱の赤色顔料を塗布し、下顎とともに顔面を垂直にして再埋葬されたようである。

2) 71号墳3主体部

石棺の両端に頭部を置いて埋葬された2体分の人骨である。2体ともに女性の人骨で、1体の年齢は壮年後半から熟年前半、もう1体は壮年と推定される。

3) 73号墳2主体部

石棺の片側に頭部を置いて埋葬された人骨で、成人男性骨と推定される。詳細な年齢は不詳である。

4) 133号墳1主体部

石棺の片側に頭部を置いて埋葬された人骨で、男性骨を窺わせるが、確言できない。年齢は熟年後半～老年と推定される。頭蓋骨には赤色顔料の付着が認められ、頭蓋の検出状況から見て、顔料塗布後、下顎とともに顔面を垂直にして再埋葬されたと考えられる。

稿を終わるにあたり、本人骨の調査の機会を与えていただいた米子市文化財団に御礼申し上げる。とりわけ、埋蔵文化財調査室の佐伯純也氏には、人骨の取り上げや人骨の写真撮影などでお世話になった。記して御礼申し上げる。

第4章 総括

第1節 金廻芦谷平遺跡の調査成果

平成26年度に実施した金廻芦谷平遺跡の発掘調査では、縄紋時代のものと見られる陥穴状の土坑を24基確認した。これらの土坑は平面形や底部の小穴の有無などに違いがあるが、全て動物を狩るための陥穴と推測される。これらの土坑内からは土器が出土しなかったため、直接的な年代を知る手掛かりが得られなかったが、隣接する金廻家ノ上ノ内遺跡や坂長越城ノ原遺跡からは、一定の範囲内で規模や形態の異なる陥穴が多数見つかったことから、縄紋時代早期から晩期にまで至る、長い期間に亘って形成されたものと考えられる。越敷山麓一帯が、縄紋時代において狩猟の場であったことを示す資料である。

弥生時代の調査では、土坑1から弥生土器の甕と突帯紋土器の破片が出土した。これまでに実施した越敷山麓の発掘調査では、坂長前田遺跡と坂長第8遺跡から突帯紋土器と弥生時代前期の土器が出土している事例が見られる程度であり、当該期の資料数は少ない。今回検出した土坑1は、弥生時代前期前半まで遡る資料であり、この地域における弥生時代開始期の様相を示す資料と考えられる。また、伯耆町教育委員会が実施した斜面下部の調査で、焼土を伴う土坑内から弥生時代中期後半頃の土器が出土しているが、今回の調査ではこの時期の資料は出土しなかった。

斜面部で検出した4条の溝については、掘削された時期を特定することが出来なかつたため、明確な用途は不明である。位置関係からすると斜面に位置する越敷山80号墳への道とも考えられるが、複数の溝が連なる状況からすると、長期間にわたって利用された、山を登るための道という解釈が妥当であろう。

丘陵部で検出した塹壕については、アジア・太平洋戦争末期の昭和20年の春から始まった「チ号演習」に伴うものと考えられる。この「チ号演習」とは、連合国軍との日本本土決戦を想定した陣地構築であり、鳥取県西部地方では、越敷山と対岸にある米子市淀江町の壺瓶山に陣地が置かれ、日野川沿いを遡ってくる敵を越敷山麓の狭隘な地形におびき寄せて一気に殲滅する予定であったという。今回検出したものは、越敷山71号墳と79号墳の間を通るようにして「U」字形に伸びており、更に屈曲部を一段深く掘り下げて暗渠とし、雨水の浸透を図る工夫がなされていた。当時大本営が作成した『国民築城必携』にも塹壕内に暗渠を設けるよう指導する記述があり、本資料の暗渠構造もそれに倣ったものと考えられる。

第2節 越敷山古墳群（金廻地区）の調査成果

越敷山古墳群（金廻地区）の調査では、古墳25基と周辺に散在する石棺墓や土壙墓を多数検出した。

今回の調査で最大の規模を誇る越敷山71号墳・79号墳が古墳時代前期後半頃に相次いで築造され、それに続いて71号墳・79号墳の周囲を取り囲むようにして小規模な周溝を持つ古墳が順次造られて古墳群を形成したものと考えられる。

時期的には前期後半から中期後半まで存続するが、後期には造墓活動が一旦途絶え、終末期に再び

横穴式石室墳である越敷山80号墳が単独で造られている。これまでの発掘調査でも、長期間存続した一支群であったことが判明した。ここでは、越敷山古墳群(金廻地区)の調査成果を項目ごとにまとめる。

1 墳丘と周溝 本調査区内では、方墳である越敷山71号墳と79号墳の2基の古墳を中心として、周囲に小規模な古墳が点在している状況を確認した。墳丘の形は、盛土が失われているものや周溝が全周しないものが大半であるため不明だが、129号墳～135号墳は方墳を志向していると思われる。一方、時期的に後出する136号墳～148号墳は、周溝が斜面側にしか残らないが、三日月形を呈するものが多いことから円墳と見られる。墳丘の盛土については、71号墳や145号墳のように、調査前から石棺の石蓋が露出しているような状況のものが多かったため、築造された当初にどの程度の高さがあったものか分からない。また、139号墳や149号墳のように、斜面を「L」字形にカットして平坦面を造り、石棺上に土を盛り上げるようにして小規模な墳丘を造る古墳も見られる。同様の事例は、米子市・新山研石山3号墳でも見つかっていることから、今後の調査において注意すべき点と考える。

周溝については、素掘りで全周しないものが多い。周溝内埋葬の事例は、135号墳の3主体部が周溝にはみ出す形で造られていることから、埋葬が終了した後に、完全に周溝を埋め戻したものと考えられる。それ以外では、71号墳の西側に土壙墓が1基、79号墳の西側の周溝内に土器蓋を用いた土壙墓8が1基造られているが、それ以外の埋葬施設は、周溝外に造られる事例が多いように見受けられる。葺石や埴輪などの墳丘に付属する外表施設は見られないが、越敷山古墳群の周辺では、ほぼ同時期に造営されたと考えられる米子市と伯耆町にまたがる長者原古墳群や米子市・日下古墳群が埴輪を持つ古墳群であり、近接した地域でも明確な違いが認められる。

2 埋葬施設 前期後半のものと見られる71号墳では、中心部の埋葬施設に長大な組み合わせ式木棺（木棺長4.5m）が採用されているが、小口に石を用いるという特徴が見られる。米子市内では、尾高19号墳1主体部（木棺長2.5m）、日下25号墳3主体部（木棺長3.3m）、日下36号墳1主体部（木棺長1.7m）、日下39号墳2主体部（木棺長3.8m）、日下44号墳2主体部（木棺長2.2m）、新山研石山1号墳1主体部（木棺長2.8m）、吉谷12号墳の埋葬施設6（木棺長3.1m）で、同様に小口に石を用いた木棺墓の例が見られることから、この地域では普遍的に行われていた木棺墓の組み合わせと考えられる。ただし、中期に入って石棺墓が主体となっても小口にのみ石を使用する事例があり、今回検出された79号墳3・4・5主体部、146号墳、土壙墓4のほかにも、越敷山73号墳の周辺埋葬、米子市・日下10号墳1主体部、米子市・古市21号墳で認められる。鳥取県内では、長瀬高浜遺跡47号墳第1埋葬施設で片側の長側板にのみ板石を用いる事例があるが、それ以外ではあまり見られない形式のため、越敷山古墳群を中心とした地域的特徴と推測される。

棺の蓋については、板石を使用するものが多く、土壙墓でも平石で閉塞されたものが多い。木蓋については、検出状況から客観的に存在を示す資料が得られなかったため、あくまでも推測ではあるが、越敷山73号墳の周辺埋葬で、完形の土器が土壙内に落ち込んだ状態で見つかったものが見られたことから、木蓋が存在した可能性は高いと考えられる。どんなに小さな土壙墓であっても、材質は別として棺に蓋が被せられている事実は、石蓋が埋葬時において死者との決別を行う重要な装置であったことを窺わせる。石枕については、石棺墓、土壙墓合せて26基の主体部で使用されているのを確認した。石の置き方は、基本的に2～3点の平石を用いて頭部を挟み込むようにするものが一般的と考えられるが、79号墳6主体部のように棒状の石を1点のみ使用するものや、石棺の小口板と同化した79号墳3主体部のようなものも見られる。

埋葬頭位の方向については、石枕の存在や棺底の高低差、小口幅の大小によってある程度推測することが出来るが、一つの棺に二つの石枕が置かれている事例があることから、あくまでも主軸方向が決定しているに過ぎない。その中で、71号墳1主体部のように主軸が北東一南西方向を向くものと、79号墳1主体部のように南東-北西方向を向くものに大別できる。これは、尾根の伸びる方向と平行または直交していることから、地形的な制約が影響しているものと考えられる。また、急斜面に位置しているものは大半が等高線に対して平行して主体部が配置されているが、137号墳・142号墳・149号墳では、等高線に対して直交するようように主体部が配置されており、時期的に新しいものは主体部の配置が異なる可能性がある。

石棺をベンガラで赤く塗る事例は、131号墳で全面塗布されたものが確認されたが、それ以外の石棺墓では71号墳3主体で少し見られたのみである。人骨の朱塗りは、133号墳出土人骨で頭蓋骨に塗布されたものがあったが、これにはベンガラが使用されている。

人骨の出土状況については、71号墳3主体部では頭蓋骨が2点出土していることから、一棺での複数埋葬であったことが判明した。133号墳では頭蓋骨と一部の頸椎のみの出土であったが、人類学的所見から、洗骨後に顔料を塗布して再埋葬したものと推測されている。頭蓋骨以下の骨については、石蓋を開けた段階で既に頭骨周辺にまで完全に土砂が流入していたことから、頭骨のみが遺存してそれ以外の骨は土砂と接したことで風化し、消滅したと判断される。なお、133号墳の石棺には底面に板石が置かれており、頭蓋骨の一部がこの板石の上に乗った状態で検出されたが、どのような意図で置かれた石かは分からぬ。越敷山古墳群では、75号墳と144号墳で棺底に平石を置いた事例があり、鳥取市の古郡家1号墳の北棺でも同様の事例が見られる。

3副葬品 埋葬施設内から出土した副葬品は、鉄製品と鏡、玉類、豎櫛がある。鉄製品は武器（剣）と工具（ヤリガンナ・刀子）があり、71号墳1主体部から出土した剣は、不明鉄器F.2と共に埋葬時に折り曲げられていた。折り曲げ鉄器の副葬例は、越敷山周辺では類例が無く、本資料が初となつた。工具については、71号墳1主体部のヤリガンナ、71号墳4主体部の刀子とヤリガンナ、140号墳周溝内の刀子、149号墳の石棺石蓋の隙間から刀子が出土している。このように、棺外から出土した刀子は破損しているものが多いことから、石棺を組み上げる際に使用された工具の折れた部品がそのまま残された可能性も考えられる。

鏡は、79号墳の東西に位置する131号墳と132号墳から仿製鏡2面が出土した。いずれも面径9cm程度の小型鏡だが、米子市淀江町・上ノ山古墳（内行花文鏡、面径8.9cm）や米子市・新山山田7号墳（7.5cm）など、周辺の中期古墳では同サイズの仿製鏡の出土例が複数あることから、この地域での副葬鏡の中心を、こうした小型仿製鏡が担っていたと考えられる。

今回鏡が出土した古墳は、いずれも一辺8m未満の小型墳であり、本調査区の中心的な位置を占める71号墳・79号墳とは規模の点で劣るが、前期古墳においては鏡の副葬事例が盟主墳的な有力古墳に集中していたものが、中期に至って地域の小規模古墳へと拡散していく状況と符合するものであり、当時の地域集団の動向をそのまま反映しているものと理解される。

玉類については、131号墳で勾玉、管玉、小玉などが出土しているが、サイズや種類にまとまりが無いため、急きよ寄せ集められたような印象を受ける。それ以外では71号墳の4主体部から管玉1点と79号墳の周溝内からガラス玉が1点出土しているのみである。以前の調査でも、玉類が出土したのは越敷山51号墳、107号墳、109号墳と類例が少ないとことから、越敷山古墳群では、玉類の副葬は一般

的ではなかったと考えられる。

豎櫛については、鳥取県西部では越敷山51号墳（1点）での出土例があるのみで、それ以外には全く見られない資料であった。鳥取県中部では上下（狼谷）3号墳（2点）、東部では古郡家1号墳（4点）、里仁32号墳（18点）、里仁35号墳（16点）で出土例がある。今回出土した140号墳の資料は、1点は片面の漆膜しか残っていなかったが、櫛を中心で結束して「U」字形に曲げ、再び結束して漆で固めた状況が観察できることから、豎櫛の製作技法を復元する上で、重要な資料と考えられる。

4 供献土器 本調査区内では、古墳の周溝内から土師器が出土する事例が多く見られた。これは、埋葬儀礼に伴い、祭祀が終了した後に周溝内に置かれたものと考えられるが、出土した位置と使用された器種については明確なセット関係が見られず、伯楽塚古墳群で見られたような、周溝の南東部に置くという規則性も見られなかった。出土した土師器は、甕、壺、長頸壺、高坏があり、須恵器は1点だけ包含層出土資料で手持ちヘラケズリした鉢が出土しているが、どの古墳に伴うのかは分からぬ。出土した甕は、二重口縁で倒卵形のものが1点あり、これが最も古相を示すものである。それ以外では退化した二重口縁の甕が主体で、最終的に「く」字形のものが主流となる。また、外面に厚くスヌが付着したものがあることから、日常の煮炊に使用されていたものが転用されたと考えられる。高坏は、坏部に緩い段を残すもので、伯楽塚古墳群で見られたような、緻密な胎土で橙褐色を呈し、口縁が内彎するタイプとは異なっている。今回の出土資料は、青木編年のⅦ期（前期後半）からⅨ期（中期後半）に相当していることから、これまでに調査された越敷山古墳群の中でも古い様相を呈している。

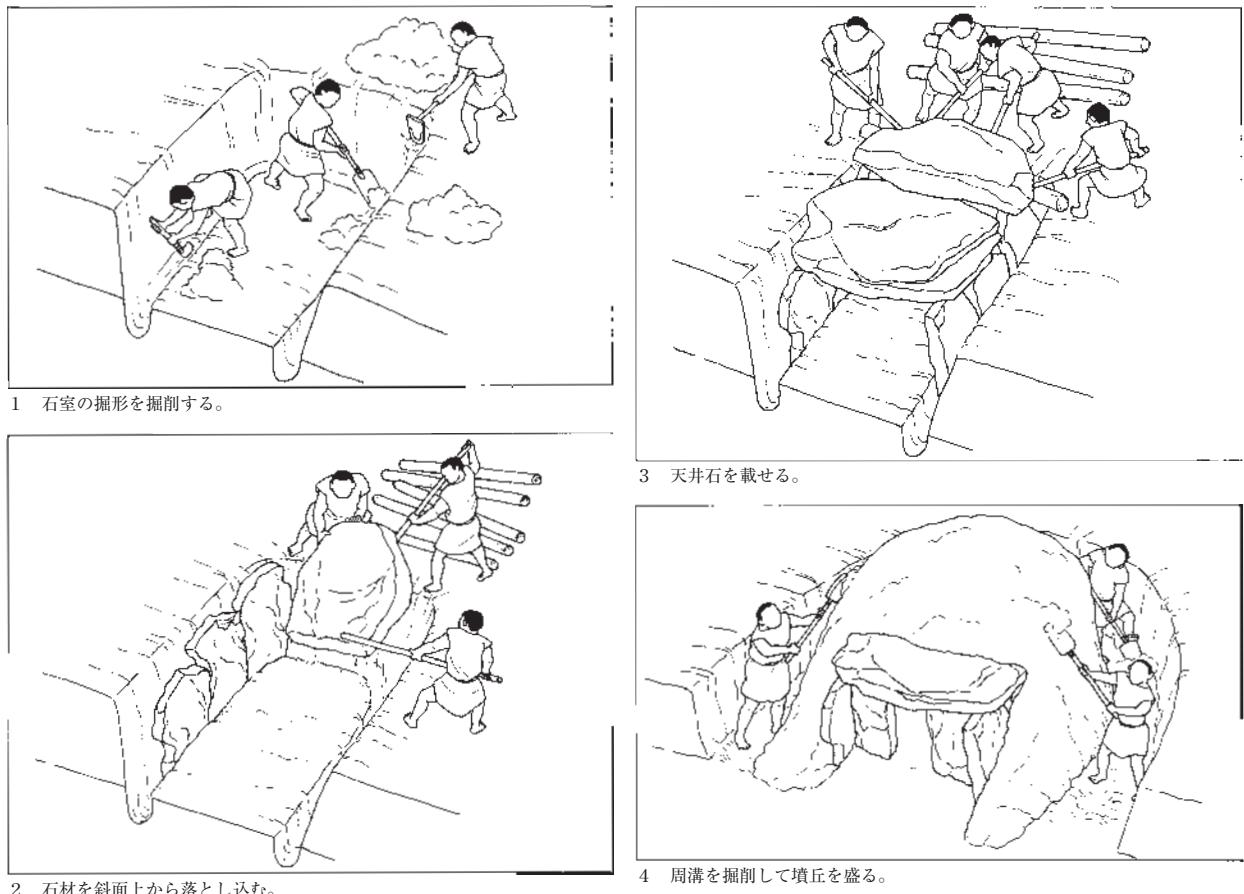
5 越敷山80号墳 横穴式石室墳である80号墳は、一辺3mほどの多角形墳と考えられる。

越敷山80号墳は、丘陵の斜面に位置する、いわゆる山寄せの古墳となるが、石室の裏込めから陥穴が出てきたことから、石室を構築する際にも表土を除去せず、そのまま石室を組み上げた後に墳丘を盛り上げて、最後に周溝を掘削していたことが判明した。この方法のメリットは、石材を斜面上から落とし込むようにして組むことで、石室構築の労力を最小限に抑えることが出来る点である。もちろん、斜面に位置する横穴式石室墳が全てこの工法で造られたとは言い切れないが、今後注意すべき点と考える。参考として、第124図に80号墳の築造過程を復元したイラストを示す。

石室の構造は、羨道部から奥壁まで同じ幅のプランで、玄門部に板状の袖石を2枚立て、樋石を埋め込むことで玄門としている。石室は、奥壁に大型の1枚石を立て、左右にも3枚の平石を立てて羨道部までの側壁を造り、羨道部の側壁は小型の平石を用いていたと推測される。石室のプランと玄門部の形状で類似する事例は、越敷山15号墳や田住1号墳など、越敷山麓を中心に分布しているが、本資料は7世紀中ごろの須恵器が出土したことから、横穴式石室編年の基準資料になるものと考えられる。

石室内は、床面に礫が敷かれているが、床面から鉄釘が出土しなかったことから、木棺は使用されていなかったと考えられる。恐らく、入口の狭さも大いに関係しているのであろう。また、入口部の床面には平石がタイル状に敷かれているが、これは玄門部の装飾を意識したものと推測される。

出土した遺物は、周溝内から須恵器の大甕が破碎された状態で出土したほか、羨道部と石室内から須恵器の坏身蓋と土師器杯1点、刀子などの鉄製品が見られた。須恵器は、宝珠つまみを持つ蓋が出土している。口径が8cm程度と小型化していることからTK217以降、7世紀前半～中頃のものと推測される。また、石室の裏込めから土師器杯が1点出土したことから、石室を構築する際に地鎮的な祭祀が行われた可能性も考えられる。因みに、横穴式石室における土師器杯の出土例は、米子平野では



第124図 越敷山80号墳の築造過程

石州府91号墳で見られるが、その他の類例は少なく非常に珍しい。横穴墓では、米子市の青木向横穴と南部町の普段寺横穴の事例がある。

6 越敷山古墳群の特徴 越敷山古墳群は、日野川左岸に位置する越敷山の山頂部から北側へかけて丘陵の尾根上に形成された150基を超える群集墳である。これらの古墳は、周辺に所在する伯楽塚古墳群や越敷野原古墳群、大寺原古墳群などとも繋がりつつ複数の支群を形成しているが、発掘調査が行われたのが岸本バイパス関連の調査例のみであるため、未だこれらの古墳群の全容は把握しがたい。

越敷山古墳群の時期は、前期後半から始まり、中期に最盛期を迎えるが、後期の埋葬施設は丘陵斜面部で見つかっており、墓域が丘陵尾根上から斜面部へと移動していくものと推測される。終末期には横穴式石室墳である15号墳や80号墳が築造されるが、対岸の石州府古墳群のように群集して営まれるのではなく、単独墳として造られている。

古墳の墳形は、越敷山の山頂に位置する13号墳（全長37.5m）とすぐ北の尾根に位置する19号墳（全長45.5m）の2基が前方後円墳だが、発掘調査が行われていないため、いつごろ築造されたものかは不明である。前期には方墳が主体と見られ、中期から円墳へと移り変わるが、墳丘の規模は小さく、直径10m未満のものが多数を占めるものと推測される。また、79号墳周辺では小型の円墳や土壙墓が群集しているが、それ以外の調査でも同様に小型のものが見つかっていることから、細長い尾根上に小規模な古墳が、連綿と群集して築造されるのが越敷山古墳群の特徴の一つと見られる。

埋葬施設については、石棺と石蓋を持つ土壙墓が中心であったが、木棺墓を71号墳と109号墳で確認していることから、何らかの使い分けがあったと考えられる。石棺の構造については、小口にのみ石材を使用した折衷型と呼ぶべきものが目を引く。こうした事例は、日下古墳群や古市古墳群でも見

つかっており、越敷山古墳群を中心とした地域の特色であろう。

また、今回の調査区では小児用の埋葬施設が数多く検出されたが、墳丘上に複数の主体部が配置される場合と、周囲に小規模な古墳と周辺埋葬が取り巻く場合があり、本調査区の例ではこれらが複合している状況である。そして、こうした小児用の埋葬施設が多く存在することは、家族墓的な様相が色濃く残る古墳群という印象を受けるが、隣接する尾根上に位置する越敷山51号墳や109号墳では、ここまで小児埋葬が集中しておらず、特異な事例と考えられる。

石枕については、ほとんどの主体部で見られることから、一般的な埋葬習俗と理解してよからう。特に、土壙墓2のように、小児を埋葬した主体部でも小さな石を二つ置いた事例は、どのような気持ちでこの石を置いたのか、その時の状況まで考えさせられる資料であった。また、石枕の無いものについては、有機質の布や毛皮などを用いた可能性がある。須恵器を用いた土器枕については、伯樂塚遺跡の土壙墓3や金廻家ノ上遺跡の石蓋土壙墓1などで確認しているが、土師器を用いたものは確認されていない。

副葬品については、鉄製品と鏡、玉類、豎櫛がある。鉄製品は、武器として刀、剣、鉾があり、工具では、斧、鎌、ヤリガンナ、刀子がある。このうち、武器を副葬した事例は、51号墳の石棺内から刀、剣、鉾、斧が出土し、73号墳からは鉾1点、123号墳からは剣、鎌、斧が、71号墳は剣1点とヤリガンナ1点が、126号墳からは刀が出土している。このうち、126号墳は直径4m程度の小規模な円墳であり、埋葬施設も石蓋を持たない土壙墓であるが、全長90cmの刀が副葬されていた。越敷山古墳群を全体的に見て、副葬品の保有率は少なく、副葬品が出土した古墳も石棺墓と土壙墓、主体部の大小などはあまり関連性が無いように思える。また、110号墳では小児用と見られる小型の石棺内から刀子が出土している。

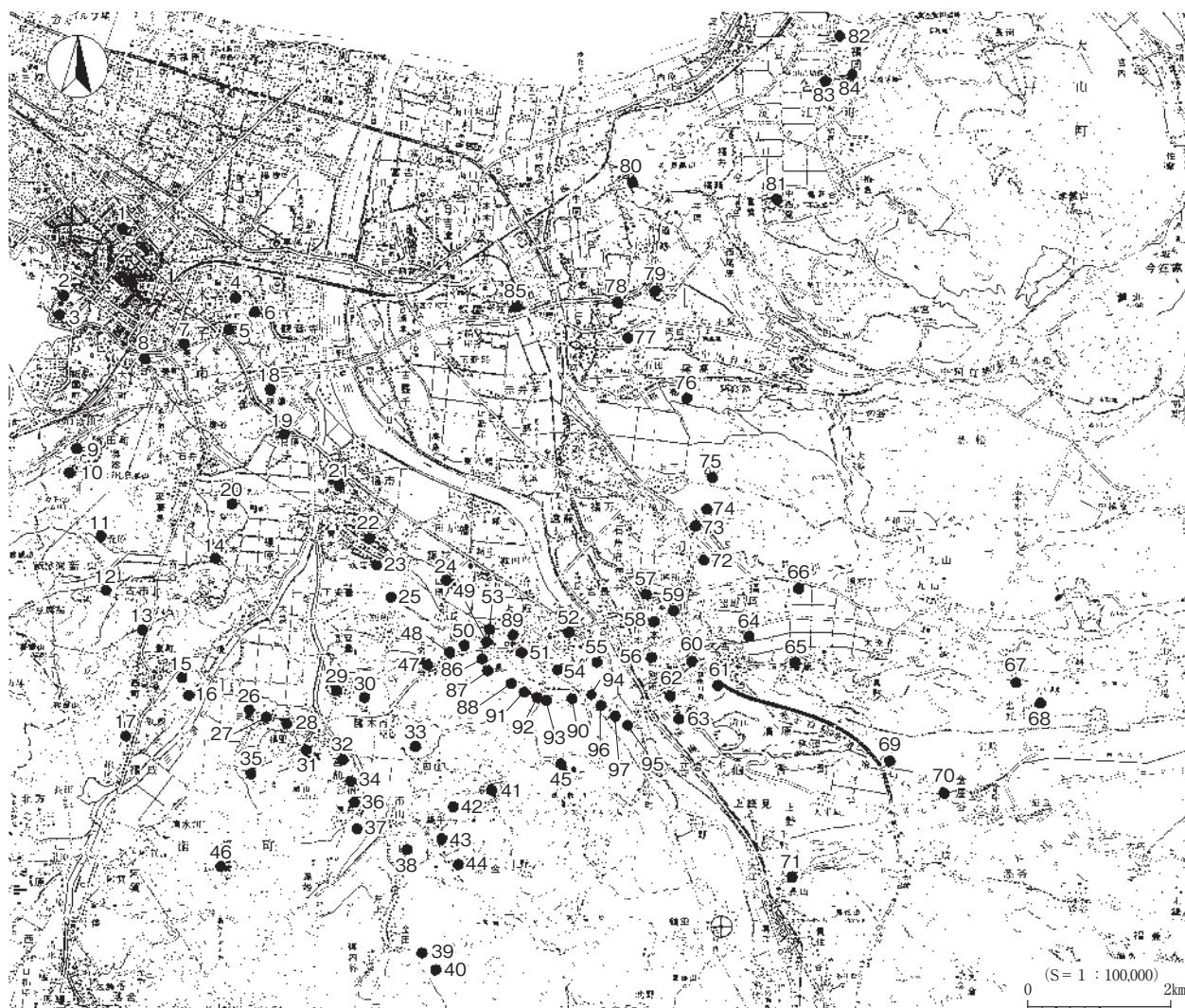
鏡については、小型仿製鏡が2面出土したのみで数は少ない。いずれも小規模な古墳ではあるが、中心的な古墳に従属する位置から出土した点は、小規模古墳における鏡副葬の開始時期を探る上で重要な視点になると思われる。

土器類については、土師器の甕が供獻されている事例が目についた。米子平野の古墳では、前期では土師器の小型丸底壺や高坏が、中期には須恵器とともに土師器の高坏や長頸壺が使用される事例が多く、甕の使用は一般的ではなかった。須恵器の普及期において、墳墓祭祀に用いられる器種組成の変化が現れていると考えられるが、これまで、一つの古墳群で具体的な器種構成の変遷を示すのは難しかった。今回の越敷山古墳群の調査で得られた資料は、古墳時代中期の土器編年を補強する上でも重要な位置を占めている。総括では編年案を提示する段階にまで進めなかつたが、いずれ時期を見て取り組むべき課題と考える。

第3節 越敷山周辺の歴史的環境

平成16年度から始まった岸本・坂長バイパス関連の発掘調査により、これまで知られていなかった遺跡の調査成果が次々と明らかになった。最後に、これらの調査成果を振り返ることで、米子市と伯耆町にまたがる長者原台地から越敷山に至る地域の歴史的環境を示す。

旧石器時代 岸本バイパス関連の発掘調査が行われる以前には、越敷山麓は旧石器時代から縄文時代草創期にまで遡る資料の希薄な地域であった。平成16年に行われた諏訪西山ノ後遺跡の調査によっ



第125図 周辺遺跡分布図

- | | | | |
|-------------|------------|------------|--------------|
| 1 錦町第1遺跡 | 27 天萬土居前遺跡 | 53 長者原古墳群 | 79 泉中峰・前田遺跡 |
| 2 久米第1遺跡 | 28 宮尾遺跡 | 54 坂中第5遺跡 | 80 小波原畠遺跡 |
| 3 米子城跡 | 29 諸木遺跡 | 55 岸本大成遺跡 | 81 井出跨遺跡 |
| 4 長砂第1・2遺跡 | 30 後塔山古墳 | 56 岸本古墳群 | 82 晩田遺跡 |
| 5 長砂第3遺跡 | 31 天万遺跡 | 57 岸本遺跡 | 83 向山古墳群 |
| 6 水道山古墳 | 32 宮前3号墳 | 58 岸本要害跡 | 84 上淀廃寺跡 |
| 7 池ノ内遺跡 | 33 田住古墳群 | 59 岸本下の原遺跡 | 85 今在家下井上遺跡 |
| 8 目久美遺跡 | 34 宮前遺跡 | 60 久古第3遺跡 | 86 坂長第7遺跡 |
| 9 隠田遺跡群 | 35 普段寺1号墳 | 61 貝田原遺跡 | 87 坂長第8遺跡 |
| 10 奥陰田遺跡群 | 36 浅井11号墳 | 62 口別所古墳群 | 88 坂長下門前遺跡 |
| 11 新山遺跡群 | 37 浅井土井敷遺跡 | 63 吉定1号墳 | 89 大殿狐谷遺跡 |
| 12 古市遺跡群 | 38 天王原遺跡 | 64 久古北田山遺跡 | 90 坂長前田遺跡 |
| 13 吉谷遺跡群 | 39 金田瓦窯 | 65 番原遺跡群 | 91 坂長武寿羅遺跡 |
| 14 橋本遺跡群 | 40 兩部太郎窯 | 66 須村遺跡 | 92 坂長ブジラ遺跡 |
| 15 福成石佛前遺跡 | 41 萩名遺跡群 | 67 真野ブヤ遺跡 | 93 坂長尻田平遺跡 |
| 16 福成早里遺跡 | 42 田住松尾平遺跡 | 68 藍野遺跡 | 94 坂長伯楽塚遺跡 |
| 17 清水谷遺跡 | 43 朝金古墳群 | 69 林ヶ原遺跡 | 95 金廻家ノ上ノ内遺跡 |
| 18 東宗像古墳群 | 44 朝金小チャ遺跡 | 70 下山南遺跡 | 金廻家ノ上遺跡 |
| 19 日原古墳群 | 45 越敷山遺跡群 | 71 長山馬籠遺跡 | 96 坂長越城ノ原遺跡 |
| 20 奈喜良遺跡 | 46 手間要害跡 | 72 石州府古墳群 | 97 金廻芦谷平遺跡 |
| 21 福市遺跡 | 47 荒神上遺跡 | 73 上福万遺跡 | |
| 22 青木遺跡 | 48 長者屋敷遺跡 | 74 日下寺山遺跡 | |
| 23 桶ノ口第4遺跡 | 49 坂長下屋敷遺跡 | 75 日下古墳群 | |
| 24 諏訪西山ノ後遺跡 | 50 坂長村上遺跡 | 76 尾高浅山遺跡 | |
| 25 別所新田遺跡 | 51 坂中廃寺跡 | 77 尾高城跡 | |
| 26 三崎殿山古墳 | 52 大寺廃寺跡 | 78 尾高御建山遺跡 | |

て、米子市内では初めてローム層中からナイフ形石器が出土した。その後、尖頭器の資料が坂長村上遺跡、坂長ブジラ遺跡、坂長第8遺跡から相次いで出土したことから、この地域に狩猟生活の痕跡が濃密に点在していることが明らかとなった。

縄紋時代 縄紋時代の遺構は、陥穴と見られる土坑が各遺跡から大量に見つかっているが、それ以外の遺構は検出例が少ない。この中で、坂長越城ノ原遺跡1区の陥穴5からは押型紋土器の破片が1点出土したほか、諏訪西土取場遺跡の陥穴2から後期の土器がまとまって出土しているのが注目される。

縄紋土器については、坂長伯楽塚遺跡から押型紋土器の最終末段階に位置付けられる穂谷式・宮の平式期の資料が出土した。遺物が見つかった場所は丘陵斜面の再堆積層であったが、標高100m近い丘陵地に小規模な集落が営まれていたことを示す資料である。また、坂長第7遺跡と坂長前田遺跡、坂長越城ノ原遺跡2区では、谷部から縄紋時代後期の土器がまとまって出土した。このうち、坂長第7遺跡ではトチノミなどの堅果類が見つかっていることから、アク抜きなどを行う水場であったと考えられている。丘陵上の遺跡では、坂長下門前遺跡3区から後期後半頃のものと見られる小型の注口土器が出土しているが、陥穴以外には活発な活動の痕跡を見出すのは難しい。

弥生時代 弥生時代前期には、谷部に立地している坂長前田遺跡、坂長第8遺跡、諏訪南山崎遺跡から土器が出土しているほか、丘陵上に位置する金廻芦谷平遺跡、諏訪西山ノ後遺跡からも土器が出土している。このうち、坂長第8遺跡と諏訪南山崎遺跡では安山岩製の石鍬が大量に見つかっていることから、初期の農耕に関わる資料が含まれている。中期には、諏訪西山ノ後遺跡、長者屋敷遺跡、坂長尻田平遺跡、坂長ブジラ遺跡、金廻家ノ上遺跡から貯蔵穴と共に土器が出土しているほかに、坂長武寿羅遺跡から段状遺構が検出されているが、住居に関わる遺構が見つかっていないため、集落の様相を探ることは難しい。後期には、金廻家ノ上ノ内遺跡、坂長越城ノ原遺跡、諏訪西山ノ後遺跡から、竪穴建物や掘立柱建物が見つかっている。いずれも標高の高い丘陵上に建てられていることから、妻木晩田遺跡や青木遺跡など米子平野の弥生集落遺跡の動向とも共通する要素が見られる。

古墳時代 越敷山麓における前期古墳の様相は定かではないが、中期には長者原台地の縁辺に位置する樋ノ口古墳群や諏訪古墳群、長者原古墳群が形成されている。越敷山古墳群でも前期後半から造営が始まり、中期には最盛期を迎えて終末期まで墓域として利用されている。集落遺跡の動向は、前期の集落が諏訪西山ノ後遺跡でまとまって見られるが、これ以外では大規模な集落を見出すことが出来ない。単独か数棟程度のまとまりでは、大殿狐谷遺跡、坂長米子道端ノ上遺跡、坂長第6遺跡、坂長第8遺跡、坂長ヨコロ遺跡、坂長ブジラ遺跡、坂長尻田平遺跡などで竪穴建物が見つかっている。恐らく、台地の斜面や谷部で小規模な集落が営まれていたと考えられる。越敷山での古墳造営が順調に進む中、周辺集落の活動が低下するのが気にかかるが、古墳時代集落の動向は会見郡衙成立前夜の様相を知る上で注目すべき問題と考える。

古代 昭和54年に調査された長者屋敷遺跡の発掘調査により初めて大型の掘立柱建物が確認され、この地域が会見郡衙の中心地であると認識された。岸本・坂長バイパス関連の調査では、台地上に位置する諏訪西土取場遺跡、諏訪東土取場遺跡、大殿下ノ原遺跡、坂長村上遺跡、長者屋敷遺跡、坂長下屋敷遺跡、坂長第6遺跡から大型の掘立柱建物が確認され、更に谷部に位置する坂長第7遺跡から、正税に関するものと見られる木簡が出土したことから、長者原台地上と周辺の谷部にも会見郡衙に関連する遺跡が点在することが明らかとなった。この中でも、坂長第6遺跡から大量に出土した鍛冶関連遺物は、謎の多い会見郡衙の側面を知らしめる資料である。この地域で生産された鉄が日本の歴史



第126図 金廻芦谷平遺跡周辺の遺跡分布図

の中でどのような役割を果たしたのか、郡衙における鉄製産の実態解明が今後取り組むべき大きな研究課題となった。また、この地域では古代寺院の大寺廃寺跡と坂中廃寺跡が知られており、郡衙に隣接して駅家も存在したものと考えられている。道路遺構に関しては、坂長伯楽塚遺跡から越敷山の山頂へ向かって伸びる道路遺構が見つかっており、更に南側にある小町石橋ノ上遺跡から尾根の鞍部を埋める土壘状遺構が見つかっていることから、越敷山の山頂に向かう道路が造られていたことが判明した。この道路の用途は定かではないが、日野郡へ向かう道路や、烽火の管理に使用された道として整備された可能性も考えられる。

中世 長者原台地一帯は、平安時代の末頃に活躍した紀成盛の本拠地であったという伝承があり、坂長前田遺跡の報告書において考古学的資料も含めた考察がなされている。その後の調査でも、直接紀成盛に関わる資料は得られていないが、坂長第6遺跡から鍛冶工房跡、坂長武寿羅遺跡から掘立柱建物、坂長前田遺跡から平安末期から鎌倉期のものと見られる鉄製の小札が出土していることから、この地域での活発な動きが見て取れる。

中世墓に関する資料は、諏訪西山ノ後遺跡から五輪塔を伴う区画墓が2基と諏訪南山崎遺跡から五輪塔の水輪を蓋に利用した地下式横穴が見つかっている。坂長ヨコロ遺跡からは、石積を持つ中世墓と備前焼の壺が単独で出土している。

近世 坂長第7遺跡や坂長ブジラ遺跡など、低湿地に面した遺跡から畦畔や水路が見つかっており、狭小な谷地形を利用した水田耕作が行われていたものと考えられる。一方、長者原台地上の調査で

は、近世の遺構は殆ど見つかっていないことから、幕末の佐野川用水の通水まで、ほとんど手つかずの原野が広がっていたと想像される。伯耆町中祖の日野川から取水する佐野川用水の工事は、元和4（1618）年から始まり、数度の中斷を経て文久元（1861）年によく完成したものである。現在ではコンクリート製の護岸が整備されているため、隧道部以外では近世に行われた工事の痕跡を見ることは出来ないが、諏訪東チシゴ原遺跡で佐野川用水の旧水路を検出し、開削された当時の護岸を確認している。現在でも用水路として活用されている佐野川用水は、毎年地元の小学校の社会科見学が行われており、隧道などが実際に見て触ることの出来る歴史教育の資料として活用されている。

近現代 鳥取県内では、アジア・太平洋戦争末期の昭和20年春に、連合国軍との日本本土での決戦を想定した塹壕が各地に掘られている。この陣地構築を「チ号演習」と呼び、鳥取県西部では壺瓶山と越敷山に塹壕が掘られ、日野川沿いを進軍してくる敵を攻撃する予定であったとされている。坂長伯樂塚遺跡の調査では、交通壕と見られる大型の塹壕を検出し、金廻芦谷平遺跡からは見晴らしの良い丘陵上に造られた塹壕が見つかった。これらの塹壕の掘削作業は、関東から派遣された総武兵团が指揮し、主に日野郡の国民義勇隊が作業を担当していた。作業の参加者は、スコップなどの道具や弁当などを持参し、毎日汽車で日野郡内の各駅から岸本駅まで移動し、更に徒歩で陣地構築の現場まで向かったという。しかし、これらの塹壕は実際に使用されることなく昭和20年8月15日の終戦を持って放棄され、樹林に埋もれることとなった。

第4節 結語

平成16年度から始まった岸本・坂長バイパス関連の遺跡調査は、米子市諏訪から伯耆町金廻にかけての範囲を約10年という年月をかけて完了した。これらの発掘調査によって、長者原台地から越敷山へと続く広大な範囲の遺跡の広がりと共に、この地域の歴史的な変遷が明らかとなった。これらの成果は、各次調査の発掘調査報告書に結実されている。

事業開始当初の発掘調査体制は、米子市域については米子市文化財団が担当し、伯耆町内の遺跡は伯耆町教育委員会と鳥取県教育文化財団が担当する形で進められたが、平成23年度からは鳥取県教育文化財団の主力が鳥取西道路の発掘調査へとシフトしたため、伯耆町内の遺跡も米子市文化財団が発掘調査を行うこととなった。

米子市文化財団としては初めて行う市域外の調査ではあったが、鳥取県教育文化財団で発掘調査に従事されていたベテランの地元作業員をそのまま雇用することが出来たことで、その後の調査を円滑に引き継げたことは大きな力となった。とはいえ、越敷山での調査は、現地へ到達する道が佐野川用水の管理道しかなく、さらにそこから山に向かって新たな道を切り開いて進むような状況であった。更に、現地には電気も水道も無く、現場事務所もテント張りというありさまであったが、かえって四季の変化を感じやすくなり、冬の到来から春の兆しを敏感に感じ取ることができた。

このように、現地での調査は困難の連続であったが、越敷山70号墳の石棺内から朱塗りの人骨が出土したことや、温度計が40度を超える夏の炎天下に、何台もの一輪車のタイヤが土を載せただけで自然にパンクしたこと、膝まで積もった雪をスコップで除雪して調査を進めたことなど、作業の苦労話として思い出深い出来事がたくさんある。現地調査が終了して早3年もの月日が経過し、既に鬼籍に入られた方もおられるが、調査に参加して頂いた作業員各位に感謝申し上げる。

参考文献

- 小原貴樹ほか 1989年『石州府古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会
- 小原貴樹ほか 1992年『日下古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会
- 加藤裕一ほか 2006年『長者屋敷遺跡・坂長下屋敷遺跡』鳥取県教育文化財団
- 加藤裕一ほか 2009年『坂長第7遺跡』鳥取県教育文化財団
- 佐伯純也 2006年『諏訪西山ノ後遺跡』米子市文化事業団
- 佐伯純也ほか 2008年『諏訪西土取場遺跡ほか』米子市教育文化事業団
- 佐伯純也 2016年『坂長ブジラ遺跡・坂長尻田平遺跡』米子市文化財団
- 佐伯純也 2016年『坂長伯楽塚遺跡・伯楽塚17~21号墳』米子市文化財団
- 佐伯純也 2017年『坂長越城ノ原遺跡・越敷山古墳群(坂長地区)』米子市文化財団
- 佐伯純也 2017年『金廻家ノ上ノ内遺跡・金廻家ノ上遺跡・越敷山古墳群(金廻地区)』米子市文化財団
- 佐々木 謙ほか 1972年『鳥取県史第1巻』鳥取県
- 杉谷愛象ほか 1984年『陰田』米子市教育委員会
- 杉谷愛象ほか 1994年『萱原・奥陰田I』米子市教育文化事業団
- 高田健一ほか 2013年『古郡家1号墳・六部山3号墳の研究』鳥取県
- 高橋章司ほか 2007年『大殿下ノ原遺跡ほか』鳥取県教育文化財団
- 高橋章司ほか 2007年『坂長下門前遺跡』鳥取県教育文化財団
- 高橋章司 2008年『大殿狐谷遺跡・長者原16・18号墳』鳥取県教育文化財団
- 高橋章司ほか 2009年『坂長第6遺跡』鳥取県教育文化財団
- 高橋章司 2009年『坂長第8遺跡』鳥取県教育文化財団
- 高橋章司 2010年『坂長下門前遺跡2・坂長ヨコロ遺跡・坂長熊谷遺跡』鳥取県教育文化財団
- 高橋浩樹 2006年『諏訪南山崎遺跡』米子市教育文化事業団
- 高橋浩樹 2006年『諏訪東土取場遺跡・大殿下ノ原遺跡』米子市教育文化事業団
- 玉木秀幸 2013年『坂長第7遺跡2・坂長第8遺跡3』鳥取県教育文化財団
- 玉木秀幸ほか 2013年『金廻家ノ上ノ内遺跡・越敷山古墳群(金廻地区)』鳥取県教育文化財団
- 谷村憲一ほか 1997年『坂長宮田ノ上遺跡ほか』鳥取県教育文化財団
- 長田康平 2012年『伯耆町内遺跡発掘調査報告書』伯耆町教育委員会
- 長田康平 2014年『金廻芦谷平遺跡発掘調査報告書』伯耆町教育委員会
- 中森 祥 2002年『古市遺跡群3』鳥取県教育文化財団
- 西川 徹ほか 1994年『尾高御立山遺跡・尾高古墳群』鳥取県教育文化財団
- 西村彰滋ほか 1989年『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書V』鳥取県教育文化財団
- 野口良也ほか 2012年『坂長前田遺跡』鳥取県教育文化財団
- 野口良也ほか 2012年『坂長武寿羅遺跡・坂長第8遺跡2』鳥取県教育文化財団
- 野口良也ほか 2012年『坂長ブジラ遺跡・坂長尻田平遺跡』鳥取県教育文化財団
- 濱 隆造ほか 2003年『吉谷遺跡群』鳥取県教育文化財団
- 船越元四郎ほか 1978年『青木遺跡発掘調査報告書III』鳥取県教育委員会

表1 金廻芦谷平遺跡・越敷山古墳群 出土土器・土製品観察表 (残存・復元値は()で表示)

遺物番号	地区遺構	層位	種別器種	法量(cm)			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面・口縁部	
Po. 1	71号墳丘上	表土下	土師器・高坏	(14.8)		(4.8)	淡橙褐色	ナデ	ハケ、ナデ	
Po. 2	71号墳南西周溝	上層	土師器・壺	(15.6)		(7.9)	灰白色	風化	風化	煤付着
Po. 3	71号墳南西周溝	上層	土師器・高坏か		(10.3)	(2.8)	淡灰褐色	ナデ	ナデ	煤付着
Po. 4	71号墳南西周溝	上層	土師器・低脚坏		(6.8)	(3.5)	灰褐色	ナデ	ナデ	
Po. 5	79号墳南東周溝	上層	土師器・壺	(7.6)		9.2	灰褐色	ケズリ	ナデ	
Po. 6	79号墳南西周溝	上層	土師器・壺	(8.6)		(6.3)	淡褐色	ケズリ、ナデ	ナデ	
Po. 7	79号墳南西周溝	上層	土師器・壺			(4.3)	灰茶色	ケズリ	ハケ	
Po. 8	79号墳 土器集中1	周溝底	土師器・壺	(13.9)		(6.2)	淡褐色	ケズリ、ナデ	ナデ	
Po. 9	79号墳 土器集中1	周溝底	土師器・高坏	(17.3)	9.7	11.5	橙褐色	ナデ、ハケ	ハケ、ナデ	
Po. 10	79号墳 土器集中1	周溝底	土師器・高坏	15.8	11.5	11.0	明灰褐色	ナデ	ナデ	
Po. 11	79号墳 土器集中2	周溝底	土師器・甕	(11.4)		(12.0)	淡褐色	ケズリ	ハケ	
Po. 12	79号墳 土器集中2	周溝底	土師器・甕	(15.5)		(16.1)	淡灰褐色	ケズリ	ナデ	
Po. 13	79号墳南東周溝	周溝底	土師器・甕	(14.2)		(16.4)	灰白色	風化	風化	
Po. 14	79号墳北東周溝	周溝底	土師器・甕	15.1		(10.0)	淡灰茶色	ケズリ	ハケ、ナデ	
Po. 15	79号墳北東周溝	周溝底	土師器・壺	(10.1)		(2.1)	灰褐色		ナデ	
Po. 16	79号墳北西周溝	上層	土師器・甕			(13.3)	淡灰褐色	ケズリ	ハケ	
Po. 17	129号墳南周溝	周溝底	土師器・壺	10.8		13.5	淡褐色	ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	
Po. 18	129号墳西周溝	周溝底	土師器・高坏	14.0		(4.5)	淡褐色	ナデ	ナデ	
Po. 19	129号墳3主体部	埋土中	土師器・高坏			(4.9)	灰褐色	ケズリ	ミガキ	
Po. 20	130号墳 土器集中3	下層	土師器・壺	16.7		39.7	淡灰褐色	ケズリ	ハケ、ナデ	
Po. 21	130号墳 土器集中4	下層	土師器・甕	16.0		25.6	灰褐色	ケズリ	ハケ、ナデ	
Po. 22	130号墳 土器集中4	上層	土師器・甕	16.1		(24.4)	灰白色	ケズリ	ハケ、ナデ	
Po. 23	130号墳 土器集中4	上層	土師器・甕	(17.0)		(17.1)	淡褐色	ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	
Po. 24	130号墳 周溝南東部	上層	土師器・壺	(8.2)		(8.1)	淡灰褐色	ケズリ	風化	
Po. 25	131号墳 土器集中5	石棺脇	土師器・甕	18.0		25.8	淡褐色	ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	
Po. 26	131号墳 土器集中6	周溝内	土師器・甕	(26.0)		(18.5)	灰褐色	ケズリ	ハケ、ナデ	
Po. 27	131号墳周溝	埋土中	土師器・甕			(8.2)	淡灰褐色	ケズリ	ハケ	
Po. 28	132号墳 土器集中7	周溝底	土師器・壺	10.4		(8.0)	淡褐色	ケズリ	ハケ、ナデ	
Po. 29	132号墳 土器集中8	周溝底	土師器・甕	(16.0)		(25.5)	灰褐色	ケズリ	ハケ、ナデ	煤付着
Po. 30	133号墳周溝	埋土中	土師器・甕	(16.0)		(8.8)	褐色	ケズリ	ハケ、ナデ	
Po. 31	133号墳周溝	埋土中	土師器・甕	(12.3)		(13.1)	灰茶色	ナデ	ハケ、ナデ	
Po. 32	133号墳周溝	埋土中	土師器・甕			(8.1)	淡灰茶色	風化	ケズリ	
Po. 33	133号墳周溝	埋土中	土師器・壺	(13.8)		(11.4)	灰褐色	ケズリ	ハケ、ナデ	

表2 金廻芦谷平遺跡・越敷山古墳群 出土土器・土製品観察表 (残存・復元値は()で表示)

遺物番号	地区 遺構	層位	種別 器種	法量(cm)			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面・口縁部	
Po. 34	133号墳周溝	埋土中	土師器・壺	12.3		12.7	灰褐色	ケズリ	ハケ、ナデ	
Po. 35	135号墳周溝	上層	土師器・高坏			(3.8)	淡灰褐色	ケズリ	風化	
Po. 36	139号墳周溝	埋土中	土師器・壺	11.3		11.0	褐色	ケズリ	ハケ、ナデ	煤付着
Po. 37	140号墳周溝	周溝底	土師器・甕	(16.1)		(18.3)	暗灰褐色	ケズリ、ハケ	ハケ、ナデ	
Po. 38	140号墳周溝	周溝底	土師器・高坏	(17.1)		(8.6)	淡橙褐色	ナデ	ナデ	
Po. 39	143号墳 土器集中9	周溝脇	土師器・甕	(12.0)		(12.5)	褐色	ケズリ	ハケ、ナデ	煤付着
Po. 40	143号墳周溝	埋土中	土師器・壺	(16.2)		(6.1)	褐色	ケズリ	ナデ	
Po. 41	144号墳 土器集中10	周溝底	土師器・壺	7.7		9.3	褐色	ケズリ	ハケ、ナデ	
Po. 42	144号墳 土器集中11	周溝底	土師器・甕	(14.8)		(25.3)	淡褐色	ケズリ、ハケ	ハケ、ナデ	
Po. 43	149号墳 土器集中12	周溝底	土師器・甕	14.6		26.5	淡灰褐色	ケズリ、	ハケ、ナデ	
Po. 44	149号墳 土器集中12	周溝底	土師器・壺	(8.8)		(10.6)	暗褐色	ケズリ	ハケ、ナデ	
Po. 45	149号墳周溝	埋土中	土師器・甕	(11.3)		(2.3)	淡褐色		ナデ	
Po. 46	149号墳周溝	埋土中	土師器・甕	(13.3)		(2.8)	灰褐色	ケズリ	ナデ	
Po. 47	土器棺墓1	土器棺	土師器・甕	17.5		26.8	淡灰茶色	ケズリ	ハケ、ナデ	煤付着
Po. 48	土壤墓8	土器蓋	土師器・甕	15.2		32.2	淡灰褐色	ケズリ	ハケ、ナデ	煤付着
Po. 49	80号墳羨道	床面	須恵器・坏蓋	10.2		3.9	淡灰色	ナデ	ケズリ後ナデ	
Po. 50	80号墳玄室	床面	須恵器・坏身	8.7		3.5	灰色	ナデ	ケズリ後ナデ	
Po. 51	80号墳玄室	床面	須恵器・坏蓋	11.8		(3.4)	淡赤灰色	ナデ	ナデ	
Po. 52	80号墳玄室	床面	須恵器・坏身	10.1		4.1	灰色	ナデ	ケズリ後ナデ	
Po. 53	80号墳玄室	床面	土師器・坏身	10.7		2.9	淡橙褐色	ミガキ、ナデ	ナデ	
Po. 54	80号墳奥壁裏込	埋土中	土師器・坏身	9.6		3.1	橙褐色	ミガキ、ナデ	風化	
Po. 55	80号墳南周溝	周溝底	須恵器・大甕	(40.8)		80.6	灰色	当て具	タタキ、波状紋、 ナデ	
Po. 56	土坑1	上層	突蒂紋土器・深鉢	(19.2)		(4.8)	灰茶色	ナデ	ナデ	
Po. 57	土坑1	上層	弥生土器・甕	(20.9)		(21.3)	灰褐色	ハケ	ハケ、ナデ	
Po. 58	9-H	表土	須恵器・坏蓋	(12.0)		(2.3)	暗灰褐色	ナデ	ナデ	
Po. 59	8-H	表土	須恵器・鉢	(13.3)		(8.8)	灰褐色	ナデ	ナデ	

表3 金廻芦谷平遺跡・越敷山古墳群 出土銅製品観察表 (残存・復元値は()で表示)

遺物番号	地区 遺構	層位	種別	法量(cm)		重量(g)	備考
				直径	厚さ		
B. 1	131号墳1主体部	石枕付近	青銅鏡・珠紋鏡	7.20		54.3	
B. 2	132号墳1主体部	石枕付近	青銅鏡・内行花紋鏡	8.08		44.1	

表4 金廻芦谷平遺跡・越敷山古墳群 出土鉄製品観察表 (残存・復元値は()で表示)

遺物番号	地区遺構	層位	種別	法量(cm)			備考
				最大長	最大幅	最大厚	
F. 1	71号墳1主体部	棺床	剣	27.0	2.3	0.3	
F. 2	71号墳1主体部	棺床	ヤリガンナカ	(15.6)	0.8	0.4	
F. 3	71号墳1主体部	棺側	不明鉄器	(10.4)	2.3	0.1	
F. 4	71号墳3主体部	棺内	刀子	(9.6)	1.6	0.2	
F. 5	71号墳3主体部	棺内	ヤリガンナカ	(10.7)	0.7	0.2	
F. 6	71号墳3主体部	棺内	ヤリガンナカ	(7.0)	0.8	0.2	
F. 7	137号墳1主体部	石棺蓋上	刀子	(13.4)	2.1	0.4	柄部は鹿角か、刃部木質付着。
F. 8	140号墳周溝内	石の下	刀子	(4.3)	1.2	0.3	
F. 9	149号墳1主体部	石棺蓋上	刀子	(3.2)	1.2	0.3	
F. 10	80号墳玄室	床面	刀子	(3.8)	0.7	0.3	
F. 11	80号墳玄室	床面	刀子	(6.9)	1.0	0.3	
F. 12	80号墳玄室	床面	不明鉄器	(10.2)	2.3	0.3	

表5 金廻芦谷平遺跡・越敷山古墳群 出土ガラス製品観察表 (残存・復元値は()で表示)

遺物番号	地区遺構	層位	種別	法量(cm)			重量(g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
G. 1	79号墳 南東周溝	周溝内	小玉	0.5	0.5	0.4	0.1	アルカリ珪酸塩ガラス
G. 2	131号墳 1主体部	石枕付近	小玉	0.6	0.5	0.5	0.1	アルカリ珪酸塩ガラス

表6 金廻芦谷平遺跡・越敷山古墳群 出土石製品観察表 (残存・復元値は()で表示)

遺物番号	地区 遺構	層位	種別	法量(cm)			重量(g)	石材
				最大長	最大幅	最大厚		
S. 1	71号墳3主体部	棺床	管玉	3.3	0.8	0.7	3.4	碧玉(花仙山産か)
S. 2	131号墳1主体部	石枕付近	勾玉	2.2	1.3	0.6	2.0	蛇紋岩か
S. 3	131号墳1主体部	石枕付近	勾玉	1.4	0.8	0.5	0.9	翡翠か
S. 4	131号墳1主体部	石枕付近	管玉	3.2	0.9	0.8	3.9	碧玉(花仙山産)
S. 5	131号墳1主体部	石枕付近	管玉	2.9	0.8	0.8	3.0	碧玉(花仙山産)
S. 6	131号墳1主体部	石枕付近	管玉	2.9	0.6	0.6	1.8	緑色凝灰岩
S. 7	131号墳1主体部	石枕付近	管玉	2.4	0.7	0.7	2.0	緑色凝灰岩
S. 8	131号墳1主体部	石枕付近	管玉	2.3	0.4	0.4	0.4	緑色凝灰岩
S. 9	131号墳1主体部	石枕付近	管玉	4.1	0.4	0.4	0.4	緑色凝灰岩
S. 10	131号墳1主体部	石枕付近	管玉	2	0.5	0.5	0.5	緑色凝灰岩
S. 11	131号墳1主体部	石枕付近	管玉	1.5	0.4	0.4	0.2	緑色凝灰岩
S. 12	131号墳1主体部	石枕付近	管玉	1.5	0.4	0.4	0.2	緑色凝灰岩
S. 13	131号墳1主体部	埋土水洗中	臼玉	0.5	0.5	0.3	0.1	滑石
S. 14	溝4	埋土	叩石	10.7	5.5	3.3	306.8	珪岩
S. 15	10-D	黒色土上層	打欠石錘	7.4	4.4	2.2	74.9	デイサイト
S. 16	10-G	表土	打欠石錘	5.8	3.3	1.5	41.8	頁岩
S. 17	9-H	黒色土	石鏃	1.7	1.4	0.4	0.5	黒曜石
S. 18	8-H	表土	石鏃	1.4	0.9	0.3	0.3	黒曜石

表7 金廻芦谷平遺跡・越敷山古墳群 出土漆製品観察表 (残存・復元値は()で表示)

遺物番号	地区 遺構	層位	種別	法量(cm)			備考
				最大長	最大幅	最大厚	
U. 1	140号墳1主体部	石枕付近	豎櫛	(3.2)	(2.6)	0.5	
U. 2	140号墳1主体部	石枕付近	豎櫛	(7.9)	(2.8)	(0.1)	漆膜のみ残存

写 真 図 版



1. 調査前遠景（東上空より）



2. 調査前遠景（北東上空より）

写真図版2



1. 塹壕完掘（東上空より）



2. 調査地全景（北東上空より）



1. 越敷山71・79号墳全景（南東上空より）



2. 調査地俯瞰（合成・写真右が北東）

写真図版 4



1. 越敷山71号墳主体部完掘
(南西より)



2. 越敷山71号墳
1・2主体部完掘
(南西より)



3. 越敷山71号墳
1 主体部鉄器出土状況
(南より)



1. 越敷山71号墳
3 主体部上面石蓋検出
(南東より)



2. 越敷山71号墳
3 主体部北側
人骨出土状況
(北西より)



3. 越敷山71号墳
3 主体部南側
人骨出土状況
(北西より)

写真図版6



1. 越敷山71号墳
3 主体部完掘 (西より)



2. 越敷山71号墳
4 主体部完掘 (南西より)



3. 越敷山71号墳
5 主体部完掘 (北西より)



1. 越敷山79号墳
1 主体部石蓋検出
(北より)



2. 越敷山79号墳
1 主体部完掘
(北西より)



3. 越敷山79号墳
2 主体部石蓋検出
(南より)

写真図版8



1. 越敷山79号墳
2 主体部完掘 (南西より)



2. 越敷山79号墳
3 主体部石蓋検出
(南西より)



3. 越敷山79号墳
3 主体部完掘 (南西より)



1. 越敷山79号墳
4 主体部石蓋検出
(南西より)



2. 越敷山79号墳
4 主体部完掘
(北西より)



3. 越敷山79号墳
5 主体部石蓋検出
(北西より)

写真図版10



1. 越敷山79号墳
5 主体部完掘 (北西より)



2. 越敷山79号墳
6 主体部石蓋検出
(南東より)



3. 越敷山79号墳
6 主体部完掘 (北東より)

1. 越敷山79号墳
7 主体部完掘
(北より)



2. 越敷山79号墳
8 主体部石蓋検出
(北西より)



3. 越敷山79号墳
8 主体部完掘
(北より)



写真図版12



1. 越敷山79号墳
9主体部側石検出
(北西より)



2. 越敷山79号墳
北西側周溝検出
(南東より)



3. 越敷山79号墳
土器集中1 (北より)

1. 越敷山129号墳
1・2 主体部検出
(南西より)



2. 越敷山129号墳
1 主体部石蓋下面検出
(南東より)



3. 越敷山129号墳
1 主体部石棺掘形完掘
(西より)



写真図版14



1. 越敷山129号墳
2 主体部石棺掘形完掘
(東より)



2. 越敷山129号墳
3 主体部完掘 (西より)



3. 越敷山129号墳
Po. 17出土状況
(南西より)



1. 越敷山130号墳主体部検出
(南西より)



2. 越敷山130号墳土器集中3
(南東より)



3. 越敷山130号墳土器集中4
(北より)

写真図版16



1. 越敷山130号墳
1 主体部断面 (東より)



2. 越敷山130号墳
2 主体部完掘 (南東より)



3. 越敷山130号墳
1・2 主体部完掘
(北東より)



1. 越敷山131号墳
周溝完掘 (南西より)



2. 越敷山131号墳
周溝内の朱出土状況
(西より)



3. 越敷山131号墳
1 主体部管玉出土状況
(西より)

写真図版18



1. 越敷山131号墳
1 主体部完掘 (北西より)



2. 越敷山131号墳
1 主体部珠紋鏡出土状況
(南西より)



3. 越敷山131号墳
1 主体部石棺掘形完掘
(西より)



1. 越敷山132号墳周溝完掘
(南西より)



2. 越敷山132号墳主体部完掘
(南東より)



3. 越敷山132号墳
1 主体部内行花紋鏡
出土状況 (南西より)

写真図版20



1. 越敷山132号墳土器集中8
(南東より)



2. 越敷山133号墳
周溝内土器出土状況
(東より)



3. 越敷山133号墳周溝完掘
(東より)

1. 越敷山133号墳
1 主体部人骨出土状況
(南西より)



2. 越敷山133号墳
1 主体部人骨出土状況
(南より)



3. 越敷山134号墳周溝検出
(北西より)



写真図版22



1. 越敷山134号墳完掘
(北東より)



2. 越敷山134号墳
1 主体部断面 (北東より)



3. 越敷山135・136号墳
周溝完掘 (東より)



1. 越敷山135号墳
主体部調査中（南東より）



2. 越敷山135号墳
1 主体部石棺掘形完掘
(南より)



3. 越敷山135号墳
2 主体部完掘（北東より）

写真図版24



1. 越敷山135号墳
3 主体部断面 (南より)



2. 越敷山136号墳
1 主体部完掘 (北西より)



3. 越敷山137号墳周溝完掘
(北東より)



1. 越敷山137号墳
1 主体部石蓋検出
(北東より)



2. 越敷山137号墳
1 主体部完掘 (西より)



3. 越敷山138・139号墳
石蓋検出 (南東より)

写真図版26



1. 越敷山139号墳石蓋検出
(西より)



2. 越敷山138・139号墳
主体部完掘 (東より)



3. 越敷山140号墳
土器・石蓋検出
(南東より)



1. 越敷山140号墳
1 主体部完掘 (北より)



2. 越敷山140号墳
1 主体部竪櫛出土状況
(北西より)



3. 越敷山140号墳
1 主体部竪櫛U. 2
出土状況 (北西より)

写真図版28



1. 越敷山141号墳
1 主体部石蓋検出
(北東より)



2. 越敷山141号墳
1 主体部完掘 (東より)



3. 越敷山142号墳
1 主体部完掘 (南東より)



1. 越敷山143号墳
1 主体部石蓋検出
(北東より)



2. 越敷山143号墳
1 主体部完掘 (北西より)



3. 越敷山143号墳土器集中9
(南東より)

写真図版30



1. 越敷山144号墳
1 主体部石蓋検出
(北東より)



2. 越敷山144号墳
1 主体部完掘 (西より)



3. 越敷山144号墳土器集中10
(東より)



1. 越敷山145号墳
周溝・石棺検出
(南東より)



2. 越敷山145号墳周溝完掘
(南西より)



3. 越敷山145号墳
1 主体部完掘 (南西より)

写真図版32



1. 越敷山146号墳
1 主体部石蓋検出
(北東より)



2. 越敷山146号墳
1 主体部完掘 (西より)



3. 越敷山147号墳
1 主体部石蓋検出
(南東より)



1. 越敷山147号墳
1 主体部完掘 (北西より)



2. 越敷山148号墳周溝断面
(北より)



3. 越敷山148号墳
1 主体部石蓋検出
(南東より)

写真図版34



1. 越敷山148号墳
1 主体部完掘 (北東より)



2. 越敷山149号墳
完掘 (南東上空より)



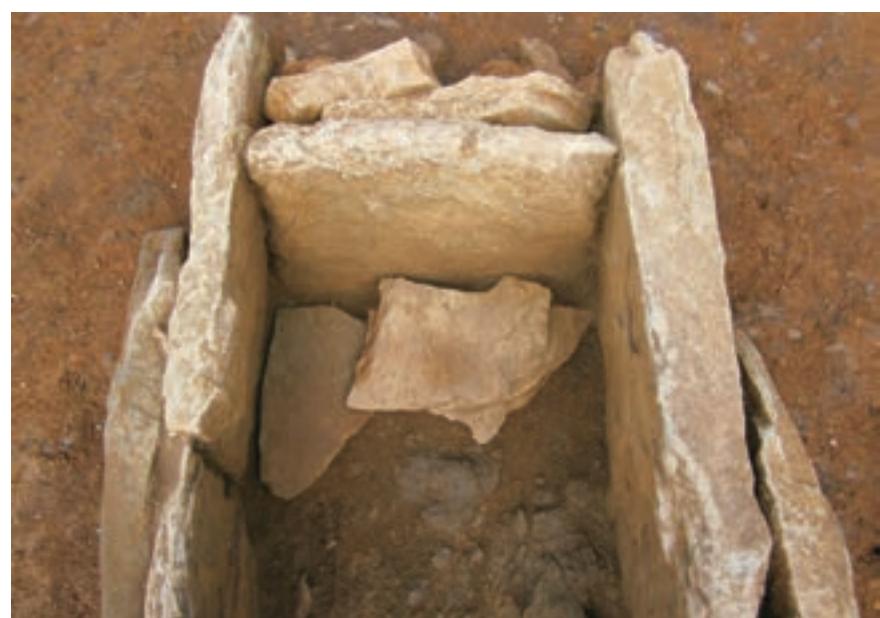
3. 越敷山149号墳
1 主体部石蓋検出
(北より)



1. 越敷山149号墳
1 主体部完掘 (西より)



2. 越敷山149号墳
1 主体部東側石枕
(西より)



3. 越敷山149号墳
1 主体部西側石枕
(東より)

写真図版36



1. 越敷山150号墳周溝検出
(北東より)



2. 越敷山150号墳周溝完掘
(東より)



3. 石棺墓1完掘 (南東より)



1. 土器棺墓 1 断面 (南より)



2. 土器棺墓 1 完掘
(南東より)



3. 土壙墓 1 石蓋検出
(北東より)

写真図版38



1. 土壙墓1完掘（北より）



2. 土壙墓2石蓋検出
(北より)



3. 土壙墓2完掘（北西より）



1. 土壙墓3石蓋検出
(東より)



2. 土壙墓4石蓋検出
(南より)



3. 土壙墓3・4完掘
(南西より)

写真図版40



1. 土壙墓5石蓋検出
(南東より)



2. 土壙墓5完掘 (南東より)



3. 土壙墓6石蓋検出
(南東より)



1. 土壌墓7断面（東より）



2. 土壌墓7完掘（北より）



3. 土壌墓8石蓋検出
(南より)

写真図版42



1. 土壌墓8土器蓋検出
(南より)



2. 土壌墓8完掘 (北西より)



3. 土壌墓9石蓋検出
(南西より)



1. 土壙墓9完掘（北東より）



2. 土壙墓10石蓋検出
(南東より)



3. 土壙墓10完掘（北西より）

写真図版44



1. 土壙墓11石蓋検出
(東より)



2. 土壙墓11完掘 (西より)



3. 土壙墓12完掘 (南東より)



1. 越敷山80号墳調査前正面
(南東より)



2. 越敷山80号墳
調査前天井石(南西より)



3. 越敷山80号墳調査前石室
(東より)

写真図版46



1. 越敷山80号墳墳丘正面（南東より）



1. 越敷山80号墳
閉塞石検出（東より）



2. 越敷山80号墳
羨道部床面検出
(南東より)



3. 越敷山80号墳奥壁
(南東より)

写真図版48



1. 越敷山80号墳
左壁中央上部（南東より）



2. 越敷山80号墳
右壁と奥壁の接合部
(東より)



3. 越敷山80号墳
左壁部（北東より）



1. 越敷山80号墳右壁部
(南東より)



2. 越敷山80号墳框石部
(北西より)



3. 越敷山80号墳
石室内遺物出土状況
(北より)

写真図版50



1. 越敷山80号墳墳丘断面
(北より)



2. 越敷山80号墳石室掘形
(北より)



3. 越敷山80号墳石室掘形
(南より)



1. 越敷山80号墳床断面
(北東より)



2. 越敷山80号墳
石室掘形完掘 (南東より)



3. 越敷山80号墳
石室掘形完掘 (北より)

写真図版52



1. 陥穴1完掘（北より）



2. 陥穴4完掘（北より）



3. 陥穴7完掘（南西より）



1. 陥穴8完掘（北より）



2. 陥穴9断面（西より）



3. 陥穴10（南西より）

写真図版54



1. 陥穴13完掘（北西より）



2. 陥穴14完掘（西より）



3. 陥穴17完掘（南東より）



1. 陥穴18完掘 (北より)



2. 陥穴21完掘 (南西より)



3. 陥穴22完掘 (東より)

写真図版56



1. 陥穴24完掘（北より）



2. 土坑1土器出土状況
(南西より)



3. 土坑1完掘（南西より）



1. 溝1完掘（北西より）



2. 溝2完掘（北西より）



3. 溝3完掘（南東より）

写真図版58



1. 墓塹完掘（北東より）



2. 墓塹断面71・79号墳付近
(北西より)



3. 墓塹完掘131号墳付近
(西より)



1. 塹壕人物との対比
(北より)



2. 塹壕東側分岐点 (北より)



3. 塹壕東側下完掘
132号墳付近 (北東より)

写真図版60



1. 墓壕完掘80号墳付近
(南西より)



2. 墓壕完掘調査区南側
(北西より)



3. 墓壕西側分岐点暗渠検出
(東より)



1. 塹壕西側分岐点断面
(東より)



2. 塹壕西側分岐点暗渠完掘
(北西より)



3. 塹壕暗渠部完掘
(南東より)

写真図版62



1. 越敷山71号墳 (Po. 1)



3. 越敷山79号墳 (Po. 2)



2. 越敷山71号墳 (F. 1~3)



4. 越敷山71号墳 3 主体部
(F. 4~6)



5. 越敷山71号墳 3 主体部
(S. 1) (S=1 : 1)



6. 越敷山79号墳 (Po. 5)



7. 越敷山79号墳 (Po. 6)



8. 越敷山79号墳 (Po. 8)



9. 越敷山79号墳 (Po. 9)



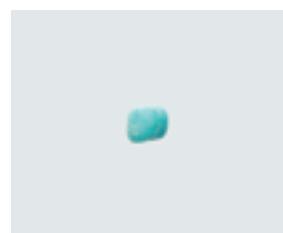
10. 越敷山79号墳 (Po. 10) (S. 1以外S=1 : 3)



1. 越敷山79号墳 (Po. 11)



2. 越敷山79号墳 (Po. 12)



5. 越敷山79号墳
(G. 1)
(S=1 : 1)



3. 越敷山79号墳 (Po. 13)



4. 越敷山79号墳 (Po. 14)



6. 越敷山129号墳 (Po. 17)



7. 越敷山129号墳 (Po. 18)

(G. 1以外 S=1 : 3)



1. 越敷山130号墳 (Po. 20)



2. 越敷山130号墳 (Po. 21)



3. 越敷山130号墳 (Po. 22) (S=1:3)



1. 越敷山130号墳 (Po. 23)



2. 越敷山130号墳 (Po. 24)



3. 越敷山131号墳 (Po. 25)



4. 越敷山131号墳 (Po. 26)

(S=1 : 3)

写真図版66



1. 越敷山131号墳 (S. 2~13・G. 2) (S=1:1)



2. 越敷山131号墳 (B. 1) (S=1:1)



1. 越敷山132号墳 (Po. 28)



2. 越敷山132号墳 (Po. 29)



3. 越敷山132号墳 (B. 2) (S=1 : 1)

(B. 2以外 S=1 : 3)

写真図版68



1. 越敷山133号墳 (Po. 30)



2. 越敷山133号墳 (Po. 31)



3. 越敷山133号墳 (Po. 33)



4. 越敷山133号墳 (Po. 34)



7. 越敷山140号墳 (F. 8)



5. 越敷山137号墳 (F. 7)



6. 越敷山139号墳 (Po. 36)



8. 越敷山140号墳 (Po. 37)

(S=1 : 3)



1. 越敷山140号墳 (U. 1・2) (S=1 : 1)



2. 越敷山143号墳 (Po. 39)



4. 越敷山144号墳 (Po. 41)



3. 越敷山143号墳 (Po. 40)



5. 越敷山144号墳 (Po. 42) (U. 1・2以外 S=1 : 3)

写真図版70



1. 越敷山149号墳 (Po. 43)



2. 越敷山149号墳 (Po. 44)



3. 越敷山149号墳 (F. 9)



4. 土器棺墓 1 (Po. 47)

(S=1 : 3)



1. 土壙墓 8 (Po. 48)

(S=1 : 3)



2. 土壙墓 8・口縁部の半裁始点 (Po. 48) (傷の幅 1 cm)

写真図版72



1. 越敷山80号墳 (Po. 49)



3. 越敷山80号墳 (Po. 51)



5. 越敷山80号墳 (Po. 53)



2. 越敷山80号墳 (Po. 50)



4. 越敷山80号墳 (Po. 52)



6. 越敷山80号墳 (Po. 54)

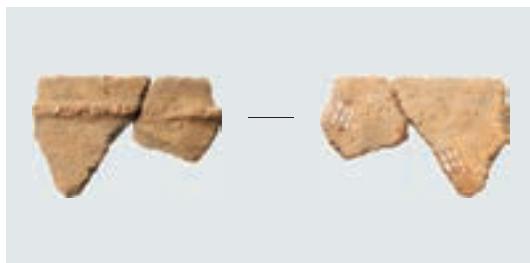


7. 越敷山80号墳 (Po. 55) (S=1:8)



8. 越敷山80号墳 (F. 10~12)

(Po. 55以外 S=1:3)



1. 土坑1 (Po. 56)



2. 土坑1 (Po. 57)



3. 溝4 (S. 14)
(S=1:3)



4. 9-H区出土 (Po. 58)



5. 8-H区出土 (Po. 59)



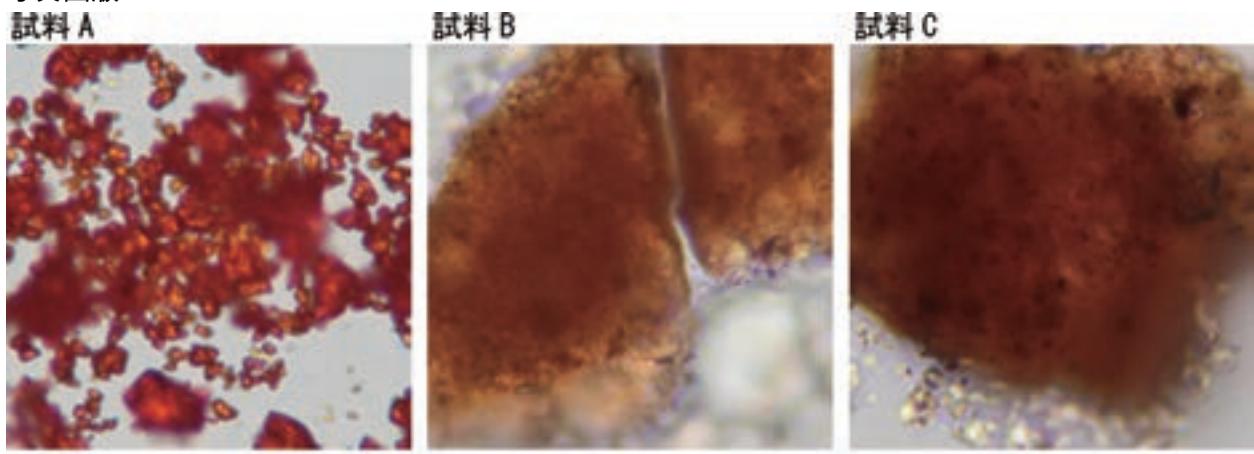
6. 10-D・G区出土 (S. 15・16)
(S=1:3)



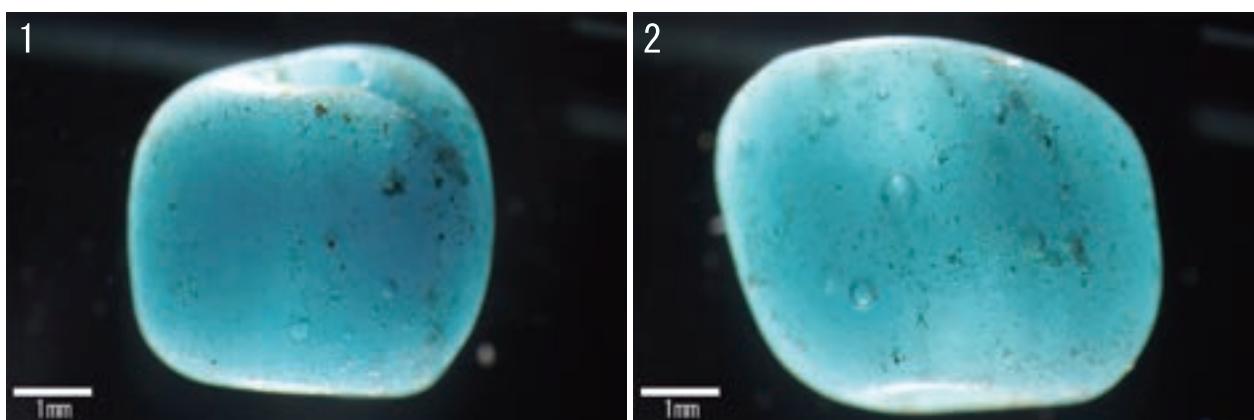
7. 9・8-H区出土 (S. 17・18)
(S=1:1)

(土器 S=1:3)

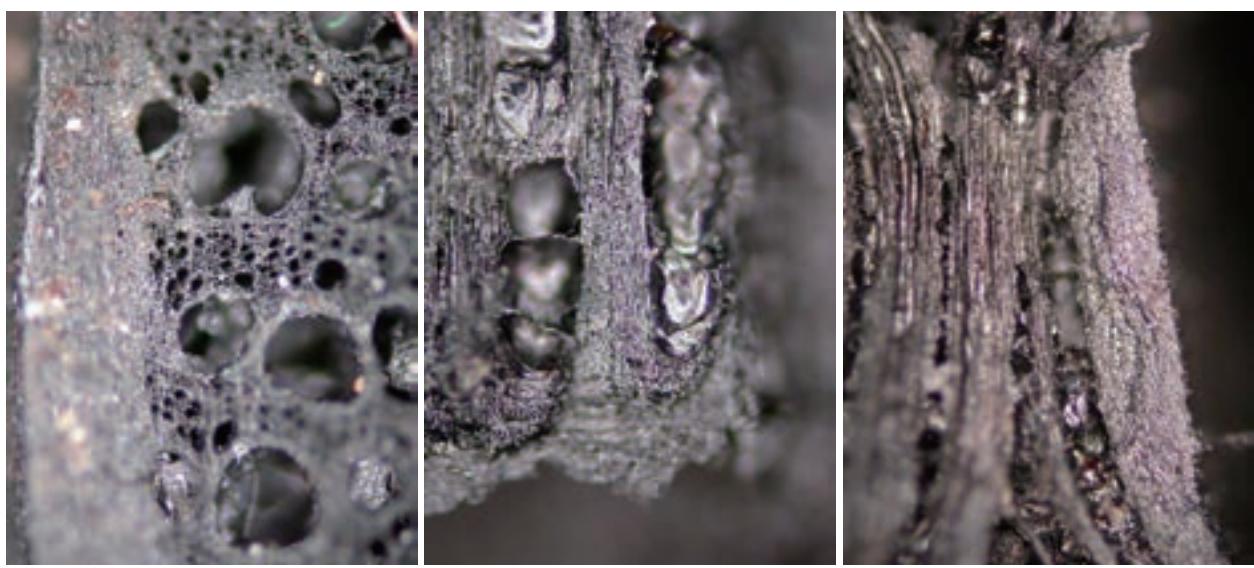
写真図版74



1. 赤色顔料の生物顕微鏡写真 (スケール : 10μm)



2. ガラス玉の実体顕微鏡写真 (透過光)



横断面 放射断面
コナラ属コナラ節 80号墳周溝内

3. 越敷山80号墳の木材



越敷山70号墳出土人骨



報 告 書 抄 錄

ふりがな	かなまわりあしやびらいせき・こしきさんこふんぐん（かなまわりちく）							
書名	金廻芦谷平遺跡・越敷山古墳群（金廻地区）							
副書名	一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	14							
編著者名	佐伯純也（編著）、井上貴央、吉環境研究所、元興寺文化財研究所							
編集機関	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地 TEL・FAX 0859-26-0455 eメールアドレス yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp							
発行年月日	西暦2018年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
金廻芦谷平遺跡・越敷山古墳群（金廻地区）	西伯郡伯耆町金廻字芦谷平	31390	1-386 1-136 1-144 1-145 1-392	35° 22' 29"	133° 24' 33"	平成26年 4月14日～ 平成27年 3月30日	4,003m ²	道路建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
金廻芦谷平遺跡・越敷山古墳群（金廻地区）	散布地 古墳	縄紋時代 弥生時代 古墳時代 近現代	陥穴、土坑、溝、古墳、石棺墓、石蓋土壙墓、土壙墓、塹壕			縄紋土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄製品、勾玉、管玉、小玉、ガラス玉、青銅鏡、櫛、人骨	石棺内から仿製鏡が2面出土、塹壕跡を検出。	

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書14

鳥取県西伯郡伯耆町

金廻芦谷平遺跡・
越敷山古墳群（金廻地区）

2018年3月

編集・発行 一般財団法人 米子市文化財団

〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地

TEL 0859-26-0455

印 刷 勝美印刷株式会社